

## 近代日本の怪談研究 明治期幽霊譚をジェンダー、戦争、植民地主義の視座から読み直す

著者	柳 政勲
発行年	2016
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2015
報告番号	12102甲第7611号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00143741">http://hdl.handle.net/2241/00143741</a>

筑波大学博士（文学）学位請求論文

## 近代日本の怪談研究

—明治期幽霊譚をジェンダー、戦争、植民地主義の  
視座から読み直す—

柳 政勲

2015 年度

## 【目 次】

目次	i
凡例	iv
序章	1
第1節 本論文の問題設定と目的	1
第2節 先行研究に対する本論文の位置付け	5
第3節 本論文の研究方法	9
第4節 各章の概要	13
第1章 近代日本における累伝説の変容	
一累伝説における女性嫌悪の系譜と変容	18
第1節 はじめに	18
第2節 前近代の累伝説	20
1. 累伝説の成立と定型化	
—『古今犬著聞集』と『死霊解脱物語聞書』	20
2. 累伝説の変容	
—『伊達競阿国戯場』の忠義と献身的な累	29
3. 累伝説の変容	
—『新累解脱物語』の儒学論理と貞淑な累	38
第3節 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』と累伝説	42
1. 累ものとしての『真景累ヶ淵』	42
2. 神経病の時代と『真景累ヶ淵』	48
第4節 おわりに	55

## 第2章 幸田露伴「対髑髏」における明治の女幽霊

—古典からの影響と明治の女性嫌悪 .....	57
第1節 はじめに .....	57
第2節 ハンセン病者としてのお妙 .....	59
第3節 恋を拒む女—「病める小町」としてのお妙 .....	67
第4節 お妙の美と醜 .....	74
第5節 おわりに .....	82

## 第3章 日露戦争と怪談

—夏目漱石「琴のそら音」を中心に .....	85
第1節 はじめに .....	85
第2節 「余」の訪問が意味するもの .....	88
第3節 帰路で経験する死の恐怖と愛の高まり .....	98
第4節 「趣味の遺伝」との関連性 .....	108
第5節 おわりに .....	117

## 第4章 近代日本の船幽霊

—鬱憤の表象から帝国の武器へ .....	119
第1節 はじめに .....	119
第2節 船幽霊の原型 .....	121
第3節 ノルマントン号事件と船幽霊 .....	127
第4節 日露戦争と船幽霊 .....	133
第5節 帝国の武器としての船幽霊 .....	139
第6節 おわりに .....	149

## 第5章 近代日本における朝鮮関連怪談

—金玉均と閔妃の幽霊譚を中心に .....	150
第1節 はじめに .....	150
第2節 金玉均の幽霊 .....	151

第3節 関妃の幽霊 .....	163
第4節 おわりに .....	175
結章 .....	176
主要参考文献一覧 .....	184
図版一覧 .....	193
初出一覧 .....	194

## 【凡 例】

1. 引用に際して、漢字は原則として新体字に改め、特に必要のないかぎり原文のルビは省略した。明らかな誤植には「ママ」の記号を付す。
2. 『 』は著書の題名および雑誌・新聞名、「 」は作品名や論文・評論・新聞記事等のタイトル、もしくは本文中の引用や強調を表す。
3. 引用文の省略は(中略)を用いる。
4. 引用記号「 」の中に更に「 」が必要な場合にも、同じく「 」を用い、『 』に変化させることはしない。
5. 特に明記しないかぎり韓国語文献からの日本語訳はすべて筆者による。
6. 年号は西暦を用いる。
7. 原文に今日では不適切な表現が含まれている場合、補注で補足説明する。
8. 引用文の中で理解が難しい単語や表現がある場合、「ママ」の記号を付して、補注で補足説明する。

## 序 章

### 第1節 本論文の問題設定と目的

本論文は、近代日本の怪談、特に明治期の幽霊譚を対象として、前近代とは異なる明治期幽霊譚の特性を明らかにし、そこに内在している近代的な欲望や政治的な意図について探索を試みるものである。

怪談を享受する文化は、前近代、特に江戸期に盛んであったことが知られている。その反面、明治維新を経て社会全般の近代化が急速に進んだ明治期の日本では、合理主義の名の下で迷信として撲滅されたというのが常識であろう。従って、今まで怪談文化及び幽霊表象に関する研究は主に江戸期を中心に行われてきた。特に近現代文学研究の領域では、純文学研究が主流を占める一方、怪談を含めた大衆文学・文化と呼ばれるものは、軽視されてきた。このように江戸文学を中心にして怪談研究が活発に行われている状況と比べて、明治以降の怪談研究が非常に少ない理由は、江戸と明治という時代を各々別個の軸に置いて、両時代の間に大きな断絶が存在すると考える近代文学研究者たちの一連の傾向が影響したところにある。

従って本論文の目的は、江戸と断絶していると想定された明治という時代において、怪談は前近代の遺物として「文明の世」に相応しくないものとされていたのか、それとも明治という激変期と共に怪談もやはり近代化の道を歩んで行ったと見るべきか、もしそうだとしたらその要因は何なのかを明らかにすることである。明治期を中心に考えた場合、怪談は一見「神経病」(第1章を参照)、「遺伝」(第2章を参照)など、文明と科学という概念の浸透を通して新しく生まれ変わったかのように見えるが、その裏面には江戸時代の怪談を再生産し、踏襲する様態も存在していた。日露戦争(1904—1905年)を契機として日本が急激に帝国の道を歩むにつれて、戦争によって必然的に対面しなければならない自国民の大量の死とその怨念を近代国家の論理で慰撫しようとする傾向が現れる一方では、植

民地支配のための方便として怪談が使われるなど、近代怪談の新たな側面が浮き彫りにされるようになる。

まず論を展開する前に、本論文で使用する怪談や幽霊という用語と、怪異や超常現象にまつわる理解の諸相について、簡略に説明しておくことにする。

民俗学者の小松和彦は怪異の原因を基準として怪談の三つの類型を提示している。第一の類型は、怪異の原因を自然のなかに見出す思考から生まれたもので、目の前の現象は超自然的な力や存在によって引き起こされると理解するものである。たとえば、洪水は大蛇によって引き起こされるといった類の物語がこれに該当する。第二の類型は、怪異の原因を人間のなかに見出す思考である。人間関係及びその人間と社会の関係で発生した出来事が怪異を生み出す原因として機能する話が多い。現在一般的に怪談と理解されているのはこの類型のものが圧倒的に多く、日本怪談史の中でも本流を形成している類型だと言える。第三の類型は、怪異を引き起こす原因は人間の側にあるが、怪異それ自体は自然のなかに見出す思考である。すなわち、ある人物の怨念が洪水や疫病を引き起こし、多くの人びとを苦しめているとみなすような話がこれにあたる<sup>1</sup>。

本論文で扱う怪談は第二の類型に属するもの、即ち人間関係及びその人間と社会との関係で発生した出来事が引き起こす怪異に関する物語である。急速に近代化が進んでいた明治という時代性を念頭に置くと、第一と第三のような自然現象に関わる怪異が科学によってすでに説明もしくは解明されたと考えられていたと推測するのは難しくない。しかし、人間関係や社会関係は別問題であったようだ。特に、人間の心、即ち意識や無意識に関する疑問は完全には解明されなかった。そこで導入されたのが西洋の科学的心靈研究であった。

明治時代の怪異に関する研究といえば、妖怪博士とも呼ばれた井上円了(1858—1919 年)<sup>2</sup>がまず思い浮かぶ。東京帝国大学を卒業した後に学内で創設した「不

---

<sup>1</sup> 小松和彦「日本怪談史のために」『國文學 解釈と教材の研究』52 巻 11 号、學燈社、2007 年 9 月、8—9 頁。

<sup>2</sup> 1858 年 2 月 4 日生まれ。東京帝国大学在学中の 1884 年哲学会を組織し、仏教の復権をめざす。20 年東京湯島に哲学館(現東洋大学)を創立。国粹主義に共鳴し、翌年政教社の創立にくわわる。迷信打破のため『妖怪学講義』(1894 年)をあらわし、妖怪博士といわ



思議研究会」(1886 年)から始まる彼の妖怪研究の目的は、怪異現象を科学的に説明して結果的には怪談や幽霊など、迷信を否定して撲滅するところにあった。円了の研究は、怪異現象は迷信であるという前提を置いた上で、その裏に科学的に解明できる原理があるということの証明を目指すものであって、怪異現象の原因として心霊や幽霊という存在を認めるものではなかった。妖怪博士というあだ名にも関わらず、妖怪や迷信を基本的に否定したのが円了である。

しかし、日露戦争後の 1908 年に平井金三(1859—1916 年)<sup>3</sup>などによって「幽霊研究会」が設立された時期になると、怪異を引き起こす心霊や幽霊などをも、真剣に学問の対象にしようとする気運が社会に充満していた。その例の一つが本論文 3 章でも取り上げる夏目漱石(1867—1916 年)の短編「琴のそら音」(1905 年『七人』にて発表)である。ここでは日露戦争で満州に赴任している軍人のところに死んだ妻の霊が訪れたという話が物語展開に大きな役割を果たす。「ロード・ブローアムの見た幽霊杯は今の話と丸で同じ<sup>4</sup>」と、当時最先端の合理思想の中心地とされながら、同時に心霊についての関心も高かったイギリスの、ロード・ブローアムの「幽霊話」が参照されている(ブローアムの幽霊談については第 3 章で詳述)が、そこで聞き手の主人公が「法学士の知らぬ間に心理学者の方

---

れた。中国視察中の 1919 年 6 月 6 日大連で死去。62 歳。越後(新潟県)出身。名は襲常。著作に『真理金針』『仏教活論』など。ジャパンナレッジの『日本人名大辞典』『国史大辞典』を参照(<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz036370> 最終閲覧日 2015 年 11 月 27 日)。

<sup>3</sup> 平井金三は日本の近代宗教史に重要な足跡を残した明治の英学者である。反キリスト教論者として神智学協会会長ヘンリー・S・オルコットを招聘、仏教復興運動を最高潮にもたらし、1893 年にシカゴで開催された世界宗教会議では、不平等条約に関して雄弁をふるい満場の喝采を浴びた。帰国後はユニテリアンに転じ、さらにその後は心霊研究や禅的な瞑想法を実践するなど、さまざまな領域で活躍している。吉永進一、野崎晃市「平井金三と日本のユニテリアニズム」『舞鶴工業高等専門学校紀要』40 号、2005 年 3 月。

<sup>4</sup> 「ブルーアム卿 Lord Henry Peter Brougham (1778—1868 年)政治家・法律家。『エディンバラ・レビュー』(中略)創刊者の一人で、著述も行った」(『漱石全集 第 14 巻』岩波書店、1995 年、691 頁)。「幽霊話(A Ghost Story)」と題された自伝の 1799 年 12 月 19 日には、友人の幽霊がブローアムを訪れたエピソードがある。詳細は本論文の第 3 章で論じる。

では幽霊を再興して居る」と思う場面がある。円了が学問を通して撲滅しようとした幽霊が「再興して居る」のである。

ロンドンで心霊現象研究協会(The Society for Psychical Research、通称 SPR)が設立されたのは 1882 年である。明治の妖怪博士と呼ばれた井上円了が怪異現象の原因として霊の存在を否定したのに対し、SPR の目的は霊の存在の有無を検証することであった。平井の「幽霊研究会」は、この SPR の影響を受けて発足したものであったと考えられる。つまり、明治日本における怪談や幽霊の扱いは、それを全面的に否定した初期から、イギリスでの怪談や幽霊に関する知見をも参照しつつ怪談や幽霊を肯定した上で学問的に検証しようとする後期へと変貌していったのである。一柳廣孝は「明治四十年前後における怪談の復権、怪談会の復活は、かつて機能していた円了フレームから、欧米の科学的心霊研究をバックボーンとする平井フレームへと移行したことが大きく影響していると考えられよう<sup>5)</sup>」と指摘している。「明治四十年前後における怪談の復権、怪談会の復活」は、日露戦争によって大量の死に直面した当時の社会的な雰囲気も考慮に入れて考えるべきだろう。本論文では、日露戦争期に量産された怪談、心霊研究の潮流に乗っていた怪談、そして江戸期から受け継がれてきた怪談、この三つのカテゴリーを中心に明治の怪談を考えることにする。

近代日本において幽霊を学問的に定義した最初の例は柳田国男(1875—1962 年)によるものであろう。柳田は『妖怪談義』(1936 年)の中で妖怪と幽霊を区別しながら、次のように幽霊を定義した。第一に、妖怪は出現する場所が決まっているのに対し、幽霊はどこへでも現れる。第二に、妖怪は相手を選ばず、誰にでも現れるのに対し、幽霊の現れる相手は決まっている。第三に、妖怪の出現する時刻は宵と暁に、幽霊は丑満つどきと言われる夜中に出現する<sup>6)</sup>。つまり、幽霊は夜中に場所を選ばず決まった相手の前に現れるものである。

これに対して日本近世文学研究者である諏訪春雄(1943 年—)は、妖怪と幽霊を区別する要因の一つとして死と生の違いを挙げた。すなわち、幽霊は死が絶対に必要な条件であるのに対して、妖怪はおおむね生者であり、死者である必要は

---

<sup>5)</sup> 一柳廣孝「怪談の近代」『文学』15 巻 4 号、岩波書店、2014 年 7 月、23 頁。

<sup>6)</sup> 諏訪春雄「日本幽霊学事始」『幽霊学入門』新書館、2010 年、124—125 頁。

ないと説明する。また幽霊が人間の形で出現する一方、妖怪は人間以外の形で現われるとし、最後に異界と他界の区別によっても妖怪と幽霊は区別されるとする。異界は空間的な概念であり、人間が日常生活をいとなむ空間と重なり、あるいはその周辺にひろがる非日常空間のことを指す。異界は、内に対する外の語であらわされる関係概念であって、その位置は相対的に移り変わる。他界は空間概念のほかに時間概念を併せ持つもので現世の非日常空間であるとともに、人間が誕生前および死後の時間を送る世界である。他界もまた、この世に対する関係概念であるが、その関係は異界のように可變的ではなく、絶対的に固定されている<sup>7</sup>と諏訪は定義する。幽霊は死んだ人間が現れるもので、異界ではなく他界に属するものだというのが諏訪春雄の見解である。これは小松和彦を中心とした民俗学研究的領域でしばしば幽霊を妖怪の下位項目として位置づけることと対比的である。

本論文では怪談や幽霊という用語を使用するに当たって以上の議論を参考にし、狭義のものとして使うことにする。言い換えれば、辞典的な意味の怪談<sup>8</sup>ではなく、人間関係及びその人間と社会の関係で発生した出来事が引き起こす怪異と、そこに現れる人間の形をした霊の話と限定して、怪談という用語を使うことにする。また、幽霊については、幽霊を妖怪の下位項目とした小松和彦の定義と分類に従うのではなく、妖怪と幽霊を区別した諏訪春雄の見解に従うこととする。

## 第2節 先行研究に対する本論文の位置付け

怪談や幽霊に関する研究は、その作品や物語を個別に扱って論じる、あるいは作家研究の延長線として行われることが多いが、その中でも例外的に時代性を中心にした総体的な研究として、江馬務『日本妖怪変化史<sup>9</sup>』（1923年）、池田彌三

---

<sup>7</sup> 諏訪春雄、前掲書、134—136頁。

<sup>8</sup> 『広辞苑』第5版によると、怪談は「ばけものに関する話。妖怪・幽霊・鬼・狐・狸などについての迷信的な口碑・伝記」とある。

<sup>9</sup> 江馬務『日本妖怪変化史』中外出版、1923年。

郎『日本の幽霊<sup>10</sup>』(1974 年)、諏訪春雄『日本の幽霊<sup>11</sup>』(1988 年)、須永朝彦『日本幻想文学史<sup>12</sup>』(2007 年)、谷口基『怪談異譚<sup>13</sup>』(2009 年)などを挙げる  
ことができる。

江馬務の『日本妖怪変化史』は、題名からもわかるように、主に平安時代から江戸期までを中心として、妖怪たちの歴史、出現条件、能力、弱点などについて述べたものである。怨念を抱いて死んだ者が幽霊となる場合ではなく、火の玉、大入道、轆轤首などの妖怪が対象であるため、本論文との関わりは他の先行研究と比べて少ないが、怪談研究全般において先駆的な著作として今でも高く評価されているため、ここに挙げておく。

池田彌三郎の『日本の幽霊』は、民俗学の観点から日本の幽霊や妖怪を日本人の心性と結びつけて論じたものである。日本人の集団的な心意伝承を支える条件として、日本の季節や家屋構造、生活習慣などが挙げられている。

民俗学の観点からなされた池田彌三郎の『日本の幽霊』とは異なり、諏訪春雄の『日本の幽霊』は、歌舞伎などの文芸作品を中心として、江戸期までの幽霊のイメージの変遷を明らかにしている。さらに、宗教的な観点から日本人の死生観を分析した後、それを中国の死生観と比較することで、日本における幽霊の特徴を明らかにしている。

諏訪春雄の研究が文芸作品を中心にして、江戸期に時期が限定されていたのに対し、須永朝彦の『日本幻想文学史』は、神話から近代の小説に至るまで様々な作品を取り上げるもので、以前の研究と比較して文学史を基盤として論を展開している点に特徴がある。民俗学や宗教学の観点からではなく、文学の領域から全体的な怪談史をまとめた著作としてその価値は高い。巻末に「日本幻想文学年表」が付されており、一目で怪談の歴史を概観することができる。本論文で対象

---

<sup>10</sup> 池田彌三郎『日本の幽霊』中央公論新社、1974 年。

<sup>11</sup> 諏訪春雄『日本の幽霊』岩波書店、1988 年。

<sup>12</sup> 須永朝彦『日本幻想文学史』平凡社、2007 年。

<sup>13</sup> 谷口基『怪談異譚—怨念の近代』水声社、2009 年。

とする明治期の怪談関連文学作品については、三浦正雄の「日本近現代怪談文学史〈明治編〉<sup>14</sup>」も包括的である。

また、横山泰子は『江戸東京の怪談文化の成立と変遷<sup>15</sup>』（1997 年）で、江戸末期から明治初期までの怪談文化について歌舞伎を中心に論じながら、思想史や文学史、または民俗学の観点までもを取り入れて綿密に分析している。横山は「江戸編」と「東京編」に分けて論を展開していく中で、「江戸編」で江戸の怪談を娯楽として規定し、「東京編」では近代という時代の中で怪談がそのような娯楽としての機能を失っていく足跡を辿っている。

近代化における前近代に由来する怪談・幽霊譚の変容とその意義を問う本論文においては、とりわけ谷口基『怪談異譚—怨念の近代』が重要である。近世怪談に始まり、開化期怪談、「琴のそら音」に代表される近代作品と超自然の関係、第二次世界大戦敗戦後における怪談の変容、現代の怪談にいたるまでを網羅し、近代怪談そのもののなかに「〈近代〉を相対化するまなざしの諸相<sup>16</sup>」を求める谷口基の著作は、『真景累ヶ淵』、「琴のそら音」、『船幽霊 噂の高潮』という研究対象の選択において、また日本の近代化と幽霊譚の変容の複雑な交渉関係を問うという問題設定において、本論文に多くの示唆を与えている。

植民地朝鮮と日本の怪談については、『朝鮮公論』など植民地朝鮮で刊行された日本語文献を対象にした中村静代の研究が注目に値する。中村は日韓における「怪談」という用語の使い方や概念のズレを指摘するなど、興味深い論を展開している<sup>17</sup>。

本論文では、以上の先行研究では十分な注目を浴びることがなかった文学作品を対象として、あるいは主流として取り扱われる文学作品だとしてもその作品の周辺に存在する同系統の非主流作品との比較を通して、さらに文学作品とは通常

---

<sup>14</sup> 三浦正雄「日本近現代怪談文学史〈明治編〉」『山陽学園短期大学紀要』34号、山陽学園大学、2003年。

<sup>15</sup> 横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』風間書房、1997年。

<sup>16</sup> 谷口基、前掲書、253頁。

<sup>17</sup> 中村静代「植民地朝鮮と日本の怪談—日韓併合前後における『怪談』概念の変容をめぐって」『日本学研究』44巻、檀国大学校日本研究所、2015年1月。

みなされない新聞報道などにおける怪談との比較対象を通じて、日本の植民地拡大と怪談との関係を視野に収めて、既存の研究とは異なるスタンスで怪談に接近していく。

ここでは、本論文の持つこのような特徴に光を当てるために、『真景累ヶ淵』における「真景」という表記のもつ意味について、簡潔に触れたい。既存の『真景累ヶ淵』に関する先行研究は、題名にある「真景」と「神経」という用語の關係に注目し、当時の神経病言説との関連を指摘<sup>18</sup>しながらも、実際には『真景累ヶ淵』という作品の中および同時代言説のなかで「神経」がどのような機能を果たしていたのかについては、十分なかたちで解析することはなかった。本論文は、円朝が作品の冒頭で語る「神経」に関する説明と、作中に表象されている「神経」が矛盾していることを指摘し、その裏に女性を「神経」病に罹患しがちな存在とする近代的な女性嫌悪の意識が内在しているのではないかという疑問から出発する。『真景累ヶ淵』に関する数多くの先行研究の中で、女性嫌悪が『真景累ヶ淵』で怪談を語る原理として働いていると指摘したものはなかった。

また、本論文は、明治期の作品を中心対象としながらも、江戸期からの連続性もしくは断絶を明確にするために、その系譜に属する同類の江戸文学も視野に入れて考えていくことになる。第 1 章では、<sup>かさね</sup>累伝説の系譜を理解するために、前近代の作品を多数分析する。幸田露伴「対髑髏」を分析する第 2 章では、前近代の小野小町伝説との関連を指摘し、それが変容された結果として「対髑髏」を分析する。第 3 章では、夏目漱石の「琴のそら音」を中心に論を展開していく中で、主人公の「余」が経験する恐怖という感情に三遊亭円朝の『牡丹灯籠』が影響していることを確認する。第 4 章においても、近代の船幽霊の特性を明らかにするために、まず前近代の船幽霊の原型について分析し、前近代と近代の連続性と断絶を明らかにする。

---

<sup>18</sup> 本論文は、「神経病」という新語には、もとより「因果」という言葉が包含してきた、人間の心理、業、運命などの壮大な宇宙観のすべてを説明し含有しつつす力など認めることができない」とする谷口の見解を共有するものである(谷口基、前掲書、75頁)。

### 第3節 本論文の研究方法

本論文は、ジェンダー、戦争、植民地主義という三つの視座から明治期幽霊譚を分析するものである。

まず、第1章「近代日本における累伝説の変容—明治期を中心に」および第2章「幸田露伴「対髑髏」における明治の女幽霊—古典からの影響と明治の女性嫌悪」では、怪談というジャンルで、前近代から明治期にかけて、怪奇現象の原因は女性に由来するとされていることに注目し、三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』（1888年）と幸田露伴「対髑髏」（1890年）での女幽霊の描かれ方を、前近代からの系譜と比較対照し、ジェンダーの側面から考察する。

仏教唱導説話の形で始まった累伝説のヒロインが、江戸期では「夫のために身を売る献身的な女」（『伊達競阿国戯場』1778年）や「貞淑な女」（『新累解脱物語』1807年）として変容してきたのに対し、明治の『真景累ヶ淵』では「神経症を持つ病者」として描かれていることを確認する。江戸期の累関連作品において累がもたらす凶事は、彼女の内面の凶悪さや反社会的行動からではなく、醜い外貌に起因するものであった。それに対して、『真景累ヶ淵』の豊志賀は「神経」症的な内面のために凶事をもたらすものとされている。『真景累ヶ淵』において累の役割をするヒロイン豊志賀は、男の新吉より18歳も年上の女として設定され、男児を抑圧し拘束する母でありながら年下の男を誘惑する悪女として描かれている。また、「神経」という当代の用語を積極的に利用し、豊志賀を神経病を持つ女、病を持つ女として表象することによって、江戸期と比べて異常に強化された女性嫌悪の論理が働いていることと、その裏には女を病と関連付けようとする近代イデオロギーが潜んでいることを確認する。『真景累ヶ淵』は、すべてが因果に収斂される点からみて仏教の論理に基づいた前近代の怪談のようにみえるが、核心である豊志賀の描かれ方を考えると、「神経」という新時代の用語と当時の女性嫌悪が融和された例として把握することができる。『真景累ヶ淵』における恐怖の度合いは、女性である豊志賀を嫌悪すべき存在、「神経」病的存在として認識する程度と比例するとも言える。

幸田露伴の「対髑髏」のヒロインお妙も、第 1 章で分析した豊志賀と同じように、当時の女性嫌悪を強く反映した幽霊である。お妙は遺伝によるハンセン病者として描かれているが、彼女の病と醜は、実は男の愛を拒否し、男を翻弄した「天刑」であるとされていることを確認する。お妙のこのような表象のあり方には、男の恋を拒んだ女が罰を受けて醜くなるという小野小町衰老落魄譚との関連が深く、お妙はこの点でまず小町と同一視されている。その一方でお妙は、明治期の、結婚を忌避し勉強を続ける女学生の系譜にも属する。明治期の女学生が、学問好きで男性には見向きもしないという場合、小町に擬せられることがあった。お妙は、このような女の表象としても理解することができる。

第 3 章「日露戦争と怪談—夏目漱石「琴のそら音」を中心に」と第 4 章「近代日本の船幽霊—鬱憤の表象から帝国の武器へ」では、日清戦争や日露戦争などの戦争によって発生した自国民大量死や、植民地における異民族武力制圧に対する、当時の日本社会の対応のありかたの一つとして、怪談というジャンルの興隆があったという仮説に基づいて分析を行う。

第 3 章では、夏目漱石の「琴のそら音」を取りあげて、怪奇現象や迷信とそれに対する近代的知識人の反発の表象のあり方の裏に、日露戦争前後の時代の不安が存在することを観察する。「迷信」と「近代の知」が対立した初期を経て、日露戦争前後には「近代の知」が「迷信」を科学の範疇に取り入れようとし、部分的にはそれに成功したが、部分的には失敗したことを確認する。また、「琴のそら音」と同じく、日露戦争が背景になる「趣味の遺伝」を通して、前代から「遺伝」されていた「浩さん」の「趣味(愛)」が日露戦争によって破壊される様子を漱石が「幻怪」として捉えて描いたことを立証する。

船幽霊の系譜を辿る第 4 章では、日露戦争の戦死者たちが船幽霊として登場する日露戦争後の新聞記事を取り上げて、祀られることがなく彷徨い続ける幽霊たちが、国に帰ろうとするロシア軍人や日本社会で排除された娼婦であることを確認する。そのことにより、死者のなかでも祀られるべきものと、祀られる必要のないものとを弁別する際に、国籍やジェンダーの要因が働いていたことを明らかにする。



明治期の幽霊譚は、大量の死<sup>19</sup>をもたらした日露戦争を契機として量産されるようになるが<sup>20</sup>、戦争によって死に追いやられた者たちを明治の文学は「幽霊」や怪奇現象の原因として再来させている。そこには、戦争により自国民を死に追い込む強権的な国家に対する反抗や、対抗的疑念を提示しようとする姿勢がみえるが、この姿勢は日露戦争の後、植民地を背景に語られた怪談には見当たらないものである<sup>21</sup>。日露戦争を起点として日本の帝国化が加速する中、植民地を背景にした幽霊譚は、主に日本の政治的な意図と深く関わって語られ、伝えられた。

第4章では、歴史の敗者、被害者として表象されてきた船幽霊が、開国期から日露戦争期にかけて、どのような変容を経ていくのかを分析する。元来平家の亡霊と想像され西日本海岸に出没するという船幽霊のイメージは、ノルマントン号事件(1886年)を背景にして描かれた『船幽霊 噂の高潮』(1886年)までは残存

---

<sup>19</sup> 日露戦争の戦死者数は、『国史大辞典』には約8万4千人、桑田悦、前原透編著『日本の戦争—図解とデータ』(原書房、1982年)によると約11万8千人と記されている。ロシア側の戦死者数が約2万5千と推定されることを考えると、日本は戦争には勝ったとしても敗戦国のロシアよりも莫大な死傷者を残したと言える。

<sup>20</sup> 1904年と1905年は紙面が日露戦争一色となるため、1903年と比べると怪異記事は明らかに減少するが、1906年には再び増加して1912年までその傾向は変わらない。こうしたことから、20世紀に入ってから怪異記事は、単に江戸期以来の伝統的なものが復活したというより、20世紀において新しい意味を帯びて再登場したといったほうが適切なほどであると湯本豪一は「明治の新聞における怪異記事—その分析と考察」の中で述べている。日露戦争に勝利して近代国家へと邁進していったこの時代に怪異記事が激増しているという事実は注目に値する。湯本豪一「明治の新聞における怪異記事—その分析と考察」『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009年、9頁を参照。

<sup>21</sup> 谷口は「あとがき」で「明治政府は、国家設立の行程で死者の差別化を行い、殉国者を神として祀る一方、これに敵した者の死をさげすみ、忘れ去ることにつとめた。(中略)倒幕期から維新後の内戦における敗者の霊が登場する怪談は、まったくといっていいほど書き残されていない」としている(谷口基、前掲書、254頁)。本論文は、日露戦争におけるロシア軍人、日本人海外セックスワーカー、金玉均、閔妃の霊が登場する新聞記事や小説を検討することにより、これまで注目の向けられることの少なかった、対外戦争や植民地主義における敗者たちの霊を分析することになるが、そこで幽霊譚の形式をもって語られているのは、実際には敗者たちの声ではなく、敗者たちを日本がどのように理解しようとしたのかであると論じていくことになる。

していた。しかし、日露戦争を経て日本が帝国として植民地を占領し始める時期になると、船幽霊さえも帝国の植民地拡張のための武器として呼び出されるようになる。植民地主義を反映した幽霊譚として『怪談百物語 船幽霊』(1917 年)を分析し、歴史の敗者、被害者として表象された船幽霊が帝国の植民地拡張の武器として想像されるまでの過程を明らかにする。

第 5 章「近代日本における朝鮮関連怪談—金玉均と閔妃の幽霊譚を中心に」で検討をおこなう、金玉均(1851—1894 年)<sup>22</sup>および閔妃(1851—1895 年)<sup>23</sup>にまつわ

---

<sup>22</sup> 19 世紀後半期朝鮮の開化派の指導者。鎖国攘夷に反対し、開国・開化をめざす同志たちを結集し、これが開化派となる。金玉均ら開化派は、対外的には清朝との事大関係を清算して完全独立を実現し、対内的には日本の明治維新をモデルとして国政改革を意図し、閔氏一族を中心とする守旧派と対立した。金玉均は 1882 年 2 月から 7 月まで、徐光範とともに初めて訪日し、福沢諭吉らの協力を得て慶応義塾や戸山士官学校に留学生を派遣し、日本の文物制度を視察し、政界人と接触した。84 年 4 月、留日士官学生を連れて日本から帰国した金玉均は、君側から守旧派を除去し、開化派政府を樹立するための秘密計画に着手し、日本公使竹添進一郎に要請して、事前の約束に従って日本軍を出動させ、王宮を護衛させた。しかし、ソウル駐留の清国軍が、袁世凱の指揮のもとに武力介入を始めると、竹添は一方的に日本軍を撤退させ、孤立無援となった開化派は、金玉均ら 9 名だけが生存して、日本またはアメリカに亡命した。日本に亡命した金玉均は 94 年 3 月 28 日に、上海の日本旅館東和洋行で洪鐘宇に四十四歳で暗殺されるまで日本で十年間亡命生活を送った。ジャパンナレッジ版の『国史大辞典』を参照(<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=30010zz143680> 最終閲覧日 2015 年 12 月 2 日)。

<sup>23</sup> 朝鮮第 26 代国王高宗の妃。明成皇后とも呼ばれる。1866 年に大院君(高宗の父)夫人の推薦で高宗妃となる。大院君は当時の王室の外戚による戚族政治の弊害を防止する思惑で戚族(安東金氏と豊壤趙氏)以外の閔氏から選定した。しかし、73 年の大院君の失脚を契機にして、閔妃とその一族の閔氏派は政権の主導権を握り、戚族政治を行うようになった。閔氏政権の無定見な開国政策は国内の社会的矛盾を激化させ、82 年には壬午軍乱がおこり、閔妃は変装して宮城を脱出して忠州長湖院で難を免れた。84 年には甲申政変がおこる。いずれも清軍に支援を要請してこれを鎮圧した閔氏政権は復活、開化に対抗して守旧政策を強めた。94 年の日清戦争の際に日本軍は宮城を占領し、反日的な閔氏派政権を打倒して親日的な開化政権を樹立、保護国化政策をすすめた。翌 95 年の三国干渉を契機にして閔妃と閔氏派はロシアと連携して、反日政策を展開した。同年 10 月 8 日未明、日本公使三浦梧楼の首謀のもとで、日本軍一個大隊・日本外交官・居留民が再び宮城を占領して、閔妃を殺害した。ジャパンナレッジ版の『国史大辞典』を参照(<http://j>

る怪談は植民地主義によって創出された幽霊譚の代表的な例である。本章では、朝鮮半島の金玉均と閔妃の幽霊譚を分析して、男性である金玉均が日本人のような文明人として描かれる一方、女性である閔妃が朝鮮の野蛮を代弁する人物として描かれたことを確認する。このような金玉均と閔妃の対比は、男と女の対比としても描かれている。金玉均と大院君、そして閔妃に対抗する東学農民軍の関係を記述した『読売新聞』や『東洋大戦史』、金玉均と閔妃を殺害した疑いで死刑になった李周會の幽霊が同時に登場する『佳人之奇遇』（1885—1897 年）がそれを証明するものである。金玉均、大院君、東学農民軍、李周會が各々の政治的な差異を超えて、閔妃に対抗する男として描かれているのである。しかし、一方で金玉均の幽霊は頭山満との関係の中で、女としてジェンダー化されることもある。金玉均は、閔妃との関係において日本人と肩を並べる文明人としての男として形象化されたが、頭山満のような日本人と対比される場合には、植民地朝鮮を表す女として表象されることもあったのである。閔妃の幽霊は、非業の死を迎えた哀れな存在ではなく、単に宮中に現れて周辺の人を死なせる悪霊である。閔妃の幽霊譚では、朝鮮の野蛮性、非合理性が常に強調されている。閔妃は野蛮として朝鮮そのものであると同時に、女として朝鮮を滅ぼした元凶でもあるとされている。

金玉均と閔妃の幽霊譚は、どちらも日本の政治的な意図の中で作られた話である。新聞報道などを通して、一見朝鮮現地からの風聞であるかのように記されているが、当時朝鮮の記録には金玉均と閔妃の幽霊譚は管見のおよぶ限り見当たらない。残っている口伝記録では閔妃が日本の姫として登場するなど、日本側の幽霊譚とは大きく異なっている。金玉均と閔妃の幽霊譚は、徹底的に日本側の政治的な立場から想像された話であると言える。

#### 第4節 各章の概要

ここでは、各章の概要を各々に具体的な作品例をあげながら述べることにする。

まず、第 1 章では、近代日本における累伝説の変容について主に明治期を中心にして考察する。累伝説にはさまざまなヴァージョンがあるが、夫に殺害された妻・累の悪霊が夫とその周囲の人物に害をもたらすというプロットが中心をなしている。日本近代小説の始まりといわれる二葉亭四迷(1864—1909 年)の『浮雲』(1887—1889 年)における言文一致体に影響を与えたことで有名な三遊亭円朝(1839—1900 年)の『真景累ヶ淵』(1888 年)は、累伝説の系譜と変容を考える場合に極めて重要な意義を持つ作品である。本論文では『真景累ヶ淵』について論じる前に、まず江戸期の累関連作品の中から代表的な作品を選別して概括し、江戸期には仏教や儒教という宗教・思想イデオロギーによって累伝説が変容してきたことを明らかにする。これによって、近代精神医学における神経病理解を累伝説に輸入して、神経病を怪異現象の本質と理解する明治の累伝説が、如何に江戸期と比べて異質なものであったのかが確認できる。また、本論文ではその異質性と共に、曲亭馬琴(1767—1848 年)の『新累解脱物語』(1807 年)などに見られる江戸期儒学者の怪異観が「神経」という用語を借りて、明治において再び活用されたことの可能性についても注意を払って分析する。また『真景累ヶ淵』において、「神経」が積極的に利用されながらも、その「神経」の論理が矛盾しているという問題の原因として、女性嫌悪を挙げることの可能性について考える。江戸期のように露骨ではないものの、内在された意識として女性嫌悪が『真景累ヶ淵』の中に見られる。

第 2 章では、『真景累ヶ淵』の豊志賀(累に相当)と同じように、男を誘惑する女が幽霊として登場する幸田露伴(1867—1947 年)の「対髑髏」(1890 年)を取りあげて、明治初期の幽霊が江戸期のものを踏襲したものと見えながら、一方では新時代の潮流に乗って少しずつその様態を変えた形で描かれていたことを確認する。「対髑髏」は基本的に古典怪談に登場する女幽霊、特に中国の『聊斎志異』(17 世紀)などに見られるような「士を誘惑する女幽霊」を典拠としている。「対髑髏」の中の女幽霊が生前ハンセン病患者であったという設定は、一見独創的な発想のようだが、近代以前から存在していたハンセン病に関する議論を土台として

作り上げられたものとも考えられる。また、これは中国の古典ではなく、小野小町伝説などの日本の古典説話の中から得た設定であるとも言える。男の恋を拒んだ女が罰を受けて醜くなるという小野小町衰老落魄譚は、「対髑髏」でハンセン病という装置を使って再び変奏されている。特筆すべき違いは、小町は色好みの女であったが、「対髑髏」のお妙は色を嫌悪する女として描かれている点である。本論文ではこの違いにも注目して自由恋愛の時流に符合しない女を醜女として形象化した明治の女性観なども視野に入れて論を展開していく。

第3章では、夏目漱石の短編「琴のそら音」を取りあげて近代的な知と怪談、もしくは日露戦争と怪談の関係を明らかにする。「琴のそら音」における怪奇現象や迷信と、それに対する近代的知識人の反発の表象のあり方の裏に、急速な近代化・西洋化の途を歩みつつあった当時の不安や病理を観察していくことを目的とする。具体的には、同作品における「迷信」と「近代的知」との関係に焦点をあてる。

また、科学や戦争によって危機に落ちる主人公「余」の愛という側面が以後「趣味の遺伝」へとも繋がっていくことも指摘したい。夏目漱石にとって、国家の戦争は個人の愛を危うくするものであり、怪談はその恐怖をいかにも適切に表してくれる材料であった。「琴のそら音」においては戦争が喚起する死の恐怖が「余」の愛を危うくすることにとどまり、「婚約者が自分をもっと愛するようになったというハッピーエンディングを迎えるが、『濛濛集』に収められたもう一つの短編、「趣味の遺伝」(1906年)においては、日露戦争の戦死軍人の「浩さん」の愛が戦争によって完全に破壊されてしまうさまが描かれている。そこでもまた漱石が幻想的な要素を取り入れたことは注目に値するだろう。この章では漱石が「琴のそら音」と「趣味の遺伝」を執筆した背景には漱石自身の幽霊に関する興味がある一方、日露戦争後の不安定な社会状況などが密接に関わっていることを確認したい。

第4章では、近代日本の船幽霊について、ノルマントン号事件を背景とする『船幽霊 噂の高潮』(1886年)と日露戦争後の新聞記事による船幽霊譚、また台湾植民地支配と深く関わる『怪談百物語 船幽霊』(1917年)を分析し、歴史の敗者、被害者として表象されてきた船幽霊が帝国の武器として想像される過程を明

らかにする。本来平家の亡霊として西日本海岸に出没すると想像されてきた船幽霊のイメージは、ノルマントン号事件、日露戦争、帝国日本の南洋進出など、その時代の様相に合わせて変容してきた。日本において怪談が不当に生命を奪われた人々の怒りと執念が、加害者に罰を与える物語だとすれば、船幽霊の話でも日露戦争期まではそのような因果応報譚的な要素が含まれていたと言える。しかし、日本が帝国として植民地を占領し始める時期になると、船幽霊さえも帝国の目的遂行のために役立たせられることになる。本論文では日露戦争と植民地支配という問題を船幽霊と関連付けて論を展開していきたい。ここで重要であるのは『怪談百物語 船幽霊』では、船幽霊は超自然の存在ではなく、光学テクノロジーを用いて作り上げられる幻影であるという点である。本章は、近代テクノロジーを用いて旧来の怪奇現象に類似した幻影を作り出し、台湾先住者武力平定に活用する日本帝国に、旧来の怪談を近代的科学の枠組みで再解釈しようとしてきた明治以降の日本の営為のひとつの帰着点を見出すことになる。

第5章では、以前の先行研究では注目されることがなかった日韓合併の以前の朝鮮関連怪談、特に金玉均と閔妃の幽霊譚について新聞記事などを対象として分析する。この二人の怪談が当時朝鮮で流行していた証拠は見つからない。特に親日派の代表とされていた金玉均の幽霊が東学農民軍の将軍となって日本軍と戦うという、『読売新聞』に登場する逸話は、朝鮮では有り得ない発想である。『読売新聞』などで報道された金玉均と閔妃の幽霊譚、および金玉均の幽霊が登場する東海散士(芝四朗)の小説『佳人之奇遇』(1885—1897年)は、金玉均と閔妃が日本とも密接な関係を持った実在人物であった点から、怪談と日本の近代化、とくに植民地支配との関係を探る本章で検討すべき格好の素材を提供するものである。この章では、この二人を幽霊として想像する原動力になった近代日本の言説を綿密に分析し、近代日本における朝鮮観についても考察する。

このような考察を行うことで、近代日本の怪談が前近代と異なる形で創出された様相をジェンダー、戦争、植民地主義を中心に把握することができるとと思われる。ジェンダー、戦争、植民地主義という要素が前近代の怪談とは異なる近代日本の怪談の特徴であるという前提を置いた上で論を展開する。日本の怪談史においては、本論文で扱う作品以外にも重要な位置を占める作品が多数存在する。明

治の怪談としてはラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn、1850—1904 年)の『Kwaidan』(1904 年)がまず思い浮かぶだろう。柳田国男や泉鏡花も明治の怪談と深く関わった人物である。しかし、本論文では前近代から近代へと怪談が変容していく様相を確認するための作品を選定して考察した。言い換えると、本論文の趣旨に合致して分析の対象にした作品は、必ずしも近代日本の怪談を代表するものではないが、近代日本の怪談を新しい視座から把握し、今まで論じられることがなかった近代日本の怪談の特徴を提示してくれる好材料として位置づけることができるのである。

## 第1章 近代日本における累伝説の変容 —累伝説における女性嫌悪の系譜と変容

### 第1節 はじめに

累かさねは、お岩、お菊と共に日本の三大幽霊<sup>24</sup>とも呼ばれる代表的な江戸怪談のヒロインである。江戸期から累を題材にした作品は数多く存在しており、近代に入ってから三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』(1888年)を始め、田中貢太郎「累物語」(1928年)、柴田錬三郎『怪談累ヶ淵』(1992年)など、多種多様な方法で累の物語は受容され、または変容してきた。

本章は、この累を題材にした物語が明治初期という時代にどのように変容していったのかを究明するものである。そのために、1888年の『真景累ヶ淵』を分析し、怪談のヒロインとしての累が、明治という時代に如何に表象されていたのかを考察する。

本章では、まず江戸期の累関連作品群から幾つかの代表的な作品を選別して紹介しながら、江戸期にかけて累の物語が如何に変化して来たのかを確認した後、明治の累関連作品を分析したい。これによって、明治と江戸の累がどのような点で差異を有しているのかが確認できる。また、文明や合理を標榜しながらも、前近代を踏襲して語られていた明治初期の怪談文化の一面を垣間見ることできるだろう。

累伝説は初めから女性嫌悪や障がい者嫌悪を露骨に表している物語である。江戸期までの累伝説は、外見が醜くて身体が不自由な累という女性が夫に殺された後、怨霊となって憑依するという怪談である。累によって一時期不安定な状態に陥った社会共同体、特に成人男性中心の社会共同体が安定を取り戻し、その構成員たちも治癒されて終わるのがこの物語の結末である。『古今犬著聞集』(1684

---

<sup>24</sup> 志村有広、諏訪春雄編『日本説話伝説大事典』勉誠出版、2000年、206頁。



年)『死霊解脱物語聞書』(1690 年)では仏教、『伊達競阿国戯場』(1778 年)『新累解脱物語』(1807 年)では儒学が各々この復旧と治癒の役割を果たしている。

それでは、このような累伝説は、怪奇現象をも合理化しようとした明治時代において、どのように変容していったのであろうか。その変容の背後に、どのような時代風潮やジェンダー力学をうかがい知ることができるのであろうか。「神経」という明治当時の流行語を想起させる「真景」をタイトルに掲げて登場した『真景累ヶ淵』は、文明化、合理化という時代の潮流に乗りながらも、旧来の女性嫌悪の論理を巧妙に内包したまま、実はより強化された形で女性嫌悪をあらわにしていることを看過してはならない。

本章では、このような女性嫌悪を土台として語られてきた累の物語が、明治という時代と如何に呼応していたのかを念頭に置きながら論を展開していくことにする。『真景累ヶ淵』は「神経病」という近代の医学用語を使って近代的な側面を強調しながら、作中の女性たちを「神経病」を病む「病的な存在」として描いていることを本章では明らかにしたい。

そのために、次節では、江戸期の累伝説のうち、『死霊解脱物語聞書』、『伊達競阿国戯場』、『新累解脱物語』を検討する。累は、『死霊解脱物語聞書』で外見だけではなく心までも醜悪な存在として描かれる。一方、『伊達競阿国戯場』では夫のために身を売ろうとする献身的な妻でありながらも、「忠義」を理解できない「人欲」の存在として描かれる。また、『新累解脱物語』では、教訓的な話の中で貞淑な女として変形されている。その過程において、特に注目されるのは、これらの累伝説における女性嫌悪である。女性を醜女として描くにせよ、愚昧ではあるが献身的な妻として描くにせよ、貞淑な女に変容させるにせよ、その根底にあるのは、女性を男性とは異なる思考と行動の様式を持つ存在、忠義や貞淑などの倫理規範に従うことのない存在とみなす（あるいはその倫理規範に従う範囲内においてのみ称揚する）、広い意味での男性中心主義的な価値観とそこに内包される女性への不信感あるいは女性嫌悪であるというのが、本論文の基本的立場となる。江戸期の累物語に見られる女性不信は、かたちを変えて、明治以降の累物語群にも引き継がれていくことになる。なお、女性幽霊表象と女性不信と

いうテーマは、特に第 2 章の幸田露伴『対觸髅』、第 5 章における関妃表象の分析において、ふたたび論じられることになる。

## 第 2 節 前近代の累伝説

### 1. 累伝説の成立と定型化—『古今犬著聞集』と『死霊解脱物語聞書』

累を題材にした江戸期の数多い作品の中に山東京伝が 1809 年に書いた『累井筒紅葉打敷<sup>かさねいづつもみじのうちしき</sup>』という合巻がある。この作品の内容自体は怨霊成仏談というより一種の仇討ちものであるが、京伝が累という人物に深い興味を持っていたことは、その五年前(1804 年)に書いた考証随筆『近世奇跡考』からもわかる。

京伝はこの随筆を通じて、累伝説が虚構の話ではなく実際にあった事件であったこと、つまりその現実性を追求している。従って、以下に引用するその冒頭の記述は、累伝説のあらましと共に、江戸期の認識をみるにふさわしい資料である。

下総国岡田郡羽生村百姓与右衛門妻かさね、正保四年亥八月十一日、夫与右衛門が為に、絹川において殺害せらる。其所を今にかさねが淵と云。与右衛門、後妻をむかふる事五人、みなかさねが為にとり殺さる。六人めの妻、娘きくをうむ。きく十三の年、寛文十一年亥八月中旬、その母も又とり殺さる。翌寛文十二年子正月四日より、累が怨霊又きくにつきて苦しめけるを、同年三月十日尊き教化にあひて、かさね成仏し、きく一命をたすかりし事、『死霊解脱物語』『新著聞集』等にしるして、人みなしれる事なれば、くはしくしるすにおよばず<sup>25</sup>。

---

<sup>25</sup> 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成 新装版 第二期 6』吉川弘文館、1974 年、296 頁。

ここで京伝は、累の事件を記した文献として『死霊解脱物語聞書<sup>26</sup>』（1690 年）と『新著聞集<sup>27</sup>』（1749 年）をあげている。その中で年代順に早いものである『死霊解脱物語聞書』は、累伝説を定型化した作品として有名であるが、実は文献上初出の作品はほかにある。『日本伝奇伝説大事典』などには『死霊解脱物語聞書』をはじめにあげているが<sup>28</sup>、この話の初出といえは実は『古今犬著聞集』（1684 年）である。『古今犬著聞集』に比べて『死霊解脱物語聞書』の記述が詳しくドラマ性があることもこのような誤解を招いた要因であろう。累伝説を劇化した『大角力藤戸源氏』の大当たり以来、江戸市村座では累狂言を家の芸と定め、観客の評判にこたえて日に三部ずつくじ引きで『死霊解脱物語聞書』を配布した<sup>29</sup>という『中古戯場説』の記述を勘案すると、江戸期から近代に至るまで、一般的に累伝説の原典とされた書物は『古今犬著聞集』ではなく『死霊解脱物語聞書』であったと推定できる。

さて、先に引用した京伝のあらましには決定的なところ、つまりなぜこのような事件が起こったのかという理由が省略されている。なぜ累は夫与右衛門の手によって殺されたのかという点は記されていない。

『古今犬著聞集』巻第十二「幽霊成仏の事」ではその理由を最初から明らかにしている。「下総国岡田郡羽生村に、かさねと云女あり。其か夫ト、与右衛門ハ入婿にて有りしか、女の姿見にくし、とて、きぬ川江突落して殺し<sup>30</sup>」たとする『古今犬著聞集』の記述は衝撃的である。つまり、夫与右衛門が妻かさねを殺した理由はただかさねの「姿」が「見にくい」からであった。本章において検討していくことになる、累伝説に基づいた物語群では、男性にとって不都合である女性が、外面あるいは内面（またその双方）において「見にくい」存在として登場させられているという共通点があることを、ここで予め指摘しておきたい。

---

<sup>26</sup> 作者は残寿、上下 2 巻 2 冊、仮名草子、別書名『祐天和尚勸化死霊解脱物語』。

<sup>27</sup> 作者は棕梨一雪、全 18 巻、随筆。

<sup>28</sup> 鳥越文蔵他編『日本伝記伝説大事典』角川書店、1986 年、242 頁。

<sup>29</sup> 堤邦彦『『死霊解脱物語聞書』の世界』『江戸の怪異譚』ペリかん社、2004 年、36—37 頁。

<sup>30</sup> 朝倉治彦、大久保順子編『仮名草子集成 第 28 巻』東京堂出版、2000 年、160 頁。

『死霊解脱物語聞書』では、累が「顔かたち」において「悪女」とされるばかりでなく、「心ばへ」すなわち内面までも「かだましき」存在、厭われる存在とされている<sup>31</sup>。さらに、「すがたかたち見にく」く、「心ばへ」においても人に嫌われるような女は、夫によって殺害されてもいたしかたないことであるとする、農村共同体の意識が書き込まれている。

彼の <sup>かさね</sup> 累 と云女房、顔かたち類ひなき悪女にして <sup>あまつさ</sup> 剩 へ心ばへまでも、かだましきゑせもの也。(中略)さて其時同村の者共一両輩、累が最後の有様、ひそかに是を見るといへども、すがたかたちの見にくきのみならず、心ばへまで人にうとまるゝほど成ければ、「<sup>げ</sup> 実にもことわり、さこそあらめ」とのみいゝて、あながちに男をとがむるわざなかりけり<sup>32</sup>。

累の姿が醜かったのは『古今犬著聞集』と『死霊解脱物語聞書』とで共通しているが、『死霊解脱物語聞書』で累が殺された理由はそれだけではなかった。むしろ

---

<sup>31</sup> 田中貴子は『＜悪女＞論』（紀伊國屋書店、1992年）で、「奈良時代や平安時代に生きた女性」を取り扱った、中世に成立した資料を研究するにおいて、史実そのものではなく、「後の資料のイメージがどんなものであったか」「それはどのような過程で形成され、そこに関与する要因は何か」を問う視座に立ち、「悪女」の定義の歴史的変遷について、つぎのように述べている。「悪女」には容貌・外面において醜い女の意味があり、歴史的にはこれが先行している。これに17世紀、「性質や品行が「悪」い「女」「みにくくて、見かけの悪い女、また、身持ちの悪い女」という意義が加わる。現代においては、それに「第三の新しい意味」、すなわち「性格も悪く、男性に尽くすどころか逆に翻弄してしまうような「<sup>ファム・ファタール</sup>運命の女」という意味が追加される。ある女性が「悪女」と呼ばれる条件として、「権力を掌握するか、あるいは権力者の周辺にいて自身が権力に関与できる」点、さらに「男性との関係において彼女の価値が計られている」点を挙げ、「悪女」は「男性のまなざしによって計られる」ものであり、「悪女の「悪」は常に「誰にとっての悪か」が起点となっている相対的なもの」であるとしている（同書、6—11頁）。田中の論は、王朝文学や中世文学を論じたものであるため、江戸文学や明治文学を論じる本論文で田中の議論をそのままに援用することはできないが、「悪女」としての累表象とその変遷を考察するにおいて、貴重な示唆を得た。

<sup>32</sup> 高田衛編『近世奇談集成（一）』国書刊行会、1992年、334頁。

ろ、「心ばへまでも、かだましきゑせもの」であったのが一次的な理由であるかのようにも理解できる。そしてまた、村の人々が与右衛門による累殺害場面を見ていたにも関わらず、それを咎めなかったというところを見ると、累に対する村共同体の嫌悪感から、与右衛門による殺人を黙認していたことがうかがえる。女性の外面の美を重んじ、男性の意思に従順であることを女性の美德とする価値観が、累を殺害する夫のみでなく、農村共同体にも(そして『死霊解脱物語聞書』の作者である残寿と作品を読む読者共同体にも)共有されていたものと理解してよいだろう。そして、このような累に対する両作品の認識差は、結末にもよく現われている。『古今犬著聞集』においては、累の醜さの原因について語られることはない。他方、『死霊解脱物語聞書』では、累が見にくい姿で生まれたことに因果応報律による原因を与えている。これが両作品の最大の差異である。

『古今犬著聞集』において、累の母には、累の兄にあたる「助」という息子があつた。再婚相手の教唆に従い、累の母は助を殺害している。理由は、助が醜かったからである。「其ハ、かさねか兄也、かさねか母、助か六に成りし時、この村に來たり後の夫、助を誰にも養せよと云母か云、様、我たに見くるしき、と思ふにや、誰人か養ふへき、とて、きぬ川につれ行、淵に沈めける<sup>33</sup>」と『古今犬著聞集』は説明している。つまり、先天的な身体的障がいを持っていた助を嫌った夫は誰かに渡して養育させるように言うが、母である自分でさえ醜いと思う助を受け入れてくれるところはないと判断した母は、結局鬼怒川の淵に連れて行き、息子助を自分の手で殺すのである。

しかしながら、これが重要な点であるが、『古今犬著聞集』においては、累の醜さと、助の怨念には、何の因果関係も設定されていない。助の怨念が発動し始めるのは、累が成仏した後である。累の霊は、夫の与右衛門が再婚して得た娘である菊に憑依して現れた後、祐天上人の手によって、助の登場以前に成仏している。助はただ「かさねか往生を、羨しく思ひ<sup>34</sup>」現れたのである。

---

<sup>33</sup> 朝倉治彦、大久保順子編、前掲書、162頁。

<sup>34</sup> 朝倉治彦、大久保順子編、前掲書、162頁。

他方、『死霊解脱物語聞書』においては、助に当たる人物がその醜さゆえに母により殺害されたことと、妹・累の醜さのあいだに、因果関係が設定されている。

累が実父さきの与右衛門、やもめにて在し時、他村より妻をめとる。その女房男子一人つれきたれり。その子の形はめつかいでてつかいで、びつこにて候ひしを、与右衛門がいふやう、「かくのごとくのかたわもの、養育して何かせん。急で誰にもくれよ」といへば、母親のいふやうは「親だにあきし此子をば、たれの人かめぐまんや」（中略）母親が思ふやう、「子を捨るふちはあれ共、身を捨る藪なし」とて只今かれが申通り、かてつみにつれ行、松原の上手より川中へなげこみ、夫にかくと語れば、与右衛門もうちうなづき、「それこそ女のはたらきよ」とて中よく月日を送りしが、終に其年懷妊し、翌年娘を平産す。取あげそだて見てあれば、めつかいてつかいちんばにて、おとこ女は替われども、姿はおなじかたわもの<sup>35</sup>。

後に累の実父となることになる与右衛門が「他村より妻」を娶ったとき、彼女は身体に甚大な障がいを抱えた息子を連れていた。再婚相手・与右衛門の教唆に従い、母はこの息子を殺害した。ここまでは『古今犬著聞集』と共通している。この殺人を与右衛門が「それこそ女のはたらきよ」と賞賛していること、すなわち夫の意思に従う妻の行動は、それが実子殺害であっても、妻の美德として褒め称えられるべきであるという価値観を与右衛門が有していること、それが夫婦円満の秘訣であるとされていること（「中よく月日を送り」）にも注目したいが、ここでなによりも重要なのは、『死霊解脱物語聞書』では、『古今犬著聞集』とは異なり、与右衛門の子として生まれた累の醜さは、与右衛門の妻（累の母）が助を殺したことへの、応報律による結果であったとされている点である。累は、殺された兄と「おとこ女は替われども、姿はおなじかたわもの」として生まれた。

---

<sup>35</sup> 高田衛編、前掲書、381頁。以上の引用文には現在差別語とされる表現があるが、作品のオリジナリティーを尊重する立場から原文のままに引用する。差別を助長するような意図がないことをここに明記する。

すると、『死霊解脱物語聞書』の累の夫・二代目与右衛門による累殺害にはある種の必然性、妥当性を見ることが出来る。これは、現代でいうところの、現実世界における原因・結果の関係として捉えられるものではなく、本人自身の責任においてなしたことの結果が、後に本人自身によくも悪くも影響を与えるという意味での原因・結果としての妥当性を持つものでもない。しかし、先行する世代がなした事柄に対して、次世代が責任を負わされることは十分にありえることであり、それは適切なものであるとする思考の枠組み、すなわち前近代的な「因果応報」律においては、つぎの経緯には、必然性、妥当性が見出されるのである。累の父・与右衛門の教唆により母が累の兄を殺害、それが因となって、累は醜い姿で生まれる。「顔かたち<sup>たぐ</sup>類ひなき悪女にして 剰<sup>あまつさ</sup>へ心ばへまでも、かだましきゑせもの」である累は、ついには夫・与右衛門によって殺害されるが、累の「顔かたち」「心ばへ」の醜さが、夫・与右衛門による累殺害の原因となっている。現代の観点からみれば、累が美貌に恵まれないことは、累自身には何の責任もないはずであり、現実的物質的世界にその原因を見出すことはできない。しかし、この作品世界においては、母による息子(累の兄)殺害が、累の心身両面での「見にく」さの原因となることが、納得できるものとして提示されている。さらに、そのようにして生じてきた累の心身両面の「見にく」さが、夫である与右衛門に、妻・累の殺害を思い立たせ実行させるに足る必要十分な条件であるとされている。さらに加えて、先に述べたように、累の殺害場面を目撃した人々は、累が殺されたとしてもそれは仕方ないことだという立場をとっている。『死霊解脱物語聞書』で村の人々は「終に与右衛門が手にかゝり、かの累も此絹川に沈み果しは、是も因果のむくひならん」と、与右衛門による累殺害を「因果のむくひ」であるとして納得する。「因果のむくひ」を「思ひ合せて見る時は、今の与右衛門もさのみはにくき事あらじ」と納得して、与右衛門を免罪してしまう。累や与右衛門をとりまく人々は、先行する世代の者がなした悪行が次世代に害をもたらすという「因果」を妥当なものとみなしているばかりではなく、その結果としての累の外面の「見にく」さ・美の欠如を、彼女が内面においても「かだましきゑせもの」であることと同一視しており、累が内面外面において「見にく」いという

事実をもってして、与右衛門が累を殺害することの必要十分な条件とみなしているのである。

なぜ『死霊解脱物語聞書』には、このような結末が出てくるのか。現代の観点、すなわち原因・結果は現実世界における現象であり、人は現実世界において自分自身のなしたことの結果を引き受けなくてはならないとしても、自分の与り知らない先行する世代の所業については、責任の追いようがないとする観点からみれば、『死霊解脱物語聞書』で展開される「因果」は非合理的だと思うしかない。また、女性の外面的美の欠如を、内面における美德の欠如と同一視する価値観についても、承服しがたいものがあるだろう。しかしながら、この本の刊行目的を考えると、女性の外面の美と内面の美を同一視し、先行する世代の行動の結果が後続する世代に影響をあたえんとする理解のあり方は、それほど不思議でもない。なぜなら、仏教僧・残寿の筆になる『死霊解脱物語聞書』は、その基盤にある思考において、仏教における因果応報律に基づいているのであり、その思考は強く女性嫌悪的な要素を多く含んでいるからである。

『古今犬著聞集』の作者である俳人一雪<sup>36</sup>と違って、『死霊解脱物語聞書』の作者は残寿という浄土宗の僧侶である。彼は自分が語る物語を、「顕けん誉よう上人しようにん直じきの御物語を再三聴聞さいさんちやうもん仕り、其外羽生村はにうむらの者共はなの咄はなしをも粗聞ほきゝあわ合せ書記かきしるす者ものならし」と結んでいる。彼はこの話を、事件を解決した祐天上人(顕誉上人、1637—1718年)<sup>37</sup>から直接に聞いたのである。高田衛はこの点に注目し、残寿という著者は筆

---

<sup>36</sup> 1631 年京都出生の俳人。没年は未詳。貞徳に俳諧を学んだらしく追悼吟一句が伝わる。西武に従って俳諧師となり、26 歳から本格的な活動を始め、『祇園奉納俳諧連歌合』に付句十二、梅盛編『口真似草』に発句五十、付句八が入集し、この年の歳旦句も知られる。1660 年に『歌林鋸屑集』を出版。発句二十九句と独吟百韻一卷を収める。そのほか『茶杓竹』『正章千句』『洗濯物』『洗濯礎』『洗濯物追加晴小袖』を出している。1680 年頃から説話(実録)作者となって『古今犬著聞集』12 巻を成稿。1696 年には『日本武士鑑』を出版し、序文で西鶴を批判したことが知られている。特に、『古今犬著聞集』は、近世説話の源流をなすものと評価されている。秋山虔他編『日本古典文学大辞典 第 1 巻』岩波書店、1983 年を参照。

<sup>37</sup> 江戸時代の浄土宗の高僧。名利を求めず隠棲していたが、五代将軍徳川綱吉の懇請により諸寺に住し、後に増上寺三六世を継ぎ、大僧正となる。桂昌院をはじめ将軍家の信



記者に過ぎず、祐天上人こそこの本の陰なる実作者ではないかと主張している<sup>38</sup>。作者同定の問題は別として、この本が浄土宗の僧侶によって作られたものであること、従って浄土宗の教義に基盤を置いたものであることは、間違いあるまい。

浄土宗は法然を開祖とする日本仏教の一宗派で、その中心的思想は専修念仏である。『日本宗教事典』によると専修念仏とは、念仏の行のみを修めて、他の行を捨て去ることを意味する。浄土宗以前の念仏には複雑な理論の理解、財物の布施、厳しい修行の積み重ねが要求されていたものを、法然は浄土宗を救済の宗教と確立するために、救済の手続きを単純化し、あらゆる階層の人間に手の届くものに変革しなければならなかった<sup>39</sup>。いわば、庶民向けの宗教である。

この専修念仏の思想は、両作品に共通して表れている。例えば『古今犬著聞集』には累の怨霊に憑依された菊に向かって「いや、念仏すれハ、靈魂、往生するそ、早唱へよ<sup>40</sup>」と祐天が責める場面があり、累と助が成仏した後にはその場面を目にした共同体構成員が「感涙を流し、念仏する者多かりけり<sup>41</sup>」という記述も見える。『死霊解脱物語聞書』になると、念仏の効験を強調する場面が更に多く見られ、その描写も強くなる。特に助を成仏させる時には「十念したまへば、むらかり居たる老若男女、みな一同に南無阿弥陀仏と唱ふる声の内に、四方

---

望も厚く、しばしば城中に召された記事が『徳川実紀』にみえる。目黒祐天寺は弟子祐海が開き、祐天を開山としたもの。祐天の一代記には、①祐天寺蔵版『祐天大僧正伝』のように史実をなぞった漢文体のもの、②法席で説教として語られて流布した実録、③実録に基づいて脚色を加えた講釈、④読本などの系統がある。広く大衆に親しまれていたのは実録の祐天像で、前世の因縁で愚かだった祐天が成田山不動明王の力で叡知を得、さまざまな奇瑞を示し、祐天寺を隠居寺とした、というあら筋になっている。この中で特に有名なのが累得脱の一件である。ジャパンナレッジ版の『日本架空伝承人名事典』を参照(<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52510KK0065200> 最終閲覧日 2015 年 12 月 2 日)。

<sup>38</sup> 高田衛編、前掲書、1992 年、421 頁。

<sup>39</sup> 以上浄土宗に関する説明は、村上重良『日本宗教事典』講談社、1988 年、132—133 頁を参照。

<sup>40</sup> 朝倉治彦、大久保順子編、前掲書、161 頁。

<sup>41</sup> 朝倉治彦、大久保順子編、前掲書、163 頁。

の気色を見渡せば、何とは知らず光りかゞやき、木々の梢にうつろふは<sup>42</sup>」と、劇的な場面を演出している。加えて「奇哉此物かたり、あるひは現在のみんなわをあらはし、あるひは<sup>とうらい</sup>当来<sup>きなるかな</sup>の苦楽をしらせ、あるひは<sup>じゆきやう</sup>誦経念佛<sup>りやく</sup>の利益をあらそひ、あるひは<sup>しおんほうしや</sup>四恩報謝<sup>ぶんざい</sup>の分齊をただす<sup>43</sup>」と、浄土宗教理の布教という執筆の目的を明らかに示す記述も見える。『死霊解脱物語聞書』の作者が浄土宗の僧侶であると想定される以上、『死霊解脱物語聞書』が『古今犬著聞集』と比較して、浄土宗の教理をより積極的に写しだしているのは当然のことであろう。本論文の問題設定において注目したいのは、累が顔と共に心も醜かったという設定も浄土宗の布教という目的と関連があるのではなかろうか、という点である。

先に言及した『日本宗教事典』では浄土宗の特徴として「女性救済の道」をあげており、「専修念佛には、従来の仏教のように、女性を原理的に救済から閉め出す必然性はなく、法然は男女の別なく教えを説き、その講筵は女性にたいして完全に開放されていた<sup>44</sup>」と記されている。浄土宗が女性を救済の対象としたのは、いくら悪人であっても専修念佛によって救済できるという教義に基づくものであり、言い換えれば、女性はすべて「悪人」であるということが浄土宗教義において前提されているからである。法然の弟子である親鸞は、この脈絡から悪人こそ救済されるという「悪人正機説」を唱えたことで有名である。善人はただ自分の力だけでも成仏できる、実に阿弥陀の力が必要となるのは悪人たちであるとするこの説から考えれば、累を『死霊解脱物語聞書』において「悪人正機説」による救済の対象とするためには、彼女は「悪人」でなければならなかった。

与右衛門の場合も同じである。自分の妻を殺した悪人ではあるものの、それゆえに彼こそ救済の対象であった。彼はただ因果で骨がらみになった一人の意志薄弱な人間に過ぎなかったのである。他方、村の人々はどうだろうか。先述したように、彼らは与右衛門の累殺害を知っていたが、それを咎めず、ある程度その殺害に同調していた。つまり、『死霊解脱物語聞書』の登場人物たちは祐天と菊を除くとすべて累の殺害を容認していたと言うしかない。

---

<sup>42</sup> 高田衛編、前掲書、384 頁。

<sup>43</sup> 高田衛編、前掲書、373 頁。

<sup>44</sup> 村上重良『日本宗教事典』講談社、1988 年、132—133 頁。

菊は累の怨霊が成仏した後に出家を願うが、祐天はそれに反対、「現に世間の<sup>けん</sup>人を見よ。(中略)地獄や極楽の有様を、此身ながらで見し者も、家に帰りてほど経れば、いつの間にか忘れはて、あらぬ心も起こりて、地獄の業<sup>こう</sup>をも造るぞや<sup>45</sup>」という。怨霊の憑依という経験をした菊が出家すると、自分の経験を富貴栄華の手段とするかもしれないという立場である。このように人間を道徳的に無力な存在とし、その本性を否定的に捉える観点こそ、『死霊解脱物語聞書』と『古今犬著聞集』の差異を確実にした第一の要因であると考えられる。

祐天上人の幽霊成仏談から始まった累伝説は『古今犬著聞集』に表れた簡略な説話風の叙述を超え、『死霊解脱物語聞書』によってその定型化を遂げた。この定型化には累殺害の動機や過程、そしてその原因の提示と描かれ方に影響を与えた。『死霊解脱物語聞書』における、累が殺されたのは顔が見苦しかっただけではなく、その心まで醜かったからだという設定、そして与右衛門の累殺害が与右衛門個人の問題ではなく、以前から続く因果の問題であり、村全体の問題であるという設定は、浄土宗布教のために効果的な装置となった。

『死霊解脱物語聞書』で作者が「奇哉此物かたり、あるひは現在の<sup>きなるかな</sup>みんぐわをあらはし、あるひは<sup>とうらい</sup>当来の苦楽をしらせ、あるひは<sup>じゆきやう</sup>誦経念仏の利益をあらそひ、あるひは<sup>しおんほうしや</sup>四恩報謝の分齊を<sup>ぶんざい</sup>ただす<sup>46</sup>」と浄土宗の教理と念仏の効果を強調していたことは先に述べた通りだが、この作品の内容の相当部分が『古今犬著聞集』と違って仏教的な世界観における地獄を説明する、所謂冥土物語に割かれていることにも注目できる。この点からみても『古今犬著聞集』と比べて『死霊解脱物語聞書』の叙述に仏教イデオロギーが濃厚に色づけられていることは自明である。実話から派生された累伝説という怪談は、『死霊解脱物語聞書』によって一層仏教的な色彩を漂った物語になったのである。そして、この変容の中心には「外見が醜い女」から「心までも醜い女」へと変化されていく累が存在している。

## 2. 累伝説の変容—『伊達競阿国戯場』の忠義と献身的な累

---

<sup>45</sup> 高田衛編、前掲書、388 頁。

<sup>46</sup> 高田衛編、前掲書、373 頁。

だてくらべおくにかぶき  
『伊達競阿国戯場』は、伊達騒動<sup>47</sup>の筋に累伝説を組み合わせ、複雑な構成にした作品で、1778 年 7 月、江戸中村座で初演された。作者は桜田治助、笠縫専助、主な配役としては、絹川谷蔵後に与右衛門・渡辺民部を四世松本幸四郎、足利頼兼・豆腐屋三郎兵衛を初世坂東三津五郎、累を四世岩井半四郎、高尾を中村久米次郎が演じた。当時好評を得たので翌年には人形浄瑠璃としても脚色上演された。1808 年 3 月には江戸市村座で、勝俵蔵(後の四世鶴屋南北)によって添削増補が施され、大名題はそのまま『伊達競阿国戯場』として再演された。初演時の脚本は伝わらず、その筋は翌年に上演された人形浄瑠璃を通して推測されている。また、現行の上演台本は 1808 年版が中心となっている。本章では松竹大谷図書館蔵の上演年代未詳写本を底本に、同図書館所蔵写本『薫樹累物語』、早稲田大学演劇博物館所蔵写本『達競阿国戯場』などを参照した諏訪春雄編『伽羅先代萩 伊達競阿国戯場』を中心に、内山美樹子・延広真治校注『近松半二・江戸作者浄瑠璃集 新日本古典文学大系 94』を参考にした。

『伊達競阿国戯場』は、累が夫のために身売りをしようとするエピソードがあるため、通称「身売りの累」として知られている。この作品は歌舞伎・浄瑠璃に

---

<sup>47</sup> 仙台藩伊達家のお家騒動。1660 年伊達綱宗が幕府から隠居を命じられたあと、その子亀千代が二歳で家督をついだが、その後見人で政宗の末子の宗勝・原田甲斐らが藩政の実権を握り、保守派の伊達安芸らと対立、安芸らが宗勝の失政を幕府に訴え、老中の裁許によって宗勝らが処罰された事件をもとにしている。戦後山本周五郎の『樅ノ木は残った』のような小説が書かれ、原田も悪臣とはいえないという解釈もあるが、実録本や講談では、忠臣と敵役とを典型的に対立させている。この騒動は 1746 年江戸で演じられた『大鳥毛五十四郡』という歌舞伎狂言以降、明治までいろいろな作品があるが、いちばん著名なのは『伽羅先代萩』で、これは 1778 年に江戸初演の『伊達競阿国戯場』という歌舞伎狂言が翌年人形浄瑠璃になったのを逆輸入、前半に義太夫を入れ後半を史劇風な演出で見せる変則的な台本である。この作品をていねいに演じると隠居した藩主が吉原の高尾太夫に失恋して女を船の中で斬ったり、高尾の妹である累に崇るという物語も含まれる。『先代萩』は仙台を利かせた題名だが、1876 年河竹黙阿弥が書いた『早苗鳥伊達聞書』は現在『実録先代萩』と呼ばれる。ジャパンナレッジ版の『歌舞伎事典』を参照(<http://japanknowledge.com/lib/display/?lid=52620DC0088600> 最終閲覧日 2015 年 12 月 2 日)。

において、累狂言の大筋を固定化した作品とされ<sup>48</sup>、また主に「数多くの〈累物〉の中でも、怪談より女心の哀れさに重点を置いた佳品<sup>49</sup>」として評価されることが多い。「大筋の固定化」というのは、累が生まれながらの醜女ではなく最初は美人であったという設定や、その美が姉の怨霊や薬など、ある契機によって失われた点、または最後に首を絞められるのではなく鎌によって殺される点などが、後続の累関係の作品で引き継がれていくことになるからである。「女心の哀れさ」とは、終始夫に献身したにも関わらず、最後にはその夫によって殺されるという悲惨な結末と、美しさを失うことによって貞淑な女から執念の女へと変貌する過程を指して言われる。なお、本論文の第 2 章で、「対髑髏」におけるハンセン病表象を検討する中で、女性の外面と内面の美がどのように結び付けられているかを分析、男性の情熱に容易に従おうとしない女性が「醜」として登場するときに作用している要因は何であるのかを追求していくことになることを予告しておきたい。

前節で検討した通り、1647 年 8 月 11 日、下総国岡田郡羽生村で起こった夫与右衛門による妻累の殺人事件から成る累伝説は、『古今犬著聞集』「幽霊成仏の事」を初出として、仮名草子『死霊解脱物語聞書』によって仏教唱導説話として定型化される。累が歌舞伎作品にはじめて登場するのは 1731 年『大角力藤戸源氏』からで、以後累伝説は関東・関西を問わず、『伊達競阿国戯場』まで約 10 編の歌舞伎作品として上演され、先に述べたように、『伊達競阿国戯場』に至って歌舞伎として大筋の固定化をみせる。先行する作品群と比較した場合の『伊達競阿国戯場』の最大の特徴は、累の怨念の源泉が、かなわぬ「恋」にあるとされている点であり、さらにその「恋」が、武士階級に出自をもつ男たちが主君への忠義を果たす障害になっていると設定されている点である。階級・階層についていえば、先行する作品群、『古今犬著聞集』「幽霊成仏の事」や『死霊解脱物語聞書』では、累とその周辺の人々は、農民階級出身であった。それに対して、『伊達競阿国戯場』では、主な登場人物たちは、本来武士階級に出自をもつものとさ

---

<sup>48</sup> 阿部さとみ「「累もの」の系譜一趣向の変遷」『演劇創造』27 号、日本大学芸術学部演劇学科、1998 年 3 月、38 頁。

<sup>49</sup> 下中直人編『歌舞伎事典 新訂増補版』平凡社、2000 年、261—262 頁。

れている。別言すれば、『伊達競阿国戯場』では異性間の強い情動(女性から男性に一方的に向けられる)と、武士階級の男性同士の紐帯とが、相克するものとして提示されていることになる。

『伊達競阿国戯場』の概要に沿いながら、異性への執着に終始拘泥する女たち(累・高尾)と、主君への忠義を最優先する男たちとの対比について解析していきたい。

足利頼兼が遊女高尾に迷い放埒を極めているのを利用して、陥れようとする大江鬼行の計略を知った頼兼の家臣絹川谷蔵は、主君のためと高尾を殺害し、その怨みを受けることになる。鬼行の家来に襲われた谷蔵は南禅寺門前の豆腐屋にかくまわれ、そこで高尾の兄・三姉と妹・累に出会う。姉の敵とも知らず谷蔵に恋慕した累は、結婚して下総の羽生村で谷蔵と暮らすことになるが、高尾の怨念により顔が醜く変わる。羽生村で与右衛門と改名している谷蔵は、頼兼のために百両の金を調達しようとして苦しんでいる。それを知った累は夫・与右衛門(谷蔵)のために遊里に身を売ろうとするが、鏡を見せられて顔が醜くなったことを悟り、投身しようとする。そこに、頼兼の許嫁・歌方姫が身を隠すために訪れる。彼女を夫の情婦であると誤解した累は、嫉妬心から狂って姫を斬りつける。主君への忠義を重んじる与右衛門は、やむなく累を鎌で殺してしまう。その後、祐天の徳で姫の生命は助かり、累の死顔がもとのとおり美しくなると、与右衛門は累の首を姫の身替わりにする。足利の家が安泰となることで話は終わる。

祐天上人の霊験談としての性格が強い『古今犬著聞集』「幽霊成仏の事」や『死霊解脱物語聞書』を見ればわかるように、累伝説も本来は唱導説話として成立した。執念深い女の救済というテーマは『伊達競阿国戯場』でも見出されるが、『古今犬著聞集』「幽霊成仏の事」や『死霊解脱物語聞書』における累の執念は『伊達競阿国戯場』のような恋における執念ではなく、自分を殺した夫に対する恨みという執念である。『古今犬著聞集』と『死霊解脱物語聞書』には、恋という要素が最初から存在しなかったとも言える。

にも関わらず、『伊達競阿国戯場』で恋における執念が浮上するようになったのは、言うまでもなく累伝説を歌舞伎として劇化するために行われた思案の結果である。同じように、『古今犬著聞集』「幽霊成仏の事」や『死霊解脱物語聞書』

などの先行作品では、生まれながらの醜女であった累を美女として登場させ、その美女が美しさを失うことによって生じる悲劇を視覚的に提示したことも『伊達競阿国戯場』の歌舞伎というメディアの特色から考えるべきであろう<sup>50</sup>。

しかし、歌舞伎のメディア特性以上に、累が持つ「女の執念」の反対側に、夫・谷蔵(与右衛門)や兄・三婦などの「男たちの忠義」が存在することに注目する必要がある。物語の開始以前において、主君の放蕩による主家の混乱を防ぐために、(のちに累の思い人となる)谷蔵は主君の愛人である遊女高尾(三婦の妹、累の姉)を殺していた。怨霊となって谷蔵の前に現れた高尾は「恨めしい絹川どの。なに罪もないこの身をば、ようも手になさんしたな」と自分の悔しさを述べる。その高尾に対して谷蔵は「赦して下され高尾どの」と謝罪はするものの、「御家の大事と御主の身の上。御放埒の根を断つより外には思案も尽き果て、理不尽とは思いつつ、心を鬼にそこもとを、斬って捨てしも忠義のため」と、仕方がなかったと主張する。もちろんこの主張に納得するはずのない高尾の霊は、「エ、聞かぬ。輪廻に迷うこの高尾が恨みを思い知らしやんせ」と言いながら、のちに「恨み」を晴らすために再登場するであろうことを予感させつつ、姿を消す。

やがて妹の高尾を殺した犯人が谷蔵であることを知るようになった兄の三婦は「妹の敵、絹川覚悟」と谷蔵に斬りかかる。しかし、谷蔵の高尾殺害の理由について、主君があまりにも高尾を寵愛したため、「迷いの種の高尾どのの命を断つが何よりと、言いつけられて絹川が、君のため、お家のため、是非なく斬って捨てました」という谷蔵の話を聞いた三婦は、「コレ高尾よ、妹よ、よう殺された」と言い、泣きながらも「谷蔵どの。ようしてやられた。よう殺してやって下された」というほどまでに、谷蔵の殺人を容認するようになる。実は自分たちも元は侍であつて、昔は足利家の家臣であつたことが、家族としての心情よりも主君への忠義を重んじる理由としてあげられ、「兄がなすべき忠義に替え、妹が捧

---

<sup>50</sup> 「江戸の文化がパターン化するためには、いくつかの改変と演出が加えられねばならなかった。そのもっとも重要なものは、累を生まれながらの目っかち、びっこの不具もので、ふた眼と見られぬ悪女であるという設定を棄て去ったことである。」服部幸雄「累曼荼羅」『国文学 解釈と教材の研究』19 巻 9 号、學燈社、1974 年 8 月、143 頁。

げし真心も、御主の仇となつたか。あさはかにも三郎兵衛[引用者補注：三婦]兄妹は不忠者となるどころ、よう殺して下された」とのべ、すべては忠義へと収斂される。

一方、累の存在はこの忠義の世界から完全に排除されている。まず累は姉を殺した谷蔵を最初からいささかも叱責せず、以後も一切そのことについては恨みの感情を持っていない。すると、累も兄・三婦や谷蔵が述べる忠義の論理に納得したのであろうか。結論からいうと、累は始終忠義の論理からは何の関係もないところに置かれている。累は姉を殺した谷蔵を恨むよりは、むしろ自分の姿を醜くした姉・高尾の怨霊を恨んでいる<sup>51</sup>。姉の怨霊は恋の障害物であって、谷蔵に殺された哀れな霊であるにも関わらず、累をめぐって行なわれる悲劇の責任はすべて高尾に転嫁される。

累はまた、姉の復讐をしようとする兄三婦をも引き止めている<sup>52</sup>。谷蔵に対する恋の気持ちがそれほど強かったともいえようが、姉の死とその復讐についての感情の動揺が全く見られないのは、やはり不思議だと言わざるを得ない。その上、以後明らかになる家柄の来歴に関しても累は一切の言及をしない。いやむしろ、作品は累に、自分の恋情以外に言及する資格がないとしているといおうか。忠義を論ずる場は、ひたすら谷蔵と三婦という男たちに占有されている。累の存在が浮上するのは、忠義の話が終わった後に、三婦が累を谷蔵と一緒に羽生村へ行かせるところである。しかし、ここで累はただ「嬉しうござんす」と谷蔵と一緒にいられることを喜ぶだけで、何の悩みや葛藤も表出しない。

---

<sup>51</sup> 該当箇所はつぎのとおり。「累 チエ、思えば恥かしい。こういうわしが顔ゆえに鏡を見せぬ夫の心、その顔もせず、朝夕に可愛がって下さんしたは。

お情けすぎて情けなや、なぜあからさまに打ち明けて。

累 言うて聞かして下さんせぬ。また姉さんも胴欲な。

現在の妹がこれほどまでに憎いかえ。」諏訪春雄編『伽羅先代萩 伊達競阿国戯場』白水社、1987年、153頁。

<sup>52</sup> 該当箇所はつぎのとおり。「累 アレ、あのように言わしゃんす。谷蔵さんが姉様を殺したとは深い訳がござんしょう。その訳早う言わしゃんせ。コレ兄さん、聞いてあげて下さんせいなあ。」諏訪春雄編、前掲書、113—114頁。



谷蔵(改名してからは与右衛門)は自分と姫の間を恋愛関係と誤解している累を、そうではない、もっぱら忠義のために姫を尊重しているのだと説得しようとするが、累は「イヤ／＼、その言い訳聞かぬ／＼」と谷蔵の話を聞こうとしない。すると、谷蔵は「これほどに事をわけ、言い聞かずに聞きわけぬ。アノここの業ざらしめが。うぬ。コレ、累。なぜそのように物の道理をわきまえぬぞ」と累の愚かさを責める。「物の道理をわきまえぬ」「業ざらし」な累の心情は、「言い聞かしても聞きわけぬ、その魂は付きまとう高尾が執心同性」とあるように、姉高尾の「執心」と重ねあわされている。谷三の前に現れた高尾の霊は、「忠義のため」という谷蔵の説得を拒否して自分の恨みを述べるだけであるが、累も同じく与右衛門がいう「物の道理」から離れている存在として描かれている。谷蔵や三姉が「忠義」という「道理」に一貫したように、高尾や累もその「執念」に従っているという図式が見出される。ただし、執念を持って自らの欲求に忠実であっただけの累や高尾という女性たちが、その執念や欲求を否定され、結局は忠義の名によってあまりにも無力に「退治」されてしまうところがこの作品の特徴である。

ここで、この作品において、女性の美醜と異性への情念との関係がどのように描かれ、そしてそれらがどのように男性の忠義や理性と対立しているものとして描かれているかを検討するために、累が自分の容貌が醜くなっていることを知るに至る経緯を検討しよう。姉の怨霊によって醜くなった自分の姿を知らない累は、夫の与右衛門が「そなたのような美しい女房持っていて、何のほかの女子に目をくれてよいものかいの。もっとも都を立つ折に、門口でつまずいたが原因で、そのような足にはなつたれど、顔、形なら風俗なら、江戸の吉原へ突き出しても、とんとまけぬ器量」と言ったことを信じていた。ただし、累を除けばすべての登場人物、あるいは観客までも累に美貌と言う価値がないことをわかっている。

夫の困難を打破するために累は自分の身を遊女として売る決心までするが、女衒である源六は累の決意を「このかみさんは気が違ったそうだ(中略)おめえのような者は夜鷹にも買い手があるめえよ」と「お前は鏡を見たことがねえかの」と嘲笑する。しばらくの期間、鏡を見ることができなかったために自分の変貌を知

らずにいる累に対して、源六は「こなたの顔の容体を言ってみせよ」と、残酷にも累の容貌を「ぐるり高のちょっぴり鼻。顔にべったり痣があつて、しかも出っ歯で、おまけにちん／＼ちんば」と描写してみせる<sup>53</sup>。累だけは身を売ろうとする自分の行為を「献身」だと思っているが、実際には彼女の献身、言い換えれば自発的な自己犠牲は滑稽なものに終わっている。

しかし滑稽な雰囲気は、続いて登場する最も重要な小道具、鏡によって一変する。ここからは累が自分の姿を知る、即ち自己認識をするのではないかという緊張感が漂う。鏡はその重なりつつある緊張感を爆発させる触媒ともいえよう。ここで鏡は、単純に累が自分の姿を映し出す役割以上の機能を果たしている。因果の恐怖を再び思わせ<sup>54</sup>、残酷な現実を自己嫌惡的に受け入させ<sup>55</sup>、最終的には累のキャラクターの変化の触媒となるのである。夫に献身的な姿勢で一貫していた累であるが、自分の醜さを知ることによって、夫の気持ちを疑いはじめ、ついには嫉妬深く、「物の道理」がわからない女へと変貌したのである。累が献身をもって行った自発的な犠牲は、その目的意識は無視されたまま、完全に無効化され、その結果は、正反対の展開を導いたのである。

女性自らの献身ではなく、男性による女性の殺害という強制的な犠牲の場合は如何だろうか。累の姉・高尾の死は、主君の放蕩を防ぐために殺されるという一方的な殺人である。「忠義」という名目が付けられてはいるものの、高尾本人は、最初から、そして怨霊になってからも「忠義」を果す何の意味も持っていない。完全に強制的で、また暴力的な犠牲が累の犠牲以前にあつて、この犠牲、暴力から累の物語が始まるのである。しかし、累の自発的な犠牲と同じく、高尾の犠牲もその効果は微々たるもので、犠牲の目的であつたお家の安定を取り戻すことには繋がらなかった。加害者の目的意識が明白であつたにも関わらず、なぜ高尾の死はその目的からはずれ、累の犠牲をもたらしたのか。そして挙句の果て

---

<sup>53</sup> 諏訪春雄編、前掲書、148—150 頁。

<sup>54</sup> 「また姉さんも胴欲な。現在の妹がそれほど憎いかえ」諏訪春雄編、前掲書、153 頁。

<sup>55</sup> 「こういうわしが見ともない顔形になったゆえ、愛想のつきたは無理ならねど、明かして言つて下さったら、このように腹は立つまいもの」諏訪春雄編、前掲書、165 頁。

は、累が身売りではなく、その死によって犠牲にならなければいけなかったのか。

『伊達競阿国戯場』における暴力、犠牲にもそれなりの理由が明瞭に現れている。まず、忠義による高尾の犠牲は正当なものであるとされており、高尾の死後にも「忠義」は殺人の妥当性を主張する核となっている。高尾の兄三姉が納得することによって同意は得られたように見えるが、これは実は女性を排除した上で、男性同士の間においてのみ達成される同意である。高尾本人はいうまでもなく、累すら同意を表していないからである。「そりゃ赦してあげて下さんすか。怨みを捨てれば谷蔵さんはもう敵<sup>かたき</sup>ではござんせぬなあ」とは言うものの、累は忠義については何の言及もしていない。累が注目しているのは、その結果であって、過程におかれた論理ではない。そして、作品の内的構成においても、高尾の死は納得されないことが前提条件となる。もし、高尾の死に聞き手が納得してしまうと、その後続く因果が妥当性を失うからである。高尾の死が、男たちの忠義のための妥当な犠牲であると観客が納得するのであれば、高尾の怨霊としての崇りにより、妹・累の容貌が醜くなるという物語に、観客が納得することはないだろう。観客が高尾の死について谷蔵に対する怒りではなくあわれみを感じることは、観客には谷蔵が主張する忠義という武士階級の論理を否定し、拒否しきることができないからである。それでも、観客は高尾に対してあわれみの心を抱き、彼女が怨念を持ったことに一定の共感を抱く。谷蔵は、高尾に惑溺し政務を忘れる主君の愚かさそのものを正そうとするのでなく、高尾を殺害する。観客たちは武士社会の安定の方が、女性ひとりの生命より重いとする武家社会の忠義の論理を真っ向から否定することはない(高尾の死に対して、観客は怒るのではなく、あわれみを覚える)。男性の女性に対する暴力(高尾殺害)が「因」となり、累の醜い容貌という「果」を生むことになる。本来であれば加害者である谷蔵へ向けて発動すべき高尾の怨念が、曲折して累に向かうことになる。

死後、累は再び怨霊として登場するが、この段階ではもはや妻などではなく、完全に「魔」として扱われ、累を自己認識させたその小道具、鏡によって退治されることになる。この作品が上演当時に好評を得た理由として、服部幸雄は「悲

しい女の業のかたまりのような累に限りない同情と共感を寄せた<sup>56</sup>」と述べている。「限りない同情と共感」は、単に夫に殺された妻に対するものではなく、武家社会の忠義の論理によって犠牲にされた一人の女性に対するものであろう。

### 3. 累伝説の変容—『新累解脱物語』の儒学論理と貞淑な累

『伊達競阿国戯場』などによって芸能化され、忠義という儒学概念の反対に存在する人物として累は設定されるようになったが、江戸後期になると、江戸戯作の代表作者として名高い曲亭馬琴(1767—1848 年)が累伝説に興味を持って『新累解脱物語』(1807 年)という独特な物語を書く。以下はその序文である。

ちかころなにわ ふみや  
近會浪速の書肆、河内屋太助、遙かに解脱物語二巻を贈る。いはく、この書僕が蔵版なり。しかれども文辞疎漏にして婦幼の耳目を樂するものにあらず。願くは先生修飾してその奇を増せと乞ふ。余諾てこれを考覈するに、たえて蹈籍なし。困つて已むことを得ず、往々口碑に伝ふところを摘みてその闕略を補ひ、間亦足らざるものは、或ひは鬼名に撮合し、或ひは烏有子に托し、もて唐山の小説に擬す。文を綴ること若干巻、倉卒の際に稿を脱し。名づけて『新累解脱物語』といふ<sup>57</sup>。

作品の創作動機を明らかにする序文である。馬琴は婦女子の目と耳を樂しめるため(「婦幼の耳目を樂する」)にこの作品を書いたという。実際にこの作品は、『古今犬著聞集』『死靈解脱物語聞書』など、原型に近い累伝説と異なって、より複雑な関係にある人物たちを登場させ、その間の心理を効果的に描いたものである。かつて中村幸彦は「複雑な人間関係を、因果の理を説かずに構成のみで示

---

<sup>56</sup> 服部幸雄「累曼荼羅」『國文学 解釈と教材の研究』19 巻 9 号、學燈社、1974 年 8 月、145 頁。

<sup>57</sup> 『新累解脱物語』本文は、大高洋司が影印した『曲亭馬琴作 新累解脱物語』和泉書院、1985 年による。

す方法を馬琴はこの作で確立した<sup>58</sup>」と指摘している。『新累解脱物語』の先行研究は、この指摘以来さまざまな方向で行われてきた。

まず柴田美都枝は、中村幸彦とは異なって、『新累解脱物語』を複雑な人間関係を描きながらも因果の道理を示した作品であると評価している<sup>59</sup>。また大高洋司は、馬琴特有の善悪対立ではなく美醜の対立でこの作品を解釈しながら<sup>60</sup>、結局は祐天上人の一代記物として把握すべきだと主張する<sup>61</sup>。高田衛の場合は、善悪の対立図式を美醜の概念に引き入れて、善(醜)と悪(美)が被害(醜)と加害(美)の関係に当てはまると述べている<sup>62</sup>。

本節で指摘したいのは、『新累解脱物語』の累は「貞実にして」夫を「敬ひ<sup>うやま</sup> 齊眉<sup>かしづく</sup>こと、孟徳耀<sup>もうとくよう</sup>が梁鴻<sup>りやうこう</sup>に偶<sup>あへ</sup>るがごとし<sup>63</sup>」など、「貞女」として登場している点である。外貌も最初から醜かったわけではない。子供の時は、「田舎人<sup>いなかうど</sup>の子にはよろづ立<sup>たち</sup>まさりてみゆ」るほど可愛い子として描写されている。累が醜くなったのは、誤って囲炉裏に落ちてしまったからである。『新累解脱物語』にもう一人、夫に虐待される妻として、累の継母珠鶏<sup>すけ</sup>が登場することに注目する必要がある。珠鶏は夫与左衛門が旅人として訪れた玉芝の美貌に惑わされたせいで、結局は鬼怒川に身を投げることになるが、その人物描写は累と同じように「貞女」として描かれている。

顔<sup>がん</sup>色<sup>しよく</sup>美ならずといへども、心<sup>こころ</sup>ざま<sup>さく</sup>伶俐<sup>りやう</sup>、織績<sup>おりつむぐ</sup>女子<sup>をなご</sup>の業<sup>わざ</sup>はさら也、田殖<sup>たう</sup>草刈<sup>へくさかる</sup>ことも、をさ／＼男子<sup>おのこ</sup>に劣<sup>おと</sup>らず(中略)与左衛門<sup>よざゑもん</sup>は女婿<sup>むこ</sup>にて、累<sup>かさね</sup>は携養<sup>つれこ</sup>なれど

---

<sup>58</sup> 中村幸彦『中村幸彦著述集 第5巻』中央公論社、1982年。

<sup>59</sup> 柴田美都枝『読本の世界 江戸と上方』世界思想社、1985年。

<sup>60</sup> 大高洋司編『曲亭馬琴作 新累解脱物語』和泉書院、1985年。

<sup>61</sup> 大高洋司『『昔話稲妻表紙』と『新累解脱物語』』『日本文学』55巻1号、日本文学協会、2006年。

<sup>62</sup> 高田衛『江戸の悪霊祓い師』筑摩書房、1991年。

<sup>63</sup> 後漢の梁鴻の妻の孟光が食膳を捧げるとき、その高さを眉と齊しくしたという「後漢書」梁鴻伝の故事。

も、珠鷄すけはつゆばかりも夫おつとを蔑あなどらず、又累またかさねを愛めでいつくし 慈まことのこむこと、実子すぎにも過たれば、一郷いちごう 挙こぞつててその貞実ていじつを称誉ほめざるはなし<sup>64</sup>。

『新累解脱物語』では、この珠鷄を虐めて死に至らしめた与左衛門の罪が、与左衛門の娘・累の悲劇に繋がるという因果関係が設定される。ここで『新累解脱物語』の全体的な概要を述べると以下の通りである。

妻珠鷄と平和に暮らしていた与左衛門は、美女玉芝に迷って珠鷄を虐待し、絹川入水に追込む。玉芝はその後医師西入玄冬と出奔、兇賊に襲われ、千葉惟胤に救われる。惟胤の娘田糸姫が寺侍権之丞となった玄冬と結婚した時、玉芝は侍女として従い、やがて権之丞と計って姫を殺し、側女となって金五郎を生む。しかし権之丞は玉芝を姫の怨霊と見誤って殺し、遂電する。金五郎は惟胤の嗣子正胤の近習となるが、正胤の妾苧績の嫉妬によって羽生村の累と結婚させられ、与右衛門と名乗る。羽生村の親許へ帰された苧績は、今度は与右衛門に懸想し、結局累は与右衛門によって殺される。苧績は与右衛門と結婚して娘を設けるが、娘のさくは絹川堤で怪我をして人面瘡を生じ、それが珠鷄や累の顔と変じて怨みを述べるので、苧績は狂死する。与右衛門は鳥有和尚に救いを求め、その指示により絹川堤に待つと、和尚は死んだと思われていた珠鷄と田糸姫を弟子として従えて現れ、今まで珠鷄や累の怨霊の仕業だと思われた現象が実は人欲から現れた誤解であることを明かす。

先述したように、『古今犬著聞集』や『死霊解脱物語聞書』にも「すけ(助)」という名がみえる。ただし、それは人ではなく怨霊で、また作品の最初ではなく累が成仏した後に登場する。助の登場に関して『死霊解脱物語聞書』で因果のことわりが強調されたことはすでに述べた。しかし『新累解脱物語』においては、累すけと珠鷄の間に何の因果のことわりも探せない。二人をつなぐ糸は、二人とも「貞女」であり、夫に虐められたということである。むしろ馬琴は、鳥有和尚の口を借りて累の悲劇、そしてすべての怪異現象が人の心から生じたとする。

---

<sup>64</sup> 大高洋司編『曲亭馬琴作 新累解脱物語』和泉書院、1985年、27頁。

悪人あくにんの臨終りんじゅうは、邪念じやねん頓滅とんめつすることあたはず。譬たとひは穢きたなき物ものを焼たくに、臭香くさきかしばら且くく  
室いへの中うちに、残のこるがごとし。こゝをもて崇たよりをなす事あり。その崇たよりにあふもの、  
みづからこれに触ふれれば也。故ゆゑにいかになれば、かの本然ほんぜんの善せん、人欲じんよくの私わたくしに  
覆おほはれ、種々しゆしゆの悪業あくごうをなすものも、心こゝろ鎮しづかなるときは、やうやくわが悪あくをし  
る。知るといへども悔くひて改あらたむるに至いたらざれば、天てんかならず物ものに仮托かたくしてこれを  
罰ばつす。世よに冤魂おんれうの説せつは我われより彼かれを憑ひくに成なる。(中略)汝等すけ、珠鷄すけは絹川きぬがわに投なめり  
と思きみふによつて、鬼魅罔兩きみもうりやうこれに仮托かたくす<sup>65</sup>。

怨霊の崇りというのは「人欲じんよくの私わたくし」から始まるとするこの説は、新井白石(1657—1725 年)の『鬼神論』(1800 年刊)と同じように、当代の儒学者たちの認識を代弁している。浄土宗の僧侶が因果のことわりで累伝説を解説したことに対し、儒学に該博だったと知られる馬琴は儒学者の論理で解説したともいえよう。すると、『死霊解脱物語聞書』と違って『新累解脱物語』の累や珠鷄が貞女として描写されたのも儒学の影響から考えるべきであろう。

『死霊解脱物語聞書』で累は被害者でありながら、同時に加害者でもある。累の怨霊は「数々の妄念虫と成て、年来汝が耕作の実をはむゆへに、他人の田畑よりも不作する事<sup>66</sup>」と述べられている。累が祟る方法は、ただ人に憑依して苦しめるだけではなく、農作物にまで影響を与えるのである。累の怨霊に驚いて逃げ出した与右衛門の代わりに、村の人々が累の怨霊を慰めるのもこのためであろう<sup>67</sup>。生きていた時に容貌が醜く精神面でも歪んだとされている累は、死んだ後にも人に害を与える悪霊として現われ、憐憫というより恐怖の対象として認識されるのである。

それに比べて『新累解脱物語』の累(あるいは珠鷄)は、絶対的な被害者として現れる。加害者として位置づけられるのは、美男美女たちである。静かな農村に訪れた美女玉芝に惑わされた与左衛門が、結局珠鷄を家から追い出したように、

<sup>65</sup> 大高洋司編『曲亭馬琴作 新累解脱物語』和泉書院、1985 年、270 頁。

<sup>66</sup> 高田衛編、前掲書、411 頁。

<sup>67</sup> 服部幸雄は、累伝説が関東地方の貧困な農村生活を背景として成立したと主張し、累の怨霊は害虫の化身であると指摘する。服部幸雄、前掲書、142—143 頁。

「まさに美男」であった金五郎(与右衛門)も芋績に惑わされて累を殺してしまう。

『死霊解脱物語聞書』での善悪や被害加害関係が『新累解脱物語』では反転されているのである。悪人であることが救済される妥当性だと布教する浄土宗の教理から考えると、出来るだけ累が悪人であった方が、最後の祐天上人の教化を極大化する装置にもなった。ところが、『新累解脱物語』で祐天上人の役割をもつ烏有和尚は、ただの観察者である。怪異現象があってもそれを解決するのではなく、怪異現象は人の心から生じると説教するところに、烏有和尚の存在意義がある。馬琴のライバルであったと知られる山東京伝も、『累井筒紅葉打敷』で祐天上人の役割を最小限にしているが、ここでの累は『新累解脱物語』より『死霊解脱物語聞書』に近い悪女として描かれている。ここで興味深いのは、累が殺された理由が、嫉妬の果てに夫の董五郎が仕えた主君の物である鏡を壊したからだとなっている点である。殺害の動機が忠誠心から起因するという設定から、これも儒学的な変容であると判断できる。

### 第3節 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』と累伝説

#### 1. 累ものとしての『真景累ヶ淵』

三遊亭円朝の『真景累ヶ淵』は、1859年円朝が『累ヶ淵後日の怪談』として最初高座にかけた噺<sup>68</sup>を核として、後に1887年9月から翌年1月まで『やまと新聞』で連載した速記本があり、現在一般に読まれているのは、『やまと新聞』に連載されたものを単行本にした1888年5月薫志堂刊行の『真景累ヶ淵』である

---

<sup>68</sup> 初演の事情については、つぎを参照。「スケ(援助出演)に頼んだ二代目円生が、円朝の予定した演目を先に演じてしまったのである。そのため円朝は急遽用意した道具を間に合う咄に変えざるを得なかった。しかもこの仕打ちが連日に及んだため遂に創作を決意、『累ヶ淵後日の怪談』を高座にかける。維新後、芝居咄から素話に転向しての初高座に選んだのが『真景累ヶ淵』で、円朝の累物にかける思いには並々ならぬものを感じる」  
延広真治「空想心と滑稽心」『落語怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』岩波書店、2006年、473頁。



<sup>69</sup>。第 97 席にも及ぶ長編の『真景累ヶ淵』だが、実際累伝説に基づいて怪談の雰  
囲気を漂わすのは 53 席の前半だけで、後半は仇討の物語になっている。

前半は大きく分けて三つの物語に分類することができる。まず、金貸し按摩の  
宗悦を旗本の深見新左衛門が殺害して羽生村の累ヶ淵に遺体を捨てる発端、宗悦  
の次女お園に惚れた新左衛門の長男新五郎がお園を殺害してしまう部分、そして  
宗悦の長女豊志賀と新左衛門の次男新吉が恋仲になるが、豊志賀の死後その怨念  
によって新吉が狂っていく部分である。現在享受されている『真景累ヶ淵』の物  
語は前半からお園と新五郎の咄を省いた形のものが多い<sup>70</sup>。

本節では、『真景累ヶ淵』を累伝説の系譜に属する物語として把握した上で、  
主に豊志賀と新吉の関係とそこから生まれた豊志賀の怨念の正体について分析を  
行うことにする。『真景累ヶ淵』は「累ヶ淵」というタイトルだけではなく、「累  
伝説の約束を守り、先行作との類似性を保ちつつ、新味を加え工夫を凝ら<sup>71</sup>」し  
たものとされるが、その「新味」については今まで冒頭に言及される神経病と幽  
霊に関する円朝の世間話、即ち幽霊否定論者たちを「開化先生」と揶揄した後に  
科学的に幽霊を検証、肯定しようとする世論を紹介するところだけが注目されて  
きた。もちろんここでタイトルの「真景」という言葉が目立つのは否定できな  
い。このタイトルは、当時の有名な漢学者にして、また、社会的有識人だった  
しのぶじょけん  
信夫恕軒(1835—1910 年)の助言によってなされ、「真景」は「神経」を暗示する  
と同時に「怪談」という言葉を避けるために採用されたといわれている。しか  
し、「新味」はこのような世論の反映だけではなく、累物としてこの作品を鑑賞

---

<sup>69</sup> 『落語怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』の延広真治校注『真景累ヶ淵』も 1  
888 年 5 月薫志堂刊行の初版を底本としている。

<sup>70</sup> この形式は、現代における累伝説翻案作品においても継承されている。2007 年公開さ  
れた映画『怪談』(中田秀夫監督、黒木瞳、尾上菊之助主演)は、『真景累ヶ淵』を原作と  
しているが、ここでは発端を落語や歌舞伎の形で紹介した後、豊志賀と新吉の恋物語の  
中心に物語を展開させている。同年刊行された漫画『累』(田邊剛作画、エンターブレイ  
ン)も新五郎とお園の物語は省略し、豊志賀の死後新吉が羽生村に行くところまでを描い  
ている。

<sup>71</sup> 延広真治「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』」『國文学 解釈と教材の研究』37 巻 9 号、學燈  
社、1992 年、110 頁。

する時にも味わうことができる。既存の累物と比べて大きな違いが『真景累ヶ淵』には存在するとためである。

まずは、その違いをヒロインに値する豊志賀の人物設定から考えてみる。豊志賀は、元来堅くて男嫌いの女であったが、18歳年下の新吉と出会うことで自ずから男を誘惑する女へと変貌していく。「曇がバラバラ降」る11月下旬、「食客」の新吉は二階で、ふたつ折りにした布団にひとりくるまって(「蒲団の柏餅」)眠りにつこうとしていた。豊志賀「師匠は堅いから下に一人で」寝ていたが、寝付けないでいる。豊志賀が寒さを防ぐために新吉に同じ布団で寝るように依頼したところから、彼女の変貌が始まる。

豊「誠に淋しくっていけない、お前さん下へ下りて寝ておくれな(中略)」

新「私も淋しいから下へ下りましょう」(中略)

豊「お前寒くっていけまい、こうしておくれな、私も淋しくっていけないから、私のネこの上掛の四布蒲団を下に敷いて、私の搔卷の中へお前一緒に這入って、その上へ五布蒲団を掛けると温かいから、一緒にお寝な」

新「それはいけません、どうして勿体ない、お師匠さんの中へ這入って、お師匠さんの身体から御光<sup>72</sup>が射すと大変ですからな」

豊「御光だって、寒いからサ」

新「寒うございますがね、明日の朝お弟子が早く来ましょう、そうするとお師匠さんの中へ這入って寝てえれば、新吉はお師匠さんと色だなどといえますからねえ」

豊「いいわね、私の堅い気象は皆知っているし、私とお前と年を比べると、私は阿母さんみたようで、お前のような若い子みたいな者とどうこういう訳は有りませんから一緒にお寝よ」

新「そうでげすか、でも極りが悪いから、中に仕切を入れて寝ましょうか」

---

<sup>72</sup> 延広真治の校注によると、ここの御光とは「尊さの喩え。仏の背からの光明なので「後光」が正しいが新吉の気持を反映した表記」とされる。延広真治校注『落語怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』岩波書店、2006年、65頁。

豊「仕切を入れたって痛くっていけませんよ、お前間がわるければ背中合にして寝ましょう」

と到頭同衾をしましたが、決して男女同衾はするものでございませ<sup>73</sup>ん。

「男嫌いで堅い<sup>74</sup>」と評判の豊志賀と「ちょっと子柄の好い愛敬のある<sup>75</sup>」新吉が共寝に至るまでの場面である。ここまで何度もその堅さを強調された豊志賀が急に新吉を誘惑しているようにみえる。最後に円朝が「決して男女同衾はするものでございませ<sup>73</sup>ん」と付け加えているところもそのような印象が残る要因である。積極的な豊志賀と比べてずっと断り続ける新吉なので、円朝のこの一言は新吉のような男＝読者＝聴衆に対する忠告にほかならない。しかし、ここで同衾を勧誘する豊志賀の言動を男女の間に行われる性的な誘惑だと断定してもいいだろうか。

豊志賀は自ずから年齢の差を強調し、「私とお前と年を比べると、私は阿母さん」とまで言っている。豊志賀が新吉に同衾を勧誘する理由は、新吉が感じる寒さと自分自身が感じる寂しさにある。39歳の独身女性が18歳も年下で「ちょっと子柄の好い愛敬のある」男の子に母親の身振りをしてみたとも言えるのではないか。

にも関わらず、先行研究において豊志賀は、「怏気の焰と恋の気狂い<sup>76</sup>」に堕ちた女、もしくは「中年の女の惨めな愛欲<sup>77</sup>」の表象として理解されていた。確かに豊志賀の弟子で「ちょっと男惚のする愛らしい娘」お久が登場して「新吉の顔

---

<sup>73</sup> 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』岩波書店、1956年、77—80頁。

<sup>74</sup> 「師匠豊志賀は、年卅九歳で、誠に堅い師匠でございまして(中略)男嫌いで堅いというから、男は来そうもないものでございますが、堅い師匠だというと、妙に男が稽古に参ります」三遊亭円朝、前掲書、1956年、76頁。

<sup>75</sup> 「年二十一でございますが、ちょっと子柄の好い愛敬のあるというので、大層師匠の気に入、その中に手少なだから私の家にいて手伝ってという」と三遊亭円朝、前掲書、77頁。

<sup>76</sup> 斎藤喬「悪因縁と恋心(2)三遊亭圓朝口演『真景累ヶ淵』にみる年増の怏気」『東北宗教学』2号、東北大学大学院文学研究科宗教学研究室、2006年、131頁。

<sup>77</sup> 久保田万太郎の「解説」三遊亭円朝著『真景累ヶ淵』岩波書店、1956年、481頁。

をみてはにこにこ笑う」ことになる、豊志賀は「本当にこの娘は何てえ物覚えが悪い娘だろう、其処がいけないよ、こんなじれったい娘はないよ」とお久に対して厳しい態度を取るが、「家にいると、継母に苛められる」お久は新吉との悪い噂で弟子が全部出て行った豊志賀のところに毎日来ている。

お久は何も知らぬから、芸が上ると思ひまして、幾ら捻られてもせつせと来ます。それは来る訳で、家に居ると継母に捻られるから、お母さんよりはお師匠さんの方が数が少ないと思つて近く来ると、なお師匠は修羅を燃して、わくわく愀気の焰は絶える間は無く、益々逆上して、眼の下へポツリと訝しな腫物が出来て、其の腫物が段々腫上つて来ると、紫色に少し赤味がかつて、爛れて膿がジクジク出ます、眼は一方腫塞がつて、その顔の醜な事と云うものは何ともいひようが無い。一体少し師匠は額の処が抜上つて居る性で、毛が薄い上に鬢が腫上っているのだから、実に芝居で致す累とかお岩とか云うような顔付でございます<sup>78</sup>。

お久の接近によって、豊志賀の心に「愀気の焰」が生まれ、それが腫物へと変わり、遂には累、お岩のような醜い顔になってしまう場面である。お久がこれからの予想可能な悲劇の原因を提供したようにも思われるが、ここでお久は「何も知らぬ」、言い換えれば、新吉に対する恋心を抱いて豊志賀を恋敵として想定することが元々出来ない初心な娘である。お久にとって豊志賀の叱責は、自身を苛める継母のそれと違わない。「お母さんよりはお師匠さんの方が数が少ない<sup>79</sup>」とその程度の差を勘案して豊志賀のところに來るだけである。以後豊志賀の病気が重くなって病床につくことになる、豊志賀の好物である「煎豆腐の中へ鶏卵が入って黄色くなったの」を持って来るし、新吉の言葉を借りれば「毎日お見舞に來たり、どうかすると日に二度ぐらい」見舞いに來ている。

---

<sup>78</sup> 三遊亭円朝『真景累ヶ淵』岩波書店、1956年、82頁。

<sup>79</sup> 筆者注 叱られたり、苛められる数が少ないという意味。

それでも豊志賀の「恠気の焰」は消えることがなく、お久が見舞いに来るのも新吉に恋心があるからだと考えている<sup>80</sup>。「私は早く死にたい」と言う豊志賀は「私が早く死んだら、お前の真底から惚れているお久さんとも逢われるだろう」「私が死んでもお前は可哀そうだと思う気遣はないよ」と新吉を責め立てる。このような言動を執着と解釈するのも一見妥当である。しかし、この執着を恋愛感情から生まれた執着、即ち恋する男を手放したくない女の執着として読み取るべきかは疑問である。実際、豊志賀は新吉に対して何も自身の恋を告白したり、もしくは新吉の恋を求めたりしない。豊志賀はただ自身の顔が醜くなったことで新吉が逃げるのではないかと心配している。ここの逃げるという行為は、恋人から逃げるのではなく、病人から逃げる、つまり新吉が豊志賀の醜い顔に飽きて看病を放棄して逃げるということである。

豊志賀が死後残した遺書の文面からみても、豊志賀は新吉の不人情を非難しているだけで、その浮気を問題にしているのではない。

心得違いにも、弟か息子の様な年下の男と深い中になり、これまで親切を尽したが、その男に実意が有ればの事、私が大病で看病人も無いものを振捨てて出るようになる不実意な新吉と知らずに、これまで亭主と思い真実を尽したのは、実に口惜しいから、たとえこのまま死ねばとて、この怨は新吉の身体に纏って、この後女房を持てば七人まではきっと取殺すからそう思え<sup>81</sup>

豊志賀の怨念は、恋する新吉に捨てられたから生まれたのではなく、看病の義務を果たさなかった新吉の「不実意」にあった。ここが、既存の累伝説関連作品と違って新吉より 18 歳も年上の豊志賀を累役のヒロインとして設定した理由である。結局「息子の様な年下の男」新吉は「継母に苛められる」お久と共に駆け落ちするが、豊志賀の怨念に憑依された新吉の手によってお久は殺されてしまう。

---

<sup>80</sup> 該当箇所はつぎの通り。「豊 黙っておいで、そんなにお久さんの最顶层ばかりおしでない、それは私がこうしているから案じられて来るのじゃア無い、お久さんはお前の顔を見たいから度々来るので」三遊亭円朝、前掲書、88 頁。

<sup>81</sup> 三遊亭円朝、前掲書、109 頁。

21 歳の新吉も 18 歳のお久も親から独立できる年齢であり、この二人の駆け落ち  
は母の懐からの脱出を意味すると言える。

新吉の生母は、すでに事件の発端にあたる第 6 席で新吉の父によって殺されて  
いる。夫が妻を殺したのである。新吉自身も「この後女房を持てば七人まではき  
っと取殺す」という豊志賀の呪いが実現、自分の手で 3 人まで妻あるいは恋人を  
殺すことになる。この点は、夫による妻殺害という累伝説本来のポイントを円朝  
が意識して作中に反映させた証である。しかし、豊志賀に限っては、新吉が自  
分の手で殺すことはなかった。新吉はただ豊志賀を「振捨てて出」た行為で恨まれ  
ている。上記の引用文で豊志賀は自分が新吉を亭主と思ったとするが、『真景累  
ヶ淵』において豊志賀だけが新吉に殺されない妻である。

新吉の生母はまた、殺される直前まで豊志賀のような病人であった。豊志賀の  
病気が嫉妬から生じたことに対し、新吉の生母の病は新吉の父、新左衛門に殺さ  
れた宗悦を憐れむ心から生じたというところが違うが、「女の心」から二人の病  
が発生したことは共通している。

豊志賀を妻ではなく母として把握したのは、このように既存の累伝説関連作品  
とは異なる『真景累ヶ淵』だけの特徴がそれを示しているからである。以前には  
一度もなかった 18 歳も年上の豊志賀を登場させ、お久という継母に苛められて  
いる人物を加える。その上に、夫に殺されない妻という設定は、『真景累ヶ淵』  
がもつ、先行作品とは大きく異なる特徴であると言える。

## 2. 神経病の時代と『真景累ヶ淵』

『真景累ヶ淵』を取り上げて論じる際に、最も頻繁に引用されるのが以下の冒  
頭部である。

今日より怪談のお話を申し上げますが、怪談ばなしと申すは近来大きに廃り  
まして、あまり寄席で致す者もございません、と申すのは、幽霊というのは無  
い、全く神経病だということになりましたから、怪談は開化先生方はお嫌いな  
さる事でございます。(中略)狐にばかされるという事は有る訳のものでないか

ら、神経病、また天狗に攫われる事も無いからやっぱり神経病と申して、何でも怖いものは皆神経病におっつけてしまいますが、現在開けたえらい方で、幽霊は必ず無いものと定めても、鼻の先へ怪しいものが出ればアッといって尻餅をつくのは、やっぱり神経がちと怪しいのでございましょう<sup>82</sup>。

一般に『真景累ヶ淵』の「真景」は「神経」を重ねたもので、文明開化の世の中で「怪談」という言葉を用いることを避けるための命名だと言われている。「神経病」という近代の用語は冒頭だけではなく作中全般で繰り返し用いられている。そこに円朝の、変事のすべてを神経の変調で説明しようとする「開けた」考え方に対する揶揄の姿勢を見出すことができる。29 席の「何が出ても蛇と思い只今申す神経病」、37 席の「その頃は怨み祟りという事があるのあるいは生まれ変わるという事もあるなどと(中略)只今申す神経病でございますから」など、『真景累ヶ淵』には何度も「神経病」という言葉が繰り返されている。「只今申す神経病」とわざと繰り返して説明を加えるところには、「神経病」を真剣に考えるよりはむしろ滑稽の対象とする姿勢まで垣間見られる。上記の冒頭部においても、「幽霊というのは無い、全く神経病だという」「開化先生方」でも「鼻の先へ怪しいものが出ればアッといって尻餅をつく」というところには「現在開けたえらい方」に対する皮肉と嘲弄が含まれている。

「神経病」という用語が怪談で用いられるのは、『真景累ヶ淵』だけの特徴ではない。延広真治の指摘によると、すでに河竹黙阿弥が 1880 年に新富座で初演された『木間星箱根鹿笛』で、幽霊を見るのは「神経病」だという設定が存在するし、1884 年だけでも一竿斎宝洲『神経闇開化怪談』、花傘文京『開明小説 四季の花籠』、高島藍泉『怪談深閨病』、関屋孝橘『怪談怨緒環』などの小説が刊行されていて、そこには幽霊や祟りと思われたものが、実は「神経病」の所為であったり、神経病で人を殺したりする場面が描かれている<sup>83</sup>。また『真景累ヶ淵』が『やまと新聞』で連載された 1887 年には、中国の『剪灯新話』『牡丹灯記』を

---

<sup>82</sup> 三遊亭円朝、前掲書、9—10 頁。

<sup>83</sup> 延広真治「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』」『国文学 解釈と教材の研究』37 巻 9 号、學燈社、1992 年、111—112 頁。

典拠として円朝の『牡丹灯籠』とは異なる、翻案に近い形(舞台は南北朝時代)で書かれた岩本吾一の『神経小説 怪談牡丹燈』が刊行されている<sup>84</sup>。このように明治の早い時期から「神経病」が世間の流行語となって借用されたことを勘案すれば、『真景累ヶ淵』において「神経病」に繰り返して言及されるのも、当時の流行を反映したという意味しか持たない。延いては、そのような世間の流行を揶揄するための素材として選ばれたとも言える。

むしろ興味深いのは、同時代の他作品と違って、表題に「神経」ではなく「真景」と書いたところである。「真景」という字は、当時の漢学者である信夫恕軒からの提案だと言われている。元来「真景」は「真景山水画」という用語があるように、山水画を描くときに中国の理想郷を想像して描くのではなく、現地の実景を真に描くという意味である。『落語怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』の延広真治の補注では 1882 年の『南総里見八犬伝』の広告に「人情世態ノ真景ヲ摸出シ」とあることから、馬琴崇拜者だった円朝がここの「真景」、即ち真の姿の意味で「真景」を取り入れた可能性について述べられている<sup>85</sup>。また、明治の神経病言説について集中的で精密な分析を行った度会好一は『明治の精神異説—神経病・神経衰弱・神がかり』で次のように述べている。

『真景累ヶ淵』にあらわれる幽霊が病んだ神経の生む妄想だというのは、せいぜい表層だけにとどまる。『真景累ヶ淵』の基層にあるところを洗い出すなら、幽霊は怨念をいだいて死んだ人が執念から出てくるという伝統的な信仰で

---

<sup>84</sup> 序文から円朝を意識して書いたところがみえる。しかし、時代設定が南北朝であるためか、作品中での神経病に関する言及は多くはない。にも関わらず、表題を「神経小説」と書いたところに、その時代の「神経」流行にアピールすることが目指されていたのだと考えることができる。『神経小説 怪談牡丹燈』については内田康のつぎの論考があるので参照されたい。内田康「もう一つの『牡丹灯籠』—香夢樓主人『神経小説怪談牡丹燈』試論」『稿本近代文学』14号、筑波大学、1990年。

<sup>85</sup> 延広真治校注『落語 怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』岩波書店、2006年、443頁。



あり、幽霊は妄想(神経病)ではなく、「真景」つまり、真実うたがいなしの実景だと信じられていると思われる。神経ではなくて真景なのだ<sup>86</sup>。

幽霊が「神経病」の所為だとするのは表層的な建前に過ぎず、深層には幽霊を怨念の発露として認識する本音が潜んでいるから、「真景」は当時疑われていた伝統的な民間信仰、いわゆる迷信が真実であることを意味する単語である。度会の主張はこのように把握できる。

しかし、「真景」が元来山水画の用語であることを勘案すると、「真実うたがいなしの実景」とは昔からの伝統的な信仰(昔の中国の景色を描く山水画)よりは、明治当時の信仰(現在の日本の景色を描く山水画)の意味だと判断するのが妥当である。円朝自身が「真景」を表題に入れた理由について直接述べたことがないので、これ以上強く断言することは難しいが、先に述べたように、当時の怪談作品の多数が表題に「神経」という言葉をそのまま取り入れたことを考えると、円朝はそのように人口に膾炙している「神経」から距離を置きながら、観察者として当時の「神経」ですべてを説明しようとする世態の「真景」を伝えようとしていたと考えられる。もちろんそこには当時の神経病言説を疑う円朝の伝統的な信念が存在したに違いない。

渡会はまた『真景累ヶ淵』を「薄皮まんじゅう」に例えて「「幽霊＝神経病」論はおもての薄皮、中身のあんこは、怨念をいだいて死んだり、非業のさいごを遂げたりした人の霊力を恐れる怨霊・御霊信仰と仏教の因果説とが、分ちがたくこね上げられているのだ<sup>87</sup>」と述べながら、「円朝と神経病の結びつきは、このコトバの大衆化を促進した<sup>88</sup>」と評価している。しかし、当時の神経病言説において『真景累ヶ淵』が占める位相が「コトバの大衆化」だけにとどまることはない。本論文では、「神経病」をジェンダーの側面から考察したい。

---

<sup>86</sup> 度会好一『明治の精神異説—神経病・神経衰弱・神がかり』岩波書店、2003年、97—98頁。

<sup>87</sup> 度会好一、前掲書、98—99頁。

<sup>88</sup> 度会好一、前掲書、100頁。

『真景累ヶ淵』において「神経病」は、女の病気であった。作中に「神経病」という用語は 10 回ほど挙げられているが、新吉の「神経病」に言及されるのは 1 回だけである<sup>89</sup>。まず、作中に述べられている「神経病」についての説明を検討しよう。

詰り悪い事をせぬ方には幽霊という物は決してございせんが、人を殺して物を取るというような悪事をする者には必ず幽霊が有ります。是が即ち神経病とって、自分の幽霊を背負って居るような事を致します。例えば彼奴を殺した時にこういう顔付をして睨んだが、もしや己を怨んでいやアしないか、という事が一つ胸に有って胸に幽霊をこしらえたら、何を見ても絶えず怪しい姿に見えます<sup>90</sup>。

悪事をした人が罪悪感や精神的に不安な状態で見える幻影が幽霊であって、そのような内面に触発されて現れる症候が神経病である。すると悪事を行うのがすべて男性である『真景累ヶ淵』では、「神経病」を患う主体は男性でなければならない。宗悦を殺した新吉の父の新左衛門、お園を殺した新吉の兄の新五郎、そしてお久を殺した新吉という 3 人の男性殺人犯が神経病を患わなければならないはずである。神経病の症状が幽霊の幻影を見ることであるとしたら、実際新左衛門も幻影を見て妻を殺しており、新吉の場合も豊志賀の幻影を見たのがお久殺害の原因ではある。しかし、これら男性たちを描写する時に「神経病」という言葉が選ばれることはなかった。「神経病」という言葉が作中に顔を出す時には、常にそれに相応しい内面の持ち主としての女が描かれている。それと対比的に、「神経病」を患うことのない男性は、強靱な内面を備えた存在として表象される。ま

---

<sup>89</sup> 「神経病」が新吉の病として言及される部分は、新吉とお累との間に生まれた子の顔が新吉の兄・新五郎の顔に生き写しで、新吉がそれを不気味に感じるところである。そこで語り手は以下のように述べている。「その頃は怨み祟りという事があるのあるいは生れ変るという事も有るなどと、人が迷いを生じまして、色々に心配を致したり、除を致すような事が有りました時分の事で、いわゆる只今申す神経病でございますから、新吉は唯だ其の事がくよくよ心に掛りまして」三遊亭円朝、前掲書、187 頁。

<sup>90</sup> 三遊亭円朝、前掲書、11 頁。

ず、新左衛門が宗悦を殺した後に、新左衛門の妻がそれに起因する精神的な不安のため、体まで弱まっていく経緯をみよう。

深見新左衛門の奥方は、ああ宗悦は憫然な事をした、どうも実に情ない、お殿様がお手打に遊ばさないでもよいものを、別に怨がある訳でもないに、御酒の上とはいいいながら気の毒な事をしたと絶えず奥方が思いますところから、いわゆる只今申す神経病で、何となく塞いで少しも気が機みません事でございます。翌年になりまして安永三年二月あたりから奥方がぶらぶら塩梅が悪くなり、乳が出なくなりましたから、門番の勘藏がとって二歳になる新吉様という御次男を自分の懐へ入れて前町へ乳を貰いに往きます<sup>91</sup>。

新左衛門の妻は、宗悦には悪いことをしたという憐憫から気持ちが浮き立たない状態が長引いていつの間にか病になってしまうのだが、その時に改めて「神経病」が持ち出されている。宗悦を殺害したのは新左衛門であるが、新左衛門は、事件後もいつもの通り、酒を飲むばかりで何も動揺する気色はない。むしろ、不安になっていくのは、新左衛門の妻であって、彼女は2歳の息子に乳を飲ませることが出来ない状態になっている。その後、彼女は宗悦の亡霊を切ろうとした夫新左衛門の手によって殺されることになるが、彼女自身が宗悦の亡霊を目撃することはない。作中の経緯と、原因を作った人間がその応報を受けるという因果律によれば、宗悦を殺した新左衛門が「神経病」を患って宗悦の亡霊を見るべきであるが、「神経病」の部分だけは切り離されて女の奥方に与えられている。

お累るい(お久の従姉妹)も同じである。父の新左衛門が自分が殺した宗悦の亡霊と間違えて妻を殺したのと同じく、豊志賀の亡霊だと思ってお久を殺してしまった新吉は、お久の墓でお久の従姉妹であるお累と出会うことになる。そこでお累は新吉に一目惚れするのだが、その時お久の墓の穴から蛇が出てきたのに驚いたお累は思わず新吉にすがりつく。その後、お累は再び蛇を見て驚いた挙句、顔に熱湯を浴び、顔に傷が出来てしまい、美貌を失う。

---

<sup>91</sup> 三遊亭円朝、前掲書、34頁。

その夜三蔵の妹お累が寝ております座敷へ、二尺あまりもある蛇が出ました。九月中旬になりましては田舎でもあまり蛇は出ぬものでございますが、二度程出ましたので、墓場で驚きましたから何が出ても蛇と思い只今申す神経病、累「アレー」

と駆出して逃る途端母親が止めようとした機、田舎では大きな囲炉裏が切ってあります、上からは自在が掛って薬鐘の湯が沸って居た処へ双に反りまして、片面から肩へ熱湯を浴びました<sup>92</sup>。

ここの蛇をお久の怨念が化けたものと解釈すれば、お久の怨念は自分を殺した新吉に向けられるべきであるのに、そうではなくて新吉と睦まじい仲になりつつある従姉妹のお累に向けられていることになる。原因を作った者が、その応報を受けるはず(べき)であるとする因果律にズレが生じている。女が、自らの不幸の原因を作った男に祟るのではなく、もう一人の女に祟っている。

ここで、この作品における恨みの連鎖では、凶事の原因を作った男性が凶事の犠牲者である女性の恨みの対象となるのではなく、連鎖してはいるが別個の凶事の被害者である別の女性が祟りを受けることになるという、因果律(原因をつくった者がその応報をうけるはず/べきである)のズレを確認するために、今一度、お久に関するプロットを確認しよう。お累に祟るお久もまた、女に祟られた女であった。豊志賀が、当時は純情だった新吉とお久との関係を疑ったことが原因の一つとなり、新吉とお久は江戸を逃亡、お久を豊志賀の怨霊と見間違えた新吉によってお久は殺害されたのであった。怨念が、本来ターゲットとされるべき加害者としての男性から、被害者としての女性に移し変えられるというモチーフは、お久の場合と、お累の場合と共通している。

原因を作ったものが応分の責任を負うべしという意味での因果律でいえば、お久の亡霊に祟られてしかるべきであるはず新吉は、自分が一連の凶事の原因となっていることに関して、なんらの反省の念も抱くことはない。この後も新吉はお

---

<sup>92</sup> 三遊亭円朝、前掲書、150 頁。

久の幽霊に悩まされることなく、お累と結婚して金をふんだんに使いながら酒を飲むばかりの生活を続けていく。二人の間に生まれた赤ん坊が、新吉によって口に熱湯をかけられて死亡する。ここでも、赤ん坊の死の直接の原因を作った新吉は、自分の行動について反省することも、自罰を加えることもない。お累は新吉がお久を殺した時に使った鎌で自殺することになる。それでも新吉の心に動揺はなく、さらに放蕩道楽悪行を続けるばかりである。この時点での新吉は、かつての豊志賀に出会った時の可愛い少年ではない。自らの行動が引き起こした恨みの連鎖について反省することなく、妻の死を悲しむこともなく、女と酒に惑溺する大人である。たしかにこの時点での新吉には、成熟した男の悪の魅力がある。『真景累ヶ淵』において怨念に苦しめられ、心が疲弊し、「神経病」を患う、あるいは怨霊と化すのは常に女たちである。

「神経病」という単語で説明されたことはなかったが、豊志賀も「心の病」を持っている存在として描写されるのは同じである。豊志賀は、「恠気の焰」によって顔に腫物ができたとされており、病床に豊志賀をお久が見舞いに来た時には新吉に会いに来たのだと妄想して新吉を責め立てている。この妄想が発展して死んだというのが『真景累ヶ淵』の独特な設定であることは先に述べた通りである。『真景累ヶ淵』は、加害者の男性が患うべき「神経病」を女性の内面に生じる疾患として描写し、その女性を母(新吉の母、豊志賀)と妻(お累)としてカテゴライズして提示しているといえよう。

#### 第4節 おわりに

羽生村の殺人事件に基づいて祐天上人の霊験譚として出発した累伝説は、以後多様な形で変容されていった。

『死霊解脱物語聞書』では物語が定型化されて累が外見の醜いだけでなく、心までも醜悪な存在として形象化されており、『伊達競阿国戯場』では夫のために身を売ろうとする献身的な妻でありながらも、一方では「忠義」を理解できない「人欲」の存在として描かれていた。そして『新累解脱物語』は、儒学的な観念に基づいて、累を貞淑な婦人として設定すると同時に、累伝説で語られる怪

異現象が実際は人間の内面から発生するという儒学者の「鬼神論」を強調する教訓的な話に累伝説を変形させている。

一方、『真景累ヶ淵』は「神経病」という近代の医学用語を借用して他には見られない独特な物語となっている。顔の醜い女、夫の妻殺害、殺害道具として鎌の利用など、既存の累伝説が持つ要素を反映しながらも、豊志賀を母のような存在に見立てながら、その母を捨てて去っていく少年の話として読ませる点が『真景累ヶ淵』の特徴であると言える。また、豊志賀を含めて作中の女たちは、合理的に考えて加害者の男性たちが背負うべき「神経病」と深く関わっていて、ここから女性を「病的な存在」として認識する明治の言説を読み取ることもできる。

前近代の累伝説関連作品と比較すると、『真景累ヶ淵』において累の母としての位相が浮き彫りにされている。これは第 2 章で「対髑髏」のお妙について論じる時にも指摘するところであるが、献身的な女(『伊達競阿国戯場』)、貞淑な女(『新累解脱物語』)から男を抑圧して拘束する母のような女として累の位相が変容していくことの裏には、前近代とは異なる女性像が浮上した当時の社会状況との関連もあると思われる。これについては第 2 章「幸田露伴「対髑髏」における明治の女幽霊」で論じることとし、本章では『真景累ヶ淵』において累が「神経病」を持つ病的な女(母、妻)として登場することを結論とする。

## 第2章 幸田露伴「対髑髏」における明治の女幽霊 —古典からの影響と明治の女性嫌悪

### 第1節 はじめに

「対髑髏」は、お妙という女性の哀切な運命を幽霊譚の形式を通して表した作品である。1890年『日本之文華』1月上旬号から2月上旬号にかけて「縁外縁」というタイトルで発表され、同年6月に単行本『葉末集』に収められる時に「対髑髏」と改題された<sup>93</sup>。

物語は、奥日光の金精峠を越えようとして山中で道に迷ってしまい、ある民家へたどり着いた主人公「露伴」を美女の女主人が誘惑する前半部と、その美女、お妙の身の上話を聞きながら夜を明かすと、朝足元には髑髏一つだけが残っていたという後半部に分かれている。最後に後日談として生前のお妙が実はハンセン病患者であったことが明らかになり、生前のお妙を知る者によって語られる、ハンセン病患者お妙の醜い姿が強烈な印象を残しながら物語は終わる。

「対髑髏」に関する先行研究は、主に作者露伴の仏教的な素養と関連付けて論じていることが多い。「対髑髏」を露伴の仏教的世界観を表明する作品とする登尾豊の論が代表的である<sup>94</sup>。これに対して関谷博は、「対髑髏」を根本的欠陥が存在する作品とし、露伴が倫理的な主体へと成長していく過渡期のものとして評している<sup>95</sup>。ここで明確には述べられてないが、関谷博がいう欠陥とは女性嫌悪のことを指していて、成長とはそのような意識を克服していく過程を意味すると理解できる。またジェンダーの観点から美の破壊こそが「対髑髏」の大きな主題だ

---

<sup>93</sup> 「対髑髏」の本文及び後書は何度も改稿されている。本稿では1890年という時点の完成版として1890年6月春陽堂刊行の『葉末集』所収の「対髑髏」を分析の対象とする。改稿された本文と各版の異同については、中村仁美「幸田露伴「縁外縁/対髑髏」諸本間における異同〈資料〉」（『文月』5巻、文月刊行会、2000年）を参照。

<sup>94</sup> 登尾豊「「対髑髏」論」『文学』44巻8号、岩波書店、1976年。

<sup>95</sup> 関谷博「「対髑髏」の問題—煩悶の明治23年へ」『日本近代文学』47巻、日本近代文学会、1992年。

とし、露伴の女性忌避について論じた潟沼誠二の論も注目できる。古典作品との関連を中心に「対髑髏」の髑髏と『雨月物語』『青頭巾』の髑髏を思想的な面で分析しながら、その影響関係を論じた徳田武の研究もある。以上のようにさまざまな視点から研究されている「対髑髏」であるが、今までこの物語に登場するお妙という女幽霊の正体と怨念について具体的に言及したものはなく、主に幸田露伴に関する作家論の視座から論じられることが多かった。

本章ではお妙が幽霊として「露伴」の前に出現した理由、その怨念の究明と、それが 1890 年という時代の中でどのような意味を持っているのかについて考察する。お妙の死の直接の原因はハンセン病であるが、その裏には男の恋を拒む女は罰を受けるという小野小町伝説から起因した設定が存在している。絶世の美女が男の求愛を拒み、男を翻弄したあげく、悲惨な末路を迎えるという小町伝説であるが、「対髑髏」が発表された時代には、小野小町に対する関心が高まっていた。「対髑髏」初出のちょうど 1 年前の 1889 年に、秋田市長町の中教院では「小町千年忌」が盛大に催された<sup>96</sup>。1894 年には小町の神格化を試みた元秋田藩士である小松弘毅の『小野小町貞女鑑』も出版された。また時が経って 1913 年になると明治の人気作家黒岩涙香が『小野小町論』を書いている。婦人訓育のために書かれたこの書物で涙香は小町を「好色の女」から「貞淑な女」へと変貌させている。「小町伝説」が 19 世紀末から 20 世紀前半において注目を集め、涙香の場合のように、旧来的な意味付けが変更された場合もあったことの背後には、「小町伝説」を受け継ぎ変容させた、時代と文化の要請が作用していることが予想される。

本章は、古来の小町伝説及び明治当時に認識されていた小町像と「対髑髏」の類似点と差異とを比較分析しながら、「対髑髏」が当時の恋愛風潮を忌避する女、強制的異性愛に抵抗する女に、懲罰を与えるかのごとく、作品中において醜女に変容させるテキストであることを確認する。また、小町伝説のうち、「病める小町」の物語が、「対髑髏」においてお妙がハンセン病患者として描かれる背景

---

<sup>96</sup> 錦仁『小町伝説の誕生』角川書店、2004 年、217 頁。



にあることを立証、「対髑髏」のお妙が本論文の第1章で述べた累のように、「醜」と共に「病」を内包した存在として表象されていることを確認する。

## 第2節 ハンセン病患者としてのお妙

「対髑髏」が前近代の幽霊交流譚と比べて持つ最も顕著な特徴は、幽霊お妙が生前ハンセン病患者だったということである。この点を除外すると、山中で道に迷った男が美女が居る宿で一夜を明かし、後にその美女が幽霊であったことを知るという幽霊交流譚は、中国の伝奇小説を始め『聊齋志異』(1766年)などにも見られる設定である。突然現れた美女と一夜を共にすることに対する男の欲望、幻想とそれに比例して生じる不安や恐怖を示す定型化された物語とも言える。

「対髑髏」も実はその性的ファンタジーを積極的に標榜した作品である。露伴は吉岡哲太郎宛の書簡で発売禁止になることを心配して尾崎紅葉と相談したことを書いているが<sup>97</sup>、『新著百種』5号に載った広告に「古今未曾有に艶ぽき<sup>98</sup>」という文句があることから考えると、発売禁止の心配はその性的要素の添加にあったと思われる。この作品を、女が男を性的に誘惑する物語として作者露伴や出版者吉岡哲太郎が認識していたことを意味している。また作中で木叢峠、魂精峠と表記される金精峠が道鏡の伝説と関わって性的な意味を持つことも注目に値する<sup>99</sup>。このように性的な意味合いを持って読者の注意を引こうとする「対髑髏」だ

---

<sup>97</sup> 「拙者大詩人の儀、昨日、紅葉詞兄とも相談いたし候ひしに、「なによかろう、おもしろし」などとの説に付、いよいよ出版いたしたく、迂生は素より乱暴の積りにも無之候へば、是非とも出版願ひたく存候。然し万々一、当局者の認定をもっと発売禁止など蒙り候節は、甚だ御迷惑との御懸念も御座候べけれど、虎穴に臨まずんば虎子を得ぬ理屈(後略)。」徳田武「『対髑髏』と『雨月物語』・西鶴・『莊子』」『明治大学教養論集』172号、明治大学教養論集刊行会、1984年、58頁から再引用。

<sup>98</sup> 吉岡哲太郎編輯『新著百種』5号、吉岡書籍店、1890年2月。

<sup>99</sup> 金精峠の金精神社は、石の男根を御神体とする金精神を祀った神社で、大きく重い男根を持つ道鏡が金精峠を越えようとした時、男根が大きく重かったため峠で自分の男根を切り落としてしまったという伝説がある。高橋千劔破『名山の民俗史』河出書房新社、2009年、348頁。

が、実際作中で最も強烈な印象を残すのは、このような性的要素が容赦なく破壊され、消滅する最後のクライマックス部分である。お妙の幽霊と話しながら一夜を明かした語り手「露伴」は、宿に戻ってその老父からお妙の実像について聞く。先行研究において関谷博が「対髑髏」を「欠陥」を含めた作品だと評価したことはすでに述べたが、このような評価がくだされる最も重要な理由がここの描写である。露伴は冷静でありながら大胆な筆致でお妙の醜を描写している。読者に不快感を与えるほどに、描写は執拗に続いている。引用が長くなるが、ハンセン病のために醜の極みに達した姿を細部にわたりグラフィックに描き出す箇所を確認しよう。宿の主人は生前のお妙について、「年は大凡二十七八何処の者とも分らず色目も見えぬほど汚れ垢付たる襤褸を纏」っていたと語る。歩行に困難を覚えるほど病状は進んでいたものらしく「竹の杖によわ／＼とすがり」歩いていた。

総身の色薄黒赤く、処々に紫色がゝりて怪しく光りあり、手足の指生姜の根のやうに屈みて筋もなきまで膨れ、殊更左の足の指は僅に三本だけ残り其一本の太さ常の人の二本ぶりありて其続きむつくりと甲までふくだみ、右の足は拇指の失し痕かすかに見え、右の手の小指骨もなき如く柔らかそうに縮みながら水を持って気味あしく大きな蚕のやうなり、左の手は指あらかた落て拳頭づんぐりと丸く、顔は愈々恐ろしく銅の獅子半ば熔ろけたるに似て眉の毛尽く脱け額一体に凸く張り出して処々凹みたる穴あり、其穴の所の色は極めたる紫の上に溝泥を薄くなすり付たるよりまだ／＼汚なく、黄色を帯て鼠色に牡蠣の腐りて流るゝ如き膿汁ヂク／＼と溢れ、其膿汁に掩はれぬ所は赤子の舌の如き紅き肉酷らしく露はれ、鼻柱坎け欠て其所にも膿汁をしたゝか湛え、上唇とろけ去りて粗なる歯の黄ばみたと痩せ白みたる歯齦と互に照り合ひてすさまじく暴露れ、口の右の方段々と爛れ流れたるより頬の半まで引さけて奥歯人を睨まゆる様に見え透き、髪の毛都て亡ければ朱塗の賓都廬幾年か擦り摩られて減りたる如く妙に光りを放ち、今にも潰え破れんとする熟柿の如く艶やかなるそれさへ見るにいぶせきに右の眼腐り捨てて是にも膿汁尚乾かず、左の眼の下瞼まくれ

て血の筋ありありと紅く見ゆる程裏がへり、白眼黄色く灰色に曇り、黒眼は薄  
鳶色にどんよりとして眼球なかば飛び出で<sup>100</sup>

ここの長い描写から、お妙が生前ハンセン病患者であったことが推測できる。当時  
使われた「癩」という単語が直接用いられることはないが、「処々に紫色がゝり  
て怪しく光りあり」「極めたる紫の上に溝泥を薄くなすり付たるよりまだ／＼汚  
なく」など、ハンセン病患者の病変皮膚色であるとされる紫色を特徴として記し  
ており、「顔は愈々恐ろしく銅の獅子」（ハンセン病の獅子顔貌を指す）、「鼻柱坎  
け欠て」など、腫れた後に顔や手足などの形が崩れていく描写からハンセン病を  
思い浮かべるのは当然である。

生前のお妙は醜悪な外見のために、健常者から忌避され「握り飯与ふるだけの  
慈悲」を与えられることもなく、村を追われる。

人間は一目見るより胸あしくなり（中略）されば誰も彼も握り飯与ふるだけの慈  
悲もせず其女の為すまゝに任せしに、彼呂律たしかならぬ歌のようなる者をあ  
はれに喰るを聞ば世に捨てられて世を捨てゝ、叱々と覚束なく細々と繰り返して  
は息だはしく、ハツタと空を睨みて竹杖ふりあげ、道傍の石とも云はず樹とも  
云はず打たゝきては狂ひまわり、狂ひ躍ては打たゝき瞋恚の炎に心を焼き、狂  
ひ狂ひて行衛しれず<sup>101</sup>

生前のお妙が、ハンセン病のために「世に捨てられて世を捨て」狂乱状態に陥った  
のち、病と自分を捨てた「世」に対する「瞋恚の炎に心を焼き」ながら村落を去  
り、山中の一軒家に住むことになったのであろう、そしてその一軒家で孤独な死  
を迎えることになったのであろうことが了解される。その一軒家が「露伴」が前  
夜を過ごした家であった。

---

<sup>100</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注『幸田露伴集 新日本古典文  
学大系明治編 22』岩波書店、2002年、285—287頁。

<sup>101</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、286—287頁。

ハンセン病文学研究者の秦重雄は「明治期の他の作品がハンセン病の具体的な描写をすることが出来ず、一・二行で済ましていたのに比すると医学的な冷徹さすら感じられる<sup>102</sup>」と述べている。後に 1902 年版『露伴叢書』においてはこの描写が大幅に削除され「世に癩病といふものなるべし、其あさましさ何とも彼とも云はれねば」と変えられて「癩病」という言葉を直接用いることになるため、1902 年版では、「ハンセン病の具体的な描写をすることが出来」なかった「明治期の他の作品」と同じようになったとも言える。残酷な描写から読者が受ける衝撃とハンセン病患者に対する嫌悪感を助長するという批判を意識したのであろうか。しかし、1916 年版『名家傑作集』においては、本来の描写に戻されている。問題は必要以上と思われるほど詳細に、また残酷に描写された理由にある。作者露伴のハンセン病患者に対する差別意識だと纏めるよりは、物語の構造の中でこの部分が占める位相について考える必要がある。

ここの描写について関谷博は、

癩者に対する殊更な差別意識が、露伴にあったとは思わないが、しかし、彼が己れの文学的欲求の為に、癩を現世の苦の象徴として選んでしまった誤りは、仏教自体が孕んでいた癩への偏見に抗する術を、露伴が持っていなかったことに起因する<sup>103</sup>

と述べ、残酷な描写が「現世の苦」を象徴するものだと把握した上で仏教の影響についても論じている。

確かに仏教の影響からハンセン病を前世の罪業から起因した「業病」「天刑病」とする認識は、1890 年という明治初期までは根強く残存していたに違いない。実際仮名垣魯文は『高橋阿伝夜刃譚』（1879 年）で「癩病を天刑病・百薬効な

---

<sup>102</sup> 秦重雄「明治の文学作品に描かれたハンセン病患者」『部落問題研究』172 号、部落問題研究所、2005 年、229 頁。

<sup>103</sup> 関谷博「初期露伴の文学的課題」『幸田露伴集 新日本古典文学大系明治編 22』岩波書店、2002 年、538—539 頁。

く」などと記しており、河竹黙阿弥も『綴合阿伝仮名書』(1879 年)で「人の厭がる業病」とハンセン病を説明している。

一方、同時代においてハンセン病を「業病」「天刑病」とする旧来の考え方と、「遺伝」や血液接触伝染などの近代的な考え方とが一体化しつつあったことも注目に価する。「対蠲膿」が発表された 1890 年になると、ハンセン病治療を専門とした荒井作が『治癩経験説』で「不治ノ症ニ非ス又遺伝病ニ限ラサル事ヲ確診」と述べ既存の「業病」「天刑病」観念を否定している。「癩病蔓延ノ予防及ビ癩病家ノ注意書」の中では「余ハ癩病患者ヲ数年間取扱ヒ毎日癩病ノ血液余ガ身体ニ触ルハと雖ドモ更ニ伝染ノ模様ナシ」と伝染説を否定しているので、1890 年という時期が当時の医学界においては大きな転換点であったとしてよいだろう。「業病」「天刑病」とする前近代のハンセン病観が文学作品などを通して一般に再確認される一方で、近代医療システムの中では医学で管理すべき病としてハンセン病を見直そうとする意見が出るようになった時に「対蠲膿」が書かれたのである。

『治癩経験説』において、荒井は「遺伝病ニ限ラサル事」とハンセン病を遺伝の病気とする説を肯定も否定もしていない。ハンセン病を遺伝、言い換えれば血脈による病気とする認識は、「遺伝」という単語からみて近代的な思考体系の産物であるように思われるが、実際には「業」「天刑」とみる前近代的な思考体系の延長線上にあるものである。2005 年に発行された『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』「第二 1907 年の「癩予防ニ関スル件」」には次のように述べられている。

「天刑病」・「業病」という言葉の普及が、「癩」を家筋とみなす考え方の普及の時期と重なるのは、「天刑」や「業」が、「癩」はいったん「血脈」にとりつけば子々孫々にまで渡り、不治であるという認識と不可分であったことを示唆する。「前世の業」という中世以来の宗教的「癩」病観と、近世社会で普及し

た「家」に伝わる病という現世的・医学的理解とが一体化して、新たな近世の「業病」「天刑病」観が形成されたのである<sup>104</sup>。

この報告書はまた、明治期の民衆生活のなかでのハンセン病観には遺伝説が広く普及していたことも指摘している<sup>105</sup>。前近代仏教の論理から生まれたハンセン病患者への差別的な認識が、明治期になって「遺伝」という言葉を借りた形で、「現世的・医学的理解」と一体化して変わりなく継承されていたのである。ハンセン病患者への差別についても、前近代と比べて近代の差別意識に質的な変化があったとはいえない。近世幕府はハンセン病患者が乞食をすることを許し(「対髑髏」の生前のお妙が、「握り飯与ふるだけの慈悲」を期待して放浪する病者であったことが思い起こされる)、同時に病人介護を家庭内で行うように奨励していたが、近代になると強制的に隔離施設に収容していく。2005年に発表された同報告書には、

近世において地域や共同体、各家のありように応じた生活をしていた患者を、近代国家が「癩」を強烈な伝染病と宣伝して強制収容を続け、人々の意識と社会システムを絶対的排除へと一元化していった事実は、重く受け止めなければならない<sup>106</sup>。

と述べられている。このようなハンセン病に関する差別意識は、「対髑髏」にも濃厚に反映されている。

物語の結末部で、生前において醜い容貌のハンセン病患者だったことが暴露されるお妙だが、この結末に至るまでお妙は繰り返し美しい女として描かれている。第1章において(特に『死霊解脱物語聞書』や『伊達競阿国戯場』)女性の外面の

---

<sup>104</sup> ハンセン病問題に関する検証会議「第二 1907年の「癩予防ニ関スル件」」『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』財団法人日弁連法務研究財団、2005年3月、38頁。

<sup>105</sup> ハンセン病問題に関する検証会議、前掲書、47頁。

<sup>106</sup> ハンセン病問題に関する検証会議、前掲書、39頁。

美醜が内面的美醜とつよく連関させられていたことの意味を検討してきた本論文の視座からすれば、お妙の美が、華族貴公子の死の原因となることは、特に注目に価する。美しい容貌だけではなく、親孝行の心性までも兼備したお妙に恋したある華族の貴公子が求愛してくる。お妙は「我亡き後は是を見て一生の身の程を知れ」という母の遺言に従って求婚を断り続け、相手の貴公子は恋煩いの挙句、息を引き取ってしまう。以後お妙は東京から離れてこの金精峠に庵を結んで住むようになったという。母の遺言について問いかけてくる「露伴」にお妙は「ハテ野暮らしい其を聞ようでは貴君もまだ人情知らず」と詰責しながら「世を捨てよといふ教訓、浮世を捨てねばならぬ訳をかきしるせしに極つた事」と返答するが、「露伴」は納得できない。

怪しからぬ事、浮世を捨ねばならぬ訳なし。イヤ／＼妾等一類の人間是非とも浮世を捨ねばならず、浮世を捨ねば安心の道おぼつかなし、さればこそ初は神をも仏をも恨みし也。扱も分らぬ話し。イエ／＼能く分つた話し、深山の中にのたれ死せずばならぬ妾等の身の上、浮世の人は眼くらく、種々のあはれを悟りながら、情なき妾等の身の上には月日も全く暗く花鳥も全くおもしろからぬを知らず。されば彼若殿に我身を早く任せざりしも、若殿の子孫をして我如くあさましからしめざらんとの真実の心其時の苦しさ推量したまへ<sup>107</sup>

最後まで母が残した「黒塗の小箱の中の書置」の文面がはっきりと記されることはない。しかし、先述の結末からお妙がハンセン病患者であることを知るようになった読者なら、この部分に再び戻って「妾等一類の人間是非とも浮世を捨ねばならず、浮世を捨ねば安心の道おぼつかなし」の「妾等一類の人間」がハンセン病患者を意味することと、「安心の道おぼつかなし」と言った理由がハンセン病が及ぼすと当時推測されていた危険、即ち遺伝と伝染を想定した言葉であることがわかる。「若殿の子孫をして我如くあさましからしめざらん」が遺伝への不安と恐怖を象徴する言葉であるとしたら、その後東京を離れて日光の山奥にまで至った

---

<sup>107</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、283—284 頁。

のは伝染を防止するための決意である。14 歳に父を亡くし、18 歳には母を喪ったお妙である。母から遺言がそうだったように、両親の死の原因についても正確に明かされることはないが、ハンセン病と関係があると推測できる。なぜなら、「我亡き後は是を見て一生の身の程を知れ」という母の言葉からすると、母はお妙がハンセン病患者になることを予測していたからである。まだ発病もしていない病気のことを想定して「身の程を知れ」と言えたのは、お妙の両親もハンセン病患者であったことを証明している。

「身の程を知れ」と、結婚など考えないように、母はお妙に忠告する。「身の程」を知ったお妙は男の求婚を最後まで断るが、その結果その男が焦がれ死にすることは予想外のことであった。予想可能な自身の悲劇の上に新たな悲劇が重なったのである。

物語の現在時点においてお妙は幽霊である。幽霊であるということは彼女が怨念を持って死んで行ったことを意味する。お妙の怨念はこの二つの悲劇の中、どちらから生じたものであろうか。次節では、ハンセン病という悲劇と男の恋を拒んでその男を死なせたという悲劇が、実は深く関連された同一の悲劇であると共に、その前後関係、原因結果関係、因果関係が作品内の叙述過程において逆転されていることについて論じることにする。一般にハンセン病が原因で、恋を拒むという行為が結果であると思いがちだが、実は恋を拒む、男を嫌うというお妙の心性こそがハンセン病の原因であるかのように叙述されている。そこにはハンセン病を「天刑」とする前近代の認識が反映されている。お妙を恋を拒んだが故にハンセン病に罹病する女として描くことは、近代的科学の視点からみれば、原因・結果関係、因果関係の倒錯であるが、ハンセン病を「天刑」とするという認識は、恋を拒んだ結果、美貌を失う「病める小町」伝説を援用することで、一定の物語上の説得力をもつものとして復興されている。ハンセン病をめぐる新旧の認識がせめぎあうなか、女性についての認識も、新旧のそれがせめぎあっている。恋よりも知識を求めたお妙は、知力において凡百の男性を凌駕する自負のあった小野小町に重ねられる一方、知識を求める新時代の女学生としても描き出されている。



### 第3節 恋を拒む女―「病める小町」としてのお妙

お妙は最初から恋を拒み、男を嫌う人物ではなかった。「家計ゆたかなるにまかせて」、幼い頃は「蝶と愛でられ」少女時代には「花といつくしまれ」ていたお妙だったが、父の死後家に引きこもるようになってから性格が変わっていく。「薄雪住吉伊勢竹取」から「源氏狭衣」などの恋をストーリーの核とする物語を読んだお妙は、読書から得た知識によって人情と世態の「真実虚妄」、特に男性が信用ならない存在であることを知るようになったという。

むかしより男といふ者のあさましく、意一時なさけ一時、思ひ込強けれど辛防弱く、逢ふを悦こべど別れを悲しまず、媚めかしく佞らへるおかしき女を好み、恋を榮華のわざくれ三昧、犬猫の色美しきを愛る様に女の髪容よきを愛る者なるをさと。我縁もなき男なれど源氏業平の如き戯け者を憎く思ふ事深く、嫉妬するにもあらねど其戯け者に迷ひ焦れし色々の女どもを齒痒き馬鹿と心の内に思ひける<sup>108</sup>

「男といふ者」は、低劣な上に自分の欲望を抑制することができず、恋においては相手との別れを悲しむ人情さえなく、色気があって外見が綺麗な女だけを好み、相手を手に入れたら勝ちだと思ふことに熱中する存在であるとお妙は思っていた。一見男性嫌悪ともみられるこの意識の根本をなしているのは、『源氏物語』『伊勢物語』などを読んだ経験である。日本古典文学において頻繁に登場する色男、「源氏業平」に対して「憎く思ふ事深く」と嫌悪感を抱くようになったお妙は、その色男に惑わされる「女ども」も「馬鹿」だと思っている。お妙の嫌悪感は、両性におよんでいる。

お妙が、このような考え方を持つ人物として設定されたのは、彼女の名前がお妙であることも関連がある。明治期の作品で古典作品が再活用されるさま(第1章の累伝説、本章の小野小町伝説、第3章の『牡丹灯籠』)に注目する本論文と

---

<sup>108</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、274—275頁。

しては、お妙という名が西行と歌問答を行つたとされる女性歌人「江口の君」から来ていることに注目したい。「我元来洒落といふ事を知らず数奇と唱ふる者にもあらで<sup>109</sup>」と語り手「露伴」の自己紹介から始まる「対髑髏」の冒頭部分には「当世江口の君の宿仮さず<sup>110</sup>」と記され、「江口の君」に言及している。「江口の君」とは、現在大阪市付近の「江口」という地域に多く住んでいたとされる遊女のことであるが、ここでは句の後半が「宿仮さず」となっているところから『山家集』（成立年未詳）で西行と歌問答をしたと記されている「江口の君」を意味していると見られる。四天王寺参詣の途中で激しい時雨に遭った西行が、ある民家の戸を叩いて宿を請うが、出てきた「江口の君」は西行が僧侶であることを見て断る。それを批難する歌を西行が詠む<sup>111</sup>と「江口の君」も負けずに立派な歌で返した<sup>112</sup>という話である。この話は以後『新古今和歌集』（1205 年）にも掲載されるが、ここでは歌を返した「江口の君」の名前は「遊女妙」と明記されている。また「対髑髏」冒頭の「当世江口の君の宿仮さず」（今の世の「江口の君」が宿を貸してくれなくても）につづく文章は、「里遠しいぞ露と寝ん草まくらとは<sup>113</sup>」となっている。これは西行の「くさまくら旅なる袖におく露を都の人や夢にみるらむ」という和歌を借りて「露伴」が自身を西行に見立てたと考えられる。「対髑髏」の物語も「露伴」がお妙の宿を借りて一泊するところから出発しているので、「対髑髏」の背景には西行と「江口の君」の話が置かれていると言える。

露伴は、お妙にその名を与えることで西行と「江口の君」の逸話を、いわば本歌取りに似た手法で取り入れ、読者の文化的知識に訴えかけることを可能にしている。「江口の君」は西行ほどの歌人と比べても劣らない歌を詠むことができる女、学のある女である。「対髑髏」のお妙も「薄雪住吉伊勢竹取」から「源氏狭衣」まで、文学には造詣がある女として描かれている。お妙の場合その文学経験

---

<sup>109</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、252 頁。

<sup>110</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、252 頁。

<sup>111</sup> 「世の中をいとふまでこそかたからめかりの宿りを惜しむきみかな」峯村文人校注・訳『新編日本古典文学全集 43 新古今和歌集』小学館、1995 年、87 頁。

<sup>112</sup> 「世をいとふ人とし聞けばかりの宿に心とむなと思ふばかりぞ」峯村文人校注・訳、前掲書、87 頁。

<sup>113</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、252 頁。

が恋を拒み、男を嫌う要因となっている。しかしながら、「江口の君」は文学的な才能はあるものの、そのためにお妙のように恋を拒んだり、男を嫌ったりはしない。お妙という名前で登場しながらも「江口の君」と違う性格に彼女が設定されたのは、ここにもう一つの典拠が使われていたからである。

文学的な造詣が深い女で恋を拒んだ経験があり、その後醜くなったという伝説をもつ代表的な人物に小野小町がある。小野小町を巡っては様々な物語、伝説が創られたが、その中に百夜通い伝説がある。小野小町は、熱心に求愛してくる深草少将を諦めさせようと思って、自分のところに百夜通ったらその恋を受け止めるという。それを真に受けた男は、99 日まで通ったが、結局思いを遂げられないまま息を絶えたという話である<sup>114</sup>。そして、この伝説が変容されると、死んだ深草少将の怨霊に取り憑かれた小町が狂って乞食となったという衰老落魄説話へと発展する。「対髑髏」の場合、1890 年『日本之文華』で始めて発表された時の挿絵にはお妙が平安時代の服装をした女として描かれており<sup>115</sup>、求愛してくる男性を焦がれ死にさせたことからお妙の人物設定に小町伝説が影響していることが確認できる。

このように、お妙は「江口の君」と小野小町のイメージが重なった形で創造された人物であると言える。特に小町伝説は、以後お妙がハンセン病者として悲惨な運命を迎えることとも関連がある。百夜通い伝説に特定しなくても、前近代から一般に流布していた小町伝説の輪郭は男を翻弄したあげく、悲惨に死んでいく女の話であったようだ。小田幸子は「小野小町変貌—説話から能へ」の中で以下のように述べている。

そもそも、実在の小町像が不鮮明なうえに、平安中期～末期に成立した空海作と伝える『玉造小町子壮衰書』の老女と小野小町が同一人物とみなされ、「落魄の小町像」が広く流布した。そこにさらに伝説が加わり、それらを総合して

---

<sup>114</sup> 小田幸子「小野小町変貌—説話から能へ」『日本文学誌要』84 号、法政大学国文学会、2011 年 7 月、24 頁。

<sup>115</sup> 同年 6 月の単行本『葉末集』に収められた時の挿絵は、「露伴」が髑髏になったお妙を眺めている絵である。

中世には「若い頃は絶世の美女で多くの男性に言い寄られたが、拒絶や翻弄を繰り返したあげく、年老いてからは顧みる人もなくなり、乞食となって諸国を放浪した末に孤独のうちに亡くなった。その骸骨は野ざらしとなっていたが、ある人が見つけて供養した」という一代記の輪郭が形作られていったのである

116。

「乞食となって諸国を放浪した末に孤独のうちに亡くなった。その骸骨は野ざらしとなっていたが、ある人が見つけて供養した」というところは、「対髑髏」においてもそのまま用いられている。そこにハンセン病や遺伝という近代的と見られる要素を取り入れたとしても、男を拒絶した結果、悲惨に死んでいくという話の流れは同じである。

小町伝説について今少し述べると、小町伝説は3種類に分けられるという。湯浅佳子は「小野小町伝説の一系譜―病める小町の話―」で、「小町伝説の零落譚には、父母の死による家の凋落（『玉造小町子壮衰書』）、老衰（謡曲『関寺小町』や『小町草紙』）、そして民間伝承に語られる病による零落という話型がある<sup>117</sup>」と述べた後、最後の「病める小町」に関連する伝承と近世や近代の文学作品を紹介しながら、各作品についての分析を行っている。ここで湯浅が取り上げている作品は、梅流山人『小野小町翁嚙』（1816年）、山東京山の合巻『小野小町浮世源氏絵』（1830—1848年）、須藤南翠『江戸小町』（1893年）、小松弘毅『小野小町貞女鑑』（1894年）、谷口流鶯『小野小町』（1896年）、石川淳『かよひ小町』（1946年）である。これらの作品内で小野小町が患う病気とは、乳房の下に赤い黒子ができたり、毒薬を付けた楊枝で顔を刺されて顔面に大きい黒子ができたり、または体に赤い斑点があるという、皮膚病である。この皮膚病によって小町の美が一瞬に無くなって零落していく姿を描いたのが「病める小町」系統作品群

---

<sup>116</sup> 小田幸子「小野小町変貌―説話から能へ」『日本文学誌要』84号、法政大学国文学会、2011年、21頁。

<sup>117</sup> 湯浅佳子「小野小町伝説の一系譜―病める小町の話」『東京学芸大学紀要』第2部門人文科学第51集、東京学芸大学、2000年2月、295頁。

の共通特徴とみえる。最後に湯浅はそれぞれの病が持つ意味について次のように述べている。

合巻『小野小町 浮世源氏絵』では、小町の赤い黒子は、小町が宿命として背負った罪業を意味するものとして示され、因縁の物語が展開する。また明治小説『江戸小町』は、小巳都の病を、業の象徴として扱うのではなく、醜から生まれた真の美の物語として描いた。さらに石川淳の『かよひ小町』に至っては、染香の体の赤い斑点は、遊び女が背負う烙印として示された。そこでは病の因縁のことは触れられることなく、そこにある染香という人間の意味、すなわち宿命として病を受けた人間は、「聖霊の宮」と化して他を救済する存在となるべきことが語られている<sup>118</sup>。

「病める小町」の病とは、基本的に業によって生じる業病だが、『江戸小町』は業病ではなく、真の美が生まれるための病として描かれており、『かよひ小町』では「病の因縁」自体に触れることすらないと述べている。つまり、「病める小町」を扱った作品は、順次的に業については言及しない方向へと変容されていたということである。しかし、湯浅自身も自ずから述べているように、『かよひ小町』の染香において病は「宿命」であった。また『江戸小町』の小巳都も美しい外見を持ったため、真の精神的美人を現出させようと思う潮多によって顔に薬物を塗られるのである。業という表現が無くなったとしても、湯浅が提示する「病める小町」の系譜には一貫してその美が原因で病を患う女が描かれていると言える。

「対髑髏」のお妙も、美しいがハンセン病という恐ろしい病を持つ女、もしくはその美しさに惚れた男の求愛を拒んだ挙句、「天刑」としてハンセン病を受けた女、すなわち「病める小町」として描かれていると読むことができる。また湯浅が取り上げている作品中 3 作品(『江戸小町』(1893 年)、『小野小町貞女鑑』(1

---

<sup>118</sup> 湯浅佳子、前掲書、300 頁。

894 年)、『小野小町』(1896 年))が 1890 年代に刊行されたことを考えると、1890 年の「対髑髏」も「病める小町」の系譜と何らかの関連があるに違いない。

江戸期まで小野小町という人物は『伊勢物語』で紹介されていた「色好みなる女」として一般に認識されていた。勝又基の「小野小町は貞女か—近世前期叢伝に見る小町像」では、御伽草子の『小町草紙』にも「小町といふ色好みの遊女あり」という文句があり、『本朝美女鑑』(1687 年)などでは「色好み」から「好色」への言い換えが行われ、「色事を好む方向へとより印象づけられて行く小町像が、貞女の範疇に入り難いのは言うまでもない<sup>119</sup>」と述べられている。

しかし、近代になると、黒岩涙香の『小野小町論』(1913 年)が代表的に示しているように、小野小町は貞女として表象されるようになった。

余は幸ひにして、我が日本に、今より千有余年前に、日本の女子の為に、活きたる手本を示した偉絶壮絶なる貞女の女神の有ることを知つて居る、彼の女は而も絶世の美人であつた、全く女らしい点に於て総ての女に優絶した乙女である。彼の女は千有余年後の今の人が漸く知り得た「一夫にだも見えず」の崇高なる貞操観念を千有余年前に体現して身を犠牲に供するを厭はなんだ、彼の女は全くの奇蹟である、恐らくは天が、世界の墮落し易き「貞操の何たるを知らぬ」女達に対し、迷ひの夢を醒さしむる為に響き渡らせたる警鐘で有らう

120

涙香はここで小野小町を「一夫にだも見えず」「貞操の女神」として位置づけている。また、小町は「女らしい」と同時に、「崇高なる貞操観念」のために「身を犠牲に供するを厭はなんだ」と述べている。百夜通い伝説で深草少将が焦がれ死になったことを小町の罪業と見る江戸期までの認識と違って、小町が深草少将の死後、ずっと独身を通したことを取り上げ、それを深草少将に対する小野小町の貞操とみるのである。涙香は、一度は深草少将の恋を受け止めようと決心した

---

<sup>119</sup> 勝又基「小野小町は貞女か—近世前期叢伝に見る小町像」『国文学 解釈と鑑賞』70 巻 8 号、至文堂、2005 年 8 月、158 頁。

<sup>120</sup> 黒岩涙香『小野小町論』朝報社、1913 年、2—3 頁。

小野小町が、死ぬ時まで深草少将を裏切らなかったとして、自分と同時代の「墮落した女達」を訓戒しようとする。

涙香が『小野小町論』を出したのは 1913 年であるが、涙香が持つ小町認識はその以前からも存在していた。錦仁は『小町伝説の誕生』で、涙香の『小野小町論』が 1894 年の『小野小町貞女鑑』を下敷きにして書かれたものだと指摘している。『小野小町貞女鑑』の作者小松弘毅は、その序文で「弘毅案スルニ徒然草以下ノ本朝通鑑百人一首一夕話ニ論スル皆不貞ノ女ト書キ汚名ヲ伝フ」と、それまで小町を「不貞の女」としてきた前近代の否定的な認識を「甚ダ謬レリ」と嘆く。「小野小町ハ二夫ニ見エタリヤ人ヲ侮ル事アリヤ」と反問し「其ノ貞烈清潔ナルヲ述ベテ婦女子ノ鑑トセント欲ス」と、小野小町を「色好みの女」から「貞烈清潔ナル女」へと変形させている<sup>121</sup>。涙香が賞賛した小町の「一夫にだも見えず」の崇高なる貞操観念がここでも「二夫ニ見エタリヤ」と小町再評価の根拠として働いている。ここから女を「娼婦」と「聖女」の二分法で考える性の二重観念と、一夫一妻制とそれに伴う道德観念を押し付けていた明治言説の一断面を読み取ることもできる。小野小町を「貞女」として表象する動きは 1890 年代から始まっており、そのような時代背景の中で「対髑髏」のお妙が「病める小町」として描かれたのである。

しかし、「対髑髏」のお妙を美しい「貞女」として把握するには無理がある。次節で述べるように、お妙は初めて会った男に共寝を誘う女であり、作品の末尾ではお妙のハンセン病者としての醜い容貌が強調されている。どちらも当時の女性の手本にはならない。すると、お妙は江戸期までの小町像がそうだったように、「色好みの女」であったかということ、お妙は「源氏業平の如き戯け者を憎く思ふ」女であったから、「色好みの女」でもない。

お妙は、「病める小町」にハンセン病の要素が加えられて誕生した人物であるが、そこには 1890 年代という時代像が結びついており、その人物像や彼女の怨念の正体を一言で断定するのは難しい。従って次節ではお妙という人物の形成と

---

<sup>121</sup> 小松弘毅『小野小町貞女鑑』土屋軍治、1894 年、2 頁。

彼女が持ったはずの怨念について 1890 年代の女性認識という観点から考えてみることにする。

#### 第4節 お妙の美と醜

小町伝説が世間に広く流布されるための前提条件として小町が「絶世の美女」であったことがあるように、「対髑髏」のお妙も人とは思われないほど美しい女として描かれている。しかし、お妙の美しさに関する描写は結果的に彼女を女性でない存在、「妖怪」に等しい存在とすることになる。

年は二十四五なるべし、後面に燈を負ひて後光さす天女の如く、其色の皎さ、其眼のぱつちりとしたる、其眉つきの長く柔和なる、其口元の小さく締りたる、其髪の今日洗ひたる乎と覚えて結もせず後に投掛て末の方を引裂きたる白紙にて一寸纏めたる毛のふさ／＼としてくねらざる美しさは人にあらずおのれ妖怪かと三足ほど退つて覗へば<sup>122</sup>

最初にお妙と対面した「露伴」が抱いた感想である。天女のように美しいお妙を見た「露伴」はその後「おのれ妖怪」かと思って退くことになる。この後再びお妙の美しさに関して描写する時にも「ソツと屏風の外を覗けば、炉の傍に尚端然と坐して何やらを読み居る美しさ人形の様なり<sup>123</sup>」と彼女の人間の限界を超えた美に言及している。やがてお妙から共寝を勧誘されることになると、彼女の美しさは恐ろしさと同一のものとされる。

頑固でも何でも拙者の申す事聞るゝがよい。ハイハイ到底あなたの頑固には叶ひませぬからあなたの申さるゝ通りに致しましよ、ホゝホゝ、まあ怖い顔をして。(中略)ホゝ可愛らしい、真面目に。ハイ真面目に。妾しも真面目に申しませう、サア露伴様。何。殿御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずと

---

<sup>122</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、257 頁。

<sup>123</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、261 頁。



もよいと思はるゝか。何。御自分の御言葉だけを無理やりに心弱い妾しに承知させて、妾しの真実には露かゝらぬと酷らしうおつしやるか。知らん。知らんとは御卑怯な、サア此方へござれ御一所に臥ませう、妾しもあなたの御言葉を立ますればあなたとて妾しの一言を立て下さつたとて、御身体の解くるでもあるまい汚るゝでもござるまいに、何故そう堅うなつて四角ばつてばかり居るゝか、エ、野暮らしい、と柔らかな手に我手を取りて晴も動かさず平気に引立んとする其美しさ恐ろしさ<sup>124</sup>

共寝の誘いを拒否する「露伴」に対して、お妙は「殿御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずともよいと思はるゝか」と責めながら、「怖い顔をして」いる「露伴」を「ホ、可愛らしい」と弄ぶ。ここでのお妙の「露伴」に対する態度は、おとながこどもをあやすような態度であることにも注目したい。「露伴」はお妙の誘惑を「美しさ」と取りながらも一方では恐ろしいと言っている。ここで「露伴」が彼女を恐ろしい存在と認識したのは、彼女の行動が「露伴」が持つ常識の範囲、すなわち性に関係した場面では、女性は受動的であるはず(べき)であるとする男性主義的な常識を超えているからである。

「露伴」は、最初に「我元来洒落といふ事を知らず、又数奇と唱ふる者にもあらで」と自己紹介している。夜中に峠を越えることを引き止めようとする案内係の人には「おのれ我を都会育ちの柔弱者と侮つたりや」と怒る人物である。「都会育ちの柔弱者」のように「洒落」「数奇」などに拘らない「露伴」は、自ずから「男らしい男」として自分自身を規定している。お妙の誘いを最初に断る時にも「我男の身として自分ばかり暖まり居をさもしき様に思ひなし」「小生も男でござる、瘦我慢致して是より御暇申す、女性に難義さして我心よく眠らば一生の瑕瑾、母の手前朋友の手前恥かし、夜道まだ／＼楽な事なり」と、女性を(深夜夜具なしで眠るなどの)身体的苦痛から守るのは、男としての自分の義務であるとして、男振りを見せることに集中している。「男らしい」と自分を規定する「露伴」にとって、平気で男の手を引いて共寝しようと自ら提案する女は「女ら

---

<sup>124</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、263—264 頁。

しい」女ではないはずである。「露伴」が恐ろしいと思ったのは、お妙の「女らしくなさ」である。後になって、「露伴」はお妙の「女の癖に男めきたる」「女らしくなさ」が憎いと言う。

さりとは又女の癖に男めきたる憎さよ。女の女らしからざる、男の男らしからざる、共に天然の道に背きて醜き事の頂上なり。さりながら女の女らしからずして神らしきと、男の男らしからずして神らしきは、共に尊き頂上ぞかし。今此女の言ふ所最速女らしからず、女の口より初めて達ひし我を抱て寐んなど中々以て言へた事ならざるに、然も乳母が幼稚人を抱て寐る如く我を抱て寐んと云ひし事若し虚誕ならずば、此女は女の男めきたるにはあらで、人より以上の方外の女なり<sup>125</sup>。

「女の女らしからざる、男の男らしからざる」ことは「醜き事の頂上」であるが、もし性別とは関連がない神であるから女らしくないというならば、それは「尊き」としており、醜いことと神らしきことが表裏一体であると述べている。しかし、お妙が神だと言っているのではない。「露伴」にとってお妙は「方外の女」、即ち世の中の道德観念、慣習、秩序に拘束されない「女」もしくは「妖怪」である。一つの布団に共寝を誘うお妙の行動に性行為への誘いを読み込めば、「女らしく」ない行動となろう(性的行動においては男性が主導権を握るべきであるという発想を元にすれば)。しかしお妙が共寝を誘ったのは、「乳母が幼稚人を抱て寐る如く」「露伴」を抱いて温めるためであり、彼女の共寝の誘いは性を超越している。この点でも「女らしさ」の規範を超越しているお妙は、「露伴」にとって怪物的存在なのである。

明治期の道德観念、慣習、秩序が女に与えた絶対的な拘束の中に結婚がある。近代的な一夫一妻制を確立し、効率的な労働力を確保するために結婚は必要不可欠であった。前述したように、お妙は恋を拒み、結婚を断っている。「対髑髏」ではその背景としてお妙の学、つまり幼い時に本を多数読んだ経験をあげてい

---

<sup>125</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、271—272 頁。

る。このようなお妙表象の背後に、知識獲得を目指す同時代の若年女性に対する、時代の不安が投影されている可能性をここで検討したい。明治当時にはこのように学を積んだ女学生が、結婚を忌避する危険性があると認識されていた。

井上章一によると、明治期の女学生の中で美人は勉強を続けることが難しかったと言う。授業参観という「見せ場」を通して「選ばれた」美人女学生は卒業する前に結婚することが当然であったのだ。結婚しないで勉強を続け卒業まで成し遂げた女学生を当時「卒業面」と呼んだという。

いっばんに、当時は、平均結婚年齢がひくい。一〇歳台のなかごろで、嫁にいくというケースも多かった。つまり、女学校在学中に結婚してしまうことも、あったのだ。

とはいえ、女学生のすべてが、在学中に結婚をするのかというと、そんなことはない。女学校教育を、最後までまっとうして、卒業するものもいた。

ここで注目すべきは、彼女たちの容姿と就学についての因果関係である。在学中に結婚をしてしまうのは、どちらかといえば美人ともくされる女学生であった。そして、卒業をするものは、そうではないほうの生徒が多かった。すなわち、不美人である。

じじつ、当時は、彼女たちのことを、卒業面<sup>そつぎょうづら</sup>とよんでいた<sup>126</sup>。

ここには知識獲得を結婚よりも優先する女性は、美しいはずがないという偏向した先入見が作用している。女性にとっては、学問よりも結婚が重要であるという考えにたてば、恋や結婚を忌避する女、「卒業面」の女学生やお妙は、醜い「はず」なのである。「卒業面」と呼ばれた女学生は、学問志向が強かった点では、「江口の君」や小野小町の末裔であるともいえよう。

もちろん、「露伴」がお妙に出会って「美しさは人にあらず」と感じたように、彼女は作中において人間の美しさを超えた美女として印象づけられている。しかし、彼女が美女として明確に描かれているのは、「露伴」の視点からであり、

---

<sup>126</sup> 井上章一『美人論』朝日新聞社、1995年、20頁。

「露伴」が目撃したお妙は死後の幽霊である。「下女共が年若く美しき俳優なぞの噂まで苦々しく」思った色嫌いのお妙は生前に、

髪に油の香も止めず、櫛の齒を入れて鬢の恰好気にするまでもなく(中略)紅脂白粉はまるで忘れつ、帯に苦勞をせしはむかし、下駄に鼻緒を選びしもむかし、羽織の色がどうであろうと、着物の取合がどうであろうと一切女のたしなみを捨て<sup>127</sup>

と、美には興味がない女であった。「器量美しい」という文句もみえるので、お妙が基本的に美女であったことは間違いないが、「露伴」が幽霊となってからのお妙を目撃して述べるような「天女」の外見を、生前のお妙が持っていたと考えることは難しい。

実は、お妙に焦がれ死んだ華族の貴公子がお妙に恋した主な理由も彼女の外見ではなかった。貴公子がお妙に恋したのは、亡くなった母を慕う彼女の孝心に感動したからである。お妙のところに縁談を持って来た「髭毛うるはしき官員風の男」は、この縁談の経緯について次のように述べている。

今年の春若殿郊外を散歩せられし折或る墓地を通りかゝられ、不図乞食共の話しを聞るれば、今帰つたあの娘、器量美しい計りか孝心のいぢらしさ見えて、母親の墓の前に蹲踞りたるまゝ動き得ず、涙は雨のふる程泣て／＼、若い身にも似ず、生命惜からねば早く母様の御傍に行たしとの述懐、何と今時珍らしい氣立の女ではないかと一人が云ふを又一人がひつとつて、貴様今日初て彼娘に氣が付たか、あれは毎月の事、去年の何月なりしか彼娘の親の此処に葬られてから毎月の命日怠る事なく此処に来てあの通りの悲歎、他所で見ても可愛想なありさま、殊更今日などは顔も大分痩せて血色も悪し、大方家に居ても始終泣てばかり居る事であろうかとの噂、耳に入るより若殿ゾツとし玉ひて、誘はれし涙が一滴、是ぞ恋の水上思ひの泉、ゆめ／＼浮たる御心ならで恋が為せし探

---

<sup>127</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、276 頁。

索、其後御名前御住所まで何時の間にか聞知り玉ひ、ます／＼焦れて遂に父上の許しを乞はれ<sup>128</sup>、

「顔も大分痩せて血色も悪」いお妙についての事情を乞食たちから聞いた貴公子は、「生命惜からねば早く母様の御傍に行たし」と願う彼女に対する憐憫の心から涙を流し、遂には憐憫が恋へと発展し、焦がれていく。ここで貴公子がお妙の顔を見たかどうかは書かれていない。貴公子はお妙の顔すら見たことがなく、「器量美しい計りか孝心のいぢらしさ見えて」という話から彼女を判断した可能性すらある。外見の美に惑わされることなく、その内面を重んじる貴公子の純愛を強調するための設定である。

前節で述べたように、お妙は「病める小町」の系譜に属する人物で、貴公子の恋を拒んだことでハンセン病という天刑が下されたかのように描かれている。しかし、小町が持つ「絶世の美女」という前提条件がお妙には与えられていない。厳密に言えば、死後のお妙は「絶世の美女」であるが、生前のお妙は「女のたしなみを捨て」た「孝心のいぢらし」い女である。前述したように、死後の幽霊としてのお妙の美貌は、「露伴」にとって恐ろしいものであった。作中における叙述の進行過程に沿ってお妙の美の変容を把握するとしたら、美女であるが恐ろしいとされるテキストの最初の段階(物語の現時点)から、女の嗜みを捨てて「顔も大分痩せて血色も悪」になった回想場面へ、そして最後にハンセン病患者として顔が崩れていくクライマックスへと展開していく。

生前のお妙が美女として造形されていない可能性の理由を、作者幸田露伴の認識から窺うこともできる。雑誌『新小説』の1898年2月号に「雑録」として載って以降単行本に収められた時に「女の上」と改題された露伴のエッセイがある。ここで露伴は、「女」「妻」「妾」「再婚」「下司女」「美女」「醜婦」「美女と醜婦」「女の衣」「髪」の項目をあげて自分の女性観を赤裸々に述べている。「女といふものこそめでたくうるはしきものなれ」と言いながら「其心やさしく、望み少なく、争ひをきらひ、いつはりを遂ぐる事無し。されば、よき女だに多く

---

<sup>128</sup> 幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注、前掲書、277—278頁。

ば、世は常に幸福多かるべくや。よき女多き家の幸福多きは、われひと共に眼にも見て知ることなり<sup>129</sup>」と、優しくて男と争うことがない、従順な女が良き女として家に幸福をもたらすとしている。また、妻に関しては「今は世も進みて、男の自ら立つさまもいたく異なれば、(中略)妻にありたきは、夫の業を夫のみの業とおもはで、夫の業やがて我が業なりと常常思ひしみてあらん心がけなり<sup>130</sup>」と述べていて、全体的に女を男の付属物とする認識を見せている。さらに、続く「美女」の項目では次のように述べられている。

美しく生まれつきたる女、十人に六人は心驕れり。美しく生まれつきたる女、十人に六人は智乏し。美しく生まれつきたる女、十人に六人は命薄し。家を破れるものの母の見るに、十に六までは美人なり<sup>131</sup>。

「十人に六人」という表現を使って断定は避けているが、大体の美女は驕慢でありながら、知力が低い傾向があると露伴は言っている。結婚して母になっても、美人は家を破産させる存在として規定されている。これに比べて「醜婦」の項目では「十人に六人までは、醜く生まれつきたる女、心ひがめり。十人に六人までは、醜く生まれつきたる女、迷ひ深し。十人に六人までは、醜く生まれつきたる女、片意地なり<sup>132</sup>」と、不満が多く自分の主張を曲げることがないのが「醜婦」の特性だとされている。また、「美女と醜婦」では、「美女の醜婦よりも世の為に取りて悪きとはいふべくもなし。美といふことは一の力なれば、さてそこさまざまの事も起るなれ」と、「美女」が「醜婦」に比べて世のために悪いとし、その理由は、美が力になるからだと言っている。美は力なので、女がそれを自覚して利用すると、従順な「よき女」から離れていくともいいたげである。露伴の認識

---

<sup>129</sup> 幸田露伴「女の上」『露伴全集 第29巻』、岩波書店、1954年、114頁。

<sup>130</sup> 幸田露伴、前掲書、114頁。

<sup>131</sup> 幸田露伴、前掲書、118頁。

<sup>132</sup> 幸田露伴、前掲書、119頁。

は、井上章一が述べている明治の「美人撲滅論」「醜婦奨励論」に合致した、当時の典型的な女性観とも言える<sup>133</sup>。

それでは、「対髑髏」のお妙は、露伴の判断基準からして「美女」と「醜婦」、どちらに近い存在であろうか。露伴によると、美女は「心驕れり」、醜婦は「心ひがめり」と言う。お妙の色好みを否定して男を嫌う傾向は「心驕れり」より「心ひがめり」に近い。また、そのような傾向を育てたお妙の読書経験から考えて、お妙は「智乏し」とは距離がある人物で、貴公子からの求婚を最後まで断り、「露伴」には「殿御の仰しやる事さへ通れば女子の云ふ事は通らずともよいと思はるゝか」と反問しながら粘り強く共寝を誘う側面は「片意地」を表している。つまり、お妙は「醜婦」に近い内面を持った人物として描かれていると言える。

露伴自身、高度の教育を受けた知識人であったが、学問によって身につけた知識については、揶揄的な態度をとっていたことにも注目したい。中国文学研究者の井波律子は、菊地松軒の主催する漢学塾で「白話の読み方をマスターし、白話で書かれる俗文学、すなわち明清の小説や元曲を難なく読みこなせるようになったことは、小説家幸田露伴にとって大きなベースになった<sup>134</sup>」と述べながら、「対髑髏」に関しては『莊子』「至楽編」の髑髏問答のくだりを下敷きにして和文で書かれた作品だと評している。そこで、露伴の随筆「明暗ふたおもて」（1895年）を引用して「老子の「学を絶てば憂いなし」（第二十章）にのっとり、勉強を

---

<sup>133</sup> 井上章一は、明治当時の修身教科書に「美人排斥論」「醜婦奨励論」が書かれている例をあげて以下のように述べている。「卒業面の女学生を、世間の冷笑からまもりたい。そのためには、女学校をひとつの自閉域にする必要がある。世間の揶揄が、とどかないようにしなければならない。そうすることで、卒業面が劣等感をいだかなくてもすむような場を、つくっていく。この意欲が、「美人排斥論」の言葉になった。それは、向学心のある女学生を、世間の冷笑からガードするバリエーションだったのだ。だとすれば、「美人排斥論」は、世間のありようをうつしだすひとつの陰画だと言えるだろう。教科書が、美人をけなし、不美人をほめる。つまり、そうまでしなければならないほどに、世間は彼女たちを冷笑しきっていたというわけだ。」井上章一、前掲書、39—40 頁。

<sup>134</sup> 井波律子「露伴初期」『日本研究』16 号、国際日本文化研究センター、1997 年、170 頁。

始めたせいで、女性のことも含め、知らないでもいいことを知ってしまったと、諧謔的な口調で述べている<sup>135</sup>」とも指摘する。井波律子があげている「明暗ふたおもて」には以下のような記述がある。

六歳か七歳かな、兄に引かれたり婢に負はれたりしていろはを習ひだしたのが抑々の大失敗の発端、此の御庇蔭で大分碌でも無い事を覚え、八歳で綺麗な姉さんだと思つた女に可愛がられて、其の御庇蔭で僻み根性といふものを覚えさせられ、まだ口惜しいは十三で大人聖人といふ何でもないものを有難がつて子曰くに魂魄を蠹蝕まれ<sup>136</sup>

家事使用人(「婢」)に背負われて字を覚えた露伴は、それを「大失敗の発端」だという。その後、「綺麗な姉さん」からは「僻み根性」というものを覚えさせられ、儒学聖人の教えを覚えることで「魂魄を蠹蝕まれ」たともいう。井波律子の言うように、確かに諧謔的な口調ではある。現実の生活には役立たずの学問を切り捨てることができず、安定した職場から離脱し、北海道から東京に戻ってきた露伴らしい述懐とも言える。この「明暗ふたおもて」は、「対髑髏」より後に発表されたもので、男である自分にとっての学問の無用性を述べたものだが、「対髑髏」にみえる学ある女に対する態度に共通するものがある。

## 第5節 おわりに

本章では、幸田露伴の「対髑髏」を対象として、男性の意思に容易に従おうとしないヒロインのお妙が、内面もしくは外面において醜い存在とされていると論じた。第1章で分析した、「神経病」を病む豊志賀やお累の場合と同じように、お妙は「病的な女」として表象されていた。お妙、豊志賀やお累の表象のされかたからは、当時の女性嫌悪の一端をうかがい知ることができる。

---

<sup>135</sup> 井波律子、前掲書、170頁。

<sup>136</sup> 幸田露伴「明暗ふたおもて」『露伴全集 第29巻』、岩波書店、1954年、34頁。



お妙は遺伝によるハンセン病患者として描かれているが、彼女の病と醜は、実は男の愛を拒否し、男を翻弄したことに対する罰、いわば「天刑」であるとされている。「対髑髏」が発表された時代は、ハンセン病を「遺伝」や血液接触を通じた伝染といった、近代的な科学の思考で解釈する傾向が見え始めた一方、前近代から引き継がれた、ハンセン病を「天刑病」であるとする思考もまた、影響力を保ちつつ残存していた時代であった。「対髑髏」は、ハンセン病を「天刑病」とするパラダイムの方により強く依拠しているといえよう。注目すべきは、旧来のハンセン病＝「天刑病」説が、先行する世代がなんらかの形で「天」に逆らうような罪を犯したために、ハンセン病という「業病」が子孫にも引き継がれることになったとするものであったのに対し、「対髑髏」のお妙は、「天」に逆らったわけではなく、自分に恋する男性を拒否したという、相対的に軽微なはずである罪のために、ハンセン病を罹病したとされている点である。この作品においては、男性の意思に従わないことが、「天」に背く行為に等しいとされているという解釈が可能である。

お妙の描かれかたには、男の恋を拒んだ女が罰を受けて醜くなるという小町衰老落魄譚との関連が深いことを、「対髑髏」発表年代前後の小野小町伝説に材をとった作品との比較検討を通して立証した。「対髑髏」は、男性の恋を迎え入れないお妙を「天刑」に価する悪行をなした女とするために、小町衰老落魄譚を再利用している。お妙は小町と同一視されながら、当時の女学生の中で結婚を忌避し勉強を続ける、学問好きという意味での小町のような女の表象としても理解することができた。

お妙が「露伴」に対して「女子の云ふ事は通らずともよいと思はるゝか」と反問し、自分の主張を曲げない傾向があることを考えると、作者露伴にとってお妙は「女の上」という随筆で語られた「片意地」を持つ醜婦の一人に属する存在であった。絶世の美女として描きながらも「その美しさ、恐ろしさ」に対して警戒し、遂にはお妙の醜を明らかにして執拗に描写した理由も、お妙を内面もしくは外面(あるいはその両方において)醜婦として描きたかった露伴の意識が反映された結果であると言える。しかし、「女の上」や「明暗ふたおもて」から見られるように、露伴が醜婦を否定的な存在として捉えていたかどうかは曖昧で、美女と

比較するところでは、「美女の醜婦よりも世の為に取りて悪き」として醜婦の方がよりいいとしている。明治当時の女学生を対象として「醜婦奨励論」が流行していたという井上章一の『美人論』を参照した場合、露伴のこの意識も当時の知識人男性が持つ女性観の一断面として把握することができる。

本論文で女性の美、あるいはその欠落に注目するのは、女性たちが彼女たちを取り巻く社会の主流の価値観を支持しそれに従う場合は、内面あるいは外面（もしくはその両方）において「美」の存在とされ、そうでない場合は「醜」の存在であるとされるという傾向、いわば美のイデオロギーとでも呼ぶべきものが、本論文で扱う多くの女性幽霊譚においても作用していると、論者が考えているためである。第1章で論じた『真景累ヶ淵』の豊志賀も美を失っていく存在として描かれている。累伝説の系譜に属する物語の多くで、累は初期作品（『古今犬著聞集』『死霊解脱物語聞書』）を除くと、美女が醜婦へと変貌する。仏教的な理由であれ、儒学的な理由であれ、累が醜婦になる原因はいつも彼女の内面にあった。『真景累ヶ淵』ではそれが「神経」だったのである。同様に、「対髑髏」のお妙が物語展開の中で絶世の美女から醜婦へと変貌していくことも、彼女の「片意地」といった性格が原因であった。厳密に言えば、「片意地」による「天刑」であるかのように露伴は見せかけているのであって、その道具として小町伝説が用いられたと考えるべきである。

第3章からは、夏目漱石の「琴のそら音」を中心に、そして関連作品として「趣味の遺伝」を取り上げ、幽霊譚を語る意識の裏に存在する時代の不安を読み取ることにする。『真景累ヶ淵』や「対髑髏」において、時代と共に変化していく女性の内面が不安の種であったとしたら、漱石に幽霊譚を書かせた不安は、野蛮と文明の一大激突でもあった日露戦争にあると思われる。

### 第3章 日露戦争と怪談 —夏目漱石「琴のそら音」を中心に

#### 第1節 はじめに

「琴のそら音」は、1905年『七人』に発表され、後に『漾虚集』（1906年刊）に収められた夏目漱石の短編小説である。『漾虚集』には「琴のそら音」以外にも、「倫敦塔」、「趣味の遺伝」、「幻影の盾」など、主に漱石初期の浪漫的な傾向を表す作品が多数収録されており、先行研究においては江藤淳の言うところの漱石の「低音部<sup>137</sup>」や「深淵」が垣間見られるものとして研究の対象になってきた傾向がある。江藤は、『漾虚集』の諸作品から「「生」そのものに対する殆ど生理的な嫌悪の感情<sup>138</sup>」を読み取って、それを漱石の「低音部」もしくは「深淵」と名付けた。その中で「琴のそら音」は「低音部」や「深淵」に属する作品の中でも注目される機会が乏しく、副次的に言及されることが多かった。しかしながら、2000年以降一つの作品論として「琴のそら音」を分析する論考が増えてきている。

---

<sup>137</sup> 安天「「他者」概念の誕生—江藤淳の『夏目漱石』について」によると、江藤淳の低音部概念は以下のようなものである。「南画と漢詩、英詩といった芸術趣向は、「生」そのものに対して殆ど生理的な嫌悪の感情」を持っていた漱石にとって、苦痛で在り続ける日常生活の領域から束の間であれ逃れ癒しを得るための、すなわち現実逃避のための世界であったとし、この現実逃避願望が幼い頃から一貫していた漱石の主調低音に据える。（中略）『漾虚集』から始まり『四編』にいたるほとんどの短編小説には、漱石の現実逃避願望が色濃くあらわれているという。厭世的な審美主義傾向の短編小説を執筆する傍ら、生活者としては長編小説に「日本の現実」を描いていたというのが、江藤が提示する漱石像である。」安天「「他者」概念の誕生—江藤淳の『夏目漱石』について」『言語情報科学』10号、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2012年、146頁。

<sup>138</sup> 江藤淳『江藤淳著作集 1—漱石論』講談社、1967年、37頁。

例えば、主人公の「余」が持つ婚約者に対する期待と不安を中心に分析し、彼女は本当に「余」を愛しているのかという愛の強要観念の隠蔽として読む論<sup>139</sup>、死を文学的なロマンティシズムとして認識する動因が科学の持つ合理性にあるという逆説を通して、科学と文学の表裏一体的結合をみる論<sup>140</sup>、「余」が「幽霊という狂気」に囚われながらも正常へと帰着するという論<sup>141</sup>などがある。ほかにもインフルエンザという要素を中心に「琴のそら音」を文学史の中に位置づけようとする論<sup>142</sup>や、「余」と「津田」の関係に注目し、二人の友情が深まる過程として捉える論<sup>143</sup>などが見られる。

本作品では「津田君」という「余」の古くからの友人が、日露戦争出陣中の軍人を死んだ妻の霊が訪れたという怪談を、ありうるべきこととして語る。彼によれば、さまざまな迷信や旧習にはそれなりの根拠があるのであり、日常的な常識よりも高次の論理、最前線の知識をもって合理的に説明できる可能性が強い。それに対し、「余」は「常識」を重んじる人物として登場する。この態度の違いが、やがて物語を駆動する最も大きな要因となる。本論文では、「琴のそら音」における怪奇現象や迷信と、それに対する近代的知識人の反発や容認の表象のありかたの裏に、日露戦争前後の時代の不安や病理を観察していくことになる。そのために、本作品における「迷信」（「婆さん」に代表される）、「常識」（「余」には、自分はこれを代表するものであるという自意識がある）、旧習や迷信をも「心理学」や「化学」で説明可能とする立場（「津田君」）との関係に焦点をあて

---

<sup>139</sup> 松本良太「隠蔽された愛の強要観念—夏目漱石『琴のそら音』論」『金沢大学国語国文』37号、金沢大学国語国文学会、2012年3月。

<sup>140</sup> 神田祥子「『科学』という信仰—夏目漱石『琴のそら音』を視座として」『東京大学国文学論集』5号、東京大学文学部国文学研究室、2010年3月。

<sup>141</sup> 荻原佳子「幽霊という狂気—漱石『琴のそら音』」『九州女子大学紀要』39巻3号、九州女子大学文学部人間文化学科、2003年2月。

<sup>142</sup> 福井慎二「漱石『琴のそら音』論—インフルエンザの近代文学史」『河南論集』6号、大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室、2001年3月。

<sup>143</sup> 宮藺美佳「夏目漱石『琴のそら音』考—「余」の見た「幽霊」のもたらしたもの」『人文論究』46巻3号、関西学院大学文学部、1996年12月。

る。日露戦争中という戦時不安がどのようにこの作品に影を落としているかが注目される点となる。

主人公「余」が家事のために雇用している年配女性(「迷信婆々」)<sup>144</sup>は、犬の遠吠えや占い、幽霊などを信じる女性である。他方、近代化・西洋化された帝国大学における国家的教育システムの所産である「余」や「津田君」は、近代的知のありかたを代表するべき存在であるはずである。しかしながら、本作品においては、迷信と近代的知のありかた、旧来の武士階級出身の年配女性と、「余」や「津田君」の世界観とは、明確で単純に対立するものとはされていない。

心理学を研究する道を選択した文学士の「津田君」は、死霊などの迷信を頭から否定するのではなく、ときに西洋の知的権威を参照しながら、それらが近代的・西洋的知の体系によって合理的に説明可能なものとなる可能性を思索している。他方、「津田君」とは違い、大学卒業後官僚としての現実的な立身出世の道を選択した「余」は、「津田君」の浮世離れした生き方と知識のありかたを部分的には軽侮しつつも、迷信とされてきた現象に、新たな近代的・西洋的再解釈を与えつつあるかに見える「津田君」に対する劣等感と畏怖を禁じ得ないでいる

<sup>145</sup>。

この作品では、旧来的なものであると想像された死霊の訪れなどの迷信と、近代的・西洋的知のありかたの葛藤や矛盾が生じているのであるが、本作品が、日本がヨーロッパ世界と闘った最初の戦争である日露戦争の最中という時期に書かれたことに注目する必要がある。特に重要であるのは、「津田君」が語る、日露戦争出陣中の軍人を、死んだ妻の霊が訪れたという逸話である。

本論文の第1章であげた『真景累ヶ淵』に登場する女性たちが「神経病」、第2章のお妙が「ハンセン病者」として描かれているように、「余」の婚約者、「露子」はインフルエンザのために体調を崩しており、「余」は彼女の「病」から彼女の「死」の可能性を思い不安に陥る。「津田君」宅から帰る途中、怪奇現象じ

---

<sup>144</sup> 没落士族階級出身。彼女は、近い将来に予定されている「余」と婚約者「露子」との新生活準備の役割も担っている。

<sup>145</sup> 近代と旧習、明晰な知と迷信とのうち、後者は「余」の「婆さん」の姿を通して、女性の特質としてジェンダー化されているという側面も指摘できる。

みた出来事に遭遇して、婚約者の健康に対する迷信めいた不安を増大させる「余」であるが、実際には婚約者がすでに健康を回復しつつある場面で、本作品は終結する。怪奇現象などの迷信がもたらす恐怖や不安は、このエンディングのために、最終的には治癒され、押さえこまれて、「余」は現実的、合理的で近代的な世界観の妥当性を再獲得し、婚約者は「以前よりも一層余を愛する」(127)ようになる。

「余」と露子のあいだの愛情が深まるのは、「余」の擬似怪奇体験、特に女性の恋着の恐怖を描く幽霊譚に似たシチュエーションを「余」が経験したためである。「余」の婚約者の名前は、「露子」である。この名前は必然的に三遊亭円朝の『牡丹灯籠』の女幽霊を想起させる。明治以降の怪談・幽霊譚が、近代以前の幽霊譚をどのような形で継承し、それぞれの時代や文化情勢の要請に応じて、どのように変形させてきたのかを重視するという研究方法を採用している本論文では、「琴のそら音」における「余」の恐怖という感情が当時の時代的な不安と共に前近代の怪談からも触発されて表れていることについても確認する。

以上の点の分析を踏まえて本章は、「琴のそら音」における怪奇現象や迷信表象の背後に、急速な近代化・西洋化への途を歩みつつあった、日露戦争前後の時代の不安や病理を観察していく。

## 第2節 「余」の訪問が意味するもの

一人称小説「琴のそら音」の前半において、その中心になる人物は、「余」ではなく、「津田君」である。物語は、久しぶりに知己津田君の下宿を訪問した「余」が「津田君」に「迷信婆」について相談するという構成になっているが、作品の前半において「余」はただ「津田君」の話を聞いて、その論理に振り回される受動的な存在にすぎない。「余」は自分自身について「刻下の事件を有の盡に見て常識で捌いて行くより外に思量を廻らすのは能はざるよりも寧ろ好まざる<sup>146</sup>」人であると語っている。物語を展開して行くのは、「余」に怖い話を聞かせ

---

<sup>146</sup> 夏目漱石『漱石全集 第2巻』岩波書店、1994年、99—100頁。

てくれる「津田君」である。しかし、作品の語り手は「余」であるため、読者は「余」の内面を目撃することしかできない。つまり、物語を導いていくのは「津田君の話」で、その話を聞いた「余」の内面を通して読者はこの物語のテーマ、すなわち日露戦争中の不安と恐怖に感応すると言えるだろう。

「余の内面」において、「津田君」は両面価値的な存在である。一緒に大学時代の思い出を語り合う知り合いとして知己でありながらも、現在「余」と「津田君」が共有できるものはほとんどない。却って二人は対立するかのようにもみえる。生活が大変だと苦情を訴える「余」に対して「津田君」は同情しながら言う。

「成程少し瘠せた様だぜ、余程苦しいのだらう」と云ふ。気のせいか当人は学士になつてから少々肥つた様に見えるのが癪に障る。机の上に何だか面白さうな本を広げて右の頁の上に鉛筆で註が入れてある。こんな閑があるかと思ふと羨しくもあり、忌々しくもあり、同時に吾身が恨めしくなる。

「君は不相変勉強で結構だ、其読みかけてある本は何かね。ノート杯を入れて大分叮嚀に調べて居るぢやないか」

「是か、なに是は幽霊の本さ」と津田君は頗る平氣な顔をして居る。此忙しい世の中に、流行りもせぬ幽霊の書物を済して愛読する杯といふのは、呑氣を通り越して贅沢の沙汰だと思ふ<sup>147</sup>。

何より、「余」は忙しい。久しく津田君の家に来なかったのも忙しかったのが理由である。この後津田君が幽霊の話をする時も「忙しい余に取つてはこんな機会は又とあるまい」と、自分が忙しい存在であることを強調する。「余」だけではない。この世自体が忙しいのである。にも関わらず、のんびり「流行りもせぬ」幽霊の書物を読んでいる津田君を「呑氣を通り越して贅沢の沙汰だ」と「余」はやや見下している。

---

<sup>147</sup> 夏目漱石、前掲書、87—88 頁。

「余」の内面において「津田君」は自分が想定している「高級」の枠からは外れた存在であると言える。が、同時に「余」の過去の記憶において、「津田君」は「余」より優秀な存在でもあった。

津田君と余は大学へ入ってから科は違ふたが、高等学校では同じ組にいた事もある。其時余は大概四十何人の席末を汚すのが例であつたのに、先生は巋然として常に二三番を下らなかつた所を以て見ると、頭脳は余よりも三十五六枚方明晰に相違ない。其津田君が躍起になる迄弁護するのだから[引用者補注：日露戦争戦地にいる夫を妻の幽霊が訪れたという話]満更の出鱈目ではあるまい。余は法学士である、刻下の事件を有の儘に見て常識で捌いて行くより外に思慮を廻らすのは能わざるよりも寧ろ好まざるところである。幽霊だ、祟だ、因縁だ杯と雲を攫むような事を考へるのは一番嫌である。が津田君の頭脳には少々恐れ入っている。其恐れ入つてゐる先生が真面目に幽霊談をするとなると、余も此問題に対する態度を義理にも改めたくなる<sup>148</sup>。

二人は高等学校からの同期生である。法学士の「余」と違って「津田君」は文学士として心理学を研究している。高等学校時代の「津田君」に対する「余」の記憶は、頭脳が明晰で自分より成績が優秀だったため敬意を抱いてはいるが、「津田君」の幽霊談への興味に関して「雲を攫む」「先生」「恐れ入る」など、滑稽に描写している点も見られる。「幽霊と雲助[引用者注：江戸時代の荷物運搬人、駕籠かき]は維新以来永久廃業した者とのみ信じていた」「余」としては、幽霊、祟、因縁などをできうれば否定したい。しかし自分よりはるかに頭脳明晰な「津田君」が怪異現象は科学的に証明できるものだというのが、「余」も態度を改めるしかない。

「津田君」が真面目に語る幽霊談とは、日露戦争で軍人として満州滞在中の夫に逢いにいく妻の幽霊の話である。「津田君」の親戚にあたる女性は、インフルエンザから肺炎を起こして急死した。結婚後一年も経たない時点での急死で、ま

---

<sup>148</sup> 夏目漱石、前掲書、99—100 頁。



だ二十代前半であった。このような事情があったため、「余」の婚約者の体調を心配する「津田君」は、「余」の婚約者の病因がインフルエンザであることを知り、さらに懸念を深める。「注意せんといかんよ」「君のも注意せんといかんと云うのさ」という「津田君」の好意からの言葉は、むしろ「余」の不安を増大させる。死んだ女性の、戦地にいるという夫について「余」が質問したところから、このエピソードは幽霊譚へと展開する。

戦地にある夫の元に、日本から妻の死を知らせる手紙が届く前に、「細君がちゃんと亭主の所へ行行って」いたのだという。死んだ妻が幽霊になって遠い土地にいる夫に会いに行ったという「津田君」の話を、「余」は「林屋正蔵の怪談<sup>149</sup>」のようだと混ぜ返して、「津田君」の幽霊話がもたらした不安と恐怖を紛らわそうとするが、「津田君」は「教育ある人にも似合わず、頑固に」、幽霊話という「愚な事」を主張する。その「津田君」のことを「余」は「まるで僕のうちの婆さん」、すなわち数々の旧習迷信を信奉する「余」のうちの家事補助年配女性のようにであると考ええる。

「津田君」が語る幽霊談は、痛切な愛の物語である。軍人の妻は夫の留守中に自分が病気で死ぬようなことがあっても、「必ず魂魄だけは御傍へ行行って、もう一遍御目に懸ります」(100)と誓った。軍人が満州へ出立する際、妻は懐中用鏡を夫に与える。夫が戦地でその鏡を見ると「青白い細君の病気に寥れた姿」が現れた。ことばを交わすことはなかったが、「鏡の裏から夫の顔をしげしげ見詰める」妻の姿に、夫は「訣別の時、細君の言った言葉」、すなわち「必ず魂魄だけは御傍へ行行って、もう一遍御目に懸ります」ということばを思い起こす。「時間を調べて見ると細君が息を引き取ったのと夫が鏡を眺めたのが同日同刻」であったことが判明する。

---

<sup>149</sup> 4代目林屋正蔵が怪談の名手として知られているので、4代目のことと思われる。4代目は、はじめ歌舞伎俳優で、1851年頃2代目林屋正蔵の門人となり、4代目林屋正蔵を襲名した。本名も芸名と同じく林屋正蔵である。最晩年には正翁を名乗った。怪談断を得意とし、麻布我善坊に住んだことから「我善坊の正蔵」とも呼ばれた。小学館編『日本大百科全書 第19巻』小学館、1984年、82頁を参照。

この幽霊談は、恐怖を誘う怪談であるが、「磊落」で勇猛な日本軍人とその貞節な妻が、日露戦争のために満州と内地に引き裂かれながらも、生と死の境界線を越えて愛を貫く純愛美談でもある。幽霊となって妻が夫の元を訪れたところに、死をもってしても消滅しない強い愛が描かれている。「余」はこの話を聞いたところから、婚約者の死を深刻に恐れ始め、いくつかの怪奇じみた経験をす。幽霊など有り得ないことだと最初は「津田君」を罵倒する「余」であるが、「津田君」が持つ知の権威に少しずつ屈服するかのようにも見える。「津田君」の話を聞いて「法学士に似合はしからざる感じが起つた」「余」は、結局「津田君」の話を認めることになる。「有の儘に見て常識で捌いて行く」常識人としての「余」が態度を完全に変えた理由は、「津田君」の持つ知の権威にあった。「法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊を再興して居る」と思いながら、「余」は自分の無知を告白し始める。「知らぬ事には口が出せぬ、知らぬは無能力である。幽霊に関しては法学士は文学士に盲従しなければならぬ」と無知を認め、完全に「津田君」の論理に従うようになった「余」に対して、「津田君」は、軍人の妻の幽霊が戦地にある夫の元を訪れたという逸話は、「ロード・ブローアムの見た幽霊杯は今の話と丸で同じ」であるとして、イギリスで旧友の幽霊がブローアムを訪れたという逸話を参照する。

ここで言及されている「ロード・ブローアム」とは、法律家・政治家・文筆家、ヘンリー・ブローアム男爵(Henry Brougham, 1<sup>st</sup> Baron Brougham and Vaux, 1778—1868 年)のことである<sup>150</sup>。自伝の 1799 年 12 月 19 日項は、「幽霊話(*A Ghost Story*)」と題されている。内容はつぎのとおりである。こども時代・大学時

---

<sup>150</sup> ヘンリー・ブローアムの伝記と業績については、Project Gutenberg に所収された John William Cousin, *A Short Biographical Dictionary of English Literature* (1911 年)を参照(<http://www.gutenberg.org/files/13240/13240-h/13240-h.html> 最終閲覧日 2015 年 11 月 22 日)。ブローアムの幽霊経験については、“Mysterious Britain and Ireland” の “Lord Brougham’s Experience” (<http://www.mysteriousbritain.co.uk/hauntings/lord-brougham%E2%80%99s-experience.html> 最終閲覧日 2015 年 11 月 15 日)から情報を得た。*The Life and Times of Henry Lord Brougham* は、Internet Archive で確認した(<https://archive.org/details/lifeandtimeshen05vauxgoog> 最終閲覧日 2015 年 11 月 15 日)。

代の親友と、先に死んだ方が必ずもう一人を霊として訪れ、死後になにが起こるかを知らせようという約束をする。その友人とは長年音信が絶えていたが、ブローアムはスウェーデン旅行中、インド赴任中の友人の姿を見る。夢か幻影だと考えようとするが、友人が死んだのではないのかという思いも捨てきれないでいた。スコットランド帰国後手紙を受け取り、彼が友人の姿を見たのと同日の 1799 年 12 月 19 日に、友人がインドで死去したことを知ったという (1862 年 10 月 16 日の後日追記)。後日記でブローアムは、怪奇現象や奇跡と見える幽霊話にも説明はつけられるとしている (“I believe every such seeming miracle is, like every ghost story, capable of explanation.”)。

「津田君」の怪異現象に対する態度は、怪異を説明のつかない現象だとするのではなく、科学的に説明可能であるとするものである。怪異を怪異に見せかけているのは、それを合理的に説明する原理がいまだ知られていないからに過ぎない。彼は、軍人の妻が息をひきとったちょうど同じ時間に、夫の懐中鏡に妻の姿が映ったという不思議について、ブローアムを参照して「近頃じゃ、有り得ると云う事だけは証明されそうだよ」と述べ、最新の知識に基づけば、怪異の現実性は証明可能なものであるとしている。この態度は前述のブローアムと共通するところである。「津田君」は、一見非合理的な超常現象と見えるものも、脳科学や化学変化で説明可能だと考えている。「遠い距離において、ある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的变化を起こすと……」(103)と「津田君」がつぶやくとき、距離的に隔絶したところにいる、ある人と別の人との脳細胞が「化学」的に感応して、物理的にはそこに存在しないはずの人物がそこにいるかのように感知されることがありうるというのが、「津田君」の考え方であろう。それが脳細胞の「化学的变化」の働きがもたらす結果である以上、非合理的な超常現象と見えるものは、実際には「化学」「科学」の範疇を超えた超常現象ではない。超常現象と見えるものを、先端の科学知識で説明しようとする「津田君」は、日露戦争中の「奇瑞異変其他不可思議」を収集し、分類しようとした井上円了の妖怪研究会の、正確な同時代人である。井上円了の妖怪研究会については後述する。

ここで、「余」と「津田君」の関係を二項対立的に把握することができる。まず、「余」が法学士で立身出世、新時代の官僚、常識人として登場する人物であるとしたら、「津田君」は文学士で高等遊民、貧乏士族、知識人として位置づけられている。そして、この二項対立は、主に法学士「余」の内面によって明らかになるのであるが、ここで注目したいのは、この二項対立の発端ともなった第三項の存在である。その第三項とは、これから「余」が帰るところで「余」を待っているはずの「迷信婆」である。

「迷信には驚いた。何でも引き越すと云ふ三日前に例の坊主の所へ行つて見て貰つたんださうだ。すると坊主が今本郷から小石川の方へ向いて動くのは甚だよくない、屹度家内に不幸があると云つたんだがね。(中略)其上若い女に祟ると御負けを附加したんだ。さあ婆さん驚くまい事か、僕のうちに若い女があるとすれば近い内貰ふ筈の宇野の娘に相違ないと自分で見解を下して独りで心配しているのさ」(中略)「それを心配するから迷信婆々さ、あなたが御移りにならんと御嬢様の御病気がはやく御全快になりませんか是非此月中に方角のいゝ所へ御転宅遊ばせと云ふ訳さ。飛んだ預言者に捕まつて、大迷惑だ<sup>151</sup>」

「迷信婆」と呼ばれる女性は、「坊主」の占いで、「余」が方違え転居を行わない限り、婚約者の病気が快癒しないと聞き、「余」に転宅を勧める。ここの婆さんは『坊ちゃん』の清の前身ともいわれる人物で、清がそうであるように、「余」の面倒を見ながら「余」の成功を願い、たえず「余」に前近代の価値を想起させる役目を持っている<sup>152</sup>。『坊ちゃん』と違うところと言えば、婆さんが主張する前近代の価値が迷信として扱われることであろう。占いだけではなく、毎朝梅干に白砂糖を懸けて食べるのが疫病よけのまじないだと信じ、犬が遠吠えをすると

---

<sup>151</sup> 夏目漱石、前掲書、92、93、95 頁。

<sup>152</sup> 坊ちゃんと清が想像していた未来、つまり坊ちゃんが官僚になって立派な家を買って一緒に暮らすことを「余」と「迷信婆」はすでに手に入れているともいえよう。

不吉が起こる<sup>153</sup>と心配する「迷信婆」の話を「余」は全面的に否定するのである。常識人の「余」にとって迷信は撲滅しなければならない対象にすぎない。迷信撲滅は明治の時代精神でもあったが<sup>154</sup>、「琴のそら音」が発表された 1905 年はその転換期とも言える。

近代合理主義に反するものとして扱われてきた迷信、怪談などの類が井上円了(1858—1919 年)の活躍もあって科学の一種として認識され始めたのがこの時期である。その社会的な変動を反映しているのが、先に述べた「余」と「津田君」の会話である。また、1905 年は日露戦争の年であり、ちょうど「琴のそら音」が発表された 5 月は勝戦がある程度見えてきた時期でもある<sup>155</sup>。西洋に対する政治的・文化的な劣等感が解消される契機となった日露戦争について、漱石自身も精

---

<sup>153</sup> 犬の遠吠えに関する俗信は日本全国に広がっている。データベースれきはく「俗信データベース(動植物編)」を参照(<http://www.rekihaku.ac.jp/doc/t-db-index.html> 最終閲覧日 2015 年 11 月 18 日)。つぎの例が挙げられている。

犬が遠吠えすると泥坊がはいる。(富山県) 犬が夜遠吠えするときは死霊を見たときである。立止まって悲しそうに泣く方向にある家は注意すべきである。(沖縄県) 家の後方で犬が吠えたら病人が出る。(沖縄県) 犬の遠吠えは不吉な知らせ。(福岡県) 犬が遠吠えをすると、人が死ぬ。(兵庫県)

<sup>154</sup> 延広真治「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』」(『国文学 解釈と教材の研究』37 巻 9 号、學燈社、1992 年 8 月、110 頁)は、迷信撲滅を目指した明治の時代風潮について、つぎのように述べている。「幽霊を表向き否定せざるを得なかったのは、文明開化のためであるが、これは、日本人の心を少なからず荒廃させた。若松県官は殺生禁断の淵に網を入れ、奈良県会は春日の神鹿を洋銃の的とし、京都府は宇蘭盆会・地藏盆を謬説妄誕として禁じ、敦賀県では無用を以て有用を助くべく、石仏を敷台・靴脱ぎに転じ(石田一良「明治開化期と市民文化の成立」、『開国百年記念 明治文化史論集』)、東京府は明治七年、神仏分離に反したとして、お岩稲荷の神体を没収(「明治世相篇年辞典」)」

<sup>155</sup> 日露戦争中の重要な出来事を列記すれば、つぎのようになる。3 月 10 日奉天占領(陸軍記念日)、4 月 8 日閣議、韓国保護権確立を決定する、4 月 22 日日露戦争の戦没者 28,999 柱を靖国神社に合祀する、5 月 1 日平民社でメーデー茶話会、5 月 27 日日本海海戦に大勝(海軍記念日)、5 月 28 日日本海海戦にロシア艦隊全滅。小森陽一、成田龍一編「日露戦争関連年表」『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店、2004 年、238—253 頁を参照。

神の勝利だと評したことがあり<sup>156</sup>、日本の文学史においては怪奇現象を扱ったものを含めて日本の古典を本格的に再評価するようにもなった。もちろん怪談に限って言えば、文化的劣等感解消の土台を作ったものとしては漱石の東京帝国大学英文科前任でもあったラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn、1850—1904 年)の『Kwaidan』(1904 年)の存在を指摘しなければいけないだろうが、本稿では「琴のそら音」を中心にしてハーンについては言及しないことにする。ただし、明治になって蔑視されてきた怪談を取り上げてその味方を自任したハーンのように、「琴のそら音」において「津田君」も「迷信婆」の味方となっていくことは注目に値するだろう。白砂糖を懸けて梅干を食べる習慣に対して日本中どこの宿屋に行っても朝に梅干を出すという点から「成程夫は一理あるよ、凡ての習慣は皆相応の功力があるので維持せらるゝのだから、梅干だって一概に馬鹿には出来ないさ」と評価する「津田君」は、「迷信婆」が婚約者の健康を心配して「余」に忠告するように、インフルエンザだと聞いて低い声で「注意したまへ」と言うのである。これに対して「余」は「なんて君迄婆さんの肩を持つた日にや、僕は愈主人らしからざる心持に成つて仕舞はあ」と反発する。

ここで「余」が「愈主人らしからざる心持[引用者注：下宿を出て一家の主人になった者にふさわしくない気持ち]」になった理由を考えるためには、「余」がなぜ「津田君」を訪問したかを明らかにする必要がある。「余」は表面上「津田君」と追憶を共有したくて来たように見える。

---

<sup>156</sup> 該当箇所はつぎの通り。「力の上の戦争に勝つたと云ふばかりではなく、日本国民の精神上にも大なる影響が生じ得るであらう(中略)サ、かうなつて来ると文学の方面にも無論この反響は来るのである、今まで西洋には及ばない、何でも西洋を真似なければならぬと、一も二もなく西洋を崇拜し、西洋に心酔して居たものが、一朝翻然として自身自覚の途が啓けて来ると、その考も違つて来る、日本はドコまでも日本である、日本には日本の歴史がある。日本人には日本人の特性がある、あながちに西洋を模倣するといふのはいけなぬ、西洋ばかりが模範ではない、吾々も模範となり得る、彼に勝てぬといふことはない、斯う考へが付て来る。」夏目漱石「戦後文界の趨勢」『漱石全集 第 25 巻』岩波書店、1996 年、108 頁。この論考が『新小説』に発表されたのは、「琴のそら音」発表 3 ヶ月後の 1905 年 8 月である。

「珍しいね、久しく来なかつたじゃないか」と津田君が出過ぎた洋燈の穂を細めながら尋ねた。(中略)この正月に顔を合せたぎり、花盛りの今日まで津田君の下宿を訪問した事はない。

「来よう／＼と思いながら、つい忙しいものだから――」

「そりあ、忙しいだらう、何と云つても学校にいたうちとは違ふからね、此頃でも矢張り午後六時迄かい」

「まあ大概その位さ、家へ帰つて飯を食ふとそれなり寐てしまう。勉強所か湯にも碌々這入らない位だ」と余は茶碗を畳の上へ置いて、卒業が恨めしいと云ふ顔をして見せる<sup>157</sup>。

「余」は「卒業が恨めしいと云ふ顔をして見せる」のであって、実際学校にいた頃に戻りたいと念願しているとは思われない。「余」が「津田君」の下宿を訪問して確かめたいのは、二人が共有する昔の価値と二人の差異を明らかにする今現在の価値、両方である。「余」が確認しようとする今現在の価値とは、自らずっと主張するように、忙しい近代人としての自分にほかならない。だからこそ、「余」はその対蹠点として意図的に「迷信婆」の話を持ち出すのである。

しかし、科は違っても自分と一緒に近代の価値を共有しているはずの「津田君」が「迷信婆」の肩を持つと「余」のアイデンティティーは揺らぎ始める。以上の過程を作中の叙述順によって纏めると以下のようなになる。

まず、「余」が「津田君」の下宿を訪問する。この訪問の目的は、近代人としてのアイデンティティーを共有し、確認するためである。そして婆さんの話が持ち上げられる。「余」によって「迷信婆」と表現されているように、彼女は近代人としてのアイデンティティーを確認しようとする「余」の対蹠点に存在する人物であり、前近代の表象とも理解することができる。その後、「津田君」が幽霊話を持ち出す。ここで、「津田君」は近代の科学技術によって前近代の迷信(怪異現象)が肯定される例として、日露戦争の戦地にある夫の元に、妻の幽霊が訪れた話を聞かせてくれる。「余」は「迷信婆」の話を「津田君」と共有すること

---

<sup>157</sup> 夏目漱石、前掲書、87 頁。

で、確固たる近代人としての自分を再度確かめたかったのだが、「津田君」は日露戦争と関連した幽霊話を通して「余」の意図を見事に裏切ることになったのである。結局、「余」は最初の意図とは違って、不気味な不安感だけを持って帰路につく。「余」が近代人としてのアイデンティティーの危機を実感するのは、これからのことである。次節では、「余」が帰路で死の恐怖を経験しながら、不気味な不安感が増幅していく過程について考察していく。

### 第3節 帰路で経験する死の恐怖と愛の高まり

「津田君」が「よく注意したまへ」と聞かせてくれた話は、「余」が婚約者の健康について深刻な不安を感じ始める契機であった。生死の境を越えて夫への純愛を貫いた軍人妻の幽霊談を聞いたことで、その女性と同じ病(インフルエンザ)を患う婚約者が、死に至る可能性、婚約者の死(愛の消滅)という恐ろしい想像へと発展するのである。婚約者の健康に十分注意するようにという「津田君」の忠告に「余」は、「必ず魂魄だけは御傍へ行って、もう一遍御目に懸ります」と誓い、幽霊となって夫の懐中鏡に姿を現した軍人の妻とは異なり、自分の婚約者は「万一の事がありましたらきつと御目に懸りに上りますなんて誓は立てないのだから」大丈夫だろう、いいかえれば婚約者と自分とのあいだに、軍人とその妻のあいだにおけるような熱愛は存在しないから、かえって婚約者の生命は安心だろうと「洒落」に紛らわせようとするが、「心の中は何となく不愉快であつた」(104)。

「津田君」が一度喚起した死は、「余」を不安にし、この不安は「余」の帰路で絶頂に至る。「余」は帰途でいくつかの死に関係した出来事に遭遇し、怪談めいた体験をする。

夜の11時、「津田君」の下宿を出た「余」は帰路の途中、「今夜はどうしても法学士らしくない」自分を感じながら、小石川の極楽水に至る。極楽水は「余」



にとってそこ自体が「いやに陰気な所」であるが、空家になった長屋<sup>158</sup>をみて「余」はまた死について考え始める。

貧民に活動はつき物である。働いておらぬ貧民は、貧民たる本性を遺失して生きたものとは認められぬ。余が通り抜ける極楽水の貧民は打てども蘇み返る景色なきまでに静かである。——実際死んで居るのだらう<sup>159</sup>。

「余」の認識において、貧民(労働者)は活動(労働)する者であり、働かない、即ち「余」のように忙しくない貧民は死んでいるのと同様である。もちろん貧民だって働かない権利、労働を拒否する権利はあるのだが、近代人、そして常識人の「余」にとってそれは死に等しいものである。

乳飲子の棺桶を担っていく黒い着物をきた男二人は高くも低くもない声で、ただし「夜が更けて居るので存外反響が烈しい」声で、「昨日生まれて今日死ぬ奴もあるし」と言う<sup>160</sup>。

「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」と余は胸の中で繰り返して見た。昨日生まれて今日死ぬ者さへあるなら、昨日病気に罹つて今日死ぬ者は固よりあるべき筈である。二十六年も娑婆の気を吸つたものは病気に罹らんでも充分死ぬ資格を具えて居る。かうやつて極楽水を四月三日の夜の十一時に上りつゝあるのは、ことによると死にに上つてゐるのかも知れない。——何だか上りたくない。しばらく坂の途中で立つて見る。然し立つているのは、殊によると死にに立つて居るのかも知れない。——また歩行き出す。死ぬと云う事が是程人の心を動かすとは今までつい気がつかなんだ。気がついて見ると立つても歩行いても心

---

<sup>158</sup> 日露戦争による景気不況を示唆しているものと考えられる。支配階級の霸権的な欲望によって始まった日露戦争が当時の平民たちに経済的な苦痛を与えたことについての問題意識を間接的に表現したものだろう。

<sup>159</sup> 夏目漱石、前掲書、105 頁。

<sup>160</sup> 「津田君」の場合、「インフルエンザ」は高い声で、「よく注意したまへ」は低い声であった。

配になる、此様子では家へ帰つて蒲団の中へ這入つても矢張り心配になるかも知れぬ。何故今迄は平気で暮して居たのであろう。考へて見ると学校に居た時分は試験とベースボールで死ぬと云ふ事を考へる暇がなかつた。卒業してからはペンとインキとそれから月給の足らないのと婆さんの苦情で矢張り死ぬと云ふ事を考へる暇がなかつた<sup>161</sup>。

昨日生まれて今日死ぬこともあるという死の恐怖を通して「余」が悟ったのは、死がいつもそばに存在しているという自明な事実である。しかし、忙しい近代人としての「余」はこのような考えに耽る暇がなかつた。「余」にとって死は、近いところに存在しながらも忘れてきたものであり、「余」は坂に立ちながら、その瞬間、ようやく死を認識するのである。

生と死の区分が不分明になる境界(異界)としての坂は以後にも続いて登場する。切支丹坂へ至っては、前にみて笑った「日本一急な坂、命の欲しい者は用心ぢや／＼」という張札をみて笑えなくなる。坂の上に立っている「余」にとってその文句は「聖書にでもある格言」のように思われるのである。

この作品において、生と死の境界として登場するのは日露戦争の戦地としての満州と坂、この二つであると言える。満州は「津田君」の話において、夫を愛する妻の幽霊が現れる空間になるのだが、戦地という側面から考えて満州が生と死が共存したところであつたことも言うまでもなからう。

「余」にとって婚約者はいつも一緒にいるはずの愛しい存在であるはずだが、インフルエンザを通して少しずつ病者のイメージが強くなり、遂には死へと結びつけられる。死がいつもそこにいるという当然の事実を今まで忘れていたものである以上、死と結びつけられた婚約者もまたもう親密な(ずっと一緒にいる)存在ではなくなる。「津田君」の幽霊話によって、「余」の内面において婚約者は一度日露戦争という死の空間へ所属された存在として認識されたともいえよう。

「琴のそら音」が発表された 1905 年 5 月の 2 ヶ月前に東京日日新聞に井上円了の妖怪研究会関連記事が掲載される。井上円了といえ、仏教の近代化を提唱

---

<sup>161</sup> 夏目漱石、前掲書、106—107 頁。

し、その一環として妖怪・怪異現象などを合理的に説明しようとした明治の妖怪博士である。円了がその手段として取り入れたものが心理学であり、哲学館であった。心理学の研究として幽霊の本を読んでいる「津田君」はこの円了をモデルにしたとも言えるだろう。以下に引用する『東京日日新聞』1905年3月29日の記事は当時の怪異現象関係の研究が日露戦争と出会う場面である。

#### 妖怪研究会

妖怪に就て多年研究中なる彼の井上円了氏は今回の戦争中に定めて種々の奇瑞異変其他不可思議の出来事あるべきを察し此のたび汎く其材料を蒐集する由其重なる項目は第一感通(例へば戦地にて死傷せし時に其血縁あるものに前知せ又は夢知らせ等ありたる場合及び郷里又は家族中に異変ありたる時に戦地にて感知したる場合の如きを云ふ)第二前兆(戦死又は負傷の前に本人の身上又は見聞上に兆候ありし場合を云ふ)第三奇運(世に所謂天助神護に依りて万死に一生を得たるの類例へば携帯せる御守が弾丸を隔つて負傷を免れたるが如きを云ふ)第四奇瑞又は異変(戦時中に普通の道理を以て解し難き奇怪を現象に接近したるを云ふ)等にて右実験の人人は其詳細を認めて小石川区原町哲学館内妖怪研究会へ宛てゝ寄送せらるべく其事項を書冊に記載したる場合には此れを其寄贈者に進呈すべしとなり<sup>162</sup>

新聞というメディアが怪異現象と日露戦争を結合させた記事を本格的に量産するのは翌年の1906年からであるが<sup>163</sup>、以上の記事が1905年3月に載せられたことは、すでに社会全般に日露戦争と関連する怪談が盛んに流布された事実を証するものである。漱石作品における「津田君」の幽霊話(上記引用中の「郷里又は家族中に異変ありたる時に戦地にて感知したる場合」に相当)もおそらく当時人口

---

<sup>162</sup> 湯本豪一『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009年、482頁。

<sup>163</sup> 1905年の時点でも、戦死者の写真から血が出る(『神戸新聞』3月19日)という話や、日本海海戦を予言した老人の話(『新愛知新聞』6月2日)が見られるが、その露出頻度において1906年のものとは比較にならない。1906年からは日露戦争を表象するような船幽霊の話が本格的に登場し始める件については、第4章を参照。

に膾炙された怪談の中の一つから発想を得たものであるという可能性が考えられる。

このように、日露戦争時の怪談増加は、近代戦争技術の発展とメディア速報の発達などの、近代テクノロジーによってもたらされたものであるという側面がある一方では、「琴のそら音」で言及された怪談の構造が日本文学の古典と類似しているところもあることを指摘しなければならない。例えば、三島由紀夫が日本怪談最高の傑作と賞賛した<sup>164</sup>上田秋成の『雨月物語』の「菊花の約」と「浅茅が宿」をあげることができる。信義を守るために自殺し、自ら幽霊になって逢いにいくという「菊花の約」と、戦地に行った夫を待ち続け、死んだ後にも幽霊となって夫の帰りを待つという「浅茅が宿」のテーマがこの作品の幽霊話にも見えてくるのである。「津田君」の話の軍人の妻は若し自分が病気で死んだとしても「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、もう一編御目に懸ります」と夫の出征の前に誓い、その誓いを守るかのように幽霊となって満州へ行く。実際、夏目漱石蔵書目録(東北大学漱石文庫データベース)によると、漱石が1893年版の『雨月物語』に夏目金之助と署名をして所々書き入れながら読んだことがわかる<sup>165</sup>。

また、三遊亭円朝の『牡丹灯籠』との関連も見逃してはいけないだろう。「余」が心配し続けるのは婚約者の死であるが、この婚約者の存在を考える時に彼女の名前が「露子」であることは重要である。露という単語から「昨日生まれて今日死ぬ」命の虚しさを連想することも可能だが、水川隆夫によってすでに指摘があるように<sup>166</sup>、漱石が円朝の怪談落語を楽しんだとすれば、ここで円朝の『牡丹灯籠』との連関性も考えてみる必要があるだろう。周知の通り、『牡丹灯籠』のヒロインの名前は「お露」である。それだけではなく、死んだ女の霊魂が生きている男のところに逢いに来るという点も「琴のそら音」における津田君の話と共通している。この作品において「露子」という名前が初めて明らかになる

---

<sup>164</sup> 三島由紀夫「雨月物語について」『決定版 三島由紀夫全集 第27巻』新潮社、2003年、211頁。

<sup>165</sup> 東北大学漱石文庫データベースを参照([http://db.library.tohoku.ac.jp/infolib/meta\\_pub/CsvSearch.cgi](http://db.library.tohoku.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi) 最終閲覧日2015年12月3日)。

<sup>166</sup> 水川隆夫『漱石と落語—江戸庶民芸能の影響』彩流社、1986年。

のは、「余」が帰路において最後の坂に至ったところである。その前までに、彼女は「未来の細君」「御嬢さん」と呼ばれるだけで、「露子」という名前はずっと隠されてきた。茗荷谷の坂を上ろうとする「余」は、その坂の中途に当たる位置で「赤い鮮かな火」を見る。

是は提灯の火に相違ないと漸く判断した時それが不意と消えて仕舞ふ。此火を見た時、余ははつと露子の事を思い出した。露子は余が未来の細君の名である。未来の細君と此火とどんな関係があるかは心理学者の津田君にも説明は出来んかも知れぬ。然し心理学者の説明し得るものでなくては思ひ出してならぬとも限るまい。この赤い、鮮かな、尾の消える縄に似た火は余をして慥かに余が未来の細君を咄嗟の際に思ひ出さしめたのである。——同時に火の消えた瞬間が露子の死を未練もなく拈出した。額を撫でると膏汗と雨でずる／＼する。余は夢中であるく<sup>167</sup>。

心霊現象の火の玉を思い起こさせる「赤い鮮かな火」を「余」が提灯の火であろうと判断したとたん、その明かりが消える。その瞬間、「余」は「露子」という名の婚約者のことを思い出す。「余」は、このような連想反応は、心理学者である「津田君」にも説明できないだろうと推測している。その連想反応は、心理学者には説明できないもの、言い換えれば近代科学の知によっても説明できないもの、「津田君」のいう「化学的变化」によっても合理的に説明できないものであるとしても、現に「余」のところに起きていることは間違いのない事実であり、「余」は、「心理学者の説明し得るものでなくては思ひ出してならぬとも限るまい」として、「心理学者」の有する知的権威を相対化している。

「余」の連想反応が「津田君」の「心理学」によって説明することができないものであるとしても、前近代から引き継がれた怪談の伝統から、それは説明可能である。「余」が、消える灯から「露子」という婚約者の名前を思い出すときに、念頭に浮かべていたのは、『牡丹灯籠』であろうと判断してよい。読者の側

---

<sup>167</sup> 夏目漱石、前掲書、108—109 頁。

からしても、提灯の火というところから突然「露子」の名前が出された時に『牡丹灯籠』を連想することは無理ではないだろう。

ここで『牡丹灯籠』の、愛と怪奇現象に関係するプロットと『琴のそら音』の類似性を確認すれば、つぎのようになる。萩原新三郎に焦れ死したお露が幽霊となり、「灯籠」をもった乳母のあとについて「カランコロ／＼<sup>168</sup>」と下駄の音をさせて、夜な夜な新三郎を訪れる。お露の霊が主人公に取り憑く『牡丹灯籠』で、主人公の萩原新三郎は、お露が毎夜持ってくる牡丹燈籠を墓場で見つける<sup>169</sup>ことで、お露が幽霊であることを悟る。灯籠(提灯)は、恐怖を最高に高める機能を果たしながら、新三郎に死を喚起させる道具でもある。『琴のそら音』の「余」の見た提灯は「盆灯籠の秋風に揺られる具合に」揺れ動いていたが、これは『牡丹灯籠』のお露の幽霊が初めて新三郎を訪れるのが、「盆の十三日<sup>170</sup>」であることを想起させる。

このように、消えがちな提灯から婚約者である「露子」を思い出す「余」の心理メカニズムは、提灯と「露子」のあいだに、『牡丹灯籠』を配置してみると、理解可能となる。「赤い、鮮かな、尾の消える縄に似た火」(108)は、「余」に『牡丹灯籠』の提灯(灯籠)を思い起こさせている。その人魂が消えるとき、「余」は婚約者「露子」の死を予感して怯える。

提灯から「露子」を思い出して困惑する「余」は、提灯という「因」から「露子」という「果」にいたるこの連想反応のことは「津田君」も説明できないだろうと推測している。それは「余」が自ら語っているように、心理学者の説明できないもの、言い換えれば近代科学の知によっても説明できないものであっても、『牡丹灯籠』(およびそれが踏襲する『剪灯新話』の「牡丹灯記」など)の、近代以前からアジアにおいて受け継がれてきた怪談の系譜を親しく知るもの、愛と執念、因果と怪奇物語に関するリテラシーを備えたものにとっては、ごく自然な連想反応であることを前提として、漱石がこの場面を設定していると理解できる。

---

<sup>168</sup> 三遊亭円朝『牡丹灯籠』岩波書店、1955年、60頁。

<sup>169</sup> 三遊亭円朝、前掲書、82—83頁。

<sup>170</sup> 三遊亭円朝、前掲書、58頁。

ここで、怪奇現象と考えられるものについての、この作品における代表的な三種の反応のありかたを整理し、そのうえで、作品の後半部分で、提灯の火から『牡丹灯籠』の灯籠の灯りを、そこから婚約者「露子」の死の危険を連想する「余」の心的メカニズムのもつ意味合いを再点検してみよう。まず、犬の遠吠えや占い、幽霊などを信じる「迷信」（「迷信婆々」に代表される）、「常識」（「刻下の事件を有の盡に見て常識で捌いて行くより外に思量を廻らすのは能はざるよりも寧ろ好まざる」、作品の前半における「余」の立場）、旧習や迷信をも高度な「心理学」や「化学」で説明可能とする「津田君」の立場とがある。「迷信婆々」とのやりとりや、戦地の夫に会いにいった妻の幽霊についての「津田君」の話を聞いたの「余」の、怪奇現象とされる現象に関する考え方は、作品当初の「常識で捌いて行くより外に思量を廻らすのは能はざる」ことに自負を覚えていた態度とは、顕著に異なるものとなっている。作品後半の「余」の超常現象に対する態度は、単純に「津田君」に代表される知のありかたに全面的に屈服するのではなく、むしろそれを相対化する可能性を胚胎したものであったことは、すでに確認したとおりである。「余」は、「迷信婆々」の信念のありかたに追従することなく、自分のかつての「常識」の立場に回帰するのではない。

つぎに、「余」が、提灯の灯りから婚約者の名前・露子と死を連想することの背後には、自分の婚約者である露子は、『牡丹灯籠』のお露が新三郎を愛したほどには、自分を愛してはいないのではないかという不安がはたらいていたという仮説をたててみよう。「津田君」の語る軍人の妻と『牡丹灯籠』のお露は、死後、幽霊となっても愛する男性を訪れるほどに、夫・恋人を熱愛している。「津田君」の語る軍人の妻の話には貞節美談怪談の色彩が強いが、『牡丹灯籠』のお露には、狂的な執着という性質が強いという差はある。『牡丹灯籠』の新三郎は「惚れられるものに事を替えて幽霊に惚れられる」「因果」な事態に遭遇しているが、彼を救おうとする良石和尚が諭しているようにこの幽霊は「口惜しくて崇る幽霊ではなく、只恋しい／＼と思う幽霊<sup>171</sup>」である。新三郎を思うあまり「三世も四世も前から、ある女がお前を思うて生きかわり死にかわり」して新三郎に

---

<sup>171</sup> 三遊亭円朝、前掲書、85 頁。

「附纏う」もので、新三郎とお露のあいだには「遁れ難い悪因縁」がある。新三郎の死のありさまも「虚空を掴み、齒を喰いしぼり、面色土気色に変わり、よほどな苦しみをして死んだもの／＼如く<sup>172</sup>」であったが、この苦悶に満ちた死は、お露の新三郎に対する強い恋着の結果であるという点においては、死をも超えた愛の莊嚴性を帯びたものとも言える（「其の脇へ髑髏があつて、手とも覺しき骨が萩原の首玉にかじり付いており」）。それに対して、「余」が、「津田君」の話にあった、幽霊となって夫の懷中鏡に姿を現した軍人の妻とは違い、婚約者と自分とのあいだに、軍人とその妻のあいだにおけるような熱愛は存在しないと考えていたと推測できるのと同じく、軍人の妻や、『牡丹灯籠』と比較して、自分と婚約者との関係は、微温的なものでしかありえないこと、「露子」が熱烈に自分を愛しているとは考えられないことを「余」は認識したと考えてよい。

「あの火だ、あの火だ」（109）とつぶやきながら「余」が坂を駆け上がるとき、それは直接にはその直前に出会った巡査の「赤い火」を指している。足元の悪さのことをいった「悪るいから御気を付けなさい」（109）という巡査のことばによって、「津田君」の「注意せんといかんよ」のことばと、先だって目にした「赤い鮮かな火」、そして『牡丹灯籠』の提灯が心に蘇ってきたのであろう。「露子」の死の不安からくる恐怖が、彼を彼女への愛で悩乱させかけている。

不安な一晚を経て、「余」は「露子」の家に駆けつける。彼女はすでに病から快復しており、「余」の「昨夜の心配は紅炉上の雪と消え」た<sup>173</sup>。「余」が自宅に

---

<sup>172</sup> 三遊亭円朝、前掲書、183 頁。

<sup>173</sup> この後、「余」は「未来の細君の歓心を得んがためだと云われても構わない」と出かけた床屋で、床屋主人と客とのあいだの、怪談と神経をめぐる会話を耳にする。本論文第 1 章で論じた通り、怪奇経験を「神経」の誤作用に帰する論議が明治期に盛んであった。『真景累ヶ淵』と「琴のそら音」における神経論の比較研究には、より広範な調査による研究が必要なため、ここでは「余」が聞く怪談と神経をめぐる会話の概略を示すに止める。「幽霊だの亡者だの」は「電気灯のつく今日」にあるはずがないとする客のひとりに対して、床屋主人が「みんな神経さ。自分の心に恐いと思うから自然幽霊だって増長して出たく」なるのだと応じる。別の客が読んでいた『浮世心理講義録有耶無耶道人著』では、狸が人を「婆化す」というのは日本固有の「催眠術」であるのに、これを迷信に過ぎぬとする一方で、西洋由来の催眠術を崇めるのは「西洋心酔の結果」であるか



帰ると「露子」が来ている。「昨夕の事を、みんな婆やから聞いてよ<sup>174</sup>」と笑い崩れ、場は陽気な雰囲気で包まれる。

「余」は「気のせいかその後露子は以前よりも一層余を愛するような素振に見えた」としている。これは、愛の喪失の恐怖を経験した「余」の「露子」に対する愛の高まりを裏返しに表現したもの、あるいは「余」の願望を投射したものであろう。

「余」の体験談は、「法学士の知らぬ間に心理学者の方では幽霊を再興して居る」といわれた「津田君」の著作で紹介されることになる。

当夜の景況を残りなく話したら夫はいゝ材料だ僕の著作中に入れさせて呉れろと云った。文学士津田真方著幽霊論の七二頁にK君の例として載っているのは余の事である<sup>175</sup>。

「余」の経験には実際には幽霊は登場せず、厳密な意味での怪奇現象は起きない。従って「津田君」の「幽霊論」では、「余」の経験が与えた影響が科学的、心理学的に研究されているものと理解される。

「津田君」の幽霊譚から始まった「余」の不安は、帰路で遭遇した葬儀の行列や赤い火によって増幅され、「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」(106)という言葉を繰り返して想起することで死の恐怖へと繋がる。そして、死の恐怖が絶頂になった時に、「余」が露子という婚約者の名前を読者に明かすのは、偶然ではない。この時、「琴のそら音」は『牡丹灯籠』という怪談を召喚する。死によって新三郎とお露の愛が破壊されてしまう『牡丹灯籠』と違って、婚約者の露子が「余」を一層愛するようになったというハッピーエンドの「琴のそら音」だが、漱石は死によって愛が破壊される様相を「趣味の遺伝」という作品を通して描い

---

ら反省を求めたいと力説する狸が登場する。この議論を聞いていた「余」は、「昨晚は全く狸に致された訳かな」と考える。夏目漱石、前掲書、122—126 頁。

<sup>174</sup> 「余」は軍人の妻の幽霊の話を「婆や」に語っていないため、ここで「露子」が「婆や」に聞いたという「昨夕のこと」に、この話は入っていないと考えてよい。

<sup>175</sup> 夏目漱石、前掲書、127 頁。

ている。次節では、「趣味の遺伝」を「琴のそら音」の延長として考察してみる。

#### 第4節 「趣味の遺伝」との関連性

この節では、戦争によって危機に落ちる愛というモチーフが以後「趣味の遺伝」<sup>176</sup>にも見られることを指摘したい。夏目漱石にとって、国家の戦争は個人の愛を危うくするものであり、怪談はその恐怖を適切に表してくれる材料であった。「琴のそら音」においては戦争が喚起する死の恐怖が「余」の愛を強化する。婚約者が自分をもっと愛するようになったというハッピーエンディングの「琴のそら音」だが、『漾虚集』に収められたもう一つの短編、「趣味の遺伝」においての「浩さん」の愛は戦争によって完全に破壊されてしまう。その時また漱石が幻想的な要素を取り入れたことは注目に値するだろう。

「琴のそら音」において死の恐怖が個人の愛を危うくすることにとどまっているというのは、この作品の結末が漱石の作品の中では珍しくハッピーエンディングで終わっているからである。「気のせい」か其後露子は以前よりも一層余を愛する様な素振に見えた」というのは、「余」が「露子」を以前よりもっと愛するようになったとも言え換えることができる。

ここからは、「琴のそら音」と同じく『漾虚集』に収められ、また日露戦争と満州が喚起する死の恐怖について言及した「趣味の遺伝」について述べる。

仮に「琴のそら音」を怪談というならば、「趣味の遺伝」は奇譚である。満州に出征した夫のところへ逢いにいく妻の幽霊や前近代の迷信が重要な要素として取り上げられる「琴のそら音」と違って、「趣味の遺伝」に幽霊が登場することではなく、怪談の雰囲気漂わせる迷信が語られることもない。「浩さん」と「御嬢さん」の奇異で運命的な愛が不可思議な現象として描かれるだけである。しか

---

<sup>176</sup> 『帝国文学』1906年1月号に掲載された短編で、『漾虚集』に収められた短編の中では最後に位置する作品である。ちなみに、『漾虚集』の最初に位置する「倫敦塔」は、「趣味の遺伝」のちょうど一年前(1905年1月)に同じ『帝国文学』に掲載された。

し、彼等の愛を妨げるものとして日露戦争が挙げられているのは、「琴のそら音」も「趣味の遺伝」も同じである。

「趣味の遺伝」は、主人公の「余」が新橋で日露戦争から凱旋した軍隊の歓迎を見て、その感慨から旅順で戦死した「浩さん」のことを思い出した後、その墓がある寂光院で「浩さん」の墓に向かって合掌している美しい女性を目撃する前半と、その女性と「浩さん」の関係を遺伝論に基づいて探偵のように調べていく後半とに分けることができる。「趣味の遺伝」に対する解釈は、この前半と後半、どちらを中心に読むかにかかっている。戦争の凄まじさが映画場面のように描写される前半を中心に考えると、「趣味の遺伝」は漱石の厭戦思想を垣間見ることができる作品であるし、美しい男女の愛が先祖の代から繋がれてきた運命であり、それは遺伝によって可能になったという後半を中心にとすると、「趣味の遺伝」はロマンチックな悲恋の物語になる。

先行研究においても、小宮豊隆以来、恋愛の神秘を中心に論じられていたが、駒尺喜美<sup>177</sup>や大岡昇平<sup>178</sup>に至って漱石の戦争観が問題にされるようになったといわれる<sup>179</sup>。近年では、主に漱石の厭戦意識、反戦意識を表す作品として扱われている<sup>180</sup>。しかし、「琴のそら音」で日露戦争が喚起する死の恐怖が「余」の愛を不安にさせているように、「趣味の遺伝」の愛も日露戦争と強く関係づけられており、愛と戦争を別の軸で考えることはできない。愛があるために戦争の凄まじさが強調され、戦争があるために愛の悲しさが感動を与えるのである。

---

<sup>177</sup> 駒尺喜美「漱石における厭戦文学―「趣味の遺伝」」『日本文学』21 巻 6 号、日本文学協会、1972 年 6 月。

<sup>178</sup> 大岡昇平「漱石と国家意識―「趣味の遺伝」をめぐって」『世界』326 号、岩波書店、1973 年 1 月。

<sup>179</sup> 池田美紀子『夏目漱石―眼は識る東西の字』国書刊行会、2013 年、268 頁。

<sup>180</sup> 水川隆夫の『夏目漱石と戦争』が代表的であるが、「彼ははっきりした反戦論者ではなかったから、戦争には反対しなかった。彼は戦争を、人類の避けることのできない災害であるという風に考えていたようである」（222）と新潮社文庫版の解説で伊藤整が述べているように、漱石に反戦意識があるわけではなくて、ただ失われた人命に対する痛切な感情を作品内に表したとするのが既存の一般論であるように思われる。

漱石自身、この論理を作中で「余」の口を借りて詳しく説明している。「浩さん」の墓の前で「御嬢さん」を見かけた「余」は「死したる人の名を彫む死したる石塔と、花のような佳人とが融和して一団の氣と流れて円熟無礙の一種の感動を余の神経に伝えたのである」と、死と美が融和して与える感動について述べた後、その証拠としてシェイクスピア『マクベス』の「門番の場面」(後述)を取り上げている。本章で先に、『琴のそら音』では、『牡丹灯籠』という怪奇譚についての「余」のリテラシーが「余」の婚約者への愛の深まりの契機となったと論じた。ここでは、『趣味の遺伝』で、英文学関係の学者であると思われる「余」が、「浩さん」と「御嬢さん」の関係を宿命(あるいは「遺伝」)に定められた恋であると信じようとする自分の思考が、いくら世の常識を超えたものであるとしても、そこには一定のリアリティ、少なくともそのように信じたい自分の心理的必然性が存在するのだと主張していく際に、恐怖と怪奇を描いたシェイクスピアの『マクベス』や宿命の悲恋『ロミオとジュリエット』を参照していることに注目する。すでに野谷士<sup>のたに あきら</sup>の指摘にあるとおり、『趣味の遺伝』とシェイクスピア作品、とくに『マクベス』とは関係が深い<sup>181</sup>。本章では野谷の論述を参考にしつつ、『マクベス』が参照される箇所と『ロミオとジュリエット』が参照される箇所を整理し、さらに漱石の「マクベスの幽霊に就て」(1904年)を検討、漱石は文学的想像力の科学からの独立と尊厳を主張しているであることを、証明する。

「死したる人の名を彫む死したる石塔と、花のような佳人とが融和して一団の氣と流れて円熟無礙の一種の感動を余の神経に伝えた」といっても「斯んな無理を聞かせられる読者は定めて承知すまい」と危惧する「余」は、「余は文士ではない、西片町に住む学者だ」と名乗り、墓の石塔と美人の「対照」が自分に強烈な感動を神経に与えたことを「学者的に説明」してやろうという。そこで彼が持ち出すのは、「沙翁」ことウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare、1564—1616年)の『マクベス』(*Macbeth*、推定 1599—1606年)の2幕3場であ

---

<sup>181</sup> 野谷士「超自然の文素—『マクベス』の幽霊から寂光院の美女へ」『漱石のシェイクスピア』朝日出版社、1974年、42—70頁。野谷は「[引用者注：漱石の]蔵書の『マクベス』への書き込み、論文「マクベスの幽霊に就て」、『文學論』中のマクベス論、『趣味の遺傳』その他の作品」(70)を検討している。

る。つぎの引用でのキーワードは「対照」である。マクベスによる王弑逆の恐怖と門番の「たわいのない」妄言との「対照」と、「浩さん」と「御嬢さん」にかかわる「死したる人の名を彫む死したる石塔と、花のような佳人」との「対照」が類比されている。

マクベス夫婦が共謀して主君のダンカンを寝室の中で殺す。殺してしまうや否や門の戸を続け様に敲くものがある。すると門番が敲くは敲くはと云いながら出て来て酔漢の管を捲くようなたわいもない事を呂律の廻らぬ調子で述べ立てる。これが対照だ。対照も対照も一通りの対照ではない。人殺しの傍で都々逸を歌うくらいの対照だ。(中略)それでは何らの功果もないかと云うと大変ある。劇全体を通じての物凄さ、怖しさはこの一段の諧謔のために白熱度に引き上げらるるのである。なお拡大して云えばこの場合においては諧謔その物が畏怖である。恐懼である、悚然として粟を肌に吹く要素になる<sup>182</sup>。

門番の「酔漢の管を捲くようなたわいもない」「諧謔」味にあふれた言動が、王弑逆の「物凄さ、怖しさ」を「白熱度に」引き上げるのだという。

続いて「対照」を通して文学的な感興を一層高くする「諷語」に関する説明がなされる。『マクベス』の恐怖の連続は「惰性」を生む。それを打ち破るのが「門番の狂言」であり、これは「普通の狂言諧謔とは受け取れない」。「酔漢[引用者注：門番のこと]の妄語」は、「諷語」の効果で、王殺しへの「身の毛もよだつほど畏懼の念」を生み出す。恐怖と滑稽の「対照」が生む効果、滑稽な場面がむしろ恐怖の効果を高めるという効果を理解できれば、「浩さん」の墓の前にたつ華やかな若い美人の姿が、日露戦争で悲惨な死を遂げた「浩さん」への悲嘆の憶いを高めることが了解できるはずである、というのが、「余」の論旨である。  
「<sup>じょうだん</sup>雑談の底には啾啾たる鬼哭が聞こえる<sup>183</sup>」のだ。「御嬢さん」の美と「浩さ

---

<sup>182</sup> 夏目漱石、前掲書、216 頁。

<sup>183</sup> 漱石は『文学論』において、門番の場面についてつぎのように述べている。「番卒[引用者注：門番のこと]の狂語の諧謔に陥れるは先に屢述べたるが如し。去れども諧謔は字面に露臥せる尋常の字義に過ぎず。吾人は此劇を読んで此独白に至るの間に於て冥々の

ん」の死が結晶することによって文学的な感動が得られる。「趣味の遺伝」を前半と後半に分けて考えた場合にも、この論理は当てはまる。前半の戦争と後半の愛が対照されることによって、「趣味の遺伝」という作品の全体像が現れるのであって、その一方だけを強調することはそもそも妥当ではない。作者である漱石が、直接「趣味の遺伝」の読み方を読者に提示しているとも言える。

つぎに、「趣味の遺伝」と、シェイクスピア『ロミオとジュリエット』の関係について考えたい。「昔はこんな現象を因果と称えていた」(234)が「二十世紀の文明」(234)の世では、「此問題は遺伝で解ける問題だ」(233)と考えた「余」は、「浩さんの先祖と、あの女の先祖の間に何事かあつて、其因果でこんな現象を生じたに違いない」(235)と推測する。この仮定の証拠を得るために、「余」は「浩さん」の河上家と「御嬢さん」の小野田家が属した旧紀州藩の古老の話を聞きにでかけ、「浩さん」の父・才三と彼に恋した小野田の娘の悲恋を知る。「結婚の日取り迄極める位に」(240)順調に進んでいた縁談であつたが、娘に家老の子息が横恋慕、君主の指示で娘は家老子息に嫁がされる。「浩さん」と「御嬢さん」はそれぞれ、先祖によく似た容貌をしていた。

「余が平生主張する趣味の遺伝と云ふ理論」(242)とは、「父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てゝ脳中に再現する」(242)というもので、科学や一般的な意味での遺伝の論理とは整合性にとぼしいものとも見える。「脳」に

---

裡既に牢たる着眼点を養へり。此着眼点を得たる吾人はかく馴致されたる惰性により劇中の事件を大小一様に解釈し去らんとす。而して此場合に於る惰性とは悽愴の氣、畏怖の念に外ならず。悽愴の氣に居り、畏怖の念に往するものが此諧謔に接したる時、此諧謔の表面に露出せる字義を見て、字義の儘に解釈すべきか、又は惰性の命ずる所に従つて内部の消息を求むべきか。もし内部の消息を求めるとせば滑稽の裡に何物を点ずべきか。点じ得たるものは悽愴の氣畏怖の念ならざるべきか。(中略)番卒の科白は正意よりすれば明かに滑稽なり。然れども反意に其義を酌めば滑稽の対極に潜む一団の情緒に過ぎず。此滑稽のうちに鬼氣のそれを含むは云ふを待たず。而して其鬼氣は全劇を貫いて読者を包圍する精神に外ならざるを以て、突如として番卒の科白を点ずる時、彼等は正意に之を解釈せざるのみか、其反意を探らんとする暇さへなきに、全局の精神は彼等を駆りて此滑稽を凄きもの、腥きもの、怖しきものと感せしむるに至る」(夏目漱石『漱石全集 第14巻』岩波書店、1995年、349—350頁。)

言及されるところは、「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の細胞が感じて一種の化学的变化を起こすと……」(103)一見不可思議と思える現象が起こりうるとした『琴のそら音』『津田君』の理論を彷彿とさせるだろう。「遺伝」「脳」といった近代的科学のこトバを敢えて用いてまで、「浩さん」と「御嬢さん」の愛には必然性という意味での「因果」があると信じたい「余」の強い思いが伝わって来る。

累伝説(第1章)、小野小町伝説(第2章)、『牡丹灯籠』(本章)の近代以前の怪奇譚・幽霊譚が、近代以降、迷信の撲滅が目指された時代にあつて、それぞれの歴史的・文化的・政治的な文脈のなかで受容され、変容し、再活用されていくときに働く力学に注目してきた本論文である。ここで特に強調したいのは、通常の意味での科学や原因結果の論理を超越した怪奇現象、迷信、奇譚には、それ固有の論理と合理性があると主張するときに、文学作品が強力な典拠として召喚されていることの重要性である。「余」が、「浩さん」の墓の前にたつ華やかな若い美人の姿が、日露戦争で悲惨な死を遂げた「浩さん」への悲嘆を高める「対照」の働きを弁じるために参照したのが『マクベス』の門番の場面であつた。「浩さん」と「御嬢さん」との「因果」を説明するために、「余」が引き合いに出すのはシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』(*Romeo and Juliet*、推定1590年代制作)である。

余が平生主張する趣味の遺伝と云ふ理論を証拠立てるに完全な例が出て来た。ロメオがジュリエットを一目見る、さうして此女に相違ないと先祖の経験を経験を数十年の後に認識する<sup>184</sup>。

「余」は「父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てゝ脳中に再現する」具体例として、『ロミオとジュリエット』を参照する。「散文的」な「二十世紀」の人間は、『ロミオとジュリエット』について、「一寸見てすぐ惚れる様な男女を捕へて軽薄と云ふ、小説だと云ふ」(242)であろうが、「不思議な現象に逢わ

---

<sup>184</sup> 夏目漱石、前掲書、242頁。

ぬ前なら兎に角」(242)、「浩さん」と「御嬢さん」との「不思議な現象」(と「余」が信じたいもの)に出会った「余」としては、「そんな事があるもんかと冷淡に看過する」態度をどうしても承認できない。

「看過するものゝ方が馬鹿だ」(243)とまでいう「余」である。「ロメオがジュリエットを一目見る、さうしてこの女に相違ないと先祖の経験を数十年の後に認識する」ことが、「浩さん」と「御嬢さん」のケースの前例であるという読解は、もちろん、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の物語に即していえば、正しくない。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』には、「趣味の遺伝」におけるような先祖が果たせなかった愛を、後の世代が果たすという要素はない(「趣味の遺伝」においても、それは「余」の願望の投影に留まる)。

「余」は英文学関係の学者であると想定される。その専門家に、彼自身英文学の最高権威であった漱石が、「父母未生以前に受けた記憶と情緒が、長い時間を隔てゝ脳中に再現する」ことを明かす根拠として、『ロミオとジュリエット』を挙げさせている理由はなんだろうか。「余」の『ロミオとジュリエット』に関する明らかな、あるいは意図的な誤認はおそらく、『ロミオとジュリエット』と本章で先に検討した『牡丹灯籠』などの、近代以前の伝統をひく日本の恋の因果物語、「口惜しくて祟る幽霊ではなく、只恋しい／＼と思う幽霊」、男を思うあまり「三世も四世も前から」、男を「思うて生きかわり死にかわり」男に「附纏う」女幽霊と、愛された男との「遁れ難い悪因縁」を語る文学伝統と、『ロミオとジュリエット』とを混入させた結果であると考えられる。漱石は、このような誤認を行う「余」を、読者の一定の共感を誘う人物として設定することにより、『牡丹灯籠』や『ロミオとジュリエット』のもつ、迷信撲滅や近代的科学思想を超えた、文学的想像力の強度を示そうとしたのだ<sup>185</sup>。

---

<sup>185</sup> 「趣味の遺伝」で『ロミオとジュリエット』が参照された場面がもうひとつある(本文で分析している箇所より物語時点において前)(194—195 頁)。日露戦争凱行列を見ようと、「余」は人垣を超えて飛び上がろうとする。そのとき思い出すが、「高等学校時代で練習した高飛の術を応用」して、高塀に囲まれた麻布の屋敷の内部を覗こうとした去年の経験である。高飛の技術で飛び上がり、上半身を塀の上に出して、塀の内側のテニスの場面を瞥見できたが、テニスをしていた女性たちに笑われる。この「滑稽」で「馬鹿げた」記憶から、「余」は『ロミオとジュリエット』でロミオがジュリエットに会った



ここで漱石が『マクベス』を取り上げたことと関連して「マクベスの幽霊に就て」（1904 年）という漱石の論文を参照したい。漱石はここで、「マクベスの見たる幽霊は幻怪とすべきか、又た幻想とすべきか」と自問して次のように答えを出している。

文学は科学にあらず。科学は幻怪を承認せざるが故に、文学にも亦幻怪を輸入し得ずと云ふは、二者を混同するの僻論なりと。去れど文芸上読者若くは観客の感興を惹き得ると同時に、又科学の要求を満足し得んには、何人も之を排斥するの愚をなさざるべし。唯単に科学の要求を満足せしめんが為に詩歌の感興を害するは、是文芸をあげて科学の犠牲たらしむるものと云はざる可からず

186。  
。

科学の尺度で文学を計ることは出来ない、「幽霊」や「幻怪」という要素が文学の感興を惹き得るとしたら、それは積極的に受け入れるべきだというのが漱石の論旨である。

「琴のそら音」の幽霊話というまでもなく、「趣味の遺伝」の愛の遺伝という不可思議な現象も「感興を惹き得る」ための装置である。「マクベスの幽霊に就て」が『帝国文学』で発表されたのが 1904 年で、翌年に「琴のそら音」、1906 年には「趣味の遺伝」が書かれている。「科学は幻怪を承認せざる」と言った 1904 年と違って、漱石はその後、「琴のそら音」や「趣味の遺伝」で幽霊の存在や不可思議な現象の証明を心理学者の津田君と当時の遺伝論に頼りながら科学の論理で説明している。科学までも「幻怪」を承認したのである。

このように、「幻怪」を自由に使って書き上げた作品が『漾虚集』には多数収められている。その中でも「琴のそら音」「趣味の遺伝」は、共通して「幻怪」

---

めにバルコニーをよじ登る場面(2 幕 1 場)を連想する。「余」は「ロメオがジュリエットを見る為に飛び上ったって滑稽にはならない。ロメオ位な所では未だ滑稽を脱せぬと云ふなら余は猶一步を進める」と述べ、日露戦争凱旋を見たいとする気持ちに「滑稽」なところはないかと考える。

<sup>186</sup> 夏目漱石『漱石全集 第 13 巻』岩波書店、1994 年、123 頁。

を通して日露戦争について言及した作品である。「幻怪」という要素が、「琴のそら音」では戦争による死の恐怖を喚起し、「趣味の遺伝」では実ることが出来なかった愛の悲しさを強調する役割をしている。

「趣味の遺伝」で「余」は「浩さん」が「大きな男」「偉大な男」とであると説明している。このような男が「犬死」した様子を漱石は相当の紙面を割いて描写する。戦争映画のシーンであるかのように写実的な描写が続いた後、漱石は『マクベス』の話をしながら『マクベス』にはまず「怖」という要素が存在すると言う。

マクベスは妖婆、毒婦、兇漢の行為動作を刻意に描写した悲劇である。読んで冒頭より門番の滑稽に至って冥々の際読者の心に生ずる唯一の惰性は怖と云ふ一字に帰着して仕舞ふ。過去が既に怖である、未来も亦怖なるべしとの予期は、自然と己れを放射して次に出現すべき如何なる出来事をもこの怖に関連して解釈しやうと試みるのは当然の事と云はねばならぬ<sup>187</sup>。

漱石が『マクベス』の中で見つけた「怖」の要素を「趣味の遺伝」に取り入れたのが「浩さん」が死んでいく戦場のシーンであると考えられる。狂った神が「血を啜れ」「肉を食え」「肉の後には骨をしゃぶれ」と叫ぶ冒頭部分から「浩さん」が戦死するところまで、漱石が演出しようとしたのは「怖」であるに違いない。そして、「未来もまた怖なるべしとの予期」を裏切り、後半部には「浩さん」と「御嬢さん」の愛とそれにまつわる不思議な話が用意されている。

最後に愛が強くなったという「琴のそら音」と、愛が破壊されてしまった「趣味の遺伝」は相反するようだが、「怖」という要素から考えると、両作品は同一のパターンで物語を展開している。「琴のそら音」においては、幽霊話が不安感

---

<sup>187</sup> 夏目漱石『漱石全集 第2巻』岩波書店、1994年、217頁。「妖婆、毒婦、兇漢」はそれぞれ、マクベスに王となる未来を予言する三人の魔女、夫を弑虐に駆り立てるマクベス夫人、マクベス本人を指す。「未来もまた怖なるべし」は『マクベス』5幕5場、マクベス夫人の死に、マクベスが「明日、明日、また明日」の独白で未来への絶望を語る場面への言及。

を増幅させる「怖」として導入され、「余」がその「怖」を実感し、最後に「愛」を確認することで話が終わる。「趣味の遺伝」においても、日露戦争の「怖」から「愛」の確認（「愛」が遺伝によるものだとするのが独特なところではある）へと物語が展開する。

ただし、「琴のそら音」で幽霊話、即ち漱石のいう「幻怪」が「怖」を助長する装置であったとしたら、「趣味の遺伝」で不思議な現象とされる「幻怪」（少し顔を見ただけの「御嬢さん」のことを「浩さん」が満州で3回も夢見ること<sup>188</sup>、「浩さん」と「御嬢さん」の縁が先代から起因するものであること）は「怖」を助長するのではなく、日露戦争からの「怖」を鎮めて解消する装置として使われている。

両作品は、「怖」と「幻怪」という『マクベス』から得た文学的装置を漱石が日露戦争という明治日本の社会状況に代入して書いた結果であるとも考えられる。その時、「幻怪」を使い方が多少異なるところはあっても、漱石が「幻怪」に強い興味を持って日露戦争と結びつけて考えていたことは間違いないだろう。

## 第5節 おわりに

漱石が日露戦争に非常に強い反感を持っていたことは、「趣味の遺伝」にもよく表れており、彼の他作品でも散見される。日露戦争を前後して書かれた『漾虚集』の作品を漱石の厭戦思想と結びつけて読むことはもちろん妥当である<sup>189</sup>。しかし、本論文では、近代日本の怪談の一形式として、漱石が怪談を自分の作品に取り入れたことに注目して「琴のそら音」「趣味の遺伝」について論じた。

---

<sup>188</sup> 「浩さん」が「御嬢さん」の夢を見ることは、「余」が「浩さん」の日記から発見した形で作品内で述べられている。以下は該当箇所引用。「夫から二三頁進むと突然一大発見に遭遇した。「二三日一睡もせんので勤務中坑内仮寝。郵便局で逢った女の夢を見る」（中略）「旅順へ来てからは是で三度見た」」夏目漱石、前掲書、229頁。

<sup>189</sup> 「琴のそら音」「趣味の遺伝」を含む日露戦争前後に書かれた漱石諸作品における厭戦思想については、水川隆夫『夏目漱石と戦争』平凡社、2010年、82—130頁を参照。

「琴のそら音」において、漱石が日本の怪談(『雨月物語』や『牡丹灯籠』)を参照したと推定できる箇所があったが、「趣味の遺伝」を並置して考察すると、漱石における怪談(幻怪)の参照先を『マクベス』に探ることもできた。特に、『マクベス』の「怖」という要素を文学創作で有効な道具として認識した漱石は、そのメカニズムを「琴のそら音」や「趣味の遺伝」で実験していた。

「琴のそら音」において「余」が感じる不安が婚約者の死だけではなく、当時の社会的な不安とも重なるものであって、それが日露戦争と深い関わりを持っていることはすでに述べた。日露戦争から起因する不安(満州から来る不安)を不気味なものとして読者に伝えようとしたのが「琴のそら音」であるとしたら、「趣味の遺伝」は、満州で行われた死の饗宴を社会的な病理と認識し、愛が遺伝するというテーマを通して癒していく作品であると言える。

本論文では、主に「琴のそら音」における「余」の内面を分析し、そこから読み取れる「死の恐怖」と、それが時代的な状況の中で日露戦争と関連付けられて書かれた様相を中心に論じたが、最後に「趣味の遺伝」と比較することで、「琴のそら音」だけではなく、漱石の諸作品において「幻怪」が用いられた様相を垣間見ることができた。漱石の他作品における「幻怪」についてもこれから研究を進めていきたいが、「琴のそら音」はその過程において基準点のような作品であると思われる。

次章では、日露戦争を含めて、日本が近代化を進めて帝国へと変貌していく過程を船幽霊が登場する話を通して考察する。特に、日露戦争の後に量産された船幽霊の幽霊譚は、本章で考察した漱石作品と同時代の心的光景を形成するものと考えられるだろう。大規模の死を直面した後に、漱石がその恐怖について書いたのとは、また異なる様相がそこには表れている。

## 第4章 近代日本の船幽霊 —鬱憤の表象から帝国の武器へ

### 第1節 はじめに

世界的に大ヒットしたディズニーの連作映画『パイレーツ・オブ・カリビアン (Pirates of the Caribbean)』の続編「デッドマンズ・チェスト (Dead Man's Chest)」(ゴア・ヴァービンスキー監督<sup>190</sup>、2006 年)には幽霊船「フライング・ダッチマン (Flying Dutchman) 号」が登場する。「フライング・ダッチマン」とは、アフリカの喜望峰沖で遭難したオランダ人船長が船と共に幽霊になって永遠にさまよい続けるという伝説の幽霊船、もしくはその船長のことである<sup>191</sup>。大航海時代を経た西欧の文化伝統においては、このような海難事故による幽霊船伝説が数多く存在する<sup>192</sup>。

全面が海に接している島国日本でも昔から海や船に関連した怪談が語られてきた。名称は地域や時代によって異なることもあるが、全国的に流布した代表的な

---

<sup>190</sup> ゴア・ヴァービンスキー (Gore Verbinski) は、カリビアンシリーズを監督する前に、J ホラーの代表作である『リング』(中田秀夫監督、1997 年)のハリウッドリメイク版『ザ・リング (The Ring)』(2002 年)の演出を担当した経験がある。

<sup>191</sup> フライング・ダッチマン伝説を素材にしてハイネが書いた短編をワグナーがオペラで脚色した『さまよえるオランダ人』(1842 年)では、神を罵った罪で呪われた船長が女性の愛を得ることで呪いを解こうとする。フライング・ダッチマン伝説の特徴は、西欧の伝承物語で散見される「罪とその罰としての放浪」にあるという分析がある。荒井秀直「「さまよえるオランダ人」伝説考」『藝文研究』25 号、慶應義塾大学藝文学会、1968 年 3 月を参照。

<sup>192</sup> 低地ブルターニュに伝わる話、デンマークの老船員の語る話、コンウォールに伝わる話、東フリースランドに伝わる話、ノルマンディに伝わる話、イギリスに伝わる話など。荒井秀直「「さまよえるオランダ人」伝説考」『藝文研究』25 号、慶應義塾大学藝文学会、1968 年 3 月、330—332 頁を参照。

呼び名は「<sup>ふなゆうれい</sup>船幽霊」である<sup>193</sup>。船幽霊という名称からもわかるように、船幽霊は船自体が幽霊として登場する幽霊船と違って、生者が乗船している船を襲う幽霊、即ち怨念を持って集団で死んだ人たちが中心で、幽霊船が襲う船に乗っている生者たちに対して、自分たちの怨みを述べ、生者たちを死に至らしめようとする。従って日本の船幽霊は、多くの場合複数で出現し、目撃者になんらかの声をかけることが多い。幽霊船の場合におけるような、寂として声なく、ただ陰鬱な雰囲気だけが漂う船のイメージではなく、船と一緒に沈められた怨霊たちの呼びかけが船幽霊怪談の持つ重要な特徴であると言える。

本章では、日本の船幽霊に関する記録及び文学作品を対象として、そこに描かれた船幽霊のイメージが当時の時代性とどのように結び付いているのかを究明することを目的とする。特に、近代初期に書かれた二つの作品、『船幽霊 噂の高潮』（1886 年）と第一世界大戦後の『怪談百物語 船幽霊』（1917 年）を比較分析することで、特に西洋に対する劣等感に耐えながら西洋のような海洋帝国へと発展していくことが目指された日本近代の時代状況が、船幽霊の表象と深く絡んでいることを明らかにする。両作品の周辺に分布している船幽霊関係の記録などを考慮に入れて考察を進める。

船幽霊怪談の長い歴史や広範囲な分布にも関わらず、それに関する先行研究は少ない。船幽霊研究は、民俗学的な観点からその伝承の様態を採集・整理・分析する方向で行われてきた。児童文学者である松谷みよ子は『現代民話考』シリーズの第 3 巻(1985 年)で船幽霊に関する民話を収集紹介している<sup>194</sup>。近年の研究としては、関山守弥の『日本の海の幽霊・妖怪』（2005 年）がある。海上の船幽霊だけではなく、海辺に出没する幽霊・妖怪を含め、船人の海に関する信仰までを多年の文献調査とフィールドワークを通して集大成したものである<sup>195</sup>。また、この

---

<sup>193</sup> 「船幽霊」以外の名称としては、「亡者船」「モウレン船」「ボウコ」「ホムラ」「海坊主」「海幽霊」「幽霊船」「アヤカシ」「アヤカリ」「シラミ」「シキ幽霊」「マジモノ船」「グゼ船」などがある。花部英雄「船幽霊の型」小松和彦編『怪異の民俗学 2 妖怪』河出書房、2000 年、362—365 頁。

<sup>194</sup> 松谷みよ子『現代民話考Ⅲ』立風書房、1985 年。

<sup>195</sup> 関山守弥『日本の海の幽霊・妖怪』中央公論新社、2005 年。

本の解説を書いた花部英雄は、自著「船幽霊の型」(2000 年)で船幽霊の伝承を類型として分類して考察を行っている。船幽霊の歴史的な変遷、地域的な偏差も考慮にいて、その型を出現恐怖型、死者船止型、柄杓貸せ型、呼掛応答型の 4 つに分けて分析している<sup>196</sup>。文学作品を取り上げた研究としては、谷口基が『怪談異譚一怨念の近代』(2009 年)の中で、本論文でも取り扱う 1917 年の『怪談百物語 船幽霊』を分析し、帝国日本の南進政策との関係性、怪談と戦争の関係性について考察を行っている<sup>197</sup>。

本章では、以上の先行研究を参考にしながら、前近代から継がれてきた船幽霊伝承の系譜が近代という転換期にその時代性と結び付いた形で変容されていたさまを解析していく。

## 第 2 節 船幽霊の原型

現代まで語り続けられてきた日本の船幽霊伝承は、当然その時代、地域によって様々な形に変容されてきた。本論文は、船幽霊伝承の変容が、時代性とどのように結び付いているのかを究明することを目的とするものであるが、その多種多様な変容の中でも、いくつかの共通する特徴の解明から始めたい。

雨が降る夜、風を逆らって走る船が現れ、その船に乗った幽霊が柄杓で水を汲んで生者が乗船した船を沈めるとというのが、船幽霊伝承全般に見られる共通項である。その退治法についても、全国的にある程度固着されたイメージを持っている。例えば福島に現れるという船幽霊の話には松谷みよ子が『現代民話考Ⅲ』で紹介している、以下のようなものがある。

---

<sup>196</sup> 花部英雄「船幽霊の型」小松和彦編『怪異の民俗学 2 妖怪』河出書房、2000 年。

<sup>197</sup> 谷口基『怪談異譚一怨念の近代』水声社、2009 年。なお、本論文の『怪談百物語 船幽霊』の分析が、谷口の著作に多くを負いつつも、『怪談百物語 船幽霊』が江戸期以来の船幽霊の系譜につらなるものであることを重視して、谷口の先行研究の到達点を超えることを目指すものであることを注記しておく。

こさされ雨(小雨)のシケの晩には、モウレイが出っから気をつけろ、と漁師たちはいいます。モウレイセンともいって、普通の船は追い風で走るのに、モウレイ船は向い風に乗って走ってます。向い風の帆のさばきは、よっぽど巧みな者でないと、うら帆をくらって船を転覆させられることがあります。浜の人たちは、向い風のなかを走ってくる船に気付いたら、それはモウレイ船だから気をつけろといっています。このモウレイ船に追われたら、モウレイ船の船足は早くって、とっても逃げきれません。ガヤガヤ、ガヤガヤという人声は聞いても人の影は見えないものです。そして、イナカセ、イナカセと呼びかけられます。そういう時は、底を抜いた長柄(長柄の柄杓)を貸してやります。そうしないと、長柄で水を汲み込まれ、水船にされて沈められてしまうのです。(中略)モウレイ船は必ず帆船だといっています。そうこうするうちいつの間にか



【図1】鳥山石燕『続百鬼』「船幽霊」

消えるが、船のおもてへ飯をどっさり撒いてやると消えるといわれていて、かまあねえから飯をうんと撒いてやれといわれています。海で死んだ人はなんぼか腹をへらしているんだっぺがらなといっています<sup>198</sup>。

「イナカセ、イナカセ」と呼びかけられ、その呼びかけに応じてイナ(大柄杓)を貸したら幽霊が生者の乗船した船に水を汲み込んで沈めるという要素や、小雨の夜に向い風の中を走ってくる船などは、後述する通り、ほかの



【図2】竹原春泉『絵本百物語』「船幽霊」

<sup>198</sup> 松谷みよ子『現代民話考Ⅲ』立風書房、1985年、61頁。



船幽霊伝承にも共通にみえる特徴である。

つぎに、このような船幽霊伝承の原型について前近代の文献資料を中心に考察していくことにする。前近代の文献資料を検討する理由は、船幽霊伝承の変容が、時代性とどのように結び付いているのかを究明することを目的とする本章においては、原型のとみなしうる前近代の文献資料における船幽霊と、本章で検討していくことになる日露戦争期から第一次世界大戦後における船幽霊との、類似性・連続性と、差異・隔絶との両方を確認する必要があるためである。

文献資料として日本最古の船幽霊関係記述は、12 世紀成立の『宝物集』で取り上げられている。その内容は、海に出た商人が恐ろしい鬼に出会って煩惱が鬼より恐ろしいものだと言及を行う仏教唱導説話の一種である<sup>199</sup>。

『画図百鬼夜行』（1776 年）で知られる鳥山石燕（1711—1788 年）の妖怪画集である『今昔図画続百鬼』（1779 年、『画図百鬼夜行』の続編）は、

西国または北国にても、海上の風はげしく浪たかきときは、浪の上に人のかたちのものおほくあらはれ、底なき柄杓にて水を汲事あり。これを船幽霊といふ。これはとわたる舟の楫をたえて、ゆくえもしらぬ魂魄の残りしなるべし<sup>200</sup>

と船幽霊を紹介している。西国または北国の海に出没するという地域設定と「ゆくえもしらぬ魂魄の残り」が底がない柄杓で水を汲むという、悲惨でもあれば滑稽でもある描写が注目に値する。

鳥山石燕が画家であったことを考慮すれば、文字情報だけでなく、画像表現に注目することも重要である。【図 1】を詳細に見ると、右側の浪がないところ

---

<sup>199</sup> 『宝物集』で取り上げられている船幽霊関係の記述については、花部英雄「船幽霊の型」小松和彦編『怪異の民俗学 2 妖怪』河出書房、2000 年を参照した。また、『甲子夜話』に船幽霊関連記述が存在することについても花部英雄の先行研究によるところが多い。

<sup>200</sup> 鳥山石燕『続百鬼』高田衛監修、稲田篤信、田中直日編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』国書刊行会、1992 年、140 頁。

に、船に乗って長柄で水を汲んでいる幽霊たちの姿が微かに描かれていることがわかる。また船幽霊について、「ゆくえもしらぬ魂魄の残り」と記している。

このように仏教説話や妖怪説話に登場する船幽霊であるが、一般に固着した船幽霊のイメージ形成には、仏教の鬼や単なる亡霊より、壇ノ浦の合戦(1185年)で水死した平家一族の怨霊が果たした役割が大きいと思われる。それは江戸時代のポピュラーな幽霊・妖怪を総網羅したとも言える『絵本百物語』(1841年)の「船幽霊」項目を通して確認することができる。『絵本百物語』第廿五「船幽霊」には「西海にいつるよし。平家一門の死霊のなす所となんいひつたふ<sup>201</sup>」とあって、船幽霊は平家の亡霊であるといった当時の認識を反映した記述が見える。船幽霊や海に出現する怨霊には平家の亡霊という、歴史の敗者としてのイメージが付与されてきたことを、ここで確認しておきたい。本章でのちに検討することになる、ノルマントン号事件における水死者の船幽霊や、日露戦争期のロシア側の死者の船幽霊においても、歴史の敗者としてのイメージは共通してみられる。

『絵本百物語』より20年前に書かれた肥前国平戸藩藩主・松浦静山(1760—1841年)の随筆集『甲子夜話』(1821年)第二十六卷には合わせて9つの船幽霊に関する話が紹介されており、平家滅亡の地、壇ノ浦の船幽霊に関する話が最後に登場する。その背景地域が平戸(長崎県)、志自岐(長崎県)、壱岐(長崎県)、豊後(大分県)、肥後(熊本県)、備後(広島県)など、西日本に集中していることが注目される。松浦静山が平戸藩の藩主だったこともその理由の一つだろうが、本章の論点からすれば、最終話が壇ノ浦の船幽霊に当てられていることがとりわけ重要である。

まず、『甲子夜話』の船幽霊怪談に見られる、典型的な船幽霊の描写を検討したい。

---

<sup>201</sup> 多田克己編『竹原春泉 絵本百物語—桃山人夜話』国書刊行会、1997年、75頁。この著作には「ここに亡びた平家一門の一念が残るとはいうものの、婦人女子等は別格としても、知盛や能登殿(忠度)等がここに出現することはありえぬと思われる」とあるが、謡曲「船弁慶」では海上で平知盛の亡霊が出現して義経に挑みかかる場面が描かれている。

領分の海中には船幽霊と謂ふものあり。又或はグゼ船とも謂ふ。これは海上溺死の迷魂、妖を為す所と云ふ。其物、夜陰海上にて往来の船を惑はすなり。或人舟に乗て、城下の海北一里半を出て釣し、夜に入て帰らんとす。時に小雨して闇黒なるに、その北十余町に<sup>あたり</sup>当て廿四五反とも覺しき大船、帆を十分に揚て走り来る。よく見れば風に<sup>さからひ</sup>逆て行なり。去れども帆を張ること順風に走るが如し。又船首の方に火ありて甚<sup>はなはださか</sup>熾<sup>しかれ</sup>なり。然ども焰なくして赤色波を照し、<sup>ほとんど</sup>殆<sup>とま</sup>白日の如し。又船中に数人在りて揺動する如くなれども、其形分明ならず。怪み見るうち、乗たる舟止て進まず。乃<sup>すなわちこぎさら</sup>漕去んとすれども動かず。又目当てとしたる嶋、忽隠没して無し。遂に行べき方を知らず。一人云ふ。船幽霊は<sup>とま</sup>苦を焼て舟端を照せば立去るなりとて<sup>202</sup>。

松浦の領土であった平戸に出現する船幽霊の話である。小雨が降る夜に出没する船幽霊は大型船で、満帆走行しているために順風で航行しているように一見見えるが、実は風に逆らって走ってくる。また怪火が見えること、幽霊船の船上に人影が見えるが分明には見えないことや、目撃者が乗った船が動かないことなどの怪異現象について述べられている。「柄杓を貸せ」と呼びかけないのが『絵本百物語』など外の船幽霊怪談とは違うところであろう。その退治方法としては、和船で雨を防ぐむしろとして使われた苦を焼くことが勧められている。

ここで『甲子夜話』の巻26を締めくくる「壇ノ浦の舟幽霊」を検討しよう。

又隠邸の隣地に大道と云僧の居しが、此僧は筑前秋月の人にて、もとは黒田支侯の士なりし故に、或年上京せしとき、長門の赤馬ヶ関に船がゝりせしに、まの当り見し辻話れるは、三月十八日のことなりし。船頭ども言ふには、今日は何ごとをも申されな。話しなど無用なり辻禁ずるゆゑ、何なる訳やと問たれば、けふは平家滅亡の日ゆゑ、若物語などすれば、必ず災難ありと云たり。夫より見ゐたるに海上一面に霧がかゝり、おぼろなる中に何か人の形ち多く現はれたり。これ平氏の敗亡せしの怨霊なりと云ふ。この怨霊、人声を聞けば即その船

---

<sup>202</sup> 松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂『甲子夜話 2』東洋文庫 314、平凡社、1977年、149—155頁。

を覆へすゆる談話を禁ずと云伝ふとぞ。昔より十七日、十八日の夜は必ずこの禁あることなりと云。又その十四日、十五日の頃より海上荒く潮まき杯ありて、彼辺りはものすごき有さまなり<sup>203</sup>。

九州・黒田藩の武士(現在は僧)が上京途中、九州から本州へと渡り、平家滅亡の日である 3 月 18 日に「赤馬ヶ関」に繋留したときの実経験であると言う。長門国赤間関壇ノ浦(現在の山口県下関市赤間町)はいうまでもなく平家滅亡の地だ。土地の船頭たちは、武士に沈黙を願う。この日に話をすると「必ず災難」があるためである。霧のむこうに「人の形」がおぼろに見え、「平氏の敗亡せしの怨霊」であるという。平家の「敗亡」と船幽霊、幽霊船が強く関連づけられていること、すなわち歴史の敗者と幽霊船との結びつきを、ふたたび確認しておきたい。

この他にも『世事百談』(1843 年)『雨窓閑話』(未詳)などにも船幽霊の話がみえる。『世事百談』の二話は、雨の夜に船幽霊に出会って、柄杓を貸せと呼びかけられるといった典型的な船幽霊話である。それに比べて『雨窓閑話』の話は、先に言及した『宝物集』の系統に属するものである。徳蔵という人が月の晦日に海に出て海上で大入道に会う。大入道は徳蔵に向かって「我姿のおそろしきや」と言う。徳蔵が「世を渡るの外に別ておそろしき事はなし」と答えると、大入道は消えたという話である。この話は『絵本小夜時雨』(1800 年)などにみえる海坊主の姿とも似ていて巨大な黒い人影として描かれている<sup>204</sup>。ほかの船幽霊が複数で登場し、通常の大きさの人間の姿で現れることを考えれば、この系統のものは船幽霊と一つのカテゴリーに入れるより、海坊主、海入道として区別して把握する必要があるようにも思われるが、ここでは船幽霊の異種の一つとして扱うことにする。

このように見てくると、主に江戸期における船幽霊のイメージは、その地域性から歴史の敗者としての平家の亡霊に強く結び付けられていたことを確認することができる。底なしの柄杓で水を汲むことから、前近代までは船幽霊が滑稽な面

---

<sup>203</sup> 松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂、前掲書、157 頁。

<sup>204</sup> 速水春暁斎『絵本小夜時雨』近藤瑞木編『百鬼繚乱—江戸怪談・妖怪絵本集成』国書刊行会、2002 年、118—119 頁。

をもったものに描かれる傾向があったことも重要な特徴としてあげることができるだろう。

以上、前近代、特に江戸期の文献を中心に船幽霊の原型についての考察を試みた。以降は近代、特に明治・大正期にかけての船幽霊の変容様相をその時代状況を背景にして考えてみたい。そのことにより、船幽霊の原型とみなすことのできる江戸期の文献に登場する船幽霊と、明治・大正期にかけての船幽霊との、共通性・連続性を確認すると同時に、変化・差異・断絶性の背後に、どのような時代性が作用しているかを確認できるはずである。第3節では1886年のノルマントン号事件と船幽霊、第4節では日露戦争期のロシア人や日本人女性の船幽霊、第5節では第一次世界大戦後に遑行的に再構築された1880年代の日本による台湾植民地化の準備段階における船幽霊を検討することになる。

### 第3節 ノルマントン号事件と船幽霊

本節では船幽霊が、西洋との不平等条約下におかれていた時期の日本の国家意識と結び付けられた例として、ノルマントン号事件(1886年10月)が引き起こした国家的憤懣を、船幽霊物語の形式を用いて表現した柑舟漁夫『船幽霊 噂の高潮』(1886年11月)を取りあげる。

1886年10月24日、横浜から神戸に向けて出航したイギリスの貨客船ノルマントン(Normanton)号が悪天候による視界不良のなか、暗礁によって難破、沈没する事故が起きた。イギリス人乗務員が全員救出されたのに対し、日本人乗客25名は全員水死したため、日本人乗客を見殺しにして逃げたドレーク船長(John William Drake)及びイギリス乗務員たちは、以後日本全国的な公憤を買うことになった。しかし、イギリス神戸領事による海難審判<sup>205</sup>でドレーク船長は何の責任も問われず、無罪判決を受けた。この判決は、当時の日本社会に大きな反響を引き起こし、西欧列強との不平等条約の改正問題と絡んで明治日本を揺るがす大事件

---

<sup>205</sup> 安政五カ国条約で、イギリスには領事裁判権(在留外国人が起こした犯罪を本国の領事が裁く権利)が認められていたため、日本の法律ではドレーク船長以下の関係者を日本の法律で裁くことはできなかった。

となった。当時の国民感情について戸田清子は「明治前期における条約改正と新聞報道—ノルマントン号事件報道を中心に」で次のように述べている。

ノルマントン号事件が世間を大きく騒がせたことの根底には、溺死した同胞たちへの鎮魂の思いは勿論のこと、このような屈辱を与えてきた外国船船長たちへの鬱積した怒りと憤りがあり、それが世論を沸騰させたと考えることができる。事件当時、「時事新報」を編集していた福沢諭吉は、この事件を西洋諸国のアジアに対する偏見と差別のあらわれであるにとらえ、日本人に独立自尊の気概をもつことを訴えたが、ドレーク船長らに対する国民の激しい非難とさまざまな抗議行動は、それまで外国人から蔑視されていた日本人が自らアイデンティティに目覚める契機となったのではないかと考えられる。ノルマントン号事件はこうした国民感情が噴出するきっかけとなった。怒り、悲しみ、憤ること、人々が無意識のうちに抱いていた西洋への劣等感や屈辱感、そして明治政府の欧化主義政策への反感が顕在化し、それを国民が互いに共有し合うことで、日本人としてのアイデンティティを守ろうとする力が働いたのではないかとと思われる<sup>206</sup>。

鹿鳴館に代表される明治政府の西洋化・近代化政策に対する一般庶民の反感は、ノルマントン号事件を通してイギリス人船長や乗務員、所謂「文明人」に対する反感へと変わっていった。人命を大事にするとされた教養ある「文明人」が日本人乗客を見殺しにしたことで、日本国民は自分たちが今まで「文明人」に人間視されなかったことを自覚するようになったのである。

ノルマントン号事件は、以降演劇化も行われ、人々の日本国民としての自意識を養う好材料となったが、大規模の死を伴ったこともあって当然怪談にも取り入れられた。前近代、反文明の象徴ともいえるべき怪談という物語形式が「文明人」批判の道具として選ばれたのである。ノルマントン号事件と怪談、特に船幽霊怪談との関係についての先行研究は皆無であることを、ここで述べておきたい。

---

<sup>206</sup> 戸田清子「明治前期における条約改正と新聞報道—ノルマントン号事件報道を中心に」『研究季報』14巻2・3号、奈良県立大学、117頁。

ノルマントン号事件(1886年10月24日)が起きてわずか1か月弱後の11月18日に原稿が完成し、12月に出版された柑舟漁夫(未詳)の『船幽霊 噂の高潮』は、ある漁師が夢でノルマントン号事件で死んだ乗客たちの怨霊に会い話を聞く上編と、事件後の裁判過程を描く下編の二編構成になっている。全体的には怪談にふさわしい恐怖を演出しようとする姿勢は見られず、怨霊の話を聞く上編では新聞記事のように、下編では法廷ものとして裁判における証言をそのまま写し出すように書かれている。小説というよりは新聞の記事や論説ともいえるべき作品である。

序文からこの作品は、その執筆動機が水死した人たちの鎮魂と共に、事件に対する悲しみと鬱憤の表明にあることを明確に打ち出している。

日本人モ人ナルゾ西洋人モ神ナラズ助カルモノナラ日本人モ西洋人モ助カラン  
助カラナイト云フナラバ西洋人モ日本ノ船客ドモ、助カラン何ガ何タル仔細ニ  
テ西洋人ハ助カリテ日本人ハ残ラズ餘マサス、(中略)ナンマイタ／＼ナンマミ  
ダブツ嗚呼外国船ヘハ一切ノルマイト号一切ノルマイト号(ポク／＼／＼／＼  
／＼／＼ポーク)<sup>207</sup>

鎮魂の形は取るものの、全体として西洋人に対する強い不信感と恨みを読み取ることができる。不平等条約下、西洋人と日本人の「人間」としての平等が無視されていることへの憤懣である。続く本文で水死した霊が現れ、当時の状況を口述する場面においても船長で代表される西洋人に対する恨みを忌憚なく打ちまけている。

窮鳥懷に入れハ獵師も之を打たずと聞くものを恨めしの船長よな彼の時如何に  
事急なれハとて救ふて救ひ難き我れ／＼ならざりしを我ハ東洋彼ハ西洋の隔あ  
りとも人に差別ハなきものを死するを看す／＼捨て置きて逃れ去りしハ情なし

208

---

<sup>207</sup> 柑舟漁夫『船幽霊 噂の高潮』開成堂、1886年、3—6頁。

<sup>208</sup> 柑舟漁夫、前掲書、10—11頁。

当時「奴隸鬼<sup>209</sup>」とも呼ばれたドレーク船長に対する公憤を反映しながら、西洋人を獵師、日本人を窮鳥に例えて、弱肉強食の時代に日本人が弱者として犠牲になったことを強調している。

このような「弱い日本人」という設定は、下編で日本人乗客を救出できなかった理由について、船長及び乗務員たちが語る場面でも用いられている。作品の第二部、在日本イギリス領事によって行われる審判で、ドレークらの船長側が語る理由とは、退船の指示をしたにも関わらず、日本人たちがそれを拒んでなぜか端舟に乗らなかったというものである。そのような行動の裏には、日本人乗客のほとんどが英語を解らなかったのが原因であるかのように描写されている。

船「自分は以て命ずるに今二度日本人をすゝむ端舟に移らしむべき旨を以てせりその前自分みづからも両度まで説きすゝめ其他の船員も同様勧めたれども日本人ハ何れも聞入れざりし」(中略)

判「船員中日本語を話しうるものありしや」

将「自分の知る所にては日本語を話し得るもの一人もなし船客中の二人は日本の海軍士官と覺しくて(中略)この二人の船客が他の船客に危難の由を話せしならん」(中略)

判「船客中日本の水兵ハ英語を解せしか」

運「否な自分が最後に彼等を見しときにハ甲板上に立て居りし端舟に乗移らんとせハ乗られしものを彼等ハ乗移らざりしなり<sup>210</sup>」

作品中イギリス領事による海事審判での、以上の法廷証言をみると、日本人乗客全員の水死は、日本人乗客が英語で語られた船長と乗務員の説明を理解できなかったことがその理由であるように述べられている。つまり、英語が国際語とされ

---

<sup>209</sup> 事件直後流行になった「ノルマントン号沈没の歌」には「外国船の 情けなや 残忍非道の 船長は 名さえ卑怯の 奴隸鬼は 人の哀れを 外に見て」という歌詞がある。

<sup>210</sup> 柑舟漁夫、前掲書、28、32、40 頁。



るなか、それを理解できない「弱い」日本人犠牲者たちの「無学」がその死の原因であったかのように描かれているのである<sup>211</sup>。

作者はその後、「何故日本人ハ端舟に乗移ることを拒むるか等に至てハ一言も問ふ所なし」と憤慨、「海事審庭は船長以下の答弁を悉く丸呑となし一ヶ条ども反問したるとなき」(58)点が、海事審判の手続きとしても極めて不十分なものであったと鋭く批判している。また、ノルマントン号事件と日本の国家意識との関連からいえば、作者が「火夫たる印度人一名の死亡したる有様(中略)日本船客の悉く溺死して西洋人の悉く助かりたる次第も問す審理不尽」とする箇所、日本人のみならず、インド人乗組員も死亡した件について触れ、イギリス人のインド人、日本人に対する人種差別を、人種によって著しく被害状況が異なることの原因として挙げていることにも注目できよう。

日本人犠牲者たちが英語運用能力を欠落させていたために犠牲になったとされている点に関しては、上編で登場する幽霊たちの生前の社会的身分・階層が注目に値する。作者が上編で登場させた幽霊たちの回想シーンを見ると、皆エリートとは程遠い一般庶民として描かれていることがわかる。老人、商人、下士官、出稼ぎの主婦などが語る彼等の話は、国に忠誠を尽したことや経済的な苦難などに関するものに留まっている。その中でも特に、年十七八の少年が語る話が興味深い。彼は九州の片田舎から家を起こすために東京へ来て「学問修行を心に誓」ったが、ある知人が「出世を計らんに学問ハ悪し」と言うので、志を変えて横浜の商家に雇われていた。「只管ら心を商事に傾け」ていた彼は故郷に帰る途中にこの事故にあったのである<sup>212</sup>。もし彼がそのなかに英語運用能力を身につける過程も含まれていたであろうと予想される「学問修行」の道を歩んでいたら事故から免れたのだろうか。

作者が本当にいいたいことは、作品の末尾に端的に表れている。

---

<sup>211</sup> なお、作品中で言及される「日本の海軍士官」の沈没後の動向については、この作品の「船将」は「自分は知り申さず」(32)としている。

<sup>212</sup> 柑舟漁夫、前掲書、14—15頁。

此国にありし事を此国にて判決する事能はずして之を他に持ち出さざるを得ざるも畢竟ハ世に治外法権てふものゝ存するゆえなるべし人々が此事に付きての如く先づ其本なる此治外法権を改むるに熱心せば是よりはいかゝる事もなかるべし嗚呼然かなり然かなりと自ら勇み立たんとすれば遽然として眼覚めて朝日はきら／＼と紀山の頭に昇り<sup>213</sup>

ここで作者は、無念にも船と一緒に沈んだ日本人 25 名の死を、政治的な道具に切り替え、治外法権に代表される不平等条約の改正に活用することを強く説いている。後に続く夢見た漁夫が目覚めるところや朝日がきらきらと昇る場面も一つの隠喩として読み取ることができるだろう。

この作品は一見幽霊を登場させて、その怨念を晴らすための作品であるかのように見えて、実はこのように不平等条約の改正という政治的な煽動を目的とする作品である。外観では怪談の形を取っているが、実際怪談としての要素はないと言っても過言ではないだろう。本章は、近代日本において船幽霊の怪談が、ノルマントン号事件、日露戦争、第一次世界大戦という歴史的政治的大事件の時点において、もたされてきた政治的意義を検討するものである。『船幽霊 噂の高潮』は、怪談という一見したところ公的歴史や政治とはまったく無関係に見えるものが、政治目的で用いられた具体例として、注目に値するのである。

上編における怪談要素よりも、不平等条約をめぐる法廷審判を思わせる後編がより強い印象を残すこの作品であるが、にも関わらず、以上で述べた船幽霊の原型及びその系譜を念頭に入れて考えてみると、いくつか注目に値する点がある。それは、この作品が江戸期の船幽霊イメージを忠実に踏襲したという点である。上編冒頭では、「丑満」「無数の燐火は集まて一塊となり」「霧の間を微かに透て隠々として浮ひたる一艘の蒸気船」と、伝統的な怪談のモチーフを用いて、怪異の雰囲気醸成される（7）。幽霊の口を借りて沈没当時の状況を描写するところで「元略の昔平家の一門一の谷の戦敗れて壇の浦に落ちのび汀に舟を争ひしもかくやと計り思はれたり<sup>214</sup>」と平家に言及するところには、特に注目したい。少な

---

<sup>213</sup> 柑舟漁夫、前掲書、62 頁。

<sup>214</sup> 柑舟漁夫、前掲書、8 頁。

くとも明治初期までは船幽霊という存在の原型として平家の亡霊を連想するメカニズムが維持されていたことの痕跡だと言える。イギリスという大国と日本という弱国との軋轢を、源氏と平氏の氏族の政治闘争という、より古い枠組みで語ることで、読者の理解をある一定方向に導くことが期待されていた。伝統的な船幽霊の場合、船幽霊は船幽霊となった原因を作り出した者に対する怨嗟を述べることはあっても、船幽霊となった原因を作り出した者に実害をもたらし、非正義を正すことはない。それに対して、この作品の筆者は、平家の船幽霊にたとえられたノルマントン号事件の日本人犠牲者たちの声に耳を傾ける者として自分を配置することにより、平家の船幽霊という比喻を、不平等条約という非正義・不平等の是正を求める声へと転用しているのである。国際法上の不平等是正という目的のために、旧来からある怪談の枠組みを援用する、政治的な営為であると言える。

またこの作品は、明治維新後迷信と言って遠ざけられていた前近代の幽霊という存在を再び呼び戻して、近代という時代に呼応させようとしたもう一つの例として評価することもできる。もちろん、その呼応の仕方が反近代・反文明ではなく、民衆の教化・啓蒙、あるいは治外法権廃止などの、西洋と同等になるという意味での「文明化」だったことは独特だと言わざるを得ない。

#### 第4節 日露戦争と船幽霊

本節では明治期の新聞における船幽霊関連記事を通して、船幽霊が特に日露戦争(1904年2月8日—1905年9月5日)と深い関わりを持って語られていたことを確認したい。明治期全般に数多く幽霊関連記事が見られるが、明治初期には記事が少なく、時が経つにつれてますます増えていく傾向がある。しかし、本論文筆者の調査によれば、本章で集中的に扱っている船幽霊という特定の怪異現象に関する記事は、明治中期まで皆無である。日露戦争後の1906年になって、一気に船幽霊記事が掲載されるようになる。明治期最初の船幽霊関連新聞記事は、1906年5月12日の『鎮西日報』に見える。

「日本海の舟幽霊」

鬱陵島の沖に大船の繋りて喊声海を圧するばかりなるに浦人はスワ汽船入港よ  
と打喜びて舢舨を出し開<sup>ママ</sup>を目がけて漕ぎ行くに波高く陸遠くなれど尚船に及ば  
ず<sup>215</sup>

日本海海戦(1905 年 5 月 27—28 日)の激戦地の一つであった韓国の鬱陵島の沖  
に、大型船が繫留、鬱陵島住民は汽船入港を喜んで、大型船に近づこうとする  
が、どうしてもその船にはたどりつけないという怪談である。同記事は、この幽  
霊船のさまを「一陣の風頸を掠めて船影忽ち一團の濛気となり大空遙に北方に向  
つて消ゆ其の雲影のたゞずまゐ宛然我れを九天に導くの思ひあらしめ凄絶言ふば  
かりなし」と描写している。記者は、ロシアという国家のために死を迎えたバル  
チック艦隊の乗組員たちが怪奇現象を引き起こしているとして、つぎのように分  
析している。

蓋し波羅的艦隊が万難を排して日本海に入り而も一挙敗竄して幾千の兵員海底  
の藻屑となり露帝怒つて之れを祭らず殆んど浮む瀬なきが如し故に其の気は此  
処に集り以て怪を為すものか何れにしても妖怪学者の一考に値するものなり<sup>216</sup>

ロシアの「<sup>バルチック</sup>波羅的艦隊」が鬱陵島沖の日本海海戦(韓国では東海海戦)において敗  
れた後、ロシアの皇帝がその結果に怒って「海底の藻屑」となったロシア兵士た  
ちの霊を「祭ら」なかったため、そのことに「浮む瀬なき」思いをしたロシア兵  
士の「気」が集まり船幽霊になったとしている。神と妖怪・幽霊を区別する基準  
は、祀られたことの有無にあるという小松和彦の指摘があるが<sup>217</sup>、ここでも「怪  
を為す」霊の出現は、祭られなかったことにその原因があると述べられている。  
ここで、特に注目したいのは、兵士たちを「祭」るべきであったのが「露帝」で  
あるとされていること、すなわち、船幽霊が、ある国家(ロシア)に所属しその国

<sup>215</sup> 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009 年、504 頁。

<sup>216</sup> 湯本豪一編、前掲書、504 頁。

<sup>217</sup> 小松和彦『妖怪学新考—妖怪からみる日本人の心』小学館、2000 年、37 頁。

家のために戦って死した者たちとして登場、国家主権者(「露帝」)が船幽霊たちの霊を「祭」る義務を負うものとして言及されていることである。この記事の記者は、戦勝国である日本では戦死者が適切な形で「祭」られていると考えているのであろうと予測される。

韓国の鬱陵島近くで発見されたこの船は、こちらから接近しようとしても遠ざかるばかりである。出現はするものの、こちらに近づこうとはしない。同じ内容が『北国新聞』「日本海の船幽霊」1906年5月15日、『芸備日日新聞』「舟幽霊か」1906年5月15日の記事にも見られる。特に『芸備日日新聞』「舟幽霊か」においては、ロシアの船幽霊が北の方へ消えていくと述べられている<sup>218</sup>。船が北の方へ消えていくという点以外に、この船の正体に関しては何の情報もない。以上の記事よりやや時間が経った6月3日の『北海タイムズ』「日本海の船幽霊」には、「こは必定海底の藻屑と消えし露国軍人の怨魂茲に止まりて此怪しみをなすには非ずやと其近辺の噂とり／＼先は眉に唾を塗つて聞き置くがよかるべし<sup>219</sup>」とあって、この噂の信頼性に疑問を与えているが、「露国軍人の怨」をその原因として言及するところは同じである。

日本歴史の裏側に「死者の魔が支配する歴史<sup>220</sup>」があると言ったのは谷口健一である。早良親王、崇徳天皇、平将門などの大物からお岩、お菊、累のような個人に至るまで、日本の幽霊は権力闘争における敗北者や、共同体から排除された者たちとして、その怨念を共同体に向かって発散することで恐ろしさを感じさせた存在である。従って、彼らに関する物語は、その恐ろしさ自体について語る一方、常にその鎮魂を念頭において書かれていた。先に述べた『船幽霊 噂の高潮』でも不平等条約撤廃についての民衆啓蒙を目的としながらも、ノルマントン号事件日本人犠牲者の鎮魂という形式をとっていた。不平等条約撤廃という政治目的のために旧来の怪談を改変しているという点では、『船幽霊 噂の高潮』は強く近代性を帯びさせられているが、鎮魂儀礼を通して怨嗟を抱えて死んだ者の

---

<sup>218</sup> 「北の方に向つて消え此事一再にして止まらざりし。」湯本豪一編、前掲書、505頁。

<sup>219</sup> 湯本豪一編、前掲書、506頁。

<sup>220</sup> 谷口健一『魔の系譜』講談社、1984年、12頁。

霊を慰め、共同体の再安定化が目論まれている点では、古くからの鎮魂物語の系譜を継承しているのである。

日本海海戦のロシア側死者をめぐる幽霊譚では、旧来の日本の船幽霊の型が踏襲されていることを確認した。それでは、旧来の日本の船幽霊譚と、日露戦争のロシア側死者との、「違い」とはなにか。当然ながら、それは彼らが外国人であることである。日露戦争で死んだロシア軍人たちも敗北者として幽霊の条件は備えていたが、彼らの霊は鎮魂されなかった。最初に挙げた記事の記者(日本人)は、ロシアによって「祭」られなかったことが彼らが幽霊と化した原因であると推測しているが、日本の側、すなわち加害者の側にロシア軍人の霊を慰霊する義務があると考えているようではない。ロシア軍人の幽霊は日本によって慰霊される必要のある存在ではないと考えられていることになる。鎮魂の目的が共同体の安定にあるとしたら、ロシア軍人の幽霊は日本という共同体に害を与えるような存在ではないということになる。この幽霊たちはひたすら北の方、ロシアに帰ろうとしているだけであって、こちら側、日本には近づこうとしないのである。

幽霊となったものの生前の国籍によって、慰霊されるべき霊と慰霊される必要のない霊とを区分けする思考方法を、ここに認めることができるだろう。保留していえば、ロシア軍人の幽霊について述べる記事では、ロシア軍人という男性たちは、自分が属する国家に忠義を尽くしたという点において、日本の側からも一定の敬意に値する存在として描かれていることにも注目すべきであろう。

つぎに検討する記事は、幽霊となった者が、生前において国境を越えて移動するセックス・ワーカー女性であったという点において、上で検討してきた例(ロシアの男性軍人の幽霊)と好対照をなしている。日露戦争終了後 5 年が経過した、1910 年 11 月 8 日『中国新聞』の記事である。オホーツク海で「キヤツと云ふ女の悲鳴」を聞いた後、「大きな火の玉が飛付て離ない」ことを経験した人が日本へ到着してその顛末を知るようになったという内容である。

「汽船の幽霊 (?)」

此怪異に会った後に勘察加の他の漁船に会つて其話をすると君等も逢つたかと笑つて居た。漁夫等の風説では何でも一昨年頃とか横浜の芸妓で小蝶と云ふ

のが露国人に落籍されて妻となつたが此小蝶には他に情夫があつたので金の為に露国人に自由にされるのを口惜がり露国人も小蝶が云ふ事を聞かぬに腹を立てオツコク海[引用者注：オホーツク海]に連れ出して小蝶を殺した。以来小蝶の亡霊が現はれて日本漁船と見ると慕かしさに出て来るのだと云ふ噂であつた

221。  
。

『福岡日日新聞』1910年11月9日「霧中の海幽霊 オコツク海の怪物は日本芸妓小蝶の執念」にも同じ内容があつて、この二つの記事にはロシア人に殺された小蝶という芸者が登場する。

ロシアと日本が漁業権をめぐって争いあつた、カムチャッカ(勘察加)の日本漁船のあいだで広がっていた怪談に登場する幽霊は、小蝶という日本人女性である。ロシア人に落籍された小蝶の「情夫」とはおそらく日本人だろう。ロシア人の意に従わないために殺害された小蝶の亡霊が、「日本漁船と見ると慕かしさ」に駆られて出てくるというところからは、「情夫」が漁業関係者であつた可能性もうかがわせる。

この女性は、お岩、お菊、累がそうだったように、男性の手によって殺されている。ただし殺害を行う男性は外国人(ロシア人)である。また、小蝶は、従来の固有名をもった女幽霊(お岩、お菊、累)のように、自分を殺害した男性あるいはその近親のものに危害を与えて復讐したり、自分の恨みを世間に知らせ成仏を願ったりはしない。殺された当時を再現するかのように悲鳴をあげ、怪火となって出てくるだけである。だからこそ、それを目撃した日本人男性たちも、自分に危害が及ぶことを恐れることなく、「君等も逢つたかと笑つて」いられるのである。つまり、この幽霊もまた、ロシア軍人達の幽霊と同じく、鎮魂の必要がない存在である。戦争に負け、「露帝」によって祭られなかったため、故国に帰ろうとしても帰れないロシア軍人のように、小蝶という女性もオホーツク海をずっとさまよい続けるだろう。

---

<sup>221</sup> 湯本豪一編、前掲書、1086頁。

この女性が祭られない理由は何だろうか。ロシア軍人たちが皇帝の怒りを買ったとしたら、この女性は、ロシア人に落籍されたために、自国の男より他国の男を選んだ女として、日本男性の怒りを買ったのではなかろうか。日本人であると想像される「情夫」へ操を尽くした日本人女性として、小蝶が美化されることはない。この記事の時点で日露戦争終了後5年が経過している。すでに勝ったはずの「ロシア人男性」に「身を売る日本人女性」の幽霊は、笑いの対象ではあっても、鎮魂の対象ではなかったようだ。「日本漁船と見ると慕かしさに出て来る」小蝶の幽霊は、恐怖や哀悼の対象ではなく、いくらかは親しみと哀れみの混じった、笑いの対象でしかない。

最後にこの時期の船幽霊関連記事には、出沒場所が韓半島近くを含めて、日本の領土の外側に設定されることが多かったことも指摘しておきたい。『中国新聞』1906年5月31日の記事は、日露戦争で撃沈され日本の所有となったロシア船が幽霊の出る船と噂されている記事であるが、その船の発見場所は韓国の仁川である<sup>222</sup>。小蝶の幽霊が出沒するオホーツク海を含め、日露戦争後の船幽霊譚や船をめぐる怪談には、日本近海ではない場所を舞台とすることが多い。この時期の船幽霊出現が主に日露戦争の結果として語られたことを考えると、その戦地であった韓半島やオホーツク海が背景であることは当然かもしれない。前近代の船幽霊は、技術的に遠海までの航海が難しかったのも理由だろうが、すべて日本近海で目撃され、伝承されてきた存在である。しかし近代になると、船幽霊の活動舞台はますます広くなる。そのことと、日本の帝国主義的領土拡大は、むしろ、関係が深い。日本の内部ではなく、その外側に怪異が存在するという想像力は、日本内地を「文明」、日本が領土的野心を抱く近接地域を、迷信や怪異、迷妄の跋扈する「野蛮」や「未開」「停滞」の地として思い描く心性と関係しているだろう。次節では、もう一つの「野蛮人」が住むところ、台湾へ進出した船幽霊を

---

<sup>222</sup> 『中国新聞』1906年5月31日「幽霊の出る船」には、つぎの記事がある。「此程志摩国鳥羽鉄工場に於て修繕中なる汽船中丸は日露開戦の劈頭仁川に於てズンガリー号と共に撃沈せられたる露国の密航船なるがその船型異様にして一見薄気味悪きのみならず船内には臭穢充満し所々に婦人の毛髪膠着し居るより妖霊出現の噂さ切りに出で船員は逃亡せり。」湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009年、506頁。



題材にして書かれた『怪談百物語 船幽霊』（1917 年）をとりあげて分析する。

『怪談百物語 船幽霊』で日本は、船幽霊という怪異までも近代的テクノロジーで生みだし、それを植民地支配に活用する国家として登場することになる。

## 第 5 節 帝国の武器としての船幽霊

高山怨緑が書いて 1917 年大川屋が刊行した『怪談百物語 船幽霊』は、「船幽霊」「死人喰ひ」「お清が淵」三編を収録した短編集である。本稿で分析の対象とする表題作の「船幽霊」については、谷口基が『怪談異譚—怨念の近代』の中で日本の南進政策と関連づけて精密に論じている。本論文では谷口基の先行研究を参考にしながら、この作品が船幽霊物語の系譜においてどのような特徴を持っているかを中心に論を展開していくことにする。

主人公の下田武雄は、幼い時に両親と別れ叔父夫婦に育てられた。家柄が昔から海と深い関わりを持っていた。叔父は「少し学問が足りないのが玉に疵」(4)とされる名船長で、武雄自身も船員になることが将来の夢であり、「商船学校の予備科」で勉強している。そのある日、「支那から南洋」(7)への航海から戻って来た叔父が幽霊を見たという。

「今度の航海に一つ不思議な事を見てね」(中略)「幽霊を見た事さ。幽霊船と云ふ奴に出逢つたぞ。文明の世にそんな馬鹿な事つて云ふかしれんが、実際に見たんだからおかしいことだて」(中略)「丁度霧の深い晩だったね(中略)半町許前にも止まつて居た船があったらしい」(中略)「二時頃だったかな。霧の中に恐ろしい大きな姿がパツト現はれたでは無いか」(中略)「全体の大きさは二丈[引用者注：約 3.7 メートル]もあらふか、衣服を着て居た、顔はたしかに人の顔だ、青い色をしてスーツと立現らはれ(中略)」「痩せた怖ろしい相な男の幽霊だ。前後に七八人驚き出したね。私ばかり見たのなら間違かしれ無いが、舵手の喜助の奴の所へ行つた。奴真青になつてブル／＼慄へて居るではないか。生れてこのかたこの位恐ろしい思ひをした事は無かつた。危険だらふが何

だらうが構はず、船を返して急に逃げだしたのさ。今思ひ出してさへゾツト体がかう寒くなる様だから、其時の気持ちたらとても話しにやあらんのさ。<sup>223</sup>」

叔父は「文明の世」におかしいことだと言いながら、自分が見た幽霊の姿について「男」であったこと、そして「前後に七八人」と複数であったことなどを伝えている。これらは「柄杓を貸せ」と呼びかけてくる滑稽的なところはないものの、先に述べたような前近代の船幽霊のイメージ、平家の亡霊として伝承されて来たそのイメージと非常に類似したものであると言える。

怖くなって「危険だらふが何だらうが構はず、船を返して急に逃げだした」叔父だが、その後叔父は肺炎にかかる。熱のために『幽霊などに驚く福次と思うか、恐ろしい顔をして居る奴だな』とうわごとをいい、武雄の行方不明の父母について『お前の父母はどうしても海の人らしい。尋ねろ』といいのこして世を去る。

叔父の死後経済状況の逼迫から商船学校を中途退学した武雄は、船員になれば父母に会えるかもしれないという望みもあり、「支那南洋方面航海に従事する」(14)船に船員として乗り込むことになる。出発前、叔母の口から、武雄は祖父、父母についての詳しい話を聞く。江戸時代、『これからは海外の国々と貿易をしなければとても駄目だ』という先進的な思考をもっていた武雄の祖父は、密かに「天下の法を無にして大船」(17)を製造、幕府に追求されて身を隠し、武雄の父もその「大船」に乗って身を隠した。明治維新後、武雄の母も行方不明となるが、噂によれば「夫婦共に海の上を出没自在に往来して居る」という。

武雄が雇用された船は謎の多い船で、武雄は「この船にてたとへ如何なる不思議にあふも決して驚くべからず」「禁止室へ入ることは嚴重に禁ず」(28)と命じられる。当然ながら、武雄はこの禁を破る。「霧の深い晩」(43)に身を隠して船の秘密行動を盗み見した武雄は「髪はオドロにふり乱して長く垂れ、白い衣服をつけて真青な顔」(48)の「身の丈二丈もあると思われる怪しの姿」(50)を目撃する。

---

<sup>223</sup> 高山怨緑『怪談百物語 船幽霊』大川屋、1917年、8—11頁。

武雄は、「全体の大きさは二丈もあらふか」(10)という幽霊を見たという叔父の死は、自分が目撃した幽霊と関係があるのではないかと疑うようになる。

叔父の見たと云ふのもこれに違ひ無いのだ、叔父様は風邪が肺炎に変つて死んだのであらうが、この幽霊船も幾分生命を短かくした事に関係が無いともいはいれ無い、死ぬる際まで囁語の様なことを云つた<sup>224</sup>。

叔父の死の遠因となった船に、自分が勤務することになったことを武雄は知る。幽霊を目撃してすぐに逃げ出したにも関わらず、叔父は肺炎になって死んでしまう。幽霊を目撃するという行為自体が生きている人間に病気を引き起こしたかのよう、少なくともこの主人公は認識している。まるで幽霊がウイルスの媒体、もしくは病菌のかたまりであるかのようである。幽霊船目撃と叔父の死とは、旧来の怪談の枠組みでの因果関係として提示されることも可能であろうが、この作品の特徴は、この原因・結果の関係をいわば「化学」的に説明可能なものとして提示するところにある。後に叔父が目撃したこの幽霊というのが、実は機械によって作られた幻影であること、そしてこの幻影は毒ガスを人々に移すということが明らかになるのである。

「大きな目的」すなわち「他国の領地をふんだくる」という企図を秘めたこの船(57)には、「武雄が今迄きいた事も見た事もない所の薬品や器械」が装備されており「毒薬室、毒瓦斯発生室」「人骨貯蔵室」がある。武雄は「今迄は幽霊が出るなどと余程開けない船とばかり思つて居つたのに、反対に驚くべき文明の船だぞ、事によると己の学問の力では解決がつかないかしらん」と、毒薬や毒ガス技術を「文明」と呼び驚嘆する(60)。「幻霊器」というラベルのつけられた器械を武雄がいじっていると、「身の丈二丈にも余る男の幽霊」が出現する(61)。「化学の力を応用して」(63)製作された「幻霊器」は「活動写真同様に自在に空中に幻を出すことができる」装置で、「幻には恐ろしい毒瓦斯が含まれている」(63—64)。ついに武雄は捕らえられ、あわや非業の死を迎えるかと思われた。しかし

---

<sup>224</sup> 高山怨緑、前掲書、53—54 頁。

この船の「秘密船員」として一生勤務することを条件に赦免され、「幻霊器」の発明者である副長（「色は蒼白くて何となく寂しい神経質らしい、そして学者らしい人」(27)）から、この「幻霊器」と、この船の「大きな目的」すなわち台湾を「日本の領地」にするというミッションの関係について、つぎのように説明をうける。

今臺灣の土地は日本の領地となったのであるが、この話の時分はまだわが国の領地ではなかった。支那の領分であつた。この時日本の人の内に心あるものはどうかして日本の領地としたいと考へた人は一人二人ではなかった。そこで野蕃の地を征服するには普通の兵器では何うも覚束ない。この船も実は臺灣を其領土にしたいと云ふ大きな考へを持つて居た。そこで化学の力を種々に応用して彼等を征伐したいと考へた。十数年研究を続けて幻霊器と云ふ器械を発明した。この器械の前に人が幽霊の姿をして立つときには、その通り恐ろしい姿が空中に現はれた。其幻は丁度磁石が鉄を引きつける様に人体に近づき毒瓦斯を人にうつして気絶させる様に仕組んである<sup>225</sup>。

「野蕃の地を征服する」ために「普通の兵器」以上の武器、「化学の力」を応用した武器として副長によって発明されたのが、この「幻霊器」である。いわば台湾を占領するための武器として、この人工幽霊は創られたのである。叔父の死は「幻霊器」の「毒瓦斯」が原因であるが<sup>226</sup>、台湾占領というこの船の＜大義＞の登場のために、この事情は忘却される。船幽霊の存在とそれを目撃した叔父の死が怪談としてミステリアスな緊張感をこの作品に与えたのであるが、以降の話は怪談というより、人工幽霊という最先端兵器を活用したアクション活劇になってしまう。

この船による最新テクノロジーを用いた台湾征圧活劇を分析する前に、やや煩瑣に及ぶが、この作品における時間の流れを整理しておきたい。そのことによ

---

<sup>225</sup> 高山怨緑、前掲書、76—77 頁。

<sup>226</sup> のちに明らかになる通り、この船の船長は武雄の母、すなわち彼の叔父の義妹である。武雄の叔父の死の責任の一端は彼女にあることになる。

り、毒ガスを発生する幻影装置という道具立てをもつ『怪談百物語 船幽霊』が、出版年の 1917 年(第一次世界大戦後)という時点から、日本による台湾征圧という過去をどのように遡及的に再構築しようとしているのか、毒ガス発生装置という近代テクノロジーにどのような意義を付与しているかが明らかになると期待されるためである。

『怪談百物語 船幽霊』が出版されたのは 1917 年である。「今臺灣の土地は日本の領地となった」という記述での「今」とは、『怪談百物語 船幽霊』が出版された 1917 年を指していると考えてよい。「この話の時分」台湾は「まだわが国の領地ではなかつた」という記述からは、この物語のこの時点(武雄が副長から器械の説明を受ける段階)での現在は、1895 年の日本による台湾領有よりも以前であることが了解される。さらに、船長(実は武雄の生母)が、この物語の台湾征圧直後に、「武雄、お前は台湾の蕃地を服従せる大きいつとめがある。若し時機があつたなら、支那の国からこの広い領地を占領してくれろ」(92)と懇願していることから、この物語における台湾征圧は、1895 年よりもさらに前の時点に設定されていることが了解される。物語の開始の時点で「十八九位」(2)とされる武雄が、「日本の領地として台湾が世界にしれ渡つた時、日本の征討隊に戦は無いで基準した×××台」の「酋長」、「二十歳の上を少し出でた日本青年」(91)として再登場することから判断すれば、この物語における台湾征圧は、物語の開始時点から 5 年程度後の、1880 年代末から 1890 年代初頭に設定されていると考えてよいだろう。背景は 19 世紀末に設定しながらも、作中に表れている情緒と論理は、1917 年当時の台湾を植民地化するための名分作りという政治的な意図を十分反映したものである。武雄の父の艦であると想定される「姉妹船があつて内緒で南洋を占領し様として居る」(78)という。

ついに台湾上陸決行となる。「台湾内地の肝要の土地」「熟蕃××台」(80)至近の東海岸港が上陸地点となる。長くなるが、征伐場面を引用する。

副長は幻霊器をもつて船長のそばに居る。秘密船員は総員三十人にしか達して居ない。この少人数で臺灣全島を占領し様とするのだから寧ろ大胆と云はねば

ならない。しかし幸に幻霊器がある。もし一度把手へ手がつけば百万の敵さへたふすのは容易だ。

今しも密林の中へ這入った熟蕃の一人が之を認めたと見え、

「キャア／＼」

と叫んで森の中深く逃げ込んだ。

「ギャ／＼／＼」

と集つて来たのは跣足の蕃人、色は銅色をして眼ばかりピカリ／＼光らして其数二百人許恐ろしさうな顔付をして手に手に弓矢を持つて集まつて来て、

「何をなまいきな真似するのか」

と云つたらしい急ぎ足にこの部員を目掛けておしよせて来た。

「鉄砲で殺してはならぬ。彼等に反抗心を起させる許りだ。幻霊器で驚かしてやるに限る」

副長は命令を下した。

武雄は生れて初めて臺灣人を見た。又生れて初めて戦といふものをするのだ。

剛勇の天性ではあるが、身体が妙にぶる／＼振へて止まらない。

「憎くい蕃人めら手向ひするな」

部員一同が声々に呼んだが、言葉が通じないズン／＼此方へおし寄せて来た。

副長は落付きはらつて、

「矢に当たるな毒があるぞ。矢をふせげ。そして敵を思ひ様近づけさせよ」

と再び命令を下した。部員は残念ではあるが円くかたまつて矢を防いでゐた。

時はだん／＼にたつた。蕃人はます／＼近づいて来た。半町二十五間、二十間、時分はよしと、副長の手が把手にふれた。不思議の怪物が現れた。二つ三つ廻転するに従つて其数を増して来た。そして彼等が弓矢を以て勇戦して居る内を右左に動いた。

「ワア／＼／＼」

「キャツ／＼」

と云ふ叫び声がきこえる。そして二三人は見る見る内に倒れた。彼等の驚きは絶頂に達した。右左に逃げまはるのが見えた。中には弓矢を投げ捨てて森の中深くかくれた弱い奴もある。部員は手をたたいて喜こんだ<sup>227</sup>。

「副長の手が把手にふれ」と「不思議の怪物が現れ」、「熟蕃」の「二三人は見る見る内に倒れた」。ここまで来ると、この作品の目的が当時の日本政府の台湾植民地政策の反映、もしくはその過程で行われたあらゆる残虐行為の隠蔽にあったことがわかる。谷口基が指摘している通り、「鉄砲で殺してはならぬ。彼等に反抗心を起させる許りだ。幻霊器で驚かしてやるに限る」という「副長」の論理は、「蕃人」の「絶滅」を指示した第四代台湾総督・児玉源太郎に対して、日本軍の犠牲を最小限に抑えるために「威シテ而ル後撫ス」方針を提言した総督府参事官・持池六三郎の戦略にそのまま重なるものである<sup>228</sup>。

船員たちは、言葉が通じない「蕃人」に向かって「憎くい蕃人めら手向ひするな」と言いながら、彼らを殺せないことについては「残念」という感情を抱いている。このような蔑視は人工幽霊の登場によって、仰天し逃げ回る「蕃人」の姿を嘲笑する歓喜へと結び付けられる。

先述した『船幽霊 噂の高潮』で英語が解らなかった日本人乗客たちが「弱い存在」として表象されたのと同様に、言葉が通じない「蕃人」たちも日本人にとって結局のところ「弱い存在」にすぎない。ある特定の言語の運用能力をもつか否かが、植民地状況下での生存を左右するのである。『船幽霊 噂の高潮』では、日本語を用い、化学と先端視覚テクノロジーを用いた殺人機械を駆使する日本の側が「文明」を名乗る。

人工幽霊で台湾先住者を「征伐」した日本人は、台湾先住者を中国（「支那」）の圧政から救う、救出者の役割を自己演出する。

臺灣の蕃人達は支那から無暗にいぢめられて居つたから他国人とさへ見れば従はないけれども、中心から情を掛けてやつた所が、土人は小共の様なもので怒

---

<sup>227</sup> 高山怨緑、前掲書、81—85 頁。

<sup>228</sup> 谷口基、前掲書、179 頁。

る時は甚しいが又懐くことも早い。土人からは全て神様の様に敬はれて、如何なる命令でも従ふ様にはなつた<sup>229</sup>。

「支那からいぢめられて居つた」「小共の様な」存在である「蕃人」は、憎い存在ではなく、文明によって啓蒙すべき前近代的な存在、所謂「野蛮人」として表象され、近代テクノロジーを利用した「文明人」である日本人船員たちの命令に何でも従うような素朴な人々であると表象される。「文明」と「野蛮」の構図からすると、「蕃人」たちは日本人船員らにとってこれから啓蒙すべき存在であろうが、主人公を含め、ここの船員たちは「蕃人」を啓蒙することには何の興味を持たない。そこには二つの理由がある。

まず一つは、この部隊の目的が、後に日本が台湾を占領する時の無血入城を助けることであったからだ(後述)。この作品が書かれる2年前(1915年)に漢民族による最後の抗日武装闘争であった西来庵事件が発生し<sup>230</sup>、日本人95人が殺され、台湾人866人が死刑判決を受けたことを考えると、台湾占領は暴力によるものではないという政治的な宣伝及び隠蔽が必要とされていたと考えられる。

もし作品の中で船幽霊の船員たちが「蕃人」に船幽霊が人工幽霊であることを明かしてこの世に幽霊などは存在しないと教えたとしたら、「蕃人」は日本人並みの「文明人」になり得たのかもしれない。しかしながら、日本軍の非暴力的な台湾占領神話を作り出すためには、「蕃人」は「小共」のように弱く、素朴な存在、幽霊の存在を信じつづけ、それに恐怖する存在である必要があった。「威力では征服出来無い」「台湾の内地」であったが、占領者の「情けには直ぐに帰順した」(88)とされ、高テクノロジー殺人装置による武力制圧は、被占領者の、占領者の温情に対する自発的な従属にすりかえられる。

---

<sup>229</sup> 高山怨緑、前掲書、87－88頁。

<sup>230</sup> 呉佩珍、金牡蘭の研究によれば、西来庵事件は、武者小路実篤『或る反乱』(1916年)および菊池寛『暴徒の子』(1916年)に、大きな影響を与えている。以下を参照。呉佩珍「アイルランド経験の想像とフォルモサ・イデオロギー―菊池寛『暴徒の子』を中心に」(2006年台大日本語文創新国際學術研討會、台湾大学、2006年11月4日)、金牡蘭『『暴徒の子』が物語るもの―菊池寛とアイルランド文学の再考に向けて』『比較文学』49巻、2006年、35－51頁。



もう一つの理由は、船幽霊を作り出す幻霊器という機械にある。「この器械の前に人が幽霊の姿をして立つときには、その通り恐ろしい姿が空中に現はれた」(77)とあるように、恐らく作者が想像した幻霊器のイメージは映写機や幻灯機の発展された形であったと思われる。

18 世紀末フランスでは幽霊の姿を映し出して人々を驚かせる「ファンタスマゴリア (Phantasmagoria)」という幽霊ショーが人気だったという<sup>231</sup>。日本においても 1914 年の映画館宣伝文句が「幽霊がソレ／＼出タ／＼電気館<sup>232</sup>」であったように、当時映画という新技術は「ファンタスマゴリア」に類したものであって、人々はそれに対する驚異と恐怖を楽しんでいたと言える。「ファンタスマゴリア」とこの作品における人工幽霊との近似性は、つぎのエピソードでも示唆されている。一船員が、「破れた白い着物を着て、手を斯う云う風に、ドロ／＼と出」た幽霊を見て、あれは本物の幽霊に違いないと断言するが、別の船員に「お前それでは真物の幽霊を見たことでもあるのかい」と反問される。幽霊を見た船員は「活動でも」幽霊を見たことがあるから、自分が見たものが幽霊であることには確信がもてると主張する(32)。「ファンタスマゴリア」幽霊映像ショーを意識して作られた場面だろう。「活動」で幽霊が登場することをもって、幽霊が現実のものであることの根拠とされるという論理の逆転が生む、コミカルなものを含んだ場面だ。この作品においては、毒ガス発生装置つき「ファンタスマゴリア」が、驚異と恐怖と毒とで、台湾を制圧する。

船幽霊に「蕃人」たちが仰天するように、「文明人」であったはずの当時日本人たちも映画の中に出てくる幽霊に驚きながら文明の力を実感したのである。日本人には「ファンタスマゴリア」の仕組みはすでに知られており、それを軍事目的に流用したのが、この毒ガス人工幽霊発生装置である。日本人が台湾先住者に対する政治的優位を確保しつつけるためには、台湾先住者は毒ガス人工幽霊発生装置について、「小共の様」に無知のままにとどめ置かれなければならない。

---

<sup>231</sup> 岩本憲児『幻燈の世紀 映画前夜の視覚文化史』森話社、2002 年、9 頁、および谷口基『怪談異譚—怨念の近代』水声社、2009 年、184 頁。

<sup>232</sup> 『小樽新聞』1914 年 10 月 26 日の記事を参照(湯本豪一編『大正期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2014 年、448 頁)。

人工幽霊を利用した台湾占領が成功すると、今まで正体を伏せていた船の女船長が登場して急に自分が武雄の母であることを告白する。一船員から船長の後継者になった武雄に、母はこのような遺言を残して死ぬ。

武雄、お前は臺灣の蕃地を服従せる大きいつとめがある。若し時機があつたなら、支那の国からこの広い領地を占領してくれろ。夫れに尋ぬる父は今船にのつて南洋を征服して居る。いつか面会して親子の名のりをしてくれ。お前は永く臺灣の土地で王侯の暮しをして居て呉れ。万一日本の領地となる様なことがあつたら戦はないで服従ふことを忘れてはならぬ<sup>233</sup>。

台湾を中国から奪って日本軍に献上することが「大きいつとめ」であるとなんの留保もなく述べられ、この「野蛮人」たちを啓蒙して日本人のような「文明人」にし、西欧列強の侵略に対抗すべきだという近代知識人らしき主張は少しも見られない。谷口基はこの作品の登場人物たちが「きわめて＜近代＞的な人間群像として設定されている<sup>234</sup>」と評したが、これから「王侯の暮し」をして日本軍を待つばかりの彼らについて近代的だと言えるのだろうか。近代的で合理的な思考を持った文明人が「野蛮人」を啓蒙するのではなく、文明の道具を利用した野蛮な侵略と征服だけがこの作品の主眼だったのではなかろうか。谷口基はまたこのようにも総評している。

南進拠点としての台湾再評価の世論に乗じた文学的営為のひとつ、というべきなのである。(中略)下関条約後から大正初期まで続いた、台湾における「植民地戦争」に関する同時代日本人の意識と、台湾先住民に対する視線を明白に読み取ることが可能なのだ<sup>235</sup>。

---

<sup>233</sup> 高山怨緑、前掲書、92 頁。

<sup>234</sup> 谷口基、前掲書、183 頁。

<sup>235</sup> 谷口基、前掲書、171 頁。

「戦はないで服従」すればいいものを、1915年の西来庵事件まで様々な抗日武装闘争は続いていた。内地延長主義時期(1915—1937年)に入ってから間もなく書かれたこの作品は、当時の同化政策に対する歪曲された意識の反映だったのかもしれない。

ほとんどの幽霊と同じように、船幽霊も最初は歴史の敗者・被害者として表象された。だが、植民地奪還のために働く「英雄」が必要になると、大海を渡る占領軍の先頭に呼び出されるようになった。『怪談百物語 船幽霊』は南洋進出の拠点として台湾を描きながら当時の台湾認識を反映したという点と共に船幽霊イメージの転換としても読まれるべき作品である。

## 第6節 おわりに

以上、日本における船幽霊の系譜について明治大正期を中心に考察してみた。本来平家の亡霊として西日本海岸に出没されると想像されてきた船幽霊のイメージは、ノルマントン号事件、日露戦争、帝国日本の南洋進出など、その時代の様相に合わせて変容されてきた。日本において幽霊が不当に生命を奪われた人々の怒りと執念の表象だとすれば、船幽霊の話でも日露戦争期まではそのような因果応報譚的な要素が含まれていたと言える。しかし、日本が帝国として植民地を占領しはじめる時期になると、船幽霊さえも帝国の武器として呼び出されるようになる。

次章からは近代日本が帝国として植民地を占領、支配するために、怪談という物語形式を活用したもう一つの例として、朝鮮に関連した怪談、特に金玉均と閔妃の幽霊譚について考察を行う。そこには、朝鮮側の社会状況を日本側が理解し、場合によっては歪曲して利用しようとする意図が見られる。また、日本人の朝鮮人観を垣間見る好材料にもなると期待される。

## 第5章 近代日本における朝鮮関連怪談 —金玉均と閔妃の幽霊譚を中心に

### 第1節 はじめに

前近代はもちろん近代においても日本人は数多い怪談を創出し、またそれを享受していた。しかし、明治以前の日本怪談の中で朝鮮に関連したものを見つけ出すことは難しい。怪談という物語形式が口碑説話、あるいは仏教の唱導説話から起因したということを勘案すると、日本怪談の一定部分が韓半島や中国大陆から輸入されたものだと推定することは容易であるが、今までの先行研究で日本怪談と朝鮮の関連性を正確に論じたものは見当たらない。

本章は文献上において朝鮮関連怪談が初めて登場した明治後期、大正期を中心に日本人が朝鮮関連怪談を語る文化の内面を分析するものである。朝鮮という空間を怪談経由で理解し始めたのは、朝鮮を、占領すべき植民地として認識し、本格的な占領作業が行われた 1908 年からである。1908 年は、日本が東洋拓殖会社を設立するなど、植民事業が国策として活発に成されていた年である。このような植民事業の一環として釜山、仁川などの貿易港で活動していた在朝日本人向けに発行されていた日本語新聞に『朝鮮新報』と『朝鮮新聞』がある。朝鮮関連怪談は、このような朝鮮で発刊された日本語新聞を通して最初に紹介され<sup>236</sup>、その後日本国内の新聞紙にも同じ内容で報道されるようになる<sup>237</sup>。そして 1910 年、強制併合によって完全な植民地になると朝鮮関連怪談はまた新聞紙上で紹介される<sup>238</sup>。日韓強制併合という政治的な特殊性から当時の日本人は、潜在的な罪悪

---

<sup>236</sup> 『朝鮮新報』1908 年 6 月 11 日「清栄楼の幽霊」、『朝鮮新聞』1908 年 12 月 25 日「白毛八尾の狐」など。

<sup>237</sup> 『東洋日の出新聞』1908 年 12 月 28 日「白毛八尾の狐」、『名古屋新聞』1908 年 12 月 28 日「白毛八尾の狐」など。

<sup>238</sup> 『伊勢新聞』1910 年 9 月 4 日「怖い朝鮮怪談」、『山形新聞』1910 年 9 月 5 日「朝鮮の怪談」、『朝鮮新聞』1910 年 9 月 28 日～10 月 5 日「朝鮮奇聞」シリーズ、『北国新聞』1910 年 10 月 25 日「朝鮮の奇談」など。

感、自分たちが恨まれているのではないかという負債感を覚え、その屈折を怪談として消化しようしたのではないかと推測できる。このような罪悪感に勝る政治的な意図、すなわち怪談をもって日本による朝鮮半島の植民地化を強引に合理化しようとする試みが当時の朝鮮関連怪談に散見されている。

本章では、今まで学界で紹介されることがなかった金玉均と閔妃の幽霊譚をその代表的な例としてあげて検討する。さらに、資料の発掘や提示に留まらず、金玉均と閔妃の幽霊譚が当時の日本が直面していた政治的な立場と絡んで如何に創出されたのかについて分析する。韓国の歴史において重大な位置を占める人物でありながらも、当時の朝鮮を含めて今まで韓国では幽霊として想像されることがなかった金玉均と閔妃が、日本語によって書かれた文献の中で幽霊として表象された時、その背後に潜在している意図と欲望を本章は問題にする。

## 第2節 金玉均の幽霊

キムオッギョン

金玉均(1851—1894 年)は、朝鮮末期の政治家で開化派の甲申政変(1884 年)を主導した人物である。甲申政変は、閔妃(詳細後述)を中心とした守旧派とその背後にある清に対抗して、独立国朝鮮を標榜し、税制を再編するなど、当時の政情からは急進的な改革を断行した革命であった。しかし、終始上からの革命だけを念頭に置いた開化派エリートたちの近代化への念願は三日天下で幕を下ろした。また革命の支援軍として想定されていた日本政府側の微温的な態度も甲申政変失敗の一つの要因として挙げられている。金玉均は、政変が失敗に終わった 1894 年に日本へ亡命したが、大阪事件<sup>239</sup>などの影響もあって日本政府側からは冷遇を

---

<sup>239</sup> 1885 年、民権左派と称される大井憲太郎、小林樟雄、磯山清兵衛らを中心に、民権家百数十人が結集した反政府武力闘争計画。自由民権運動の後退と、甲申政変を契機とする義勇兵運動の高揚という状況のなかで、この年の 5 月ごろ大井らは、朝鮮の民主化と清国からの自立を求める金玉均ら開化派を支援して朝鮮革命を実現させ、朝鮮の宗主国を自認する清国と日本との戦争状態をつくりだし、その危機的状況を利用して各地民権家を一齐に蜂起させ、明治政府を打倒しようと計画した。実際には、資金調達の難航や朝鮮革命の任務を担う磯山の離反などで実行が遅れているうちに 11 月に発覚し、外患罪などで 38 人が有罪とされた。大井ら指導者が逮捕された大阪で裁判が行われたことから

受けることになる。福沢諭吉(1835—1901 年)、頭山満(1855—1944 年)、中江兆民(1847—1901 年)、柴四朗(1853—1922 年)などと交流はあったものの、亡命を決心した理由でもある再起の可能性は徐々に薄くなっていた。そこに現れた朝鮮最初のフランス留学生ホンジョンウ洪鍾宇の誘引によって上海に渡った金玉均は、同じ開化派であるはずの洪鍾宇のピストルによって 1894 年 3 月 28 日暗殺される。朝鮮に送られた死体は凌遲刑<sup>240</sup>にされ、切り取られた頭は見世物として全国を巡回させられるなど、「大逆無道の罪人」として極刑に処せられた。

金玉均の死は明治日本においても大事件であった。日本の冷遇から清(上海)に渡った朝鮮の親日知識人の悲劇的な死を巡って様々な物語が創られた。アジア主義者を中心に金玉均を追慕する講演会が開かれて清を膺懲すべきだという主張がなされた。イ・ヒファンによれば、福井茂兵衛(1860—1930 年)一座では金玉均死後「金玉均氏追悼義援金」募集のために二日間の慈善公演を行っており、名古屋では「金玉均殺し」という作品を公演して好評を得た。横浜の蔦座では壮士芝居を始めた角藤定憲(1867—1908 年)が金玉均を題材にして「ピストル」という三幕物を作った。新聲館の新浄瑠璃でも金玉均の事跡を取り扱った劇を公演し、神戸の壮士芝居劇団である伊東文夫一座でも金玉均暗殺事件を劇化した。また日清戦

---

大阪事件とよばれる。吉川弘文館の『国史大辞典』によると、「この事件は、国内での民主主義革命のための運動を放棄し、しかも朝鮮人民の変革の力を信頼せず、朝鮮を利用してロシアと清国を戦わせようとする謀略を夢想していたという意味で、自由民権運動の本筋から外れた運動であった」という評価もある。国史大辞典編集委員会編『国史大辞典 第2巻』吉川弘文館、1980 年、574 頁。

<sup>240</sup> 反乱の首謀者などに処せられた極刑の一つ。長時間に渡って苦痛を与えて死に至らしたことで凌遲と呼んだと推定される。金玉均の場合は、朝鮮で行われた凌遲処斬、すなわち死体が 6 部に切られて晒しものになる刑罰を受けた。小林瑞乃は「日清戦争開戦前夜の思想状況—金玉均暗殺事件をめぐる一考察」で金玉均の遺体が「切断の上さらしものにされ、この遺骸の極刑をめぐるでは諸外国の忠告を無視した行為だとして、各紙で激しい非難が起こった」とし、朝鮮を野蛮と規定する当時新聞メディアのの記事を紹介している。小林瑞乃「日清戦争開戦前夜の思想状況—金玉均暗殺事件をめぐる一考察」『青山学院女子短期大学紀要』64 号、青山学院女子短期大学、2010 年 10 月、51—53 頁。

争開戦後は、「朝鮮事変金玉均」「金玉均暗殺事件」などが劇化されて日本の戦意高揚に大きく貢献したという<sup>241</sup>。

またこれもイ・ヒファンによれば、暗殺事件が起きて一ヶ月も経ってない 1894 年 4 月 26 日には表紙に「金玉均遺案」と書かれた『こぼれ梅』が出版された。生前の金玉均から聞いた話を土台にして金玉均の言行を広く知らせるために書かれたものと言う。また同じ 4 月に高松丑蔵編の『朝鮮国亡命人金玉均氏暗殺の始末』が刊行されており、1894 年だけでも金玉均を言及した書物は数多く出版されている。そのほとんどは金玉均を「悲運の志士」として形象化し、彼の死を日清戦争へ進むための起爆剤として利用していた。

新聞メディアの論調はより露骨であった。「実に非凡な人物」「希世の人物」と評しながら、「決して朝鮮人として取扱ふ可きものに非らざる」とし、金玉均を「日本魂の男児」とまで高く賞賛した。また彼の死体に行われた極刑を朝鮮の野蛮を証明するものと強調する一方、大井憲太郎、頭山満、柴四朗などが中心になった「故金玉均友人会」によって行われた日本での葬儀<sup>242</sup>は、朝鮮の野蛮に対する日本人の「義侠」として宣伝された。日本人金玉均の死は、日本に「仇討」の口実を与えてくれたのである<sup>243</sup>。

本論文で注目するのは、このように量産された金玉均関連物語の中に怪談が存在するという点である。死んだ金玉均の幽霊が化けて出るのである。革命に失敗した歴史の敗北者として悲惨な死に方をした彼に同情するのは当然である。しか

---

<sup>241</sup> 이회환 「동아시아에 떠도는 김옥균 서사—김옥균 연구의 서설」 『한국문화』 서울대학교 규장각 한국학 연구원, 2008 년, p. 93. (日本語訳: イ・ヒファン 「東アジアに漂う金玉均叙事—金玉均研究の序説」 『韓国文化』 ソウル大学校奎章閣韓国学研究院, 2008 年, 93 頁.)

<sup>242</sup> 墓の石碑も、頭山満、柴四朗によって後に建てられたものである。金玉均の墓については、姜健榮 『開化派リーダーたちの日本亡命—金玉均・朴泳孝・徐載弼の足跡を辿る』 朱鳥社、2006 年、88—102 頁に詳しい。

<sup>243</sup> 以上金玉均暗殺事件をめぐる言論状況については、琴秉洞 『金玉均と日本—その滞日の軌跡』 緑蔭書房、1991 年および小林瑞乃 「日清戦争開戦前夜の思想状況—金玉均暗殺事件をめぐる一考察」 『青山学院女子短期大学紀要』 64 輯、青山学院女子短期大学、2010 年 10 月に詳しい。

し、金玉均を幽霊として想像したということは、彼が怨念を抱いて死んだのではないかという不安の証明でもある。当時の日本が作り上げた金玉均のイメージは、「日本の感化を受け日本を敬愛していた志士」「悲運の志士」として英雄化される一方、怨念を抱いた幽霊としても想像されたのである。これらの怪談が興味深いのは、金玉均の英雄化によって歪曲もしくは隠蔽されていた明治日本の内心が垣間見られるということである。

まず、金玉均の死後 3 ヶ月も経ってない 1894 年 6 月 8 日の『読売新聞』に「金玉均の幽霊、東学黨を導く」という記事が載っている。この記事で金玉均は甲午農民戦争(1894 年 2 月。別名東学党の乱、東学農民運動、東学農民革命)の農民軍を指揮する幽霊将軍として描かれている。

『読売新聞』1894 年 6 月 8 日

#### ●金玉均の幽霊、東学党を導く

東学黨官軍に比して猛烈なるハ云ふまでもなけれど頃日同地の都鄙に一種の怪説あり曰く東軍の鬼没神出ハ逆も人力とハ思はれず是れ全たく神仏の庇護に依るものにて現に彼等の先陣にハいつも影の如く烟の如き一個の將軍形を現はし軍扇を以て東軍を指揮し其進退掛引をなすに神算違ふことなく一度も敗を取りしことなし而してその將軍ハ実に金玉均の靈魂なりと甚だしきハ王父大院君夜に乗じて賊軍の陣頭に赴き秘計密謀を授けて進退せしむるなど噂とりどりにて人々恟々老幼婦女子に至るまで日夜戦争の噂にて他事もなしといふ<sup>244</sup>

失敗した革命家の幽霊が、また次の革命を導くという想像力が興味深い。農民軍の将軍として金玉均が想像されていたことは、甲申政変を主導し朝鮮王朝を改革しようとした彼の経歴が甲午農民戦争の改革性と結び付けられた結果でもある。実際には甲午農民戦争は、官吏の収奪に耐え切れなかった下層農民が武装蜂起した「下からの革命」であって、金玉均らが主導した甲申政変の「上からの革命」とはその性質を異にするものであったが、その対抗勢力が閔妃を始めとする守旧

---

<sup>244</sup> 『読売新聞 ネットワーク版 Version 1.4.0』2009 年、読売新聞社。



派であった点においては共通性を持つと言える。おそらく金玉均の幽霊が甲午農民戦争の指導者として想像されることが出来たのも、金玉均なら当時朝鮮の支配層であった守旧派に対して怨念を持っているに違いないという推測から始まったのだろう。

しかし、この記事には他にも幾つか注目に値する点が存在する。まず、「王父大院君夜に乗じて賊軍の陣頭に赴き秘計密謀を授けて進退せしむる」と、大院君が農民軍の側を支援したという噂を紹介している。大院君(1820—1898年)は、当時朝鮮の王であった高宗(1852—1919年)の実父で、自分の嫁である閔妃とは政治的なライバルでもあった<sup>245</sup>。この記事は、当時朝鮮の情勢を大院君と閔妃の対立として把握した上で、甲午農民戦争が大院君の主導下で行われたという一連の説<sup>246</sup>を反映している。

「人々恟々老幼婦女子に至るまで日夜戦争の噂にて他事もなしといふ」と、戦争のために世態が不安であることを付け加えて、日本軍が朝鮮に駐屯する正当性を確保しようとする努力が垣間見られる。甲申政変の後に清と日本のあいだで結

---

<sup>245</sup> 大院君と金玉均の関係は、金玉均が起こした甲申政変が中国に人質として抑留されている大院君の送還をその目的の一つとしていることからわかるように、敵対する関係ではなかった。金玉均は改革的で大院君は保守的な人物として相反するようだが、ゴン・イムスンによると、金玉均、大院君、農民軍という男性たちが強い結束力で閔妃に対抗したという主張は、1940年代の植民地朝鮮でも行われたという。そしてゴン・イムスは、それを親日史観の系統から把握している。공임순 『식민지의 적자들—조선적인 것과 한국 근대사의 굴절된 이면들』 푸른역사, 2005년, p.310。(日本語訳：ゴン・イムスン『植民地の赤子たち—朝鮮的なものと韓国近代史の屈折された裏面たち』青い歴史、2005年、310頁。)

<sup>246</sup> 김영수 「갑오농민군과 흥선대원군의 정치적 관계에 대한 연구—이병희, 전봉준 공초에 대한 분석을 중심으로」 『한국사회과학』 19권 3호、서울대학교 사회과학연구원、1997년。(日本語訳：キム・ヨンス「甲午農民軍と興宣大院君の政治的な関係についての研究—李秉輝、全琫準の供招に対する分析を中心に」『韓国社会科学』19巻3号、ソウル大学校社会科学研究院、1997年。)

배항섭 「1893년 동학교도와大院君의 舉兵企圖」 『한국사학보』 12호、고려사학회、2002年。(日本語訳：ベ・ハンソップ「1893年東学教徒と大院君の挙兵企図」『韓国史学報』12号、高麗史学会、2002年。)

ばれた天津条約(1885年)によって、日本は清が朝鮮に派兵すると自動的に朝鮮に日本軍を送る権利を得ていた。また公使館警護や在留邦人保護の名目もあったので、以後日本軍は継続して朝鮮に駐屯することになり、日本の朝鮮政府への内政干渉が始まる契機となって、結果的には日清戦争が起こる導火線となった。金玉均の死が清に対する強硬論を焚きつける材料であったように、彼の幽霊さえも朝鮮半島に対する日本の進出欲と日清戦争の口実を提供する道具としてしか機能しなかった。そこには悲慘な死を迎えた人の怨念を理解し、同情する既存の怪談享受を圧倒する政治的な計算が敷かれていたとみえる。金玉均の幽霊で人々の興味を引きながら、結局この記事が伝えたかったのは、国王の父が国の反乱軍を支援するような朝鮮という国が如何に混乱しているかという点であった。

この『読売新聞』の記事以外に『東洋大戦史』(山田捨作、1894年)にも類似した内容の話が載っている。『東洋大戦史』は、朝鮮の政治的な状況、特に清との関連に対する説明から始まって、甲午農民戦争(『東洋大戦史』では東学党の乱)の展開とそれに伴う日清戦争の必然性を述べたものである。日清戦争の直接的な要因として甲午農民戦争を挙げながら、その後日本が勧告した改革案が廃棄されたことを中心に戦争の妥当性が論じられている。このような日清戦争の叙事の中に開戦直前の話として「閔氏と金玉均」という項目が設けられ、閔妃と金玉均が対比される形で述べられている。

誰謂ふと無く言ふものあり、東学党の先陣に素兜白甲を着けたる一個の將軍あり、隠々として雲の如く、煙の如く、塵を執りて其軍を指揮する者ありと、而して雲の如く煙の如く塵を執りて其軍を指揮する者ハ金玉均の亡霊なりと、夫か有らぬか、閔氏の一門置酒高會、怨敵玉均の死を祝したる杯盞の未た乾かざるに、天下の凶変連りに至り、招討軍の敗報踵を躡して達す、国王に至りて拜伏すれハ叱斥せられ、援兵を借らんとすれば満廷の攻撃一身に湊まる、官職ハ剝奪せられ、世凱には唾棄せらる、百計齟齬して一族徒黨東西南北に流竄せらる、吁、昨日ハ雲上にありて雨を呼び風を使ふの神龍なりき、今日ハ市○に在

りて水を失ふ枯魚の如く、禍福途を同くし、盛衰掌を反すか如し、玉均の死、閔家の滅亡、幽冥の間豈契合する所なしと云はんや<sup>247</sup>。

農民軍を指揮する将軍として金玉均の亡霊が登場しているのは、『読売新聞』の記事と同じであるが、金玉均を閔妃の「怨敵」とし、閔妃一族が金玉均の死を喜んでいたと記している。また、金玉均の亡霊が指揮する農民軍に負けて「満廷の攻撃一身に湊まる」ようになり、中国の袁世凱にも嫌われるようになった閔妃は金玉均と同じく「滅亡」したのだと述べている。

『読売新聞』のように、戦争のために世情が不安であることを付け加えるだけではなく、閔妃勢力を金玉均の仇として規定して金玉均の死と共に戦争の責任さえも閔妃に転嫁しているのが『東洋大戦史』である。

金玉均と閔妃を対比した形で金玉均の幽霊を語った小説作品には『佳人之奇遇』（1885—1897年）もある。『佳人之奇遇』は、金玉均と親密な関係であり、「故金玉均友人会」の一員でもあった柴四朗が東海散士という筆名で書いた長編小説である。世界各国の民族独立運動の情熱を描いた政治小説の代表作であるが、その八篇巻十六（1897年）に金玉均の幽霊が登場している。1895年、在朝日本公使三浦梧楼の顧問として朝鮮に滞在していた柴四朗は、閔妃殺害事件に参加したことで日本に帰国した後に逮捕、投獄されることになるが、その後書かれた巻十六には広島獄中で主人公の東海散士が金玉均の幽霊に出会う場面が語られている。

まず、甲申政変から金玉均の死、甲午農民戦争と閔妃殺害までが詳しく述べられた後、投獄中の東海散士の前に「一夜更闌ケ人静リ萬籟俱ニ寂タリ忽チ李豊栄・古均居士ノ枕頭ニ来タルアリ」と、古均居士（金玉均）の幽霊と共に、李豊栄（李周會）の幽霊が登場する。李周會は閔妃殺害の罪で死刑になった人物で、甲午農民戦争の時は農民軍を討伐する先峰に立った履歴を持っている。農民軍の将軍として金玉均の幽霊が想像されていたことを考えると、金玉均と李周會は敵である。しかし、ここで李周會は金玉均に対して「君昨既ニ冤ニ遇フ僕又今冤ニ陷

---

<sup>247</sup> 山田捨作『東洋大戦史』好明館、1894年、73頁。

ル」と訴えている。やむを得ずという覚悟で行った閔妃殺害なのに、自分は処刑され、その後日本で幽霊として苦しんでいる自分の立場を金玉均に訴えている。履歴からみて相反する二人であるが、日本に頼って行った行為(甲申政変と閔妃殺害)の結果、結局日本から冷遇を受けるようになったことは確かに共通している。また、李周會も死刑後、頭山満など、黒龍会の主導で追悼されていることを考えると<sup>248</sup>、死後の日本における扱われ方も同じである。金玉均の幽霊は、知名度が低く、同情されることも少なかった李周會を浮き彫りにするために導入されたとも言える。

『佳人之奇遇』で金玉均と李周會が同じ立場として描かれているということは、その共同の敵として閔妃が想定されているということである。「朝鮮ノ虐政日ニ甚シク八道皆倒懸ノ苦ヲ叫フ<sup>249</sup>」と朝鮮の劣悪な状況を述べながら、東海散士は、その責任が閔妃という「女」にあることを主張することになる。

朝鮮ノ政体ナル国王無上ノ権アリト雖トモ南面垂成ヲ王妃ニ仰クノミ故ニ立后ノ日ニ当リ領議政先ツ更迭シ百官皆妃ノ同族ニ非サレハ即チ其党類ヲ以テス此レ万国ノ無キ所牝鶏晨ヲ告ケテ之ヲ能ク怪ムナシ陰惡鬱結党争ノ劇甚ヲ極ムル

250

金玉均の仇として閔妃を描いている例は、すでに『東洋大戦史』にもみえていたが、「牝鶏晨ヲ告ケテ」として、閔妃の女性性を表面に出し、女性が政治権力を握ることは正常であるべき権力関係の逆転であるとしているのは特徴とも言える。金玉均と李周會、そして日本人・東海散士という「男」に対する「女」として閔妃が取り上げられている。金玉均の死とその幽霊は、朝鮮の野蛮を確認させる装置として使われ、甲午農民戦争の時には朝鮮の混乱を表象するための道具として呼び出されていたが、閔妃の勢力が日本の妨害となり、複雑な経緯を経て最

---

<sup>248</sup> 黒龍会編『東亜先覚志士記伝 下巻』黒龍会出版部、1936年、133頁。

<sup>249</sup> 大沼敏男、中丸宣明校注『政治小説集二 新日本古典文学大系 明治編 17』岩波書店、2006年、604頁。

<sup>250</sup> 大沼敏男、中丸宣明校注、前掲書、605頁。

終的に日本が閔妃を排除する時期になると、今度は閔妃が朝鮮の悪を代弁するために登場している。閔妃と対照すると、一見、文明人・日本人・男として金玉均が位置づけられるようだが、これから検討するとおり、金玉均の幽霊譚の中には、その面だけでは解釈できない部分もある。

以降も金玉均の幽霊は、頭山満との関連<sup>251</sup>の中で再び語られる。1912年6月に成功雑誌社から刊行された吉田俊男著『天下之怪傑頭山満』の「怪傑頭山満対亡命客金玉均」という章で、金玉均の幽霊はまた登場する。亡命の後、「何か事件が起これば必ず最初に頭山を訪ねて、彼の指導を仰いた」金玉均は、のちに彼の暗殺者となる洪鍾宇から上海に渡ることを進められた時にも頭山のところを訪ねて来る。頭山は引き止めようとするが、「悪魔に魅せられた金玉均」を説得することは出来ず、観念した頭山は、「それぢや行け汝への身体は、韓国否東洋平和の為め必要ぢやから自重せよ」と言って、「元来友情に厚い男」だったので金玉均を大阪まで見送ることにする。「甲鉄に立つて頭山を見下す金玉均、舢舨より見送る頭山満、英雄の訣別、又実に悲壮の極みである」と描写される二人の別れの後、「神ならぬ身の金玉均」の暗殺場面が詳細に描写され、続いて暗殺当日の夜に金玉均の幽霊が頭山のところを訪ねてきたという話が展開される。

頭山は世にも稀れなる精力家で、毎夜脂燐の香を缺いては眠られぬ、新橋の薬妓<sup>ママ</sup>で、頭山の情を蒙らぬものは殆んどない位である(中略)或夜のこと、藝妓好きの遊治郎「頭さん」、不思議にも、「今夜は女子を床に入れないで、独り寝るから誰も来ないでよい」と、女将に云ふて、一人座敷に入つた、然し頭さまから深夜、如何なる命の下るやも計り知れずと、浜の家の女将の計ひで、二人の婢を隣室に寝かせた。

---

<sup>251</sup> 『人ありて一頭山満と玄洋社』によると、金玉均と頭山満が初めて出会ったのは、1885年の5月から6月にかけてのことだと推定される。その時、頭山満は「話しているうちに彼が非常な才物であるということと、野放図なところもあるが珍しい者であることを見抜いた」「頭山は手持ちの五百円をまるごと金に渡した」とされている。井川聡、小林寛『人ありて一頭山満と玄洋社』海鳥社、2003年、142頁。

夜は何時しか更け渡り、草木も眠る丑満の頃、図らずも頭山の室に、談声が聞ゆる、隣室の婢二人は、目を覺まし、「矢張り頭さまは、一人ぢやお眠りになれないわねー、何時の間にか女を引入れたのだよ、今夜の女子は誰だらう、一つ見てやろう」と、婢共は襖の透間から、頭山の部屋を覗ふと、之はしたり、何處も女子の影はない、頭山は布団の上に胡坐を掻きて、眼をバチ／＼やりながら、「ウム左様か、ウム左様か」と、恰も相手が前に居るやうに、独語を云つて居る、婢共は早や腰を抜かし、声すら立て得ない、其筈である、深夜に相手なしで、独語して居りや、他の者は何だか気味が悪い<sup>252</sup>。

午前4時頃、浪人七八人が訪ねて来ると、頭山は「ウム、金が暗殺されたらう」と平然として言う。驚く浪人たちに「金が昨夜俺に会ひに来た、俺は人を避けて逢ふた」「顔は青褪め、目は閉ぢてた、其上齒をくひしばつて居つたから、金が何を云ふたのやら些しも判らなかつた」と説明し、金玉均の死を悲しむところで話は終わる。『天下之怪傑頭山満』という本のタイトルからもわかるように、金玉均の死は「元来友情に厚い」「稀れなる精力家」としての頭山を強調するために引き出されたものに過ぎない。そして、金玉均を「悪魔に魅せられた」「英雄」として描写する点は、暗殺事件後金玉均を英雄化していた当時の新聞メディアの論調をそのまま反映していると言える。

この物語において注目には値するのは、頭山が女を寝室に入れないで金玉均の幽霊を迎えた点と隣室の女たちが金玉均の幽霊を「今夜の女子」として勘違いした点である。しかし、この設定一つだけで金玉均が女性として形象化されたとはいえない。物語全体として金玉均と頭山の関係は「友情」に基づくものであったし、最後の附記に「日韓の和信歩を進むるに従ひ、韓廷は金に、忠達公金玉均と諡し、明治四十三年七月二十七日、京城に盛大なる追諡祭は執行せられた」と記されているように、この物語が伝えようとしている金玉均のイメージは、悲劇的な死を迎えた朝鮮の英雄にほかならない。しかし、2年後この物語を借用して語

---

<sup>252</sup> 吉田俊男『天下之怪傑頭山満』成功雑誌社、1912年、141—143頁。

られた『快傑伝 第3巻』の「頭山満の幽霊問答」には以前と異なる金玉均のイメージが投影されている。

政治講談師の伊藤痴遊(1867—1938年)が編集して1914年東亜堂書房から刊行された『快傑伝 第3巻』の冒頭には「頭山満の幽霊問答」という題目の物語が載っている。頭山満と金玉均の交友関係や金玉均暗殺事件の状況を想像力豊かに描いたこの物語は、金玉均の幽霊が暗殺された当日に頭山満の枕元に現れて二人が問答したという『天下之怪傑頭山満』の設定を取り入れたもので、以降続く「東洋の諸豪傑を悩ませる高島田幽霊<sup>253</sup>」とともに読者の興味を引く怪談として機能している。「頭山満の幽霊問答」の大筋は『天下之怪傑頭山満』のそれをそのまま踏襲したものに過ぎないが、細かい描写や添加された話者の意見などを通して『天下之怪傑頭山満』との差異を確認することも出来る。

まず、金玉均を女として表象しようとする意図がより明らかに見られる。頭山が金玉均を大阪まで見送った後に別れる場面の記述を見ると、二人を英雄として描きながらも、その関係を男頭山と女金玉均の恋人関係として把握している。

頭山が金玉均を大阪まで送ったのは、金は再び日本の地を踏む事は出来まい、恐らくは之が最期の別れであらうと思つたからである。大阪へ宿る事三日愈上海行の便船に乗る事となつた時、頭山の胸中は怎麼であつたらう。血を湧し合つた恋人が最期の時、其枕頭に待つて刻一刻に消え行く氣息を見遣る悶々の情一其れにも増して頭山が金玉均を送る心情の苦痛！船は無情のものである、凄じい黒烟を吐いて進行を始めた、甲板に立つて振り向く金玉均舳船から見送る頭山、英雄と英雄の訣別ほど悲壮のものはない<sup>254</sup>。

金玉均を見送る頭山の心情を、死んでいく恋人を枕辺で見守る人の苦痛として描写している。黒烟を吐いて進行する船は二人を引き裂く「無情のもの」であり、何よりも露骨に「恋人が最期の時」という記述が見える。また金玉均を死んでい

---

<sup>253</sup> イギリスでの拉致事件の後、刺客から身を隠すために日本へ移って来た孫文が高島田髻をした幽霊が出るという噂の宿で美女の幽霊に会ったという話。

<sup>254</sup> 伊藤痴遊編『快傑伝 第3巻』東亜堂書房、1914年、6—7頁。

く病床の人として描くことによって、悲恋の女主人公として仕立てようとする。このように『天下之怪傑頭山満』と違って、金玉均を女として形象化し、頭山との関係を恋人として設定した理由は、以降続く復讐の正当性を確保するためである。『天下之怪傑頭山満』では金玉均の死を頭山を含め日本の志士たちが悲しんだという短い叙述が付け加えられているだけだが、『快傑伝』では金玉均の遺体が死後どのように処理されたのかについて詳細に説明されている。特に、朝鮮に運ばれた遺体が極刑に処せられた点が強調され、遂には復讐という言葉まで登場する。

何時の間にか金の遺骸は韓国政府の手に渡り、逆賊金玉均の汚名の下に八裂の極刑に処せられ、四肢五体所を異にして八道に曝されて居るとの事である。之を耳にした同志の面々は悲憤やる方なく、鷄林八道の空を望んで、復讐!!!と叫んだ<sup>255</sup>。

ここに至ってこの物語の目的が明らかに見える。典拠とも言える『天下之怪傑頭山満』が朝鮮の英雄金玉均と交流した友情厚い頭山満の一面を伝えることに目的があったのに対し、『快傑伝』は愛する恋人を喪った男の復讐心を建前にして、以後朝鮮半島を巡って行われた日清戦争に妥当性を付与しようとする。政治的な脈絡において金玉均の死が意味することを『快傑伝』の物語は正確に認識し、反映していると言える。

「今夜は独りで寝るから誰も来ないで宜しい」から始まる金玉均の幽霊出現は『天下之怪傑頭山満』と同じだが、以後頭山が感想を述べるところにはまた決定的な違いがある。「びつしより濡れて顔は青褪め、乃公に何か云つたが些とも判らない」と言った頭山だが、その後「默する事暫時、其兩頬には冷かな笑が浮んで居た」と話が結ばれている。この両頬に浮かんだ冷かな笑いが何を意味するかについては解釈の余地があるが、友情厚い男が友の死を悲しむ場面にふさわしいものではないだろう。「復讐!!!」と叫んだ「同志」たちの反応を考えるとここで

---

<sup>255</sup> 伊藤痴遊編、前掲書、9頁。



頭山の両頬に浮かんだ冷かな笑いもまた復讐を意味するものと考えるのが妥当である。

この物語は、「頭山満の幽霊問答」という題目で読者の興味を呼び起こしているものの、金玉均の幽霊が持っている恐怖やその背後に存在するはずの事情には注目しないで、以後行われる、もしくはすでに行われた復讐の原因を提示することに集中している。読者の理解をもっと扇情的にさせる装置として、男頭山と女金玉均の恋人関係が設けられたのである。

先に検討した『読売新聞』の「金玉均の幽霊、東学黨を導く」の記事が、金玉均の幽霊を通して朝鮮社会の混乱と金玉均の死に対して朝鮮政府の責任があることを強調したとしたら、頭山満の英雄譚から始まった金玉均の幽霊譚もやはり金玉均の死には朝鮮政府の責任があり、日本はその復讐をすべきだという点を説破する政治談論として機能している。どちらにしても悲惨な死を迎えた金玉均という一個人の怨念については少しも興味を示さなかったことが共通点として指摘できる。

### 第3節 閔妃の幽霊

<sup>ミンビ</sup>閔妃(1851—1895 年)は、朝鮮の第 26 代王高宗の正妃であり、朝鮮最後の王純宗(1874—1926 年)の母親である。1895 年 10 月 8 日の乙未事変で日本人によって殺害されたことで、韓国歴史上最も有名な王妃になった。韓国においては、王妃に在位した期間中の失政にも関わらず、日本人の手によって殺されたという事実だけで、大きく美化されたところが少なくない。とはいえ現在に至るまで韓国における閔妃の評価は定まっておらず、日本と戦った女傑と見る肯定的な評価と国を亡ぼした張本人とする否定的な評価が混在している<sup>256</sup>。

現在日本における閔妃関連の先行研究が不足しており、閔妃という人物自体に関心が低いことは、韓国側の研究者たちによってすでに指摘されている通りであ

---

<sup>256</sup> 姜準曼『한국근대사 산책』인물과 사상사, 2007 年。(日本語訳:カン・ジュンマン『韓国近代史散策』人物と思想社、2007 年。)

る<sup>257</sup>。しかし、明治当時に限れば閔妃に対する関心は高く、その評価は彼女が親露派として日本と反目していたこともあって、主に否定的な評価が多かった。例えば、『時事新報』1894年7月15日に記載されている「朝鮮王妃は如何なる人ぞ」が代表的である。

『時事新報』1894年7月15日

朝鮮王妃は如何なる人ぞ

閔族が朝鮮国内に威権を恣まゝにして横道到らざる所なく今や国家人民をして殆んど衰亡にせしめたる所以も畢竟王妃が其一族を率ゐて計画するが故なりと云ふ左れば女性の身にてありながら中々の嶮材なりとは知るも知らぬも一般に認むる所なる其中にも例へば今の世子義和君の母君は趙氏にして後宮にありて国王の寵を辱ふせしが世子の誕生あるや王妃の憎悪嫉妬殊に甚だしく遂に之を擯けたりしかども(中略)王妃の嫉悪炎々として胸を焦したる其結果にや趙氏は至惨至酷にも烙鉄を以て特に言ふに忍びざる蛮風にて焼殺されたる事あり<sup>258</sup>

その親族を動員して国を衰亡させる元凶として紹介される閔妃だが、しかもその個人的な性格は「憎悪嫉妬殊に甚だし」い人物として提示されている。閔妃を「女性の身にてありながら中々の嶮材」としているところには、彼女のジェンダーを問題にする視点が働いていることがうかがえる。ここでは「嶮材」という表現は、人格が酷烈であるという意味で用いられている。この記事の記者が、「嶮材」である閔妃が女性としては例外的な存在であるとする背後には、女性は一般に酷烈ではないという想定が存在する。一方で記者は、閔妃を「国王の寵」をめぐって、ほかの寵姫(趙氏)への嫉妬に駆り立てられる女性ともしている。「今の世子義和君」とは、1891年(この記事の3年前)に「義和君」に封じられた李垺(1

---

<sup>257</sup> 서민교 「일본에서의 명성황후 시해사건에 대한 연구와 과제」 『사충』 59 권, 역사학연구회, 2004 년。(日本語訳: ソ・ミンギョ 「日本における明成皇后弑逆事件についての研究と課題」 『史叢』 59 卷、歴史学研究会、2004 年。)

<sup>258</sup> 時事新報社 『時事新報(復刻版) 明治前期編 13 卷～(4) / 4009 号～4062 号』 龍溪書舎、1986 年、124 頁。

877—1955 年)を指す。記者は「憎悪嫉妬」こそが閔妃の女性としての本質であるとしているようだ。熾烈な宮廷闘争を経て、「義和君」の母である「趙氏」を「擯け」た(排斥した)ばかりでなく、「至惨至酷にも烙鉄を以て特に言ふに忍びざる蛮風にて焼殺」したのだと記事は伝える。記事全体としては、政治的野心の強い女性・閔妃を、女性には珍しい「嶮材」でありかつ「嫉悪炎々として胸を焦したる」女性の典型(と記者が理解するところのもの)としている。そのような閔妃のありかたが、記者が考えるところの韓国宮廷の「言ふに忍びざる蛮風」を代表するものとされている。

すでに内藤千鶴子の指摘にある通り、このような閔妃認識は当時に広がっていたメディアの閔妃認識、即ち「めん鳥歌えば家滅ぶ」というものを代弁している。また当時の朝鮮政治を素材として書かれた『小説東学党』(1894 年)『続胡砂吹く風』(1895 年)などの小説においても閔妃が韓国の政情不安定の背後にある敵、悪として設定されている。内藤は両作品を分析した上で以下のように述べている。

閔妃の悪は女の悪であり、朝鮮の「女流」の悪であるという物語は、閔妃が朝鮮半島そのものを代表し表象するという文脈と絡まり合った上で、悪しき女に蝕まれて衰亡しつつある朝鮮の姿を浮かび上がらせる。そうした構図が単純化され、小説の背景として利用されたり、主旋律を濃密に奏でることによって、災いの核心にある打倒すべき敵という役割がより鮮明化するに至り、悪い女の物語は、朝鮮を彩る物語の中心になって、定型化されるのだ<sup>259</sup>。

女でありながら、もしくは女であるからこそ朝鮮の悪を表象している閔妃だが、朝鮮そのものも植民地として女でジェンダー化されていたことは言うまでもない。先に述べた金玉均の幽霊の話で金玉均が男でありながら、女としてジェンダー化されたことを喚起されたい。

---

<sup>259</sup> 内藤千珠子『帝国と暗殺—ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』新曜社、2005 年、167 頁。

本稿ではこのように悪女としての閔妃を強調した新たな資料として閔妃の幽霊譚を紹介する。閔妃が日本人によって殺されたことが明確な事実であることを考慮すれば、被害者であるはずの彼女が怨念を抱いて現れるとしてもさほど不思議ではあるまい。しかし、当時日本のメディアが伝えている閔妃幽霊譚は、彼女の怨念に注目するよりは、悪女としての閔妃イメージを死後も繰り返すだけであった。閔妃殺害の乙未事変の翌年である 1896 年 3 月 11 日の『読売新聞』に以下のような短い記事が載っている。

『読売新聞』1896 年 3 月 11 日

○閔妃の怨霊現はる

故閔妃の怨霊宮中に現はれ生前最も寵愛を受けたる宦官二名襲はれて死す

記者曰く怨霊ハ野蛮の怪談、電信は文明の利器、今文明の利器の依て野蛮に怪談を傳ふ亦奇といふべし呵々<sup>260</sup>

金玉均がそうだったように、閔妃も悲惨な死を迎えたため、怨霊として現れたという想像力が発揮されたとしても異常ではない。しかし、金玉均の幽霊譚とは違って、この記事はわざわざ「怨霊ハ野蛮の怪談」と断言し、その信頼性を疑っている。2 年前に同じ『読売新聞』で掲載された「金玉均の幽霊、東学黨を導く」の記事では、金玉均の幽霊が朝鮮の混乱を示す好材料として活用されていたが、閔妃の幽霊譚は野蛮の怪談として切り捨てられている。そしてその対として「電信は文明の利器」が取り上げられ、朝鮮、怪談、野蛮と日本、電信、文明の構図が作られる。

金玉均を文明人、日本人として認識し、彼の幽霊が収奪される朝鮮農民の指導者として想像されたのに対して、閔妃の幽霊は生前寵愛していた人を襲って殺す悪として形象化される。金玉均が代弁するのが「日本の文明と正義」であったとしたら、閔妃は「朝鮮の悪と野蛮」を示唆しているとも言える。

---

<sup>260</sup> 『読売新聞 ネットワーク版 Version 1.4.0』2009 年、読売新聞社。

同じ時期に『国民之友』「時事」欄にも閔妃の幽霊譚が紹介されている。『読売新聞』の記事と同じ3月に掲載されたことを考えると、おそらく同じ噂からの記事と思われるが、報道の仕方には多少異なるところがみえる。

『国民之友』1896年3月

#### 朝鮮の幽霊

王妃の幽霊を夢みて、朝鮮の一宮女死す、借問す金宏集等の幽霊は未だ露館に現はれざるや否や<sup>261</sup>。

宮中の人、即ち閔妃の身近で補佐していた人が閔妃の怨霊に悩まされて死んだという点は、『読売新聞』の記事と同じである。ただ、「生前最も寵愛を受けたる宦官二名」ではなく、「一宮女」が死んだという点が異なる。福地源一郎の『張嬪 朝鮮宮中物語』（1894年）に「扱も王妃は国王が張内人に御情を懸たまへる事ども聞知りて、常から嫉妬深き性にておはしませば媚ましき事に思したるに<sup>262</sup>」とあるように、すでに以前から閔妃は王に寵愛された宮女を逼迫する悪女として形象化されていた。「宦官二名」が「一宮女」へと変えられたのも、このような閔妃認識が働いた結果だと言える。朝鮮の宮中において、死んだ妃の怨霊が現れて復讐をするという発想は、以降も続いたようで、1910年9月4日の『伊勢新聞』には上記の閔妃怪談を連想させる朝鮮怪談が載っている。

『伊勢新聞』1910年9月4日

怖い朝鮮怪談 幽霊もあり山の神もある

#### ▲白昼首をモギ取る

極昔の事であるが朝鮮に内乱が起つて妃が賊に捕へられて憤死した其の後王様は花の如き宮女を多く宮殿に集めて日毎夜毎の歌舞の宴に耽つて居られた若し魂魄が残るものなら妃が此有様を見て只一言の怨もなくて済むまじう見へたが或夏の日的事とか宮女が廊下伝ひに只ある人影もなき広間を通り抜けんとする

---

<sup>261</sup> 明治文献資料刊行会編『国民之友(復刻版)』287号、民友社、1896年3月、53頁。

<sup>262</sup> 福地源一郎『張嬪 朝鮮宮中物語』庚寅新誌社、1894年、17頁。

折しも人品卑しからぬ婦人が此方に向ひて差し招く儘に近寄れば怖しや其婦人は諸手を伸べて件の官女が頭髮を捕へ「かくして此の宮の男女を悉とく取殺ろすぞ」と凄き形相して首を抓り取つたと云ふ物語りが言ひ伝へられて居る<sup>263</sup>

「極昔の事」の「内乱」と言っているが、「賊に捕へられて」死んだ朝鮮の妃は歴史上閔妃しかいない。また、妃の怨霊が直接「首を抓り取つた」という怪談形式、つまり女の怨霊が直接復讐を遂げるという話は朝鮮の怪談には見られない形式である。朝鮮を代表する怪談と言える『薔花紅蓮傳』（1818 年の漢文筆写本があるだけで、成立年代と作者は未詳）や阿娘伝説<sup>264</sup>が示すように、朝鮮における女の怨霊は、支配階層に位置する男の手を借りなければ復讐ができない存在であり、その復讐も法や制度によるものであって、女の私的な復讐は、物語の中でさえも容認されることがなかった。以上の閔妃関連怪談は、実際朝鮮で噂された怪談の紹介というよりは、日本側の想像力の産物としてみたほうが妥当である。朝鮮の怪談らしくみえるものを選ぶとすれば、つぎの『万朝報』1907 年 7 月 18 日の記事である。

『万朝報』1907 年 7 月 18 日

#### ▲閔妃の霊

昨夜韓皇の枕上に閔妃の霊現れ韓国の近事に付連りに苦言する所あり皇帝は今朝来宮巫に祈禱せしめつゝありと取沙汰す<sup>265</sup>

男の枕上に女の霊が現れて話をするという形式は、朝鮮の幽霊譚に典型的な設定だと言える。しかし、閔妃は自分を殺害した人々への復讐や処罰を頼むために

---

<sup>263</sup> 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009 年、1033 頁。

<sup>264</sup> 韓国慶尚南道の密陽の伝説。阿娘が自分に片思いを寄せていた男に殺された後、怨霊となってその地方の首領の前に現れ、自分を殺した犯人を告発して怨念を晴らすという伝説。ネット版『韓国民俗大百科事典』を参照(<http://terms.naver.com/entry.nhn?docId=2120767&cid=50223&categoryId=51051> 最終閲覧日 2015 年 12 月 3 日)。

<sup>265</sup> 「万朝報」刊行会編『万朝報(復刻版)60』日本図書センター、1987 年、頁記載なし(明治四十年七月十八日二面)。

現れたのではなくて、「近事に付連りに苦言する」ために現れている。この記事が載った 1907 年といえば、日本と結ばれた乙巳条約の不当さを外国に知らせるために高宗がオランダのハーグで開かれた万国平和会議に密使を送った、所謂ハーグ密使事件の年である。それに憤慨した日本側が高宗に譲位を強要した時期が 7 月で、20 日には実際に譲位が行われたことを考えると、ここで「韓国の近事」はハーグ密使事件であり、「苦言」とは譲位のことであると把握できる。皇太子が閔妃の実の息子である後の純宗であったことも、この記事から譲位を連想できる理由である。

日本人によって殺された閔妃が、日本側の立場を代弁している。「閔妃の霊」が持つ怨念が日本ではなく、「韓皇」に向けられているように記されていて、『読売新聞』や『国民之友』の閔妃幽霊譚と同じように、この『万朝報』の閔妃幽霊譚も日本側の自己本位的な想像力が発揮された結果と言える。

以上の三つの記事は、どちらも朝鮮の前近代性を末尾に付け加えている点で共通している。『読売新聞』記事の「文明の利器の依て野蛮に怪談を傳ふ亦奇といふべし呵々」は、言うまでもなく、文明国日本と野蛮国朝鮮を対比して強調する意図で書かれた文面であり、『万朝報』の記事も「皇帝は今朝来宮巫に祈禱せしめつゝあり」と国家を代表する「皇帝」が「宮巫」に頼っていると伝えている。生前の閔妃が国家の一大事に関して巫女と相談していた事実も加えると、この記事は「宮巫」に左右される朝鮮人の前近代性を示唆するものになりかねない。先に検討した『国民之友』の記事も、「借問す金宏集等の幽霊は未だ露館に現はれざるや否や」と反問することによって、閔妃幽霊譚の非合理性を指摘している。特に、ここでは金宏集が取り上げられていて興味深い。

キムホンジップ

金宏集(1842—1896 年)は、日清戦争の後日本の推薦で総理大臣になった人物で、当時朝鮮では親日派と認識されていた。閔妃殺害の後、ロシア公使館に身を隠していた高宗を説得するために出かけた金宏集は、日本に反感を持っていた朝鮮民衆の手によって道端で非業の死を迎えることになる。『国民之友』は、反日派の閔妃だけが幽霊になって、なぜ親日派の金宏集の幽霊譚は存在しないのかと指摘している。悲惨に殺されたのは閔妃も金宏集も同じなのに、閔妃だけが幽霊

として人口に膾炙されるのは、彼女が日本人に殺されたからではないかと、『国民之友』は憶測している。

しかし、このような問題提起は、そもそもの外れていると言わざるを得ない。当時朝鮮の民衆にとっては、閔妃も金宏集も同じような敵に過ぎなかった。口承伝承を含め、当時朝鮮の記録を見ると、閔妃に関する評価は「国を滅ぼした悪女」とする日本側の認識とさほど変わらなかった。

現在の韓国では、ミュージカル『明成皇后』（1995 年）やテレビドラマ『明成皇后』（2001 年）の影響から、閔妃が殺害に来た日本の浪人たちの前で「私が朝鮮の国母だ」と毅然として立ち向かい、死ぬ時まで朝鮮を侵略しようとする日本と戦った女傑として認識されているが、当時の認識には多少違う側面もあったようだ。韓国における閔妃弾劾の例として興味深いのは、閔妃が日本の姫として民間で伝承されていたことである。

『韓国口碑文学大系』1 輯 7 冊に収録されている閔妃に関する伝承によると、閔妃は日本の姫が生まれ変わったもので、王妃になった後、王に薬を飲ませて日本人男性と姦通していたが結局それが暴露され死んだとされる<sup>266</sup>。荒唐無稽な話ではあるが、悪とされていた日本の姫として閔妃を想像するところから、閔妃に対する民衆の敵意を感じ取ることができる。

朝鮮では閔妃を幽霊として想像することはあり得なかった。朝鮮の女幽霊はいつも非業の死を迎えた哀れな存在であったのに対し、閔妃を哀れと思う情緒が当時朝鮮には存在しなかったのである。にも関わらず、日本では閔妃を幽霊として登場させている。それは、朝鮮を滅ぼした張本人として閔妃が存在し続ける必要性があったためであり、当然閔妃を哀れに思ったためではない。

日本側の閔妃表象のもう一つの例を挙げたい。『近事画報』誌の従軍記者としても活躍した画家小杉放庵(1881－1964 年、別号に未醒)が 1904 年 11 月に発表した『陳中詩編』に「閔妃陵」という詩がある。閔妃陵は、夏目漱石も 1909 年韓

---

<sup>266</sup> 박경수, 황경숙, 서정매 『증편 한국구비문학대계』 한국학중앙연구원 어문생활사연구소, 2014 년, pp. 266—269. (日本語訳: バク・ギョンス、ファン・ギョンスック、ソ・ジョンメ 『増編 韓国口碑文学大系』 韓国学中央研究院 語文生活史研究所, 2014 年, 266—269 頁。)



国を旅した時に訪れた閔妃の墓である。漱石は、参観の後に閔妃に関して触れることがなかったし、短い感想すら述べなかったが<sup>267</sup>、小杉放庵は閔妃について一見意外な感想を残している。小杉放庵の『陳中詩編』には「疾く其腰の刃を捨て」て故郷に帰れと叫ぶ反戦詩「帰れ弟」があり、付録の「朝鮮日記」も従軍体験を通して朝鮮の植民地化という日露戦争の目的と朝鮮侵略の不当を証言するものとして高く評価されているので、全体的に『陳中詩編』は朝鮮・朝鮮人を深く理解した作品とされている<sup>268</sup>。しかし、「閔妃陵」に限って言うならば、日本人に殺害された閔妃については同時代の皮相的な理解に留まるだけではなく、より一層嫌悪感に満ちた閔妃像を作り出しているとも言える。

春風三月城の東

閔妃の陵に柳ぞ青き

人無き昼を鳥鳴き過ぎて

もの云はぬ石寂かなるかな

妖艶の眼の一たび笑めば

八道の民悉く哭き

細きやは手の一たび指せば

大臣の首自ら落つ

色魔の骨よ今いかにぞや

美人の魂よ何処に去りし

五更の嵐梢に騒ぎて

玉壺楼下に注ぎし血汐の

---

<sup>267</sup> 『朝日新聞』2010年8月14日の記事「漱石、閔妃墓訪問の謎」で、韓国における夏目漱石研究の第一人者とされる尹相仁は「満韓旅行で漱石は、満鉄や朝鮮総督府の日本人ばかりと会って、中国人、朝鮮人は見ていなかった。閔妃墓訪問の前日に景福宮などを見物しており、宮殿を見たから次は墓を、というほどの意識で行ったのだろう」と語っている(<http://book.asahi.com/clip/TKY201008140129.html> 最終閲覧日 2015年11月27日)。

<sup>268</sup> 金仙奇「小杉未醒の『陳中詩編』についての考察—朝鮮認識と反戦意識を中心に」『日語日文学研究』32巻、韓国日語日文学会、1988年。

恨みの色の化すか<sup>け</sup>とばかり  
濃き紫の名も知らぬ花  
塚のほとりの草に交<sup>まじ</sup>るを  
摘まんとすれば黒き小蛇ぞ  
そもそも墓に穴や通へる  
出づると見えて入ると覚えぬ<sup>269</sup>

「色魔」とされる閔妃は、生前に朝鮮「八道の民」を泣かせ、数多くの臣下を死刑にした悪女であるに留まらず、死後も恨みを持って「黒き小蛇」に化けて出る。前述の幽霊譚では嫉妬深い女として形象化されていた閔妃が突然「色魔」に転じられている。当時の新聞記事や歴史記録などを参照してみても、管見のおよぶ限り、閔妃が特に性欲の強い女として描かれたことはない。

金玉均の遺体を凌遅刑にしたことが日本のメディアで当時大きく報道されていたことからわかるように、閔妃は朝鮮の野蛮を表象する人物とされていた。閔妃の幽霊譚においても野蛮としての朝鮮が問題にされていた。閔妃は国家の野蛮の指標だったのである。ところが、第一次日韓協約の年である 1904 年になると、閔妃を朝鮮の「女」として野蛮視する傾向が強まる。朝鮮の国としての野蛮性を代表していた閔妃が、今度は朝鮮女性の特性を代表するのである。強制合併が近づくと閔妃以外にも朝鮮の女は、男を惑わす美女として表象されるようになる。例えば、1908 年に朝鮮の怪談を連続して紹介した日本語新聞『朝鮮新聞』の 12 月 25 日の記事「白毛八尾の狐 妖怪譚其儘の事實」は、朝鮮の典型的な伝説である九尾狐伝説(記事では八尾)に対する日本側の解釈として把握することができる。『朝鮮新聞』は、朝鮮に渡ってきた日本の商人たちのベースキャンプであった仁川で発刊されたもので<sup>270</sup>、日韓強制併合の後に総督部の機関紙に近い役割を果たした新聞である。

---

<sup>269</sup> 小杉放庵『陳中詩編』嵩山房、1904 年、53—55 頁。

<sup>270</sup> 朝鮮新聞社の創立者は、萩谷籌夫(1869—1935 年)。1890 年 1 月 28 日から 1942 年 2 月 28 日まで発刊された。朝鮮新聞社は、1913 年から『朝鮮公論』も発刊した。日韓強制併合の後は、総督府の機関紙『京城日報』と一緒に日本人にとって植民地朝鮮を代表する

以下の記事は、「韓少女」「韓婦人」として現れた狐に「日本人」「男」が化かされた話であるが、その狐を狩りの対象として紹介しているところがそれ以前の怪談にはない特徴である。

『朝鮮新聞』1908年12月25日

白毛八尾の狐 妖怪譚其儘の事實

此処仁川を去る東一里の某村に妖怪譚金毛九尾の狐を今の世に見る不思議の事こそあれ事の次第を記さんに数年来同地にては若者杯の他村より山路を辿つて帰来する時必ず窈窕たる韓少女之れに随ひ来り不思議と思ふ間もなく何時か消ゆるが如くに姿を隠すを常としたるが其都度村内に飼ひ置く鶏の類二羽宛行衛不明となり不可思議にも不可思議の事とせられ居たり然る程にツイ数日前の事なり同地居住一邦人付近の原野にて草刈をなし居たる時しも恍惚として夢かと疑はる計りの韓婦人年は未だ二十を出でじと見らるゝが何れよりか立現れ先きの日本人に向かつて云ふ様最早や夕刻でもあるし女旅の心細ければ彼方の村まで同行して呉れとの事に同人は帰り途の話相手に折こそ良けれと早速託ひ連れ立つて出掛けたり然るに何事ぞ不思議と云ふも愚かなり途中右の日本人は殆ど人事不省になつて打倒れ其後の事を知らざりしに後某韓人に呼び覺まされて話を聞けば何事ぞ其男は今迄頭を道路の穴に入れ軀のみ宙にい浮かして悶き居たりしなりと斯かる始末に此穴こそ怪しけれと仔細に調べたる処鶏其他鳥類の骨を以て充され穴は何れ迄続かんか限なき計りなるより此處に始めて扱ては先年来村内に鶏等の被害ありしは狐の仕業にて彼の美人も狐の化身なりし事疑ふ可からず此穴は即ち彼れの住家なりし事と判明せるより大評判となり正軀見顯はさむと勤めたる結果同地の韓人は遂いに同地附近にて軀は赤く雪を欺く真白

---

新聞として双璧をなすものになった。1936年朝鮮共産党日本総局が創刊した在日朝鮮人向けの『朝鮮新聞』とは区別される。『朝鮮日報』2010年6月30日のコラムであるジョン・ジンソクの「日本語『朝鮮新聞』の奇形的な成長」を参照した([http://news.chosun.com/site/data/html\\_dir/2010/06/29/2010062902380.html](http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2010/06/29/2010062902380.html) 最終閲覧日2015年11月27日)。

の尾八本ある狐を見たりとの事に遂に此事仁川にも傳へられ好事家は之れを生擒にせむものと其中狐狩をなさむ計画中なりといふ<sup>271</sup>

1908 年 12 月 26 日の『東洋日の出新聞<sup>272</sup>』には「白毛八尾の狐 美人と化て行人を魅かす」として、同年 12 月 28 日の『名古屋新聞』においては「白毛八尾の狐 人事不省となる日本人」として副題は変わったものの、本筋はそのままの内容が報道されている。朝鮮古来の九尾狐伝説に基づいた話である。典型的な九尾狐伝説の設定だと、色に魅せられた男は美人に化けた狐に心臓や肝臓を喰われてしまうのだが、ここの日本人男性の命には何の支障もなかった。韓婦人に魅せられ人事不省になったことが報道の要点であるようにも読まれる。特に注目したいのは、末尾において好事家が狐狩りを計画していると書かれているところである。おそらく日本人だと想定される好事家たちは、朝鮮の伝説において恐怖の対象だった九尾狐(この記事では尾が八本なので八尾狐というべきか)を生け捕りにするとまで言っている。要するに、朝鮮古来の九尾狐伝説を紹介しながらも、それを恐怖の対象よりは遊びの対象として認識しているのである。閔妃殺害事件の時、その作戦を日本側は「狐狩り<sup>273</sup>」と呼んだらしい。この狐怪談のように、日本が作り出した閔妃の幽霊譚も、この時点においては日本にとって恐ろしい話ではな

---

<sup>271</sup> 湯本豪一編、前掲書、695—696 頁。

<sup>272</sup> 1902 年 1 月に、鈴木天眼によって長崎で創刊された新聞。鈴木天眼(1867—1926 年)は、孫文の辛亥革命を支持し、後に衆議院議員にもなった人物で、『東洋日の出新聞』と共に『九州日之出新聞』も創刊した。『東洋日の出新聞』の論調は、長崎という貿易港の立地を生かし、インド、南洋、中国、朝鮮等で活躍する日本人たちを中心として、東亜問題を論じたとされる。社史編纂委員会『激動を伝えて一世紀—長崎新聞社史』長崎新聞社、2001 年、78 頁、128 頁とジャパンナレッジの鈴木天眼項目を参照(<http://japanknowledge.com/lib/display/?kw=%E6%9D%B1%E6%B4%8B%E6%97%A5%E3%81%AE%E5%87%BA%E6%96%B0%E8%81%9E&lid=5011062010750> 最終閲覧日 2015 年 11 月 27 日)。

<sup>273</sup> 櫛田神社に玄洋社の藤勝頭が 1895 年に「之れ韓王妃を斬つて爾後埋木となつたものなり」と奉納した肥前刀の鞘に「一瞬電光刺老狐 夢庵勤議」と刻まれていることから、閔妃を「女狐」と呼び、閔妃殺害を「狐狩り」という作戦名で呼んでいたと推定されている。2010 年 3 月 26 日『東亜日報』の記事を参照(<http://news.donga.com/3/all/20100326/27113838/1> 最終閲覧日 2015 年 11 月 27 日)。

かったに違いない。狐狩りをするために狐怪談が流布されたように、閔妃の幽霊譚も朝鮮を狩るために作り出された話であった。

#### 第4節 おわりに

上垣外憲一は「明治前期日本人の朝鮮観」で 1882 年までは比較的自由だった朝鮮に関する言論が甲申政変が起きた 1884 年から厳しく統制されるようになったと言う<sup>274</sup>。一定の政治的な目的に迎合した意図を持って朝鮮に関する報道が行われたのである。このような脈絡の中に、金玉均と閔妃の幽霊譚が表れている。

金玉均は徹底的に日本人のような文明人、閔妃は朝鮮の野蛮を表象する人物としてその死後も繰り返し呼び出されていた。また、「日本側の文明人」金玉均が「朝鮮の野蛮人」閔妃に暗殺されたことを考えると、金玉均の幽霊を哀れな被害者として描きそうだが、むしろ金玉均の幽霊はこの時、女としてジェンダー化される一方、何も怨念については語ることがない。閔妃も日本人に殺害されたという歴史的事実とは無関係の身近の宮女などを死なせる悪霊として描かれ、後には金玉均と同じようにその女性性が強調されて語られていた。

本章では、今まで日韓のいずれでも紹介されることがなかった金玉均と閔妃の幽霊譚を発掘して提示した。また、その幽霊譚が日本によって作り出される際、常に当時の政情と深く絡んだ形で物語が仕立てられていたことも指摘した。金玉均と閔妃の幽霊譚が当時の朝鮮で語られることはなかったが、強制併合の後、朝鮮で発行された日本語の新聞、雑誌にはさらに多数の怪談が載っている。日本人が日本語で朝鮮の怪談を語ることが以後朝鮮の怪談享受文化にどのように影響したのかは、日本近代の怪談研究のこれからの課題である。

---

<sup>274</sup> 「明治十五年(一八八二)壬午軍乱においては比較的自由だった朝鮮に関する言論が、厳しく統制されるようになるのは明治一七年(一八八四)の甲申政変の時である。このときこの政変に関して出版された本数は少なく、壬午軍乱の時は比較的正確な事実関係が報道されたのに対して、甲申政変については、事の真相は全く国民に知られずに終わっている。」上垣外憲一「明治前期日本人の朝鮮観」『日本研究』11 集、国際日本文化研究センター、1994 年、56 頁。

## 結 章

本論文では、明治期の文学作品を主な対象として、その周辺の新聞、雑誌などの記事をも参照し、前近代とは異なる明治期の怪談の特質とその変容について考察を行った。前近代の怪談、特に幽霊が登場する幽霊譚において、その幽霊は一定の怨念を持つ存在として描かれることが多く、怪談を受容する側としては恐怖と不安を感じながらも、その怨念に憐憫の感情を抱いていた。しかし、このような怪談享受の伝統は、明治期の近代イデオロギーによって各々の時代状況に合わせた形で変質するようになる。

第1章では、まず江戸期に広く流布されていた累伝説とそれに基づいた代表的な作品を分析し、羽生村の実話から生まれた累伝説が、仏教や儒学の影響を受けて変容する過程を概括した。仏教の女性救済の論理によって『死霊解脱物語聞書』の中で救済されるべき悪女(内面・外面において醜い女)というイメージが一層強化された累は、儒学の理念に基づいて『伊達競阿国戯場』では献身的な女性、『新累解脱物語』では貞淑な妻へと変貌していった。それが明治期の『真景累ヶ淵』になると、累の役割にあたるヒロイン豊志賀は男より18歳も年上の女として設定され、年下の男を誘惑する悪女としての行動が、男児を抑圧し拘束する母のイメージで描かれている。また、神経という当時の用語を積極的に利用し、豊志賀を神経病を持つ女、病を持つ女として表象することによって、江戸期と比べて異常に強化された女性嫌悪の論理が働いていること、またその裏には女を病と関連付けようとする近代イデオロギーが潜んでいることを確認した。『真景累ヶ淵』は、すべてが因果に収斂する点からは仏教の論理に基づいた前近代の怪談のようにみえるが、核心である豊志賀の描かれ方を考えると、神経病に関する新時代の言説と当時の女性嫌悪が統合された例として把握することができる。『真景累ヶ淵』における恐怖は、豊志賀を嫌悪すべき存在として認識する程度と比例するとも言える。

第2章では、幸田露伴の「対髑髏」を研究対象として、第1章で分析した豊志賀と同じように、ヒロインのお妙が当時の女性嫌悪を体現する幽霊であることを

論じた。お妙は遺伝によるハンセン病者として描かれているが、彼女の病と醜が実は男の愛を拒否し、男を翻弄した「天刑」であるとされていることを確認した。そこでは男の恋を拒んだ女が罰を受けて醜くなるという小町衰老落魄譚との関連が深く、お妙が小町と同一視される傾向もみられた。さらに、当時の女学生の中で結婚を忌避し勉強を続ける、学問好きという意味での小町のような女の表象としても理解することができた。

第3章では、夏目漱石の「琴のそら音」を取りあげて近代的な知と怪談、および日露戦争と怪談の関係について論じた。「琴のそら音」における怪奇現象や迷信と、それに対する近代的知識人の反発の表象のあり方の裏に、日露戦争という時代の不安があることを観察し、迷信と近代の知が対立した初期を経て、日露戦争前後には近代の知が迷信を科学の範疇に取り入れようとしていたこと、さらに、前近代から変容を経つつ継承されてきた怪奇譚(『牡丹灯籠』)が触媒となり主人公の婚約者への愛が深まるエピソードにおいて、科学ですべてを説明しようとする潮流への抵抗が表現されていることを確認した。また、このような時代雰囲気と共にシェイクスピアの『マクベス』から影響を受けた漱石が、「趣味の遺伝」において戦争によって破壊された愛を強調するために「幻怪」や「怖」という概念を利用していることを確認した。

第4章では、近代日本の船幽霊について、ノルマントン号事件を背景とする『船幽霊 噂の高潮』と日露戦争後の新聞記事による船幽霊譚、また台湾植民地支配と深く関わる『怪談百物語 船幽霊』を分析し、かつては歴史の敗者、被害者として表象された船幽霊が、軍国主義・帝国主義を推し進めるための装置として利用されていくにいたる過程を明らかにした。本来平家の亡霊として西日本海岸に出没すると想像されてきた船幽霊のイメージは、ノルマントン号事件、日露戦争、帝国日本の南洋進出など、その時代の様相に合わせて変容してきた。日本において幽霊が不当に生命を奪われた人々の怒りと執念の表象だとすれば、船幽霊の話でも日露戦争期まではそのような因果応報譚的な要素が含まれていたと言える。しかし、日露戦争後に日本が帝国として軍事侵略を展開し植民地を占領し始める時期になると、船幽霊伝説でさえも軍事主義・帝国主義のメカニズムの一部として利用されるようになった。『船幽霊 噂の高潮』でノルマントン号事件

の被害者を幽霊として登場させたことは、イギリスへの反発を扇動しようとする政治的目的を持ったものであったが、それでも船幽霊のイメージは読者の憐憫を呼び起こすために使われたものであった。しかしながら船幽霊のイメージは、日露戦争後から変容していく。『怪談百物語 船幽霊』では、船幽霊は映像テクノロジーを駆使して作り出される幻像であり、台湾を占領するための道具、台湾先住者に対する日本の技術面での優越をもって、植民地支配を合理化するための装置として用いられている。同情すべき被害者であり憐憫の対象としての幽霊が、日本の軍国主義・植民地支配の拡大により、侵略を行う側、加害者の側のからくりとして利用されていくさまが、第4章で確認された。

第5章では、近代日本における、朝鮮の实在の人物にまつわる怪談について考察を行った。特に金玉均と閔妃の幽霊譚を通して、金玉均が日本人のような文明人として描かれる一方、閔妃が朝鮮の野蛮を代弁する人物として描かれたことを確認した。このような金玉均と閔妃の対比は、男と女の対比としても描かれていた。金玉均と大院君、そして閔妃に対抗する東学農民軍の関係を記述した『読売新聞』や『東洋大戦史』、金玉均と閔妃を殺害した疑いで死刑になった李周會を同時に扱った『佳人之奇遇』がそれを証明するものであった。金玉均、大院君、東学農民軍、李周會が各々の政治的な差異を超えて、閔妃に対抗する男として描かれているのである。しかし、金玉均の幽霊は頭山満との関係の中で、女としてジェンダー化されることもあった。金玉均は閔妃との関係においては日本人のような文明人の男として形象化されたが、頭山満のような日本人と対比される場合には、植民地朝鮮を表す女として表象されることもあったのである。

閔妃の幽霊譚においては、まず彼女を殺した人物やその殺人行為自体についての言及が皆無であったことが確認できた。閔妃の幽霊は、非業の死を迎えた哀れな存在ではなく、単に宮中に現れて周辺の人を死なせる悪霊であった。その時、閔妃の幽霊譚と共に、朝鮮の野蛮性、非合理性が強調されたことも確認することができた。金玉均の悲惨な死は朝鮮の野蛮性を浮き彫りにする材料として使われ、閔妃は死んで幽霊になってからも朝鮮の野蛮を体現する存在として認識されていた。「牝鶏晨す」「色魔」「淫乱」という表現によって描写される閔妃は朝鮮を滅ぼした女として表象された。閔妃は野蛮として朝鮮そのものであると同時に



に、女として朝鮮を滅ぼした元凶でもあった。朝鮮における植民地支配が進行するにつれて、朝鮮をいつまでも野蛮として表象するのは効率的ではなくなった。効率的な植民地支配のために、朝鮮の男性を包摂し、朝鮮の女性を排除する次元で、閔妃の女性性が益々強調されていった可能性が高い。

金玉均と閔妃の幽霊譚は、どちらも日本の政治的な意図の中で作られた話である。新聞報道などを通して、一見朝鮮現地からの風聞であるかのように記されているが、当時の朝鮮の記録には金玉均と閔妃の幽霊譚は管見の及ぶかぎり見当たらない。韓国に残されている口伝記録では閔妃が日本の姫として登場することはあるが、幽霊譚とはなっておらず、親日派とみなされた閔妃に対する反発が強調されたものである。日本における金玉均と閔妃の幽霊譚は、徹底的に日本側の政治的な立場から想像された話であった。

以上のように、近代日本の怪談、特に明治期幽霊譚は、前近代との延長線上にありつつも、当時の政治文化的な状況から様々な形で変容されてきた。本論文で扱った幽霊譚は、第5章の朝鮮関連怪談を除くと、すべて前近代の幽霊譚・伝説を背景としている。第1章では羽生村の累伝説、第2章では小野小町伝説、第3章では『剪灯新話』『牡丹灯記』の翻案である『牡丹灯籠』、第4章では前近代の船幽霊の系譜がそれである。しかし、そのような前近代の背景や系譜をたどることだけが、本論文の目的ではなかった。明治期幽霊譚の本質を究明するために、前近代以来の系譜を確認すると同時に、前近代から継承された幽霊譚が、明治以降、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦という時勢のなかでどのように変容されていくかを、当時の時代状況を背景として考察し、前近代と近代の幽霊譚の差異とそれがもつ歴史的・文化的意義を追求することが本論文の目標であった。本論文では、ジェンダー、戦争、植民地主義という視座を通して、前近代と異なる明治期幽霊譚の特質を究明することができた。

本論文では、第4章の船幽霊と第5章の金玉均を除くと幽霊譚の主役として女性が登場する。幽霊譚の主役が女性であり、その女性が自分を死なせた男性やその社会に復讐するという設定は前近代から現代に至るまで、頻繁に現れる幽霊譚の典型である。前近代の幽霊譚において彼女ら(例えば『四谷怪談』のお岩、『皿屋敷』のお菊、累伝説の累など)は、一般に憐れむべき犠牲者として理解される

ことが多く、男性に復讐することで男性中心の支配秩序に亀裂を作りながらも、個人の恨みを晴らした後に、結局は「成仏」もしくは「退治」されることで家父長社会秩序に回収されてしまう。本論文で扱った明治期の幽霊譚においても、女幽霊が社会を転覆するような力を持った存在として描かれることはなかった。しかし、注目に値するのは、彼女らが明治という時代状況の中で病との関連から描かれていることである。豊志賀を含め、第1章の『真景累ヶ淵』に登場する女性たちは、神経病と密接な関係があった。殺人を犯して精神的に不安定であるはずの新吉ではなく、新吉の母(深見新左衛門の奥方)や妻(豊志賀、お累)が神経病を患う病者として描かれていることがそれを証明する。第2章の「対髑髏」においても、お妙は美人として描写されながらも、作品のクライマックスの時点でハンセン病者としての醜い容姿が衝撃的に描かれている。第3章の「琴のそら音」において、幽霊となって夫がいる満州を訪れた妻や「余」の婚約者露子も、インフルエンザ患者として、「余」が死の恐怖を想起する契機として登場している。神経病、ハンセン病、インフルエンザという病が(前近代における病自体の存在有無とは別に)、明治期の日本社会において新しく発見されたものである以上、病と結びつけられて語られている明治期の女幽霊は迷信、非合理性などの前近代を想起させるものではなく、かえって明治という新時代の状況が反映されたものであると言える。その裏面には前近代とは異なる女性嫌悪の論理が働いていたと本論文は主張した。前近代の幽霊譚における露骨な女性嫌悪とは異なり、明治期幽霊譚の女性嫌悪は、社会における女性の位相が変化したことと関連があった。明治期幽霊譚における女幽霊たちは、明治という新時代を表象すると共に、その新時代に対する社会の不安が投影された存在であったのである。

明治という時代の特性から、本論文では明治期幽霊譚を戦争や植民地主義の視座からも考察した。特に、明治期幽霊譚が日露戦争を契機として量産されるようになった点に注目し、戦争によって死亡した者たちを明治の文学は「幽霊」や怪奇現象の原因として再来させていると主張した。

「琴のそら音」において満州に出征している夫のところへ行く妻の幽霊話が紹介されているが、作者の漱石は、「趣味の遺伝」では満州で無謀な軍事作戦のために亡くなった「浩さん」を登場させている。そこには、強権的な国家に対する

反抗や、対抗的疑念を提示しようとする姿勢がみえる。漱石は、国家によって犠牲にされ、破壊されてしまった「浩さん」の愛を「幻怪」や「怖」という道具を使って表現しようとした。「幻怪」や「怖」は、漱石自身のシェイクスピア理解から創出された要素であった。漱石は、日露戦争という国家の暴力行為や狂気を描写する装置として怪奇譚を利用している。

その反面、第4章で論じられている日露戦争後の船幽霊譚においては、日本国家が他者として排除したロシア軍人や日本人女性の幽霊が登場する。ロシア軍人や日本人女性の幽霊たちは、その死の原因が日露戦争と関連があるにも関わらず、祀られるどころか国家によって排除されて海を彷徨い続ける船幽霊となった。日露戦争によって生じた大量死を、当時の日本社会が必要に応じて選別し管理した証拠である。国家のために徴兵された男たちの霊が、国家に怨念を持つ存在として想像されることはなかった。幽霊という負の存在として想像される存在はいつも他者であり、特に日露戦争関連の幽霊譚においては、幽霊という存在が持つはずの怨念の恐ろしさもなければ、その幽霊たちを鎮めるための努力が書かれることもなかった。

日露戦争後、日本の帝国化が加速化されると、朝鮮や台湾などの周辺国は日本の植民地へと転落させられた。このような状況の中で、以前とは異なる形の幽霊譚が創出された。非業な死を迎えた無実な存在、即ち被害者として表象される幽霊ではなく、積極的に日本の帝国化に加担する幽霊が描かれるようになったのである。また植民地を背景にしてそこで現れる幽霊を物語る場合、その幽霊は内地の幽霊とは違う、異質な性質を持つ幽霊として他者化された。特に朝鮮の場合、日本に亡命した後に上海に渡って暗殺された金玉均や、朝鮮を併合する過程の中で日本側によって殺された閔妃の幽霊譚が代表的であった。金玉均と閔妃は、日本と密接な関連を持っていた人物でありながら、朝鮮民衆の間では親日派として認識されていた。従って当然朝鮮では金玉均と閔妃を幽霊(鬼神)として想像することはなかった。なぜなら日本と同じく朝鮮においても幽霊(鬼神)は憐れむべき存在として認識する伝統があったからである。閔妃と金玉均を幽霊として描いた日本では、本論文の分析によると、一見憐れな存在として描かれている金玉均の幽霊は、あくまでも閔妃が代表する朝鮮の野蛮性による犠牲として意味づけられ

ていた。閔妃の幽霊譚も、朝鮮の野蛮性を強調して朝鮮に対する植民地支配の妥当性や閔妃殺害に対する日本側の政治的な立場を主張するために語られた。朝鮮という植民地を野蛮として表象する一方、政治的な宣伝の一環として幽霊譚という形式が使われたのである。個人の怨念に同情し、憐れな存在と認識するのではなく、国家営為の正当性を保証する限りにおいて呼び出される、植民地支配やジェンダー序列における他者として扱うところに前近代とは異なる明治期幽霊譚の特質があった。

近代日本の怪談研究である本論文では、先行研究で十分に注目されることがなかった作品や資料を中心に研究の独創性を重んじて論を展開してきた。残された今後の研究課題を提示すると以下の通りである。

まず、前近代の代表的な女幽霊として、累以外に『四谷怪談』のお岩や『番町皿屋敷』のお菊の近代的な変容を考察し、本論文で主張した明治期幽霊譚における女性嫌悪がお岩やお菊の幽霊譚においても観察されるかを検証する必要がある。彼女らを含む女幽霊の表象が明治以降に変容していく推移を追跡し、現代に至るまでの日本の女幽霊の系譜について考察してゆきたい。

幽霊譚と日露戦争を結びつけて考えるという側面からは、夏目漱石が幽霊譚を通して日露戦争を描き出そうとした姿勢と比較するために、森鷗外(1862—1922年)の「鼠坂」(1912年)について分析する必要がある。鷗外は「鼠坂」で日露戦争の時、日本人記者にレイプされた中国人少女の幽霊を登場させている。鷗外は漱石とは別の視点から日露戦争の弊害を告発している。その時に、鷗外が漱石と同じように幽霊譚という物語形式を利用し、不気味な雰囲気を出していることに注目したい。また、鷗外が「百物語」(1911年)や「蛇」(1911年)という作品を通して前近代の迷信と近代の知について言及しているところも、漱石の「琴のそら音」と比較して分析する必要がある。

朝鮮関連怪談においては、植民地朝鮮で刊行された『朝鮮新報』『朝鮮新聞』『朝鮮公論』などのメディアを通して、在朝日本人が朝鮮の怪談を理解して受容する様相を分析したい。また、1945年以降、韓国で生産されたホラー映画の女幽霊と日本の女幽霊の類似性から、植民地時代に日本の女幽霊が朝鮮人側において

どのように受容されていたのかも、朝鮮と日本怪談の関連性を考える時に大きな課題である。

## 主要参考文献一覧

### 凡 例

1. 日本語文献は、著者もしくは編者の姓を五十音順に配列し、同一姓の場合は、名の五十音順に配列した。同一著者による文献は、発表年代順に配列した。
2. 韓国語文献はガナダラ順に配列し、同一著者の場合は発表年代順に配列した。
3. 外国人著者の場合、「姓、名」と表記し、姓の五十音順に配列した。
4. 本論文では、多数の新聞記事や雑誌記事を参考にしたが、主要参考文献一覧からは省略した。
5. 論文名、書名の本題と副題の間は「―」を入れて統一した。

### 日本語文献

影印本、翻刻本を含む一次資料

朝倉治彦、大久保順子編『仮名草子集成 第28巻』東京堂出版、2000年

荒木昌保『新聞が語る明治史(第二分冊・明治二十六年～明治四十五年)』原書房、1976年

伊藤痴遊編『快傑伝 第3巻』東亜堂書房、1914年

大高洋司編『曲亭馬琴作 新累解脱物語』和泉書院、1985年

大沼敏男、中丸宣明校注『政治小説集二 新日本古典文学大系 明治編17』岩波書店、2006年

賀茂真淵『国意考 日本思想大系39』岩波書店、1972年

柑舟漁夫『船幽霊 噂の高潮』開成堂、1886年

黒岩涙香『小野小町論』朝報社、1913年

幸田露伴『露伴全集 第29巻』岩波書店、1954年

幸田露伴著、登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注『幸田露伴集 新日本古典文学大系明治編22』岩波書店、2002年

黒龍会編『東亜先覚志士記伝 下巻』黒龍会出版部、1936年

小杉放庵『陳中詩編』嵩山房、1904年

- 小松弘毅『小野小町貞女鑑』土屋軍治、1894 年
- 小二田誠二編『死霊解脱物語聞書—江戸怪談を読む』白澤社、2012 年
- 三遊亭円朝『牡丹灯籠』岩波書店、1955 年
- 『真景累ヶ淵』岩波書店、1956 年
- 時事新報社『時事新報(復刻版) 明治前期編 13 卷～(4)／4009 号～4062 号』龍溪書舎、1986 年
- 諏訪春雄編『伽羅先代萩 伊達競阿国戯場』白水社、1987 年
- 高田衛編『近世奇談集成(一)』国書刊行会、1992 年
- 高山怨緑『怪談百物語 船幽霊』大川屋、1917 年
- 多田克己編『竹原春泉 絵本百物語—桃山人夜話』国書刊行会、1997 年
- 鳥山石燕『続百鬼』高田衛監修、稲田篤信、田中直日編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』国書刊行会、1992 年
- 夏目漱石『漱石全集 第 2 卷』岩波書店、1994 年
- 『漱石全集 第 13 卷』岩波書店、1994 年
- 『漱石全集 第 14 卷』岩波書店、1995 年
- 『漱石全集 第 25 卷』岩波書店、1996 年
- 日本随筆大成編集部編『日本随筆大成 新装版 第二期 6』吉川弘文館、1974 年
- 延広真治校注『落語 怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』岩波書店、2006 年
- 登尾豊、関谷博、中野三敏、肥田皓三校注『幸田露伴集 新日本古典文学大系 明治編 22』岩波書店、2002 年
- 速水春暁斎『絵本小夜時雨』近藤瑞木編『百鬼繚乱—江戸怪談・妖怪絵本集成』国書刊行会、2002 年
- ハンセン病問題に関する検証会議編『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』財団法人日弁連法務研究財団、2005 年 3 月
- 東雅夫編『文豪怪談傑作選 幸田露伴集 怪談』筑摩書房、2010 年
- 福地源一郎『張嬪 朝鮮宮中物語』庚黄新誌社、1894 年
- 松浦静山著、中村幸彦、中野三敏校訂『甲子夜話 2』東洋文庫 314、平凡社、1977 年

- 松谷みよ子『現代民話考Ⅲ』立風書房、1985年
- 峯村文人校注・訳『新編日本古典文学全集 43 新古今和歌集』小学館、1995年
- 明治文献資料刊行会編『国民之友(復刻版)』287号、民友社、1896年3月
- 山田捨作『東洋大戦史』好明館、1894年
- 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2009年
- 『大正期怪異妖怪記事資料集成』国書刊行会、2014年
- 吉田俊男『天下之怪傑頭山満』雑誌社、1912年
- 二次資料
- 秋山虔他編『日本古典文学大辞典 第1巻』岩波書店、1983年
- 東晴美「累狂言の趣向の変遷—「伊達競阿国戯場」以前」『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊』20巻、早稲田大学、1994年2月
- 阿部さとみ「「累もの」の系譜—趣向の変遷」『演劇創造』27号、日本大学芸術学部演劇学科、1998年3月
- 網倉勲「「恐怖」のレトリック—漱石「琴のそら音」と円朝「牡丹燈籠」」『緑岡詞林』33号、2009年3月
- 荒井秀直「「さまよえるオランダ人」伝説考」『藝文研究』25号、慶應義塾大学藝文学会、1968年3月
- 安天「「他者」概念の誕生—江藤淳の『夏目漱石』について」『言語情報科学』10号、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2012年
- 伊狩章「幸田露伴と江戸文学」『国文学 解釈と鑑賞』57巻5号、至文堂、1992年5月
- 井川聡、小林寛『人ありて一頭山満と玄洋社』海鳥社、2003年
- 池田美紀子『夏目漱石 眼は識る東西の字』国書刊行会、2013年
- 池田彌三郎『日本の幽霊』中央公論新社、1974年
- 一柳廣孝「怪談の近代」『文学』15巻4号、岩波書店、2014年7月
- 井波律子「露伴初期」『日本研究』16号、国際日本文化研究センター、1997年9月
- 井上章一『美人論』朝日新聞社、1995年



- 岩本憲児『幻燈の世紀 映画前夜の視覚文化史』森話社、2002 年
- 上野千鶴子『女ざらい—ニッポンのミソジニー』紀伊國屋書店、2010 年
- 内田康「もう一つの『牡丹燈籠』—香夢樓主人『神経小説怪談牡丹燈』試論」  
『稿本近代文学』14 号、筑波大学、1990 年
- 江藤淳『江藤淳著作集 1—漱石論』講談社、1967 年
- 江馬務『日本妖怪変化史』中外出版、1923 年
- 大高洋司『『昔話稲妻表紙』と『新累解脱物語』』『日本文学』55 卷 1 号、日本文学協会、2006 年 1 月
- 荻原桂子「幽霊という狂気—漱石「琴のそら音」」『九州女子大学紀要. 人文・社会科学編』39 卷 3 号、2003 年 2 月
- 小田幸子「小野小町変貌—説話から能へ」『日本文学誌要』84 号、法政大学国文学会、2011 年 7 月
- 上垣外憲一「明治前期日本人の朝鮮観」『日本研究』11 集、国際日本文化研究センター、1994 年 9 月
- 鴻沼誠二『幸田露伴研究序説—初期作品を解説する』桜風社、1989 年
- 「『対髑髏』論」『語学文学』38 号、北海道教育大学語学文学会、2000 年 3 月
- 勝又基「小野小町は貞女か—近世前期叢伝に見る小町像」『国文学 解釈と鑑賞』70 卷 8 号、至文堂、2005 年 8 月
- 姜健栄『開化派リーダーたちの日本亡命—金玉均・朴泳孝・徐載弼の足跡を辿る』朱鳥社、2006 年
- 神田祥子「「科学」という信仰—夏目漱石「琴のそら音」を視座として」『東京大学国文学論集』5 号、2010 年 3 月
- 金仙奇「小杉未醒の『陳中詩編』についての考察—朝鮮認識と反戦意識を中心に」『日語日文学研究』32 卷、韓国日語日文学会、1988 年
- 金牡丹「『暴徒の子』が物語るもの—菊池寛とアイルランド文学の再考に向けて」『比較文学』49 卷、2006 年
- 琴秉洞『金玉均と日本—その滞日の軌跡』緑蔭書房、1991 年
- クリステヴァ、ジュリア著、枝川昌雄訳『恐怖の権力—〈アブジェクション〉試論』

- 法政大学出版局、1984 年
- 桑田悦、前原透編著『日本の戦争—図解とデータ』原書房、1982 年
- 小林瑞乃「日清戦争開戦前夜の思想状況—金玉均暗殺事件をめぐる一考察」『青山学院女子短期大学紀要』64 輯、青山学院女子短期大学、2010 年 10 月
- 小松和彦『妖怪学新考—妖怪からみる日本人の心』小学館、2000 年
- 「日本怪談史のために」『國文學 解釈と教材の研究』52 卷 11 号、學燈社、2007 年 9 月
- 小宮豊隆『漱石の芸術』岩波書店、1942 年
- 小森陽一、成田龍一編『日露戦争スタディーズ』紀伊國屋書店、2004 年
- 権田和士「〈聖なるもの〉の表象をめぐる一夏目漱石「琴のそら音」私解」『日本文学』54 卷 6 号、2005 年 6 月
- 齋藤礎英『幸田露伴』講談社、2009 年
- 齋藤喬「悪因縁と恋心(2)三遊亭圓朝口演『真景累ヶ淵』にみる年増の恠気」『東北宗教学』2 号、東北大学大学院文学研究科宗教学研究室、2006 年
- 佐伯順子『恋愛の起源—明治の愛を読み解く』日本経済新聞社、2000 年
- 柴田美都枝『読本の世界 江戸と上方』世界思想社、1985 年
- 志村有広、諏訪春雄編『日本説話伝説大事典』勉誠出版、2000 年
- 下中直人編『歌舞伎事典 新訂増補版』平凡社、2000 年
- 小学館編『日本大百科全書 第 19 卷』小学館、1984 年
- ジラル、ルネ著、古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局、1982 年
- 須永朝彦『日本幻想文学史』平凡社、2007 年
- 諏訪春雄『日本の幽霊』岩波書店、1988 年
- 「日本幽霊学事始」『幽霊学入門』新書館、2010 年
- 関谷博「『対髑髏』の問題—煩悶の明治二十三年へ」『日本近代文学』47 集、日本近代文学会、1992 年 10 月
- 「初期露伴の文学的課題」『幸田露伴集 新日本古典文学大系明治編 22』岩波書店、2002 年
- 関山守弥『日本の海の幽霊・妖怪』中央公論新社、2005 年

- 高田衛『江戸の悪霊祓い師』筑摩書房、1991 年
- 高橋千劔破『名山の民俗史』河出書房新社、2009 年
- 田中貴子『＜悪女＞論』紀伊國屋書店、1992 年
- 谷口健一『魔の系譜』講談社、1984 年
- 谷口基『怪談異譚—怨念の近代』水声社、2009 年
- 塚本利明『漱石と英文学—『漾虚集』の比較文学的研究』彩流社、1999 年
- 堤邦彦『江戸の怪異談』ペリかん社、2004 年
- 出口智之「「大詩人」から『対髑髏』へ—〈露伴〉の消滅」『文学』6 卷 1 号、岩波書店、2005 年 1 月
- 徳田武「「対髑髏」と『雨月物語』・西鶴・『莊子』」『明治大学教養論集』172 号、明治大学教養論集刊行会、1984 年 3 月
- 戸田清子「明治前期における条約改正と新聞報道—ノルマントン号事件報道を中心に—」『研究季報』14 卷 2・3 号、奈良県立大学、2003 年 12 月
- 富田鉄之助「累百態」『国立劇場上演資料集 第 119 巻』日本芸術文化振興会、1975 年
- 鳥越文蔵他編『日本伝記伝説大事典』角川書店、1986 年
- 内藤千珠子『帝国と暗殺—ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』新曜社、2005 年
- 中川諭「幸田露伴と中国古典小説」『季刊日本思想史』57 号、ペリかん社、2000 年
- 中村静代「植民地朝鮮と日本の怪談—日韓併合前後における『怪談』概念の変容をめぐって」『日本学研究』44 巻、檀国大学校日本研究所、2015 年 1 月
- 中村仁美「〈資料〉幸田露伴「縁外縁/対髑髏」諸本間における異同」『文月』5 巻、文月刊行会、2000 年 11 月
- 中村幸彦『中村幸彦著述集 第 5 巻』中央公論社、1982 年
- 奈良崎英穂「〈癩〉＝「遺伝」説の誕生—進化論(ダーウィニズム)の移入と明治文学」『日本近代文学』63 号、日本近代文学会、2000 年 10 月
- 南富鎮「〈娼婦〉と〈虎〉の朝鮮表象—中島敦」『人文論集』56 巻 2 号、静岡大学

人文学部、2005 年 1 月

錦仁『小町伝説の誕生』角川書店、2004 年

——「小町の衰老落魄譚」『国文学 解釈と鑑賞』69 巻 6 号、至文堂、2004 年 6 月

延広真治「三遊亭円朝『真景累ヶ淵』」『国文学 解釈と教材の研究』37 巻 9 号、學燈社、1992 年 8 月

——「空想心と滑稽心」『落語 怪談咄集 新日本古典文学大系 明治編 6』岩波書店、2006 年

登尾豊「『対髑髏』論」『文学』44 巻 8 号、岩波書店、1976 年 8 月

野谷士「超自然の文素—『マクベス』の幽霊から寂光院の美女へ」『漱石のシェイクスピア』朝日出版社、1974 年

秦重雄「明治の文学作品に描かれたハンセン病者」『部落問題研究』172 号、部落問題研究所、2005 年 4 月

——『挑発する文学史 誤読され続ける部落／ハンセン病文芸』かもがわ出版、2011 年

服部幸雄「累曼荼羅」『国文学 解釈と教材の研究』第 19 巻 9 号、學燈社、1974 年 8 月

花部英雄「船幽霊の型」小松和彦編『怪異の民俗学 2 妖怪』河出書房、2000 年

福井慎二「漱石『琴のそら音』論—インフルエンザの近代文学史」『河南論集 6』大阪芸術大学芸術学部文芸学科研究室、2001 年 3 月

福西大輔「加藤清正虎退治伝承の広がり、その背景について」『日本民俗学』272 号、日本民俗学会、2012 年 11 月

藤井淑禎『不如帰の時代—水底の漱石と青年たち』名古屋大学出版会、1990 年

松本良太「隠蔽された愛の強要観念—夏目漱石『琴のそら音』論」『金沢大学国語国文』37 巻、金沢大学国語国文学会、2012 年 3 月

三浦正雄「日本近現代怪談文学史〈明治編〉」『山陽学園短期大学紀要』34 号、山陽学園大学、2003 年

三島由紀夫「雨月物語について」『決定版 三島由紀夫全集 第 27 巻』新潮社、2003 年

- 水川隆夫『漱石と落語—江戸庶民芸能の影響—』彩流社、1986年  
 —『夏目漱石と戦争』平凡社、2010年
- 三谷憲正「「閔妃」試論—図像をめぐる一考察」『日本研究』27集、国際日本文化  
 研究センター、2003年3月
- 宮藺美佳「夏目漱石「琴のそら音」考—「余」の見た「幽霊」のもたらしたもの」  
 『人文論究』46巻3号、関西学院大学文学部、1996年12月
- 村岡勇『漱石資料—文学論ノート』岩波書店、1976年
- 村上重良『日本宗教事典』講談社、1988年
- 山本芳明「幸田露伴「縁外縁」/「対觸髅」—フィクションとしての可能性」『國  
 文学 解釈と教材の研究』39巻7号、學燈社、1994年
- 湯浅佳子「小野小町伝説の一系譜—病める小町の話」『東京学芸大学紀要』第2  
 部門人文科学第51集、東京学芸大学、2000年2月
- 横山泰子『江戸東京の怪談文化の成立と変遷』風間書房、1997年。
- 吉岡哲太郎編輯『新著百種』5号、吉岡書籍店、1890年2月
- 吉田悦志「幸田露伴と仏教—「毒朱唇」と「対觸髅」にふれて」『国文学 解釈と  
 鑑賞』55巻12号、至文堂、1990年
- 吉永進一、野崎晃市「平井金三と日本のユニテリアニズム」『舞鶴工業高等専門  
 学校紀要』40号、2005年3月
- 度会好一『明治の精神異説—神経病・神経衰弱・神がかり』岩波書店、2003年

#### 韓国語文献

- 강준만『한국근대사 산책』인물과 사상사、2007년
- 공임순『식민지의 적자들—조선적인 것과 한국 근대사의 굴절된 이면들』푸른  
 역사、2005년
- 김영수「갑오농민군과 흥선대원군의 정치적 관계에 대한 연구—이병휘, 전봉  
 준 공초에 대한 분석을 중심으로」『한국사회과학』19권3호、서울대  
 학교 사회과학연구원、1997년
- 배항섭「1893년 동학교도와大院君의 擧兵企圖」『한국사학보』12호、고려

사학회, 2002 년

백문임 『춘향의 딸들—한국 여성의 반쪽짜리 계보학』 책세상, 2001 년

—— 『월하의 여곡성—여귀로 읽는 한국 공포영화史』 책세상, 2008 년

박경수, 황경숙, 서정매 『증편 한국구비문학대계』 한국학중앙연구원 어문생활  
사연구소, 2014 년

서민교 「일본에서의 명성황후 시해사건에 대한 연구와 과제」 『사총』 59 권, 역  
사학연구회, 2004 년

이희환 「동아시아에 떠도는 김옥균 서사—김옥균 연구의 서설」 『한국문화』 서  
울대학교 규장각 한국학 연구원, 2008 년

이희환 「명치 일본의 김옥균 서사 연구—김옥균과 한일 서사문학의 관련 양상」  
『한국학 연구』 인하대학교 한국학 연구소, 2012 년

中村静代, 이충호 『(식민지조선)일본어잡지의 괴담·미신』 학고방, 2014 년

최남선 저, 고려대학교 아시아문제연구소 육당전집 편찬위원회 편 『육당 최남  
선 전집』 현길사, 1973 년

## 図版一覧

( )は本論文におけるページ数

【図 1】鳥山石燕『続百鬼』「船幽霊」(122 頁)

鳥山石燕『続百鬼』高田衛監修、稲田篤信、田中直日編『鳥山石燕 画図百鬼夜行』国書刊行会、1992 年、140 頁

【図 2】竹原春泉『絵本百物語』「船幽霊」(122 頁)

多田克己編『竹原春泉 絵本百物語—桃山人夜話』国書刊行会、1997 年、75 頁

## 初出一覧

第1章 近代日本における累伝説の変容—累伝説における女性嫌悪の系譜と変容  
「累伝説の変容様相—『古今犬著聞集』から『死霊解脱物語聞書』へ」『外国学  
研究』13号、中央大学校外国学研究所、2009年、213—223頁

「『伊達競阿国戯場』における累伝説の変容—累の人物像を中心に」『文学研究論  
集』30号、筑波大学比較・理論文学会、2012年、81—96頁

第2章 幸田露伴「対髑髏」における明治の女幽霊—古典からの影響と明治の女  
性嫌悪

書き下ろし。

第3章 日露戦争と怪談—夏目漱石「琴のそら音」を中心に

「夏目漱石「琴のそら音」試論」『文学研究論集』32号、筑波大学比較・理論文  
学会、2014年、47—62頁

第4章 近代日本の船幽霊—鬱憤の表象から帝国の武器へ

書き下ろし。

第5章 近代日本における朝鮮関連怪談—金玉均と閔妃の幽霊譚を中心に

書き下ろし。